

これって転生に入りますか？

非単一三角形

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

テンプレ異世界を楽しもうとした転生者(?)が一步目(?)で躓いたけど頑張ってみる話。

※第一部完 次回更新予定は未定です。

目次

Chapter 1

C1-1 いざ、第二の人生へ…… 1

C1-2 安らかに眠れ、『私』 8

C1-3 荷馬車の怪 16

C1-4 幽霊の食事情? 24

C1-5 生きた記憶 33

C1-6 おさわり厳禁? 42

C1-7 教会訪問 52

C1-8 女神の涙 61

C1-9 壁鬼 71

C1-10 お祓い屋? 79

C1-11 ワット アム アイ……? 88

C1-12 霊能力者 100

Chapter 2

C2-1 つかみどころがない彼女 109

C2-2 旅は道連れ世は…… 117

C2-3 銀の翼 124

C2-4 遺跡の盗賊団 135

C2-5 光炎の乙女 144

C2-6 古の災い 156

C2-7 怨霊作戦・序 165

C2-8 怨霊作戦・転 176

C2-9 怨霊作戦・後は流れで…… 185

C2-10 古よりの宝物 196

Epi	珍道中徒然行進中	406
C 4—7	何この……何？（字余り）	396
C 4—6	幽霊の 正体見たり	383
C 4—5	物言い	370
C 4—4	舞台	359
C 4—3	ご相談	351
C 4—2	攻防？	341
C 4—1	学び舎	333
Chapter 4		
C 3—13	イズ デイス ミー……？	322
t u r .		
C 3—12	Nulliserroribus confirmata	314
C 3—11	悪霊退治？	304
C 3—10	指輪	294
C 3—9	お買い物	287
C 3—8	お手紙	278
C 3—7	お茶会	266
C 3—6	乙女心	259
C 3—5	牡丹の灯り	250
C 3—4	迷える少年	240
C 3—3	手探り	228
C 3—2	夜空の歌声	221
C 3—1	狐憑き？	209
Chapter 3		

Chapter 1 いざ、第二の人生へ……

——投げ出された手足。

血の気の消えていく肌。

大地に広がる赤い泉。

遠ざかる喧噪。

打ち捨てられた馬車。

辺りを満たしていた怒号も、慟哭も既に無く。

残るは風で擦れ合う草音に、かそけき虫の声。

夜闇に包まれた街道、荒い土の地面の上に、敷き布一つなく投げ出

された少女の軀からだを、呆然と見下ろす視線が一つ。

その瞳に宿るのは、年若い少女の末路に対する同情……ではなく。

この場で起きた悲劇に対する哀悼……でもなく。

この世に溢れる理不尽に呆れる厭世感……というわけでもなく。

ただただ呆然と立ち尽くしていた彼女は、不意に頭を抱え、ぽつりと呟いた。

「……………マジでか」



——私の名前は糸々山いとやま 雨巫あまみ。享年十六歳。

比較的何処にでもいる女子高生の一人だった、と思う。

そんな私にとんでもない転機が、それも否応無く訪れてしまったのが、ある晴れた日のこと。

視界の先に高速道路ばりの速度を出してこちらに突っ込んでくる

車の姿が映ったのが一瞬。

フロントガラス越しに見えたお婆さんの、鬼気迫る表情でハンドルにかじりつく姿に怯える暇も無く、私の意識はぷつんと暗転した。

次に目を開けたとき、視界に飛び込んできたのは、見渡す限り真っ白な世界。

病院の天井？　と思つた頭の中に、すかさず《違う》と否定する声が響いた。

聞こえる声に質問を重ねると曰く、自分は神様だという。

怪しい宗教の勧誘でも「私は神だ」はねーよ、と返すと《あ、うん、そっか……》と、やたらしよんぼりした声が返ってきて、ちよつと罪悪感に襲われた。

私はどうなったの、という問いに対して《お前は死んだ》と返された。

何で死んだの、に対しては《車に轢かれた》が返答。

あのお婆さんは私に何の恨みが。《お前ではなくその後ろにいた女性が標的》。

……その女性は一体何を。《息子を盗られたと思つている》。

要するに私は嫁姑戦争に巻き込まれて死んだらしかつた。

……いや昨今の嫁姑問題殺伐としすぎだろ。氣に入らない嫁を轢き殺して排除しにかかるとか、どこの世紀末ですか怖すぎワロエナイ。

ちなみに標的にされた奥さんは傷一つなく、姑さんは息子は勿論のこと親類全てに縁切りされ、めでたく塀の向こうへと旅立ったそう。

ともあれ私自身には何の過失も無ければ、縁もゆかりもへつたくれもないところから飛び出した不運により命を落としたというのだ。理不尽過ぎる。

これには神様も同意見らしく、何かしら便宜を図ってくれるとの事。

それから巻き込まれて死んだ私を氣に病む奥さんに、その辺りを夢枕越しにぼんやりと伝えて、臨月の精神負担を和らげようという計ら

い——優しさの化身かよ、と呟いたら神様照れていた。神様マジ神様。

——そんなわけで神様に《転生にあたって何かリクエストある？》と、わりとフレンドリーに聞かれることに。

となると私も『全盛期』は過ぎたとはいえ年頃の若者。真っ先に頭に浮かんだのは今流行りの『異世界転生』だったわけだ。

『お姫様』とまでは言わずとも、機会があるなら一度『お嬢様』辺りにはなってみたいという、俗っぽい願望も後から浮かび上がり、神様のにも都合が良かったのか、その辺も含めてホイホイと了承を貰う。

折角なので『魔法のある世界』『文明は地球でいう中世前後』などと、どんだん様式美テンプレな条件をつけていき、最後に追加したのが『赤ん坊から再開は勘弁、今の年齢近くで前世の記憶覚醒、って感じでお願いします』であった。

……それがこんな事態を招くとは、神ならぬ我が身には想像も——
いや、神様も乗り気だったあたり、神にさえ予想の及ばない事態だったに違いない。

「……………マジでかあ」

事態を認識し、溜息と共にもう一度呟く。

右を見ても、左を見ても、死体死体死体——後は中身の無い馬車。それなりに上等な紳士服を来た壮年の男性——の後悔に満ちた死に顔一つ。

檻樓とは言わないまでも煤けた給仕服の女性——の絶望に満ちた死に顔一つ。

黒服に身を包み、白鬚を湛えた老人——の「何故？」とばかりの疑問に満ちた死に顔一つ。

そしてなるべく綺麗にと逃えらえた衣服をバツサリ背中から斬られ、今も僅かに血の零れる傷口を晒しつつ、うつ伏せに倒れる少女の

身体が一つ。

母親の形見だった首飾りは襲ってきた男達に『証拠品』と称して奪い取られ、その際に掴まれていた右腕にはくつきりと浮かんだ青痣。長く伸ばし、丹念な手入れのもと、それなりに艶を湛えていた十の爪は、半分以上がひび割れ、あるいは剥がれてしまっている。

母親譲りと言われ大切にしていた腰まで届く青髪も、乱暴に掴まれた故かあちこちに散らばり、ささくれ立っている始末。

彼女が今日までしてきた努力、歩んできた人生を、私は知っている。

斜陽になりゆく家を当主の娘という立場から必死に支えるも力及ばず、遂には権力争いの場から追い落とされ、失意を胸に僅かな供を連れて王都を後にした一家を、ここで夜盗が襲ったのだ。

とうに権威を失ったと言っても爵位を持つ貴族。交渉次第では命までは取られないでしょう、とどこか意気揚々と馬車から顔を出した執事が呆気なく切り捨てられた。

当主たる父親の弾けるような指示に従い、少女は唯一残っていた御付きのメイドと共に馬車から飛び出すも、眼前を囲う夜盗——御者まで混じっていたのが凄まじい——にまごつくうちに、背中から断末魔の声を聞く。

腰を抜かしてへたりこんだメイドに見切りを付け、決死の覚悟で囲いを抜け出そうと駆けるも、忽ち腕や頭を掴まれ引き倒され。

男達に時間が無かった——しきりに「急げよ」と叫んでいた——
——ことを幸いとするべきか、その尊厳を踏みにじられることは無かった代わりに、呆気なく命を奪われたのだった。

「……………うん、まあ、思い返すと色々見えてくるけど、とりあえず——」

先の三人は顔が見える姿勢で倒れているが、少女はその限りではない。
い。

少女がどのような表情で息絶えたかを確認しようと、その身体に手を伸ばす。

しかし、伸ばした私の手は少女の肩をすりとすり抜けてしまった。

「……まあ、そうなるよね」

それに対して、私に驚きはない。

いや、驚いてはいるが、どちらかといえば「だろうな」という納得の方が強い。

そもそも少女を仰向けにするまでも無く、どんな顔をしていたか大體は知っている。

「転生先のお嬢様が記憶覚醒前……十二歳で死んじゃうかあ……」

……盲点だった、実に。

神様に注文を付けてた頃の私に会えるなら、最後の条件だけは撤回しろと死ぬ気で訴える自信がある。……もう死んでるけど。

前世の私こと、雨巫の意識が覚醒したのはついさつき。

具体的には今世の『私』が息絶えた瞬間だろうか。

『私』も色々頑張ってたんだけどなあ……相手が悪かったとしか」

今の私には今世の『私』——ヤーネースペクハイド嬢の苦勞と努力に彩られた人生が、何やら不思議な感じに記憶として入っている。彼女が見聞きした景色やら会話やらが、大きな本棚に収められている感じというか……その気になれば選んだ場面を一人称視点で観察できるといった具合だ。

その場その場で彼女が何を思ったか、何を考えていたかも知る気なら分かりそうだなと感じる。

……その最期を考えると追体験してしまうのはやや危険な気がするので、一步離れた感覚で観察するべきかなあと思うけど。

「……というか、私はどういう状態なんだ？」

手を広げて目の前で振る。……うん、私の手だ。

『私』ではなく私の、糸々山 雨巫の手だ。

亡きヤーネ嬢は同じ貴族と相対したときに舐められないためにと、目の付く場所——指先にはかなり気を配っていた。

安い手入れ用品を首尾よく多めに確保して、時間の許す限り艶出し作業をしていた記憶と共に、その手の形も私の記憶の棚の中に目立つように保管されている。

そして今、視界に映る手——ちよつと透けている——の形はその記憶と一致しない。

受験勉強の影響で出来たペンだこの残るこの手は、間違いなく女子高生雨巫の手だろう。

続いて身体に目を向ける。

胸があつて、腰があつて……えっ、足あるのか。

両足、指先十本までしつかり揃っている。……あ、裸足だ。

服は……うん、これ制服だな、長袖の。まあ、轢かれたの冬だったしな。

鏡が無いから分からないが——あつても映るとは思えないが——顔は確認できない。

だがこの流れから推測するに、前世の私の顔がそこにあるのだろう。

髪の毛の色も、今世の『私』の青髪ではなく慣れ親しんだ黒髪が見えているわけだし。

足元には草原が広がっているが、足の裏にそれを踏んでいる感覚は無い。……というか浮かんでないか私？ 具体的には五センチくらい。

つま先を曲げて地面に伸ばす……やっぱり感覚は無い。ついでに血溜まりに突っ込んでみるが、血が付いたりもしない。

足の先に影も無い。街灯が無い分、月明かりだけで結構明るいのに……これ影絵で遊べないな、左手で右手を掴んでワンワン……うん、何やってんだ私。

……これ歩けなくね？ どうやって移動すんだ？ と考えた途端、

身体がふわつと前進。

どこから推進力を得てるんだかサツパリだが、進む方向を決めて移動しようと思えば、そちらにふよふよと進むことが出来るらしい。

これ、上下方向にはどこまで行けるんだろう？ ……地面の中に潜っていくのも、空の向こうを目指すのも中々に勇気が要るな、試すのは今度にしよう。

何より速度がかなり遅い。どうものんびり歩く程度までしか出せんっぽい。

風の音も聞こえてる、草むらが靡いてるのも分かる。 ……が、身体に風が当たると感覚が無い。

暑さも寒さも感じません。そういえば『私』の記憶によると今の季節は ……夏か。まあ日本ほど四季がはっきりした地域ではないみたいだけど。

ふと思いついて息を止めてみる。

そもそも息をしていたとは思えないが ……うん、苦しくもなんともないね。知ってた。

というわけで総括。

今の私は …… まあ、色々と疑問は残るが――

「幽霊 …… だよねえ」

半ばそうだろうと思つてチェックしていた感は否めないが、何故にこんなことに。

まさに始まる前に終わっていた私の転生ライフ。

…… あの、これって転生に入りますか？

C1—2 安らかに眠れ、『私』

——朝日が昇った。

とりあえず日の光が私の身体に影響を与えることは無いようだ。

仮に私の状態が所謂アンデッド系モンスター的一种だったら、その類が日の光に弱いというのは定番だ。先ずはそれを確かめないことには始まらないよね。

その判定だと色々キツそうだから勘弁してくれと祈ってたけど、祈りが通じたようで何より……いや、推定幽霊が何に祈ってたんだ？

……まあいいか。

辺りに散らばる無縁仏達に対し、何も出来ないにも拘わらずこの場に留まっていたのは、下手に動いて日の出前に光を遮れる物が見つかるかどうか不安だったからだ。

万が一を考えて馬車の中に避難していたが、杞憂に終わったようでは何よりだね。

もう一つの理由が、スペクハイド一行が襲われたこの場所が街道だということだ。

一行が元々住んでいた王都からは、幾つも街を越えた田舎道ではあるものの、道の先はどちらも人里に繋がっている。

行き来はそれなりにされているはずで、すなわちそう遠くないうちに彼らの遺体は人目に触れることになる。……その辺りもあの連中は勘定に入れてたんだろう。

……私が生きた第三者なら、その無念を何とかしてあげたいとも思う所だが、生憎と私は死んだ第一者(?)だ。気の毒には思うもの、だからと言って何かできるとも思えない。

現に私の手は彼女の遺体に触れることすらできやしない。

土葬にしろ火葬にしろ、野晒しの遺体を弔うことすら不可能だ。

私とはもう関係の無い人々……と言ってしまうばそれまでなのだが、どう処理されるかぐらいはなんとなく見ておきたい気がする。

実際、わりと貴族にしておくのが勿体ない位に朴訥とした人々だったので、このまま田舎の地に骨を埋めるのも、彼らにとつては幸せなんじゃないかなあと思ったり思わなかったり。

……あ、でも最初に現れるのが人間という保証は無いのか。

街道と言つても獣の類ぐらいいはいるわけで、私は感じないけど血の臭いも漂っているだろうし、人目に触れる頃には無残に食い散らかされて……すまんがそうなたら見届けられんぞ、『私』。グロ耐性は無いからな、私。

——日の出から数時間後、彼らの遺体は無事に人間に発見されました。

いやあ、運が良いね。……良かったら死んでない？　せやな。

やってきたのは商人一行と思しき馬車が二台。片方は荷馬車だ。

街道脇に転がされた馬車に気付いて一旦停車、斥候らしき人が警戒しつつ接近。

……盗賊が襲われた馬車を偽装して近づいてきた相手に不意打ち、つて可能性もあるし、本陣を離しておいて少数で偵察するのは大事なわけだ。

斥候にきた彼は近くに転がる遺体と空っぽの馬車——私が居ただけけど、やっぱ見えてないね——を確認して一旦自分達の馬車へと帰還。それから一同で現場の確認を始める。

その会話を漏れ聞いた限り、身分を証明出来るような諸々の物品は残らず回収されていたため、「どこかの貴族様かなあ、多分」ぐらいの認識に終わった模様。

まあ写真や映像の情報なんて無いわけだし、没落前は有力な貴族だったといつても顔を知ってる人間なんてそうそう居ないわな。

斥候役の男性を含めた四人組が商人から護衛依頼を受けた冒険者達（！）らしく、遺体についてどうするかを依頼主に相談する。

そこは当然、何の得にもならない処理作業なんか却下する——か

と思いきや、彼は四人に死者の弔いを依頼した。

理由としては商人としてのゲン担ぎの意味が一つ。またこの往来の激しい街道ならまず無いとは思うが、アンデッド化されたら良くない、との事。

……おおう、やっぱいるのかアンデッドモンスター。

まあ、そういう感じのファンタジー世界を私がリクエストしたわけだけでも。

そして所謂『冒険者』という職業もあると。ビバ、テンプレ世界。

転生時に神様に頼んだのは『リクエストに最も近い世界』であって、私がアンデッドの存在する世界を望んだというわけではないのだが、ひよっとしたらそういう世界だからこそ私は幽霊としてこの世に留まれているのかもしれないな。

……この先、そのテンプレ世界を私が謳歌出来るかというと、うん、まあ……うん。

依頼を受けた四人が手際良く街道脇に穴を掘っていく。

親子だろうと判断した二人を一つの同じ穴に、残りの二人は一人ずつ。

……良い気遣いだ。約一名にとっては業腹ものだろうけど、死人に口なし死人に口なし。

そこで四人組の一人が徐に火を放つ。……あ、火葬ですか。

やっぱり遺体が残っているとアンデッド化しやすいつてことだろうか。

——つて、スルーしかけたけど今の魔法だよね！ やっぱあるん

だね、魔法！

いやそういうリクエストもしたんだけども！

『私』の記憶に曰く、魔法を使える人間は割と貴重なようで、殆ど生まれつきの才能で使えるかどうかが決まる模様。

才能が無ければ例え千金を積んでも習得は不可能だそうで、『私』には才能が無かった為に教養としての知識ぐらいしか与えられていなかった。

……私、ちゃんと自分が使う事も含めてリクエストしたよね？

記憶の覚醒と共に「封印が解けられた！（誤字ではない）」的なことになる予定だったのかな。

今となっては分からんけど。

立ち上る煙を前に、四人と商人が黙祷する。

……うん、いいね。野晒しにされるよりはよっぽどいいよね、この方が。

私には関係ない人達のはずだけど、何だか心の奥が温まる気がするよ。

——安らかに眠れ、『私』。

もう苦しまなくていいはずだから。

貴女の無念を晴らす……予定は特にないけど、余裕があったら考えしておくから。

……今のところそんな余裕は全く無いんで、期待はしないで頂きたいけど。

あ、それからもしそつちで神様に会ったらよろしく言っといてね。



「——やっぱりどっかで見た様な気がするなあ」

再度出発してから十数分後、馬車と平行して歩く護衛の一人がそう呟いた。

「やっっきのホトケさん達か？」

隣を歩くもう一人の問いに、最初の男が「ああ」と頷く。

残りの二人は商人が御者を務める馬車の中で腰を落ち着け休憩中。護衛と言ってもずっと馬車と並走するわけにも いかないし、こうし

てローテーションを組んでいるらしい。

「……王都を出る前に酒場に入り込んできたお嬢ちゃんのこと覚えてるか？」

「ん？ ……ああ、あれか、あの世間知らずの」

ふむ？ 在りし日のヤーネ嬢を見た事があるのかな、この二人。

ちよつと記憶の棚を漁ってみるか。ええつと、王都の酒場―酒場と―。

「護衛を引き受けてくれて、昼間から管巻してる連中に絡んでたあの娘か。報酬の額もさることながら酒場で直接募集するってあたりが斬新だったよなあ」

「きつと冒険者に依頼を出すなんて初めてだったんだろいな」

……あつたあつた。確かに一度、酒場に乗り込んで直接依頼しようとしてるね。

何でかって言ったら……冒険者ギルドとやらにも早晚『連中』の手は回ってたから、かあ。

擦り付けられた汚名が広まる前じゃないと、誰も引き受けてくれなくなるから。

ギルドを通しての依頼なんて、悠長なこと言ってられなかったから。

暇の有る冒険者が集まるだろう酒場で直談判しか可能性がなかった、と。……うわあお。

「あんな金額じゃ、隣の村にだって……いや、新米を二、三人なら雇えないこともないか？ ま、その辺りが限界だがな」

「それで目的地は王国の隅っこの村だったからな……王都から離れれば離れるほど危険は増すし、あの五倍、いや十倍は出してもらわなきゃ割に合わんぜ」

……手元に残った全財産だったんだよねえ、それが。

動かせるお金はとつくにみんな押さえられた後で、残ってたのは自分とお父さんの懐に入れてた分だけだったんだ。

調度品やらを換金出来れば別だっただろうけど、そんな余裕も無

かったし。

「……で、さっきのがその時のお嬢ちゃんだった？ いやいや、酒場のお嬢ちゃんはもつと普通の服だったじゃねえか。さっきのあの連中の服装はどう見てもお貴族様だっただろ。馬車にしても、こんなみすぼらしい木目の馬車じゃなく、貴族様専用の黒塗り馬車だったしよ」
「まあ、そうなんだがな」

馬の手綱を握る商人から「みすぼらしくて悪かったな」という呟きが漏れる。

肩をすくめて苦笑する二人。

「あの後お嬢ちゃんには冒険者への依頼の仕方を丁寧に教えてやってた物好きがいたろ？ 今頃はちゃんとした手続きを踏んで冒険者を雇ってるか、田舎町への相場を知って諦めてる頃だろうさ」

「まあ、正規の金額が払えるようには見えなかったしな」

酒場に入る前に、普通の服を譲ってもらってたからね。……物々交換で。

お嬢様な恰好で酒場に入ったら面倒が増えただろうから。

……で、当然というか、誰にも引き受けてもらえず仕方なく身内だけで出発。

まあ、仮にそこで奇跡が起こってたととしても、結果は同じだったかなあ。

—— なんとというか、やっぱりチクチクと腹立ってきたな。

ヤーネ嬢はヤーネ嬢であって、もう私ではない、とは思ってるんだけど。

この記憶の中の『私』の孤軍奮闘ぶりを見てみると、やるせないところはある。

……幽霊の私が苛立ったところで何がどうなるもんでもないんだけどさ。

だって今もこうやってふわふわと漂って聞き耳立ててるだけで、他人の視界にも入らなければ、物に触れる事も出来ないんだよ？

………ん？ ちよつと待て、ウエイト。
今、私どうなってる？

『私』達の遺体が綺麗に埋葬された後、何も無くなったところに漂っているのもアレだからって、彼らの馬車にこっそり相乗りして……相乗り？

………馬車、乗れとるやん。

えっ、昨夜は地面にすら触れなかったのに？

足の下、というか腰掛けた太ももに木の感触を感じてますですよ？

馬車の中の壁に向かって、徐に手を伸ばす。……手が木の壁を貫通。

腕を一旦引つ込めて、今度は「触るぞー」と念を込めて再び伸ばす。

……手が止まった。

手の平に微かに、木を触っている感触があった。

腕を押し込んでも手は動かない。何か違和感があるのは壁から押し返される感覚が無いからか。作用反作用の法則って奴だね。私の受験勉強は無駄ではなかった。

幽霊の手だから押し返す力を感じないのか、押す力が弱すぎて返ってくる力がいまいち感じられないのか……その辺はちよつと分からない。

手の平から「触ろう」という意識を抜いて——おととと、肩まで貫いちゃみたい。

んー……これは現世に干渉出来てる、のかな？

ひよつとして『私』を嵌めた『連中』を一発殴ってやることも可能？

ふーむ、これは……

無念を晴らす予定は無いと言ったな『私』よ。あれは撤回することになるかもしれんぞ。

……まあ、どこまで出来るかは分からんし、引き続き期待せずに待ってておくれやす。

C1—3 荷馬車の怪

——さて、触る気があれば物をすり抜けずに触る事が出来るという事は分かった。

私が馬車に乗れている事からも、これが単なる気のせいでは終わらないことが証明されている。

馬車の速度は私がふよふよ移動するよりは確実に早いので、置いてけぼりをくらってないということは、私に対して慣性の法則は機能しているという証左になる。

ひいては現世から私への干渉が行われていることになるからだ。

ただ、逆がどこまで可能なのかどうかは今の時点ではよく分からない。

現状、どれだけ力を込めても木の壁が傷付いたり軋んだりってところまではいけそうにないし。

……商人さんの肩でも叩いてみるか？

いや、それで気付かれたら気付かれたで面倒な事になる気もする。

アンデッド系モンスターの存在する世界だし、ゴースト系モンスターとか言われて討伐の運びになったらやばそう。

そういう相手に対してこの世界の人間がどういう対処を取るかもさっぱりだし。

あと少なくとも『私』の記憶にはそういう事態に関する記憶は無さげ。

……オカルト系の物語ぐらいならこの世界にもあるみたいなんだけど、ヤーネ嬢は特にそちらの造詣が深いわけではなかったようだ。

アンデッドモンスターについての知識も無いものかと探してみたけど、これまた微妙というか、これこれこういう名前のモンスターが存在する、程度。

まあモンスターの生態なんて貴族のお嬢様が興味を持つ分野ではないわな。

——と、いうわけで荷馬車内部へと移動しました。ここなら今、誰の目もありません。

各種商品に加えて、旅に必要な水と食料なんかが積んであるだけです。

まずは私の手が現世の物体を動かすことができるのか、なるべく軽い物で実験してみましよう。

えー、何か粉物でも無いかなつと……。

………塩か。

最初に見つけたのがよりによつて、塩か。

いやまあ、商品としては普通よね。人間が生きるには絶対必要だし。絶対売れるし。

しかしなー、私って塩平気なんだろうか。

清めの塩とかいつて浄化されたりしないか？ いやいや私、悪霊ではないし……ないよね？

……まあ、日光についてもチェックしたわけだし、これも調べんわけにはいかんよな。

そろーっと手を伸ばして指先でつんつん……あ、触る意識忘れてた。もう一回。

……指先に粒が当たる感触、続いて小山がほんのちよつぴり崩れる感触。

すかさず手を引っ込めて確認……指先が欠けてたりとかしないね、うん。

続いてさつきつついた塩の小山を確認……ほんのちよつと、へこみが出来ている。

では今度は迷いを振り払って手の平ドーン。

……おおっ！ しつかり手形がついたではないか。

手を離すと馬車の振動ですぐに均されてしまったが、まあええことよ。

これで日光に続いて塩も私を傷つけることはないと判明した。

そして何より、私が現世へ干渉が可能だということがはつきりと証明されたのだ。

ふっふっふ……一時はどうなる事かと思っただが、いいじゃないか転『死』ライフ。

面白くなってきたじゃないか。

次の実験は……物を持つ、持ち運べるかどうか、これだな。

先程も実験に使った塩を今度は一掴み……うん、いけるいける。

うわーこれ周りからしたら塩が独りでに浮かんでるんだろうなー……とんだ心霊現象だ。

……え、魔法がある世界ならこれぐらい普通？ もうちよつと浸らせてよ『私』。

サラサラサラ……つてあれ、塩が落ちた。

私また気抜いて「触る意識」忘れてたか？

もう一回掴まんで……あれ、なんかめつちや疲れる……

——疲れる？

おう、ちよつと待て、ウエイト^{w a i t}。

私の身体に疲労とかいう概念あったん？

昨夜から完徹してるつてのに眠気の一つも感じないんで、そういうのとは無縁かと……マジか。

休めば回復するんかな？ ……掴んでた塩が落ちたつてことは一

回体力的な物が空っぽになったわけで、もっかい掴んだらすぐ疲れたわけだから……本当に体力ゲージ的なモノだな、うん。

ちよつと休憩して——もう一掴み、うん大丈夫。

あ、でも掴んでるとまたすぐ駄目だわ。……うわっ……私の体力、無さすぎ……？

……うん、固体については一旦これぐらいにしとこう。次は液体に挑戦だ。

というわけで今度は水樽の前にスライド。水も人が生きていくのに必須だもんね。商人に限らず旅人の荷物には多かれ少なかれ必ず水が用意されてるよね。

今は蓋が閉まっていますが、商人さんが飲みに来たのを見てたから中身は分かっていますよ。

閉まった蓋を開けるってのはハードル高いだろう。ウチ、塩一掴みで瀕死なもやしっ子やし。

けどまあ、開ける必要なんかないんだ。だって私、幽霊だもん。

というわけで樽の中にー、顔をー……そおい!!

……うん、見える見える。若干水面が近いけどちゃんと見えるね。どうでもいいけど今私凄く姿勢だな。誰かに見られたらやばいね。誰にも見えないけどね。

あれ、密閉した樽の中なのにしっかり見える？

幽霊の目は夜目がきくのか。まあ、きかない幽霊とか幽霊としてどうよ？ ってなるな。

昨夜は月明かりのお陰で色々見えると思ってたけど、実際にはこっちだったんかね。

さて、予想通り水面に私の顔はうつってない。いやどのみち光源が無いから駄目か。

多分前世の顔なんだとは思っただけど、本当に確認する手段が無いなー。

手形みたいに粉に顔突っ込んで型を取るとか？ ……それで分かるのは魚拓的なアレだな。

まあこれもそのうち何か考えるところでしょう。

気を取り直して実験開始。まずは水面をつついてみる。

すっかり波紋が生まれるねえ。馬車の振動で常にふるふる揺れてはいるけど、それを踏まえてもちゃんと分かる範囲。

では次は手形を……あれ、なんか硬い？

……水の表面張力ってやつか。硬貨を浮かべるぐらいにはあるんだっけ。

続いて一掻き掬い取る。……まあ、この辺も塩と一緒にかなー。

掬った手を素早く樽の外に出す——樽の内壁で水は置いてけぼりになった。当たり前か。

んー……ひとまずはこんなもんか。

始めは触れると分かってれば『私』の埋葬も私がやったのに……とか思ってたけど、この分だと人ひとり入れる穴を掘るとかとてもじゃないが無理だったね。何日かかったやらだよ。

……しっかし、昨夜調べた時も地面やら草やら『私』の腕やら触ろうと思つて手足を伸ばしたと思うんだけどな。

あの時触れずにすり抜けちゃったのは何が悪かったんだろうか？

成りたてだったから上手く力を使えてなかったとか？ ……今となつてはもう分からんね。

あとは体力——うーん、体力つて呼んでるけどどつちかつていうと『靈力』？

いやそんな高尚なサムシングかなー……まあいいや、暫定的に靈力で。

これをもうちよつと色々出来るように鍛えることは出来んもんか。これじゃ奴らを殴るどころか毎晩枕元で髪の毛を一本一本抜いていく程度の嫌がらせが関の山じゃないか。

………とりあえず『私』の恨み返し第一案はそれにしておくか。もう少し何か出来そうなら適宜更新ということだ。

靈力——体力的なものを鍛えるとなると、持久走的な？

使つて、疲れて、休憩して、また使つて……を繰り返してれば何と

かなるかな？

後は動かすのに靈力をあんまり使わない物質とかないもんか。

霊体と相性の良い金属とかテンプレファンタジー世界にならあってもおかしくないと思う。

そうと決まれば、手始めにこの荷馬車の中を片っ端から調べてみようじゃないか。

彼がどの程度の商人なのかはともかく、それなりの種類の物質を調べることができらるだろう。

日光や塩の他にも幽霊の弱点になりそうなものがあつたら早めに調べておきたいし。

というわけで後は目に付いた物体から順繰りに持ち上げていこうかね。

それから持久力&出力上昇目指してブーツなんちゃら（幽霊式）開幕だ。ワンモアセツ。

——疲れた。そして何というか……腹が減った。

空腹もあるのかよ、私。幽霊なのに。

……いや、空腹とかなんか違う気が。『食べたい』という感覚があるわけではないし。

そして空腹感（仮）を感じ始めるようになってから、靈力の回復が遅くなったような。

使って休んでを繰り返す内に許容量というか上限が上がったような気はするんだけど、疲労が消えるまでの休憩時間が加速度的に伸びていった。

始めはほんの数秒休めばまた粉を掴めるようになっていたのに、今では十数分はかかる。

……『何か』を補給しろと身体が訴えている。

しかしその『何か』が分からん。
目の前には食料も色々とあるが、これを食べる気にはならない。
そもそも掴むのが精一杯の現状で『食べる』とか絶対無理だ。

……ぼんやり構えているが、これは転死ライフ始まって以来の危機ではなからうか。

このままこの空腹感(仮)を放置していたら私はどうなってしまうのだろう。

餓死(仮)? いや(仮)で済むのか、これ?

じりじりと迫る焦燥感を紛らわすように、さつき見つけた小麦粉をぺたぺた触る。

握ればすぐ固まるはずの小麦粉が、手の中でさらさらする感触がまさに新感覚だ。

上限の増えた霊力を一気に使って一塊掬い上げ――

「……………えっ」

《おおうつ?》

荷馬車に入ってきた商人さんと目が合った。

……いや、そう感じたのは私だけだ。私の姿は彼には見えないのだから。

ついでに私の口から漏れた情けない声も彼には聞こえていないはず。

彼の目が見ていたのは、一瞬前にどさつと塊が落ちたように見えた小麦粉の袋だ。

「……………」

訝し気に小麦粉の袋を覗き込む商人さん。

私が表面に付けた手形は馬車の振動で逐次消えている。

ぺたぺた触っていたといっても、私の手から皮脂だの埃だのが付くはずもないので、衛生的にも問題は無いのだよ。

「……気のせい、か」

そうそう気のせい気のせい。

ここには貴方がさつき水を飲みにきてから、今また入ってくるまで誰も入ってませんよ。

……少なくとも生きた人間は。

商人さんが気を取り直すように水樽を開け、手にした柄杓で一口あ
おる。

そして開けた蓋を戻そうとして——固まった。

水面にうつすらと浮かぶ、顔の輪郭。

覗き込んだ商人の顔とは全く違う、少女の顔。

《「——っ」》

目を見開いた商人の前で、水面に浮かぶ顔が、微かに動く。

見られていることに驚いたとでもいうように、目を見開き、口を開
いて——

《「ぎゃああああ——っ!？」》

商人の悲鳴に、すぐさま荷馬車内に駆け込んできたは護衛の冒険者
達。

そこには腰を抜かし、へたりこむ商人と、放り投げられた水樽が転
がっていた。

C1-4 幽霊の食事情？

——いやあ、びびった。マジでびびったよあれは。

誰のせいっていつたら疑うまでも無く私のせいなんだけれども。きつとあれだね、何とかして自分の顔が見れないかなー、って水面に顔を近付けてたからだね。

そしたら霊力さんが勝手に何かして、水面がこう……何か起きたんだらうね（語彙消滅）。

……しかし何も動くことはないじゃないか、水面の顔さん（仮）。

しかも何よあの「……見られちゃった、キャツ」的な反応は。

殺気を帯びて駆け込んできた護衛さん達の怖いこと怖いこと。まあ当然の反応だけでも。

私、思わず隠れ場所を探しちゃったからね。見えないのに。

「穴があつたら入りたい！ イヤ、穴要らないじゃん、幽霊なんだからっ」って感じで地面に潜っちゃったからね。……そもそも見えないっつてんだろ。

ま、まあ、経験豊富な冒険者の中には私みたいなへの対処法とか持つてる奴も居るかもだし、石橋叩きって奴だよ、うん。

その後、暫く様子を窺ってたなら、そのうち商人さんも再起動したらしく馬車は動き出した。

冒険者さん達の視線を改めて一人ずつ確認、私の姿がその視界に映っていないことをしっかりと確かめてから馬車に戻る。

正直もう乗つてく必要もないかなあ、とも思ってたけど、自力でふよふよ移動するより早く人里に辿り着けるわけだし、乗つてかない理由も同じく無いんよね。

——実は今、私の中で人里に辿り着くことが一転して重要な要素になっている。

何故ならつい先程まで私に真綿で締められるかのように迫っていた危機感を、解消する手段の一つがはつきりしたからだ。

水面で動いた顔に商人さんが悲鳴を上げた瞬間——私も悲鳴を上げたが——空腹感(仮)が急速に解消されていったのを感じたのだ。

どうやら幽霊にとっての『食事』とは、生きた人間をびびらせる事だったらしい。

……心霊スポットで写真を取ると、よく手やら顔やら写り込んでたが、それを見た人間がびびることが彼らの『食事』になっていたんだろうか？

いや異世界の幽霊事情があっちにも通用するかどうかなんて知らんけども。

そして商人さんを大いにびびらせたおかげか、はたまた元から出来た事を私が知らなかったただけなのか……まあともかく色々試した結果、また新しく今の私に出来る事を発見した。

《……ほいつ、と》

ちよいと気合いを入れて——気持ち的には靈力を込めて——木の床を手の平で叩く。

私を手をどけると、そこにはぼんやりと手形……に見えるような黒ずみが出来上がっていた。

こんな感じで何かの表面に、ほんのちよつぴりの『痕跡』を作れるようになったのだ。

汚れか何かが偶然手の形に見える……かな？ 程度ではあるものの、これでも使い方次第で人をびびらせることは十分可能だろう。

元来人間の目は見たものに何かしらの意味を付けようとするように出来ている。

点が三つ集まれば顔に見えるし、雰囲気次第で木の影を顔と認識したりもするのだ。

幽霊の正体見たり枯れ尾花^{尾花}つてやつだね。……いや、私はススキ^{尾花}じゃないけどね？

それにびびらせるといっても、さっきのように腰が抜けるほどでなくて良いようだ。

現に商人さんから話を聞いた冒険者さんが「何か気味悪いな」程度の様子で水を口にする度に、ちよつとずつだが何か『腹に溜まる』ような感覚がある。

これなら「あそこ何か出るらしいぜ」程度の心霊スポットをそこそこの規模の街に作るだけで、二度と飢餓感に怯える心配はなくなるんじゃないだろうか。

そんなわけでこの一行をこれ以上怖がらせる必要はないので、作った手形は消しておく。

……私の意思でなら作った『痕跡』は消すことも可能なのだ。

同じ場所で撮った写真に、変なモノが写ったり写らなかつたりするのはこのせいかな。

消さずに置いたらいつまで残るかなんかも追々確認していくとしよう。

あとは霊的に都合のいい物品の搜索についてだけど、これについては特に収穫無し。

一応隅っこにあった銀製のアクセサリーに触れてみることで、私の身体に悪影響が出ないことを確認したぐらいか。日光、塩に続くアンデッドの定番弱点その三だ。

いやあ今のところ全戦全勝ですな。敗北を知りた……くはない。常勝無敗が理想です、はい。



——馬車に相乗りして過ごすことはや数日。

今日も今日とてこつそりと幽霊版体力(?)作りに勤しみつつ彼らの道中を見守ってます。

護衛の四人は冒険者としてはそれなりのベテランなのだそうで、何度かモンスターに襲われるも危なげなく対処している。

それぞれの得物は剣、槍、弓、それと火葬を行った魔法使いが接近

戦用に軽めの槌。

襲ってくるモンスターは『ゴブリン』——緑の体色に、小さな角の生えた小男という見た目だ——を中心に、まんま野生の狼の『ウルフ』、豚顔の巨漢『オーク』と、これまたテンプレ。

……ここまで細かくリクエストした覚えは無いんだけど……よくもまあ、こんなテンプレ世界があったもんだよ、本当に。

「——そろそろ村の近くのはずだよな？」

そんな折、再々度遭遇したゴブリンをすっかり処理した後で、訝し気に呟く冒険者が一人。

「ああ、そろそろ見えてくる頃だが……どうかしたか？」

「こうもゴブリンが出るってことは、村の近くに群れが出来ちまつてるんじゃないかと思ってな」

「そうだとすると……ああ、面倒だな」

一人が抱いた疑念に、他の三人が顔をしかめて頷く。

「何せ小さな村だから……常駐してる冒険者なんざ居るわけない。既に依頼が出てればいいが、最近群れが発生して、切羽詰まつてる状態だとしたら……」

「俺達にお鉢が回ってくるな。人助けと思えば悪くないんだが……」

「……退治は難しいのですか？」

歯切れの悪い調子の冒険者達の様子に、やや不安そうに商人が問いかける。

四人は首を振ってそれを否定するが、続けて苦笑を浮かべながら言葉を返す。

「ここらの様子を見るに、俺らからすりゃ大した規模じゃなさそうです。問題は実入りです」

「旦那だって、通過点の一つである村の経済状況は把握してるでしょう？」

「それはまあ……なるほど、そういうことですか」

「相手がゴブリンじゃ何体居たって儲けにやほぼならねえ。……牙やら皮やらが売り物になる相手なら別なんだがな」

「村として用意できる報酬つっても高が知れてる」

「とはいえ彼らにとつては死活問題ですから、放っていくのも忍びない」

「いっそ危険を感じる程度の大集団なら、名を上げる機会にもなるんですがね」

「……まとめると、骨折り仕事が残ってそうって感じか。よっぽど寒村なんだねえ。」

懐にも名声にも、大して足しになりそうな案件でもない。それでも見て見ぬ振りするって意見が出てこないあたりには人の良さは出てるかな。

「というわけで一応、村から依頼されたら討伐に動くことになると思いますんで、それまで護衛を外れることになりましたが構いませんか？」

「滞在中の自由行動については契約の範疇ですし、私からどうこう言う権利はありません」

「話が早くて助かります」

そう言つて背中越しに冒険者達と笑い合う商人さん。

馬の手綱を握る手を片方、首から提げた水筒に伸ばして——中身が無い事に気付いた。

「……すみませんが、また水を補充してもらえますか」

「旦那……まだ水面が怖いんですかい？」

商人さんがさっと目を逸らす。

「……あー、腹に溜まるわー。」

「自分で気のせいだつて言つてたじゃないですか。自分の顔がうつつてただけだつて」

「動いたように見えたのも振動で波立つてたせいだつて……」

あの水面の顔（仮）は、あの後すぐに消しちやっただから冒険者達は誰も見てないんだよね。

商人さんも自分の悲鳴に集まった彼らを気のせいだと言つて収めていたし。

……必死に「気のせい、気のせいだった」と主に自分に言い聞かせる様が逆に真に迫った感じになっていて、冒険者達は以降この件を追求しないようにしていたわけだけでも。

水樽から柄杓で飲んでいた彼が急に水筒に詰めて飲むようになっても、特に言及はしなかった。

極力水面を見ないように行っていた水筒への補充作業を次第に冒険者の誰かに頼むようになり、街道から池が見える場所でやけに馬を急がせたり……

そうしているうちに、冒険者達の目には胡乱な色が溜まっていく。その表情を読んで曰く、「アンタ、いつまでそうやってる気だ」と。そんな四つの視線に、やさぐれたように商人さんもボソリと呟きを返す。

「……あのとき私の悲鳴に被せるように……女性の悲鳴も聞こえた気がするんですよ……」

「あんた今になって、そういう……ああもう」
……あーお腹にガンガン来るわー。これは五人分ぐらい来てるわー。



——村から馬車が見える距離になった頃。

彼らが予測した通り、切羽詰まった様子の子の村人数人に駆け寄られて暫しやりとりをかわした後、冒険者達は詳しい話を聞くべく村長の家へと連れられていった。

商人さんが即席露店を用意し始めたのを尻目に、私は集まってくる村人たちに目を向ける。

露店に注目する視線の中に、一つぐらい私に向いた視線があったりしないかと思ってみるが、こちらはどうにも空振りらしい。

こうして見ても二十人、いや三十人は居ないだろうな程度の村ではあるが、所謂霊感体質な人間の一人や二人居てもおかしくないかなと思っただけだ。

……いや、前の世界でもそうだけど、本当に靈感体質ってあるのかなあ。

自称霊能力者とかいう胡散臭いのは幾らでも居たけど、その人達が本当に『見えて』たかどうかなんて誰にも分かんないしねえ。

眼球の病気とかで確かに『他人には見えないもの』を見てた人も居たかもしれないし、みんながみんな嘘をついてたわけではないとは思うんだけども。

それに未だ私には『幽霊タイプのアンドレッド系モンスター』疑惑も残っている。

これについては何かしらの手段で情報を得るしかない。

……あとは人里なら『お仲間』に遭遇する可能性もあるかな？

「——冒険者、か。どうせならもつと早く来てくれてたらな……」

ん？ 何やら近くに立っていた少年が沈痛な面持ちで一言。

それを聞いた周囲の大人達が「そんな事を言うんじゃない」と宥めてますね。

「だって……っ、もつと早く助けを呼んでいたら、あいつは……ミナはっ！」

食いしばった歯の隙間から絞り出される少年の言葉に、周囲からも辛そうな「あの子か……」という呟きが広がった。

……ああ、既に犠牲者が出ちゃってる感じか。まあそれはそうだろうね。

断片的な呟きを要約すると、やはり始めにゴブリンが村の近くに見られるようになって、これは最寄りの街まで討伐の依頼を出さなければならぬか……と大人達がうんうん協議している内に、村外れで野草を摘んでいたミナちゃん（推定八才）が襲われ、最初の犠牲者と相成ったらしい。

とはいえ仮にどれだけ村の初動が早かったとしても、ここから冒険者ギルドのある街まで確実に往復三日はかかるとのこと。

対してミナちゃんが襲われたのは協議を始めた翌日との事で……

すなわち少年の憤りは的外れなわけだが、そう言われたところで彼も納得など出来るまい。

「……商人さん、何か……女の子に似合う装飾品は無いかな？」

村人の青年が、少年を目の端に捉えつつ商人さんに問いかける。

その様子に何かを悟ったような様子で、彼は手にした袋から髪飾りを取り出した。

「それでしたら、こちらはいかがでしょう」

「えっと、お代は……」

「……銅貨一枚としましょうか」

「っ……ありがとうございます」

赤い花を模した髪飾りを受け取った青年が、うつむいたままの少年の前にそれを差し出す。

気付いた少年は、濡れた目で青年を見上げた。

「お前からミナちゃんに……渡して来い」

「え……で、でも……」

「お前達の気持ちはみんな知っていたさ」

周囲を見回す少年に、誰も彼もが暖かい視線を返す。

少年は微かに頬を朱く染めた後、ぐいと目を拭って髪飾りを受け取ると、そのままどこかに歩き去っていった。

……多分その方向に、犠牲者が弔われた場所があるんだろう。

「……ありがとうございます」

「私はお客に髪飾りを売っただけですよ」

「でも、本当はもつと……」

「私が銅貨一枚と言ったのですから、銅貨一枚です」

「……………」

村人の黙礼に、商人さんはただ微笑みだけを返した。

……何だよ、めっちゃ良い人やん、この商人さん。

「生きた人間には勿論ですが、死者にも猶更敬意を払うべきです。人は自分が死んだからといってすぐ何処へと消えられるものではない。

死した後どうなったか気になるのは自然なことでしょう？ それ
時として、生きた人間の耳目に触れることもある……私はそう思っ
ているんですよ」

……ああ、うん、えつと……そういう風に自分を納得させた
ですね、この人。

あれを見たのって、無縁仏を弔ったその日の事だったもんね。

何ていうか、その……ごめんなさい。いやほんとマジでごめんな
さい。

「……そういえばあいつも、『まだミナが近くに居る気がする』と、
く言ってたな……」

……おう、ウエイwa eiト。

これはひよつとして同類おなかまに会えるフラグではなからうか。

C1—5 生きた記憶

——盛り土の上に木の棒を立てた、簡素な墓標の並ぶ墓地。俄かに村を包んだ喧噪から離れ、そこに佇むは一つの人影。未だ真新しい墓標に掛けられた、赤い花を模した髪飾り。微かな風に揺れるそれを前に、静かに瞑目する少年。

そんな彼に覆い被さる青白い靄と、そこから伸びる青白い手。

……………アカンやつや。

アレ絶対アカンやつやつて。

形になつてるの肘から先だけやもん。後はなんか靄が少年包んでるもん。

そんで顔のあるべき部分が口っぽく収縮して、《アアアア……》とか聞こえてくるんよ。

いや、ほんと、マジでどうしよう。

同類に会えるかもと思つてついてきて多分同類に会ってるんだけど、アレを同類とみてしまつて良いのか非常に悩ましいんですが。

……さつきまでの空気は何処に行つたんよー。

ここは少年少女の初々しいやり取りが行なわれる展開じゃないのかよー。

そして少年は全く気付いてないね、この状況に。まあ見えないんだろうから仕方ない。

……あ、いや、「ミナが近くにいた気がする」とか呟いてるわ。

うん、めっちゃ近くだよ。ゼロ距離だよ。むしろ密着超えて二人の距離はマイナスだよ。

……いや、でも実際少年平気そうなんよな。

傍目には悪霊に憑かれてるようにしか見えんけど、悪影響を受けてる様子は全くない。

彼が村に居る時は彼女の姿は無かったわけだし、とり憑かれてるってわけではないのか？

——あつ、少年が去っていく。

「また来るからな、ミナ」じゃなくて……えつ、平気なん？

……あ、そしてミナちゃん（仮）も追いかけないね。

名残惜しそうに腕伸ばして……霧伸ばして、なんか全体的に紐っぽくなって、残った口が《オアア……》って鳴くだけやねー。ふふふ……怖いです。

……話しかけるべきかなー。どうかなー。

私から彼女が見えてるなら、彼女からも私が見えてる公算は高いと思うけどなー。

幽霊同士で争いになる可能性とか……うーむ。

……よし、行こう。ここで行かねば何も始まらない。

見た目はともかく、あれは悪霊化してるわけではないだろう。

それに自分以外の幽霊には遅かれ早かれ会う事になるに違いない。そのときにどう対応すべきか指針を決めるにあたって、この機会は避けては通れない。

女は度胸！ 男も度胸！ 坊主のお経は勘弁な！ 正：男は度胸、女は愛嬌、坊主はお経。

漬物はらつきよう、等と更続くこともあるとかないとか。

《あー………こんにちは？》

《……アア？》

よし、まずは反応を返してくれました。やっぱり互いに認識出来る模様。

そしてミナちゃん、それはただの応答だよな？ メンチ切られたわ

けではないよね？

それにしても『こんにちは』て……もう少し気の利いた一言が浮かばんもんかね、私よ。

《えーと……ミナちゃん、で良いんだよね？》

《ア……オア、アア……！》

……うん、多分肯定やな、これは！

頭があるべきあたりが頷くような動きを見せてるし！

人違いじゃなくて安心です。何せ腕以外はマジで形が無いんだもん。

まあ全身あったところで、生前のミナちゃんを知らない以上、同じことだったけどさ。

……いやしかし、ここからどうする。やっぱり喋れないっばいぞ、この子。

生きた人間の耳には入らない上に、同輩にすら意味のある言葉と聞き取れない呻きとは。

この世界の幽霊事情について何かしら聞きたかったんだけど、これではなー。

筆談でも試す？ 筆記具なんて用意してないし、あったとして彼女に持てるかどうか。

物動かすのって凄く疲れるからね。まして字を書くとか私だってまだ二、三文字が限度だ。

彼女が私より遥かに高い霊力を持つてるのなら別だけど、この見るからに満身創痍な姿からして期待は薄いと言わざるを得ない。

あとはボディランゲージ……腕だけで？

靄部分で文字になるとか……いやいや、そんな器用な動きができるとは思えんな。

こうして見ても薄くなって濃くなってぐにやぐにや崩れてと、全然制御出来てるようには……というか初めに見た時よりだいぶ大きくなってない？

……ん？　ちよい待って、ウエイトウエイト。大きくなったんじゃない、近寄ってきてんだわ、この子。人が考え事してる間にそつとにじり寄って来てたんですね。まあ足音なんてするわけじゃないですよ。当然——って、いやちよつとくつついてこないでって、いや《オアア》じゃなくて、お姉さんそういう趣味は無いからあつ!?

………。

……あー。

……うん。そっか。

取り敢えず整理しよう。何が起きたか。

まず私の中にあつた記憶の棚……『私』の記憶が並べられていたところに、小さな棚が増えた。

ヤーネ嬢の場合は生まれてから殺されるまでの十二年の記憶を収めた大棚なんだけど、こっちは本当に小さな棚だ。

ゴブリンに襲われてから死ぬまでと、同郷の少年と過ごした日々の断片的な記憶。

そしてそこから死後になって、墓参りに来てくれる少年を見つめる日々と……最後の最後に私を目にしたごくごく僅かな記憶。

……彼女から見た私、テンパってんなー。

こんな目泳いでた？　マジかーって、それはまあ置いとくとしてだ。

彼女が私に触れた瞬間、私から『何か』が溢れだし、彼女の『欠け』を埋めていった。

……もうね、本当にスカスカだったよ。まるで虫食いされた木の実の如く。

人間の魂の構造なんか私を知るわけないけど、何か大切な部分が

ごつそりと抜け落ちてるらしいというのが感覚として何となく分かった。

『欠け』が全て満たされたのと、記憶の棚が追加されたのは同時。

そして棚の前に、生前の姿で立った彼女は、私の視線に気付くとぺこりと頭を下げた。

そして背後の棚の、私を見た瞬間に抱いた感情の部分を見るように頼んできた。

突然襲い掛かるみたいにして寄ってきた理由と、感謝の気持ちがあるからと。

……それだけ告げると、彼女は蠟燭の火の如く消えてしまった。

彼女の記憶から分かったのは、『私』のそれに対して彼女の記憶がやけに少なかった理由。

どうやらゴブリンに殺され幽霊になってからというもの、時間と共に彼女の記憶は徐々に薄れ、消えていったらしいのだ。

その日その日の出来事だとか、何気ない日常の記憶からどんどん消えていき、強く意識していた記憶だけが残っていったという。

彼女にとっての不幸は、殺されるその時に非常に強い恐怖を感じてしまったことなのだろう。

何も分からないうちに死んでいれば、あんな悪霊一步手前みたいにならずに済んだはずだ。

彼女を彼女たらしめる大切な記憶がどんどん失われていく中で、回避すべき最期の記憶は強固にその魂に喰いこみ、苛み続ける。

肉体的な死とは異なる、精神的死という悍ましさに、彼女は狂うことも、さりとて消えることを望むこともできず、ただ延々とヤスリ掛けされるような焦燥感の中でそこに存在し続けた。

そうして滑落していく記憶の中で、恐怖に並ぶ強さがあつたのが、少年への想いだったのだ。

日に日にその二つ以外の記憶を失っていく中、恐怖のみで構築された魂になるのが恐ろしくて、もう片方に必死にしがみついていたのだという。

少年が毎日のように墓参りに訪れてくれたのも幸いし、その新たな記憶と執着を基にギリギリのところまで存在を繋ぐ。……とはいえそれも、もう限界が近かったようだ。

魂が『崩れ』、人の姿を失いはじめた頃から、次第に自我も薄れてきていたらしい。

そんな中、私に話しかけられたのが本当に嬉しかったのだという。私に『覚えて』もらうことで、自分という魂が完全に消えてしまうことを防げると……私を見た瞬間、直感的にそう思ったらしい。

……何故、私にそんなことが出来ると思ったのかまでは、彼女の記憶からは分からなかった。

私の中に私以外の記憶があることが、幽霊の身に何かしら感じ取れたのだろうか？

僅かに残っていた記憶を余さず私の魂に託し、彼女は彼女であるまま旅立っていった。

最後に微かに聞こえた「ありがとう」という声は、私の気のせいなどでは決してあるまい。

——そんなわけで、私の中に八歳の少女が抱いた恐怖体験と初々しい恋の記憶が残された。

前者はもちろんだけど、後者もあくまで記録として『観る』に留めるとしよう。その気になれば彼女の感情まで追体験することもできるが、これは私が手を出して良いものじゃない。

いやー………しかし、どうすつかね。

幽霊に会ったらこんなことになるとは思わなかったよ。

死んでから時間が経つと記憶無くなってくの？ とか。

幽霊同士なら記憶のシェアできるの？ とか、色々気になることは一杯あるけど、差し当たって私がやるべき事としては——



——その日、群れの頭目であった彼は飛び起きるようにして頭を上げた。

何故か非常に不吉な夢をみたような気がして、冷や汗が止まらなかったのだ。

見渡すと、寝ぐらにしていた洞窟の岩壁が視界を埋める。

急激に大きくなった彼の群れは一時食糧に事欠くことはあったが、首尾よく当てが見つかったがゆえに概ね順調に規模を拡大、徐々に力を蓄えつつあった。

だが群れが大きくなればその分、別の群れや天敵の目に留まる可能性も高まる。

夢見が悪かったのはその予兆かもしれないと思った彼は、喉からガラガラとした声を張り上げ、手下を呼びつける。

——何事もないか？

そのような意味の声を掛けんとし……駆けつけた手下の奇妙な表情に彼の思考は中断された。

(……………?)

その視線は常のような、上位者に対する畏怖からくるものではなく、どこか気の抜けた……否、気を抜けさせるような物を眺めているような、そんな代物。

一体何をそんな目で——と、視線の向く先を今一度確認する。

向けられているのは自分の顔……いや、あるいはもつと上にある何か——

ぞくり、と。

彼は背筋に這うような悪寒を覚えた。

——まさか、いやそんな、そんなはずはない。

あれは単なる夢。そう、質の悪い夢だ。そうに決まっている……
そんな思いを宿して、彼の手はおそろのおそろとある場所へと伸ばされる。

何故か、どうしてなのか、奇妙に頼りなく感じる——自身の頭部へと。

かさり、ばさばさ……

非常に軽いモノがはらはらと体に当たる感触。

眼前に戻した手には無数の毛——根こそぎ収穫された、頭髮。

——プヒツ。

彼の耳が、やや毛色の違う音を拾い上げた。

光の消えた彼の瞳に映ったのは、手下のゴブリンの——忍び笑
い。

(——ツ!!!)

瞬間、彼の瞳は、その全身は、くぐもった水音と共に紅に染め上げられた。

「——何だ？ 仲間割れか？」

ゴブリンの群れの拠点を突き止め、さて本腰を入れるかと機会を窺っていた冒険者達。

その訝しげな視線の先には、丁度洞窟から飛び出したゴブリン上位種——『ホブゴブリン』の姿があった。

小さくとも群れを形成するとなれば、上位種の存在はほぼ確定していた為、それに対する驚きは特にない。

奇妙なのは、群れの首領であろうホブゴブリンが何故か手下のゴブリンを撫で斬りにしており、今もその返り血に身を染め上げている最中であるということ。

そしてもう一つは――

「……何だありや」

「さあ……？」

――その頭がつるつる……もとい、光を反射せんばかりに輝いていることだった。

いかな経験豊富な彼らにしても、脱毛症のゴブリンなど寡聞にして存じ上げなかつたのである。

「……なんか、見るからに怒り狂ってるんだが……」

「それはそれとして、そこはかとな悲哀を感じるような……」

血涙を流し暴れまわるホブゴブリンと、訳も分ならず涙目で逃げ惑うゴブリン達。

思わず目を合わせる冒険者達だが、彼らとしては特にやる事が変わるわけでもない。

「……良く分かんが楽しんできそうだな」

言葉少なに頷き合い、彼らは仕事を始める。

はたして皆殺しにした手下の屍を絨毯に天に向かって慟哭していたホブゴブリンは、彼らの手によって実にあっさり討伐されたのだった。

C1—6 おさわり厳禁？

——村を苦しめたゴブリンの群れは無事に討伐された。

群れの頭と思しき一回りでつかいゴブリンにもそれなりの苦しみを与えられたようだし、これでミナちゃん他、犠牲になった村人達も安心して眠ることが出来るだろう。

……まあ私が何かしようがしまいが、あの冒険者達が対処したんだろうし、私の自己満足以上の意味は実質無いんだけどね。

思った以上に反応が良かったけど、ゴブリンには頭髪を大事にする習性でもあるんだろうか？

いや、どつちかという手下ゴブリンが笑っちゃったのが致命的だったのかなー。

しかし今回で自覚したが、こと偵察任務においてこの幽霊ボディはまさに反則ですな。

地形の悪さ、視界の悪さ、相手の警戒その他もろもろ余裕の全スルー。

ふわっと浮かんで空から拠点の周辺を堂々と観察、近くをうろつく奴でも見つけて堂々と背中に憑りついてれば、後は黙ってるだけで……騒ごうが何しようが拠点へご案内。

見つけた拠点に正面からこれまた堂々と入って行って、首領の枕元にハイこんにちは。

今回は天然の洞穴だったが、例えばこれが文明的な家屋だったとしても同じ事。

物理的な扉や鍵をどれだけ設けようが、どれだけ訓練された監視が居ようが、私には通じない。

……そこまで来て出来ることが、筆ることぐらいなのが難点だけだねえ。

仕事を終えた冒険者達は元の護衛依頼に戻り、商人と共に再び旅路

に。

その馬車には私もちやつかり同席させてもらっている。

……心霊スポット作るにはちよつと小さすぎたからね、あの村。

まあ、それを言ったら別に人数が少なくつても私の腹具合には問題ないんだけど。

色々と想定外の状況ではあれ折角異世界に来たわけだし、そのうちひとところに留まるにしても候補になる土地をそれなりに見て回りたいって方が本音に近いかな。

——ああ、そうだ、腹具合と言えばもう一つ。

私があの大ゴブリンに与えたのは『恐怖』というより『怒り』だったと思うんだけど、それでも私は単に恨み返しができてスカつとする気分とは別の『充足感』を得ていた。

言わずもがな、商人一行をびびらせた時と同じ、腹が満たされる感覚、だ。

この感覚にも何か名前付けた方が良くかなー。

霊力を使い切って回復するときには消耗するんだよね。……で、霊の体力ということで『霊力』と名付けたわけだから、体力の源ということ……生命力？

イヤ、今の私に『生命』は無いやろ。常識的に考えて。……常識つてなんだっけ。

それじゃ霊力の源って意味で『霊力源』——えらく高尚な響きになった気がするが仕方ない。暫定『霊力源』で。

ともかく、私が『霊力源』を得る条件はわりかし緩いということが新たに判明した。

商人さんは私が作った……んだよね？ 作ったんだろう水面の顔に驚くことで成立。

冒険者達はそれを商人さんから聞くだけで成立。

あのデカゴブリンに至っては、誰があん状況を招いたなんて当ゴブリン(?)は知る由もなく、それでも引き起こされた事態に怒り狂うことで成立。

それぞれの抱いた感情が、私の『靈力源』に転化されたわけだ。恐怖に怒りとくれば、他の感情にも条件を満たすものがあると考えたほうが自然だな。

これは色々と検証を行うべきだろう。

とはいえどうやって、という点については全くの白紙だ。

この商人さん一行をやたら実験台に使うのもどうかと思うし。

……なんか人生観変えちゃったっぽいしね。そんな高尚なノリじゃ無いっすよ商人さん。



——はい、というわけで今わたくし慌ただしき喧噪の真っ只中におります。

勿論、誰にも見えておりませんが。

村を出発してから数日後、進行方向の彼方に頑丈そうな外壁が見えてきたところで、冒険者達が肩の荷を下ろすように言葉を交わし合う一幕があった。

そのやり取りを聞くに、どうやらこの街——マースルというらしい——が今回の護衛依頼の終着点であるそうなの。

彼らの様子からして、ここまでくればもう危険もないということなのだろう。

先の村と違って十分な防衛力もあるみたいだし。

そんなわけで顔馴染み（一方通行）となった商人さんご一行とは既にお別れ（一方通行）済み。

ありがとう、さようなら、また会う日まで。

……だってあの人達、門の前で止められてるんやもん。いや、別にあの一行だけが止められてるわけじゃなく、街を出入りする人間は検問を受けるっただけなんだけど。

一行曰く、検問自体は通常通り、しかしどこか普段には無い緊張感

があるんだとか。

なので同じく検問待ちに並んでた方々に幽霊ボディを活かして聞き込み（盗み聞き）を試してみたものの、その原因はよく分からず。

……これから街に入ろうって人間が、その街で起きた何某を知ってるわけではないわ。当然やな。

なので一足先に街の中にお邪魔いたした次第です。……検問？
外壁？ なにそれ美味しいの？

冗談はさておき、私に物理的な足止めが効くわけない。ゆうれいだもの あまみ

一旦上空から街をぐるつと見渡し——『私』曰く街の規模としてはまあまあらしい——人がぎっしり集まっている広場のようなところを発見、着陸(?)した。

この賑わいが事件のせいなのか、はたまた普段通りなのかはまだ分からないが、それだけ人通りの多い場所なら十分な情報が集まるだろう。そう思ってやってきたわけなんだけど——

「うええええーん!! ママあーっ!!」

……うん。果てしなく無視し辛い声が聞こえてきちゃったんだよねー。

そうだね、あつちの世界のデパートにも負けないぐらいの混雑っぷりだもんね。

親とはぐれて泣いちゃう子供の一人や二人は出てくるよね。

そんで人の喧噪ってのがまた、思ったより声を通さないんだよね。子供があらんかぎり泣いて、喚いて、叫んでも、周りには意外な程聞こえないんだこれが。

偶に近くを通った人が気付くんだけど、そういう人に限って急ぎの用事に追われてたり。

泣いてる子供を宥めるのって時間食うからね。時間と心によつぽ

ど余裕ないとキツイ。

……さて、そこんと言うと私はまあ、余裕つちや余裕だ。特に行く当てがあるでもない。

ここが向こうの世界ならば、そして私が生きていたなら手を引いて迷子センターまで連れてってあげるぐらいのことはするところだ。名称はともかく似た場所が無くはないだろう、多分。

だがしかし、残念ながら幽霊なんだよねえ、私。

「もしもし、そのぼく？」と話しかけたところで、相手の耳には届かないわけで。

となれば、まあ……今の私に出来る事で何か考えるしかないんだけど。

軽い物を摘んで動かす……目の前でやったらホラーでしかないな。物を摘めるなら肩トントンぐらいは……振り返っても誰も居ない。ただのホラーだわ。

周りの壁に黒っぽい痕跡で文字を作る……ホラー系ゲームの導入かな？

水面に顔を作る……どこにあるんだよ、水面。

……少年の涙？ 自分の涙に見知らぬ顔が映って動き出すとか、私でも泣いて逃げるわ。

……やっべえ、肝試し通り越して肝潰しな案しか出ないぞ、オイ。ただでさえ心細さでわんわん泣いてる子供の心を鋸引きにする気か私は。

「ぶえええーっ!! びええええーっ!!」

……どんだん泣き声が激しくなっていく。

すぐ傍に不穏な事を考えてる霊がいるから……なわけがない。……ないよね？

放置するようで心苦しいが、私に出来る事はなさそうだ。……少な

くともプラス方向には。

んー……せめてもの慰めとして頭ナデナデぐらいはしていつてあげるか？

今なら顔を地面に向けているし「え、誰かいた？」ぐらいの認識で済むかもしれない。

それでも少しでも落ち着いてくれれば、後は自力で何とかしてくれる可能性も――

《……うおっ、う!?》

そうして彼の頭に手を触れた瞬間、何かが流れ込む感覚に息を詰まらせ仰け反った。

……何が起きた？ 何か一瞬、少年の身体から青白いモノが噴き出したような――

「……………」

少年も何か感じるものがあつたのか涙の跡の残る顔を上げ、不思議そうにきよろきよろと辺りを見回している。……私が見えているわけではないらしいけど。

いやあ良かった。なにしろ今の私、蹲る少年に触れようと膝立ちした状態から後ろに仰け反って倒れたもんで、幼気な少年の目の前で大開脚だからね。……見られてなくて良かったよマジで。

「……………」

そんな痴態を晒す私のことなど知る筈も無く、少年はゆっくりと立ち上がった。

まだ涙に濡れる眼をパチクリさせた後、幾分落ち着いた様子でポツリと呟く。

「……………もしママとはぐれちゃったら、えーへーさんに……」

母親の躰の成果というやつか、逸れてしまったときにどうするかを思い出したらしい。

ぐしぐしと涙を拭い、覚束ない足取りでその場から歩き去っていった。

《……………》

そして一方、残された私も目をパチクリ。

……………いや、ていうか何だあの豹変振り。いったい私は彼に何を
した？

そして何なんだ、この、心の奥に広がる不安というか恐怖というか

——あれ私、今、泣いてる……………？

何で急にこんな……………寂しいとか、辛いとか、頭に浮かんで……………っ

《……………お、母さん……………？》

い、いやいやいや何言ってるの、私!?

お母さん？ いや、まあ、確かに結構長い事会ってない気がするけど、感覚的にはまだ一週間と少々……………って、そっか。向こうで私は死
んじやっただから、もう二度と会えないわけで……………

《お、お母、さんに……………会いた、い……………っ》

い、いやいやいやいやだから何を口走ってるのかと!?

なんでこんな息詰まらせてマジ泣きしてるの!?! 顔面ぐちゃぐ
ちやなんだけど!?!

あ、流れる涙も霊体なんですね。頬から離れる傍から光の粒になっ
て消えてくね。

……………って、そんなことより落ち着け私——っ!?!

——新しく判明した能力。取り敢えず結果から列挙しよう。

毎度おなじみ記憶の棚に、写真っぽいものが一枚増えた。

突然ガン泣きしだした私(?)が、残していったのがこれだ。

写っているのは、前世での私の家族。

どこからこんなものが……と思うが、出所なんて一つしか考えられない。私の記憶だ。

考えてみれば『私』やミナちゃんの記憶がファイリングされているのだから、私自身の記憶から同じことができて何ら不思議はない。……落ち着いた後でやろうとしても出来なかったけど。

不安と郷愁に泣き崩れる自分を、どこか一步離れたところから宥める自分。

まるで人格が二つになった感覚、というか完全に二つになってたね、あれは。

明らかに自分のモノじゃない感情が溢れてきて、それを自分の感情で塗り直す感じ……若干同調しちゃった部分があったせいで割ときつかったよ。

それから……今回に限ってはいまいち嬉しくないが、『霊力源』が微増していた。

……初めて飢餓感を覚えたあのとき、先に気付いたのがこっちの能力だったらと思うと、寒気がしてくるね。偶然発動した水面の顔と商人さんに感謝しないとだ。色んな意味で。

次に能力の詳細としては——直後の少年の様子を見るに、感情を奪い取った感じか？

……なにそれめっちゃ怖い。他人から感情奪い取るとか普通に悪霊やん。

いやまあ、使い方次第だとは思うんだよ？ あの少年の場合は良い事した気はするし。

でもそれ以上に怖すぎる。悪霊っぽいとかを別にしても。

生まれた人格を宥めて、落ち着いて、今はもうなんともないけど……一歩間違えれば、笑い事で済まなくなるような予感がガンガンしている。これはアカン、絶対ヤバイ。

少年の感情から生まれた人格。あれは間違いなく私ではないが、明らかに少年とも別物。

言うなれば、私の魂と少年の感情が混じりあった、得体の知れないナニモノカ。

……鎮めることができたからいいが、もし——というのは、できれば考えたくもない。

最後に、そして一番重要なのが、この能力の発動条件だ。

今回新しくやったことと言うと……生きた人間に触った事か？

そういえば結局あの商人一行の身体には一度も触らなかつたな。

デカゴブリンから筆った時に頭皮に触れた事は……あつたような無かつたような。

んー、触ると発動つてことでよさそう？ ……結構きつくないかそれ？

できればもう二度と発動したくないんですけど。

……あ、でも、聞き込みの途中で人の身体をすり抜けたことはあつたぞ？

まあ私がすり抜けたというか、歩いて来た人が私のいる空間を通過していったというか。

とりあえず、私側に触れる意思がなければ発動することは無いとみてよし？

………結論。当該の能力の半永久的な封印を決定します。だつ

て怖いもん。

したがって、能力発動の恐れのある『能動的な生者への接触』も厳禁とします。

確かな回避の方策が立てられるまで、疑わしい行動は取らないとするしかない。

……いやあ、参つたな。まさかここにきてこんな問題が沸いてくるとは。

私ってば結構真面目に靈力を鍛えて、そのうち筆るに限らずもつと物理的干渉が出来るようにと思つてたのに、その意思が全力で挫けそうですことよ？

『私』をさんざんイラつかせてくれたハゲ親父の三段腹に腹パン喰らわせてやる夢がー。

これじゃ元々ハゲてる奴には無力じゃないかよー、ちくしよー。

C1—7 教会訪問

——二日前の深夜、街の領主様の館に泥棒が入り、『何か』が盗まれた。

逃げ去る泥棒を数名の使用人が目撃しており、領主の指示で直ちに街の封鎖が行われた。

その後について領主より沙汰はないが、街の出入りに関して厳しい検問が続けられている以上、犯人は街中に潜伏を続けていると思われる。

……小一時間程の聞き込み（盗み聞き）の成果が以上となります。何というか、ありがちな感じだね、うん。

盗まれた物が何かについては、指輪、首飾りといった装飾品類という説が有力な模様。

変わり種として泥棒の正体はご令嬢を誑しこんだ間男、とかいう「盗んだのは貴女の心です」な発想も聞いたりした。自由だなオイ。

ちなみに如何にもお花畑な最後の説には、そもそも領主の子供はい年した男だ、という素敵なオチが付いている。……まあ噂話なんてそんなもんだよね。

これが今も忙しそうに街中を警備してる衛兵さん達から聞いた話だったら、もつとしつかりした情報も出てきたんだろうけど、そこまですべて本腰入れる意味があるのかと考えちゃうとね。

何をどんだけ聞いたところで、幽霊の私にたいしたことは出来ないわけだし。

平和な国で培われた一般市民の価値観的には、衛兵さんおまわりに協力しようという考えが無いでもないけど、姿も見えなきや声も聞こえない幽霊が協力なんていつでもねえ？

現世の事は現世に生きる人達に任せて、私は私のやるべきことをやりませう。

……てなわけで今回、私がやってきたのはこちらになります。

周囲の家屋から頭一つ抜けた、真っ白な威容。

黄金色の鐘が取り付けられた小屋根の上に鎮座する十字架。

地上に下りて正面に立てば、両開きの大きな扉に、ご丁寧にもう一つ十字架の印。

——ええ、見ての通りの『教会』でございます。

特徴的な建物だったおかげで、ちよつと空から見下ろすだけですぐ見つけたよ。

さて幽霊の弱点っぽいものとして、日光に塩、銀ときてお次は聖なる物に挑戦だ。

これまでに比べて若干ふわつとした定義なんで、ここで確認できるかどうかは分からんとところがあるけども、とにかく自分にとって何が脅威になるのか確かめておくこと、これ大事。

……敷地を跨いだ瞬間強制成仏とか無いよね？ ……無いんちゃう？ 無いやろ（根拠無し）。

ええい、試してみないことには始まらない。というわけでお邪魔しまーす。

……。

……。

……うん、とりあえず中に入ってみただけど何ともないね。

正面の教壇まえには神父らしきお爺様。ずらつと並んだ椅子にはまばらな人影。

丁度お説教の最中だったみたいね。礼拝って言った方が良いんかな？

むにやむにやと一本調子で喋り続けるお爺さん。

キラキラ熱心な眼で聞き続ける人もいるかと思えば、既に首をか
くつと落として轟沈中の方も。

……周囲が起こそうとする気配はない。良いのかそれで。

ふよふよと漂いつつ、広げた分厚い本に目を落とすお爺さんの目の
前まで移動してみる。

——反応は無い。

くるつと振り返って、起きている人間や、傍で控えているシスター
さんの視線も確認。

——やはり反応は無い。

こういう場所なら靈感のある人間の一人や二人、と思っただけど、ど
うも当てが外れたようだ。

ううむ……一人ぐらい反応してくれてもいいのよ？

……そういえばこの国、というかこの世界の宗教ってどうなってん
だろ？

教団の後ろにはそれっぽい女神の石像があるし、とりあえず偶像崇
拝系？

私を転生させてくれた神様だったりするんだろうか。とりあえず
情報^{PLEASE}プリーズだ『私』。

………オツケー、把握。

一柱の女神様を主に置いた、よくある一神教が主流のようですな。
女神の名前を宗教名にも使って『シヤニム教』。

主な教義は基本、『汝隣人を愛せよ』的な融和重視。

版図はこの国全域、及び周辺国いくつか。

少々離れた国になると、ちよつと毛色の違う神が祀られたりもして
いるようだけど、少なくともここ数十年の内に宗教を理由としたいが
み合いは起きていないらしい。

……おん？ モンスターに関する認識も宗教絡みで何かある？

ええつと……世界の淀みから生まれた忌子、ですか。
ひいては敬虔なる一信徒としてガンガン狩ろう、と。

……うん、まあ、その辺は私が口を出すようなことではないな。
実際この世界のモンスターがどういう経緯で生まれてるかなんて
知らんし。

私はただ剣と魔法のファンタジーな世界を転生先にリクエストし
ただけだ。

……何度も言うが、私のリクエストで世界が生まれたんじゃない、
リクエストに最も近い世界を神様が選んでくれただけだからね？
……誰に言い訳してんだ、私。

両手の平を空に向けて広げ、慈愛の微笑みを浮かべる女神像。

これが私が会った神様なのかどうかについては分からない。あの
時、姿は見えないしなあ。

『私』曰く、この『シャニム像』が宗教施設には必ず鎮座させてあり、
木製かつ手の平に収まる程度の大きさの物をお守りとして持ち歩く
事が多いらしい。

さて、ご利益があるかと言われると……『私』も肌身離さず持つて
いたわけだからなあ。

そのあたりの想いを込めた目で女神像を見つめる。

聖なる力、的なモノを感じるかと言われると……何となく雰囲気
で、という感じだ。

とりあえず指先に霊力を込めてつついてみる。

……うん、石だね。何の変哲もない石でしかない。

敢えて何か言うなら、滑るような手触りってことぐらいかな。

その調子で、次は神父様が首から下げたロザリオをタッチ。……何
ともないね。

これで聖なる物系も制覇って事で良いかな？

いや、あとはあれだ、聖水的なものが有ったりはしないだろうか。

……弱いモンスターを近寄らせないようにする聖水が教会で売られてる？ 了解だ『私』。
教会の中を見て回り、そういった物を扱う物販スペースを発見。ロザリオに木彫り女神像、薬草やらと一緒にありますね、聖水。瓶の中に詰めてあるが……瓶を透過して水面に指を突っ込む……さて、指の状態は？

……システム、オールグリーン。
モンスター向けアイテムと明言されている物でも、私に影響を与えることは無いようだ。

うわー、前は冗談混じりに言ったけど、割とマジで私無敵じゃね？ 『死んでる』以外に弱点無くね？ 何されても平気つすよ、もう死んでるし！ ……ふう。



——こちら、教会敷地内に併設された墓地であります。

弱点検証の次はお仲間探しというわけで、やってきましたわけですよ。

ここでの葬送の様式は火葬が主流……アンデッド化という要素がある以上そうなるわな。

残った遺灰なり遺骨なりを埋葬、その上に墓標を立てるという方式らしい。

骨壺的な慣習も無いとのことで、仮に掘り返したとしてもよほど埋葬されてすぐでもない限りは土しか出てこないというわけだ。

そして私の視界には今、墓前に佇む一人の男性と、彼に寄り添う一体の霊が映っております。

………うわあい、なんという既視感。

以前の光景との違いは二つ。

一つは、男の方がしきりに人目を気にしつつ墓標の前に蹲っているということ。

もう一つは霊の方が……もう『霊』と呼ぶしか無いほど、原型を残していないことです。

前回のように、一部だけ形が残っていたりもしません。完全に青白い霧です。……うわあい。

男に近付くような素振りが無いでもないので、ぎりぎり自我は残っているのかなあ。

多分、男の関係者なんだろうし。あの様子だと兄弟か、親子か、はたまた夫婦……。

——コツ、と。

教会の方から聞こえた物音に、男は弾かれたように走り去っていった。

後に残るは、人型の欠片すら無くした靈魂一つ。

遠ざかる背中に、伸ばす手すらなくユラユラと。

………さて、と。

あの霊にまだ意識があるのなら、手を差し伸べてみるとしますか。

前回みたく穏やかに成仏させられる保証は無いけど……相当、辛いみたいだしさ。

近づく私に、彼とも彼女ともつかない靈魂さん（仮）が気付く様子は無し。

ひよつとするともう、何も見えてすらいないのかもね。

霧というか、もはや蠟燭の煙のような、青白い筋に手を伸ばしてみる。

その途端、所在なさげに漂っていた霧が伸ばした私の手に絡まるように集まっていく。

ほんの少し、さつき迷子の少年に触れた時と同じような、感情の波

が伝わってきた。

……さっきの少年といい、その前の少女の時ミナちゃんといい、何が何やら分かんない状態だったから、こうしてじっくり過程を見るのは初めてだね。

やっぱりどっちも同じ現象だったのかな。対象が生きてるか死んでるかの違いだけで。

そうなる目下の疑問は、何でまた私にこんな事が出来てるんだろうかってとこだけでも……。

こればかりは考えても仕方ない。そもそも今の私が出来る事って、大体『なんかやってみたらできちゃった』だし。水面の顔やら、痕跡作りやら。なんとという考察泣かせなボディなんだか。

——と、完了か。本当にごく僅かだな。

ヤーネ嬢を大棚、ミナちゃんを小棚とするなら、学習机の物入れサイズの小箱だ。

前回のように生前の姿が見えることも無く、靄のまままでその箱の前に佇んでいた。

それでも消えていく様子はミナちゃんのとくと同じだったので、そういうことだろう。多分、きつと。おそらく。そういうことにする。

いやしかし、何で異世界にまで来てお祓い屋みたいな事やってんだ、私？

しかも、自分自身が寧ろ祓われる側であろう状態で。

……深く考えるのやめとこうか。彼らが救われたなら良い事ですよ、うん。

気を取り直して、遺された記憶に目を通す。

いつにも増して断片的だけれども、彼女——記憶を見るまで分からなかったけど、女性だった——が感じた恐怖と、無念の想いだけは伝わってきた。

死んでから何週間も経つと、こうもぐつちやぐちやになつちやうもんなんだね。

……あれ、私ってばあれから何日経ってるっけ？ ま、いっか。

結果として、分かった事は三つ——いや、四つだな。

一つ。今、街を騒がせる泥棒の正体は、さっきの男——彼女の兄である。

二つ。領主館から盗み出されたのは、元は生前の彼女が持っていた指輪。

三つ。その指輪はつい今しがた、持ち主の墓前に届けられている。即ち私の目の前に。

……領主館からねえ。『盗品』がねえ。本来の持ち主がねえ……ハハハ、こやつめ。

そして四つ目——どうやらまた、私の『自己満足』の標的が現れたらしい。

大部分が消えてしまっている記憶にも関わらず、一通り見ただけで経緯が把握できるあたりに、彼女の執念を感じるね。

しかし、まあ……胸糞悪い。

前回はモンスターの被害というある種『仕方ない』事例だっただけに、今回は特に頭にくる。

今回もまた、私が何もしなくっても、やはり解決はするっぽい。

先程の泥棒さんはその辺を考えた上で盗品を置いていったのだ。この教会の墓地という場所に。

『被害者』である彼女にしても先ほど安らかに逝ったのだ。これ以上は誰が得するでもない。

しかし、まあ、折角だもんね？

少しばかり脇から騒がしくしたところで、文句を言う奴は居るまいね？

さてさてさて……愉快で無頼な騒ポルターガイスト霊のお出ました。盛大に崇つてやるべえよ。

C1—8 女神の涙

「——指輪が見つかった？」

マースル領主館、執務室。

朝も早くからどこか気もそぞろに書類を眺めていた領主 フォルナー——マースルは、息を切らせ駆けこんできた使用人の報告に目を見開いて問い返した。

「では賊を捕えたのか？」

「いえ盗品が……とある場所で見つかったのです」

「ふむ？ 隠し場所を発見したか、それとも市場にでも流れていたか？」

「いえ、それが……」

領主が問いかければ問いかけるほど、使用人の返答は歯切れが悪くなっていく。

これは厄介な者の手にでも渡っていたか——と、彼は己の権力でも簡単には口止めのきかない人物を脳裏に挙げていた。

「とにかく言い淀む暇があるなら早く話せ。早急に対応を考えねばならん」

そう言つて彼は、今なお視線を泳がせる使用人を強く促す。

常から彼は柔らかな人柄、という言葉には縁の無い男であったが、この日の彼は輪を掛けて募る苛立ちを表情に滲ませていた。

何故となれば、今回の騒ぎの原因が領主たる彼にとっても頭の痛い案件であつたからである。

軽々に口にはできないが、いよいよ庇いきれないとなれば気の進まない決断をせざるをえない、というところまで既に事態は及んでいた。

それ自体を惜しむ気持ちは——全く無いとは言わないが、何より後処理が億劫に過ぎる。

そんな付随する面倒事に早くも思考を飛ばしつつあった領主へと、促された使用人は顔色を白くさせながら口を開いた。

「——女神様の御手元です」

「……………は？」

想定外過ぎる発言に、思わず漏れたのは呆気にとられたような眩き。

そんな主の様子が果たして目に入っているか——どうも敬虔なシヤニム教徒でもあったらしい使用人は、ガクガクと身を震わせながら吐き出すように報告を続けた。

「指輪が教会の礼拝堂……………女神シヤニム様の石像の指に嵌められていたのですっ」

「……………賊が、そこに置いていったのだな」

ややあつて、再起動した領主から出たのは、非常に現実的な見解。呆れたように息を吐いた主に、使用人は「ああっ」と呻いて、自らを抱くように両肩を握った。

「……………それで、回収は？」

「そ、そのような事が出来ようはずありませんっ」

「……………教会の者と話がつけれなかったのか？」

信頼をおく部下の中に、こうも信心深い奴がいたのかと、領主は額をおさえて小さく呻く。

しかもどうみてもただ単に神を騙っただけの使い古された手法にここまで惑わされるようでは、その認識も改めねばならないか……と、ただでさえ痛む頭に別の悩みを加えていた。

「……………もう良い。お前には暇を出す。とにかく今日は休め」

そう言つて鷹揚に手を振り、意外な信心深さを見せてくれた部下に退出を促す。

改めてまともな判断力を持つ者に教会に向かわせるか、と彼が考え始めたその瞬間。

「——フォルナー様っ！」

「む……ああ、お前も戻ってきたか」

「っ、盗品の在処については——」

「ああ、既にこいつから聞いた。……で、お前は怎么样了？」

駆け込んできたのは先に報告に来た者とは別の、同じ命令を与えていた使用人。

今度はまともな報告を聞けるだろうか、それなりに期待した彼に
対し——

「懺悔を、させましょう」

「……………はあ？」

思いつめたように、しかしはつきりと告げられた言葉に、再び彼の
思考は凍りつく。

一方、先に退出を命じられた使用人が、我が意を得たりとばかりに
領き同調を始めた。

「女神様よりこれ以上の御不興を買う前に、全ての罪を認めさせ、反省
を促しましょう」

「っ、そ、そうですっ！ この地から女神様の御加護が失われる前につ
！」

「……………お前達は何を言ってるんだ？」

揃って意味不明な主張を始める二人に、彼の声が次第に極寒を纏っ
ていく。

だがその思考が苛立ちと失望に塗り潰される寸前で、果たして何事
が起これば二人揃ってこども惑わされる事態になるのか、というある
意味根本的な疑問が彼の頭をもたげた。

「……………いったい何を見たというのだ、お前達は」

主からの問いに、二人は顔を見合わせ、喉を鳴らし——
厳かな口調で声を揃える。

「女神様が涙を流されていたのです」

「……………ええ……………」

領主は三度、思考を飛ばした。



——最初に『それ』に気付いたのは、石像を正面から見ることになる参拝者の一人だった。

時刻は早朝。静謐な冷気の中で祈りを捧げる者達の耳朶を叩きつけたのは、悲鳴染みた叫び。

驚き集まった視線の先には、腰を抜かしへたり込む一人の青年。

そしてそんな彼が、震える指先で指し示す方向に目を向けてみれば

——彼らが敬愛する女神の泣き顔が、そこにあつたのだ。

——石像が涙を流す、という光景に対し『有り得ない事が起きている』と、冷静に思考出来るような人間は、幸か不幸か居合わせてはいなかった。

何故ならその場に居たのはいずれも、日の出と共に参拝に訪れるような信心深き者達のみ。

ひいてはその光景を即座に『神の奇跡』と認識するような者以外が居る筈もなかったのである。

奇跡を目の当たりにした信徒たちは、即座に街中を駆け、叫びまわった。

彼らは『神の御意思』をなるべく多くの人民に伝えることを己が使命と捉えたのだ。

然程時間を要することも無く、野次馬を大いに含んだ人の波が瞬く間に教会を覆い尽くしたのは最早当然の帰結と呼ぶべきだっただろう。

結果として、女神が涙を流し尽くし、黒ずんだ跡が頬に残るのみとなるまでに、街の人口の凡そ一割ほどがさして広くもない一施設に集う事態となる。

必然的に生じた押し合いへし合いの騒ぎの中、誰かがもう一つの異常に気づき、叫んだ。

——女神様が見慣れぬ指輪を嵌めている、と。

白石を削り出し作られた石像の指にはめられた、紅い宝石をあしらった指輪。

『涙』との関連性に人々が疑問を抱く中、先の叫びにも負けぬ声が喧噪の中に響く。

——自分はこの指輪の持ち主を知っている。

——あれは、ある知人が肌身離さず持っていたはずの物だ。

——打ち棄てられた彼女の遺体から、ついに見付からなかった物だ、と。

命と共に失われた、あるいは奪われた指輪。

それを手中に、嘆きを露わにする女神。

情報が与えられれば、人々が用意された答えに辿り着くまでに時間はかからない。

その場には、実に多くの人間が集まっていた。

指輪の由来、元の持ち主を知る者が居たように——それを己の所有物だと主張し、搜索の手を広げさせている存在を知る者も、だ。

また、そんな『彼』にとつてしても——『雇い主からの命令』など『女神への敬愛』の前では比べるべくもなかったのである。

「——とんだ茶番だな……」

そう言い捨てながらも、領主フォルナーは顔の半分を手で覆い、深く嘆息した。

眼下に跪く二人——奇跡の渦中にある『盗品』について懇切丁寧に『喧伝』してくれたという部下達を叱責する気力も湧かず、彼は椅子に腰を落とし項垂れた。

「……『奇跡』とやらをどうやって起こしたかは知らんが、なかなか都合良く事を運んだものだ。いったい何人の協力者が……いや、今更考えても栓無いらか」

自嘲気味に呟き、顔も知らぬ『賊』へと彼は心中で拍手を送る。

それから暫し瞑目していた彼は鋭い眼光を宿す目を見開き、未だ床に縫い付けられたかのように不動を保つ二人に、厳然と言い放った。

「……『あれ』を連れて来い。大至急だ。寝こけているならば、叩き起こせ」

「はい、フォルナー様」

領主が眉間に深く皺を刻んだ命令を、二人は想定通り——あるいは期待通りとばかりに力強く頷き、争うように部屋を後にする。

「あの阿呆が……」

その場で溢された彼の呟きが、生きた人間の耳に入ることにはなかった。



——当然、わたくし雨巫もここに居ますよと領主館。

丁度私が見ている前で、文字通り叩き起こされたらしい領主の息子が連行されてきた。

使用人を口汚く罵りながら、されど両脇抱えられた様で口以外に出せるものなど有る筈も無く、されるがままズルズルと引きずられてのご登場。

いやあほんと……何だコイツ。『彼女』の記憶で見たわけだけど、それも踏まえて何だコイツ。

「……ようやく来たか、カトル」

「ああ……こんな朝っぱらから何だよ親父」

掴まれていた腕を摩りながら、寝起きと分かるぼさぼさの頭を不機嫌そうに掻く青年。

見た感じの年齢は二十代前半。……十五で成人扱いなこの世界基準だと、おっさんの域か。

指輪を盗られた女性——騒ぎの中で泥棒さんが叫んだ名前は口ザリー、だったかな？——に対し、暴行、殺害の上に、亡き夫から贈られた指輪を「気に入った」の一言で強奪した男。

……この頭の切れそうな領主さんから何がどうなればこんな『産業廃棄物』が生まれるのかと、小一時間問い詰めた気分っすねー。

……それにしても、これだけ広く宗教——というか神の存在が信じられたこの世界で、しかもあれだけの伝聞からこの騒ぎを『サクラ』付きの『人災』と断定するあたりは素直に凄いと思う。

あの口振りからして、それを分かった上で敢えて『乗る』つもりみたいだし。

いやまあ、元々この息子^{ゴミ}をどっかで切るつもりだった可能性も無きにしも非ずだけど。

それに泥棒さんは元よりエキストラを集めてた皆さんも、ここまで騒ぎが大きくなるのは想定外だっただろうに、即興でよくあれだけ同調できるもんだよねえ。侮れないよ、この世界の人達。

「……あの、話違うくない？」「コレ、仕込みだよね……？」「え、でも……どこまで仕込み？」的な感じの視線を発起人であろう泥棒さんにチラチラ送ってたけど。

それで泥棒さん当人も若干どころじゃなく引きつり笑いを浮かべてたけど。

まあ、最終的には「本当に女神様が……まさかな」って感じで良い笑顔を浮かべてたし、横から多少『盛った』事については、許しても

らえるだろう。

私がした事なんて文字通り水をちよろつと『盛った』だけだしさ。
……石像の目の部分にね。

具体的には、人が入ってくる時間まで流れ出さないように、それから涙の如く流れ落ちるように調整して指で押さえてたくらい。

指輪についても彼女の墓で発見されるよう泥棒さんがセツトしてたのを、折角だからと女神像の指に嵌めといただけだ。

……こつそり教会に入って誰もが目に付く場所に置くってのは、生きた人間には難しいよね。

まあ、ひとつ懸念を挙げるとすれば……あの場にお集まりだった皆々様の異様なまでの信心が、私の『靈力源』にどかつと入ってきたことか。

……これ、ひよつとして信仰のエネルギー的なものを思いつきり横取りした形なのでは？

本物の女神様に対して全力で喧嘩売ったことになってたりしないよね？ ね？

違うんすよ。予想外だったんすよ。なのでいち幽霊に氣勢を上げてんで下さい、切に。切に。

「——懺悔しろ、だあ!? 何言ってやがんだ親父っ！」

おう、ちよつと見ないうちに話が進んでら。

叫んでもしようがないだろうに、この手の輩は世界が変わっても変わりませんなー。

「今、言った通りだ。揉み消せる規模を超えた。こうなれば私も領主としてお前を裁かぬわけにはいかん。その上で民衆にお前が罪を償う意思を持つ、と示すにはそれが一番都合が良い」

……揉み消そうとはしてたんか。指輪が盗まれてなければ、他に証拠は無かったとか？

向こうの世界の警察みたいな科学捜査なんてこの世界には無いだ

ろうしねえ。

そのぶん魔法で何とか出来たりは——被害者が貴族でもない限り魔法による調査とかしないし出来ないですかそうですか。毎度ご苦勞様です、『私』。

「たかが平民の女が死んだぐらいで、何で俺がそんな面倒な事をしなきゃならねえっ!?!」

「……罪の無い人間を殺した時点で、極刑になってもおかしくはないんだがな」

あつ、息子くんの返しに、これまで無表情を貫いていた領主さんの目が死んだ。

「もう、こいつ、駄目だ……」的な感情が滲み出てるのがよく分かる。がっちり脇を掴んだままの使用人二人も呆れ——あ、青筋浮かべてキレる寸前やね。

「俺はあんたの息子だぞっ! 次期領主だぞっ!」

「だからこそ面倒だった。処分にも手間が必要だったからな。……だが良い所に口実をもらえた」

……あん? 口実?

「お前の行いに、女神様がお怒りだ」

「……はあ?」

「故に私は女神様の意思に従い、お前に告解をさせ、しかるのち廃嫡を行う」

「な、何を言っ——」

「女神を怒らせたとなれば妥当、いや寧ろ温い方だろう」

「神敵を野に放つおつもりですか?」

「なっ、おまえ……ッ!?!」

ゴミを見下ろすような使用人のセリフに息子くんが絶句する。

「神敵ってお前……」と領主さんは流石に辟易した顔を使用人信者に向けていたが、当の息子くんは発言した使用人を睨んだ途端、凄まじく

殺気が迸る目で睨み返され、それどころではないようだ。

「……『奇跡』の熱が冷めんうちに準備をさせる。お前は教会に連絡しろ」

「はい、フォルナー様」

「それからお前は……そいつが逃げ出さないよう地下室に放り込め」

「はっ、お任せを」

「なん……何だよっ！ 奇跡って、何を言ってる……!?!」

「……詳しいことはそいつに聞け。私は直接見たわけではない」

最後は若干投げやりに指示を与え、退出を促す領主さん。

息子くんはまだ目を白黒させつつ言葉にならない罵声を飛ばしていたが、有無を言わさぬ信者使用人の手によって、またズルズルと引きずられながらの退出と相成った。

………んむう。

このままでもしかるべき罰は与えられるんだろうけど、いくらなんでも反省というか、罪の意識無さすぎじゃないか息子くん？

それに息子くんの頭がアレなことを分かってて、排除する口実が生まれるまで放置してた領主もなんだかなー。

……何をこれ幸いと言いたげにしてんだ。既に安らかに逝ったとはいえ、被害者の命はあんたの口実作りのためにあつたんじゃねーぞって話よ。

……よおおし、決めた。こうなったらもう少しばかり『自己満足』を続けてやろうじゃないか。

大丈夫、大丈夫。ちよつと枕元が涼しくなるだけだよ。

日光に塩に銀に聖水その他聖なる何某対策による抵抗も一切無意味だから安心してくれたまへ。

うらめしやー。私の恨みではないけど、うーらめーしやー。

向かう方向を見失った怒りが、地下室の中に空しく響いた。

——「民衆の前で懺悔させる」と告げられ、地下室に閉じ込められてから一週間。

次期領主たる自分が、この薄汚れた地下室に閉じ込められてから一週間だ。

最初の一日に暴れるだけ暴れ、叫ぶだけ叫んだ。

次期領主にあるまじき扱いに、憤怒をまき散らしていられたのは、この日が最初で最後。

暴れ疲れて眠気を感じ始めたその時から、この地獄は始まった。

目を閉じた途端に、耳朶を叩く女の声。

眠ろうとすればするほど、声は大きく、次第にハッキリと聞こえてくる。

誰の声だと首を傾げたが、頻りに「指輪を返せ」と訴える相手には心当たりがあつた。

街中で見かけ、戯れに手を出した女。

身に着けていた美しい細工の指輪を、平民には分不相応だと没収してやったら、「返せ返せ」と狂乱しだした女。

面倒に思つて騒ぐたびに殴つていたら、いつの間にか動かなくなつていたが——

死んでも鬱陶しい奴だ、と思った。

そんな恨めしいなら化けて出てきてみやがれ、と吐き捨てた。耳に届く声を見殺して、襲つてくる睡魔に身を任せた。

——その日から、青白い肌の女が夢に現れるようになった。

ボソボソと「返せ返せ」と呟き続け、その声がだんだん大きくなるという、酷く鬱陶しい夢だ。

次の日、料理を運んできた使用人から、親父も似たような夢を見たと言った。

親父の夢にまで出てくるとは、陰気な割には変な根性のある女だ。

悪夢に気をやられたのか、親父は急に頭頂部の希薄化が進行したらしい。ざまあみろ。

親父は教会の墓地——指輪女の墓に手を合わせて祈ると悪夢が止まったらしい。

お前も墓前で謝罪するか、と聞かれ、ふざけんなど返した。

何で平民に頭を下げなきやならねえ——その時の俺はそう思っていた。

夢の中でボソボソ呟くだけの女なんぞ、そのうち諦めるだろうと思っていたからだ。

——その日から、女は夢の中で俺に掴みかかるようになった。

夢の中では振り払うことも出来ず、冷たい腕が首元を掴んだかと思えば、迫りくる血走った瞳に視界を埋められ、頭の後ろを振じられるような感覚で目を覚ます。

夢見が悪い、ではとても表現しきれない悪夢。

うなされて床に落ちたことに気付いて、情けなさに深く息を吐きだして、目を瞑った瞬間——微かに耳の奥に響いた女の声。

眠気を感じることに恐怖を覚えるまで、時間はかからなかった。

「——また、大きくなって……いい、いや、気のせいだ……っ！」

夢の変化と同時に、地下室の中にも変化が一つあった。

寝台の傍の壁に、黒っぽい染みが付いて——いや、元からあったんだ、そのはずだ。

その染みが、人の顔に見える……気がするようになった。

その染みが、眠るたびに大きくなっている……気がする。

その染みが、目を離れた隙に動いて——気のせいに決まっている、決まっているんだ。

怒った人間の顔……に見えてしまう。
……馬鹿な。せいぜい、目と口のように見えているだけだ。
見ようによつては、口角を下げて笑っている顔に見えないことも――

――（か え せ）

く、ち。

口が、うごい、て――



新能力【夢枕の囁き】（暫定名）。

効能――眠っている相手に声を届ける。

能力の発覚については、これまた偶々だった。

閉じ込められた地下室で呑気にイビキをかきだした領主息子くんを、さてどうやってビビらせてやろうかとブツブツ独り言を呟いていたら、息子くんが突然寢言で「うるせえ」と怒鳴ったのだ。

まさかと思つて起きているときに色々叫んでみたけど、これに対しては反応ゼロ。

ところが横になり目を閉じて暫くすると、何か聞こえらるとばかりに耳を押さえるとする。

その後、領主親子を相手に検証を重ね、眠りが深くなるほどよく聞こえるっぽい、というところまでは突き止めました。

まあ、あくまで夢の中に語り掛ける形なんで、細かな意思疎通には使えそうにないんだけど。

盛大にうなされてる寢言とやり取り（笑）するのが精々だったね。

ある程度『靈力源』を得るごとに新能力が生えるのかな、私。今回

特にどつと来たからなー。

……元からあった可能性？ 今更検証のしようも無いんだから考えるだけ無駄なのだよ。

とはいえ私がやったことはと言えば、ただただ枕元で「返せー、返せー」と連呼しただけだ。

悪夢を見たのは領主親子の勝手。まあ、それで悪夢をみたのであれば、後ろめたい気持ちも全く無いわけでもなかったってことなんだろう。

夢の内容を作り出すのも、結局はその人自身の記憶からでしかありえないわけだし。

領主さんに至っては意外と罪悪感が大きかったのか……はたまた頭の上の急性ドーナツ化現象が余程ショックだったのか、ある朝突然教会にすっ飛んでいった。

墓地の前に禿げ頭をこすりつける姿が多くの人間に目撃されたとのことで、まあこの分ならもう良いか、と一旦ターゲットから外すことに。

ところが息子くんの方はしぶとい。性根も毛根も。

引っこ抜こうとしたら寝返り打って床に転落して起きやがる。寝相悪いんだよこいつ。

もう一押し何かないかと考えて思いついたのが、未だ使いどころのなかったあの能力。

命名【霊痕作成】（これまた暫定）。

染み……かな？ という感じの黒っぽい痕を壁に残す能力だ。

ずつと一つの部屋に閉じ込められてる環境で、寝て起きるたびに目に入る染みがほんの少しずつ変化してたらなかなか怖くね？ なんて発想が降りてきました。

少しずつ、すこーしずつ大きくなる染み。

気のせいだと思いつつも、ふとすると目を向けている自分に気付く。

そのうち周りの染みやひびまで巻き込んで、大きな一つの顔に見えてきて——というのが私の狙いであり、実際それなりに効果が出てきていたんだが……

——(ニヤリ)

………どうしてこうなった。

マジでどうしてこうなった。

顔のように見える、までが私の想定範囲だよ。本当に顔になれとは言ってねーよ。

やめろ、笑うんじゃない。こっちは見んな。怖えーよ。

「か……っ、あ……」

……そして正面からにらめっこになり、泡を吹いて倒れた息子くんがこちらになります。

叫び声聞いて飛び込んできた使用人さんも、壁の顔(暫定)と目が合って硬直中。

続けて入ってきた領主さんにもにらめっこ……あ、壁の顔の負けやね、笑っちゃったし。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

——次期領主という立場を笠に着て、街を歩いては問題を起こしていた領主の嫡男カトル君。いつかきつとバチが当たるとみんなに言われ続けた精神ガキ大将な青年が——

なんとということでしょう。

部屋の隅で毛布を被りガクガクと震えているではありませんか。

身目麗しいものを見つけては人も物も構わず奪い取ろうとしたそ

の瞳は、瞼を閉じるのが怖い、と言ってかつ開き続け、カラカラに渴き血走っています。

これでもう、理不尽に大切なものを奪われる人間は生まれられないことでしょう。

そんな息子くんを長年放置、黙認していたお父さんのことも、女神様は忘れません。

今ではすっかり敬虔な信徒に早変わり。

毎朝教会に通っては、鬼気迫る表情で女神像に祈りを捧げています。

そんな姿に合うようにと、つるつるに禿げ上がった頭からは女神様のこだわりが見れますね。

いやー……………どうしようかね、これ。

「お怒りを鎮めください女神さまー」って祈ってるんだけど、女神様も困惑してるよねきつと。

想定外な進化を遂げているとはいえ、「[霊痕作成]で作った染みには変わりないんで、消そうと思えば消せるんだけど。消すタイミングがなー。

しかもこの『壁鬼』（命名領主さん）、私が消そうとすると悲しげな顔しやがるんだよ。

壁ごと撤去しようとしたら凄まじい憤怒の顔になる癖にね。呼びこんだ業者と一緒に腰抜かして撤去できなかつたよ領主さん。

……………というか、この状況を想定とは違うとはいえ、止めてあげる理由もあんまりない。

どれだけ怖い思いをしようが、命を奪われることには釣り合わないわけで。

しかもこの領主親子の被害者って、明らかに一人や二人じゃなかつたからね。

改めて街中を盗み聞きして回ると、過去の被害者情報が老若男女選り取り見取りよ。

証拠なんかは何も残ってないから、衛兵が動く事態にはならないけどさ。

正直、枯れ果てるまで怖がつてる、って気持ちも多分にある。

仕掛けた時点ではそこまで知らなかったからボチボチの所で勘弁してやろうかと思ってたけど、そんだけの事をこの二人はしてる。

健康を害そうが何だろうが知らん。好きだけ震えてろ。

——そんな感じで霊力源をグングン回収しつつ見守ること、はや十数日。

使用人さんがこんな事を言い出しました。

「フォルナー様。『お祓い』の依頼を受領した冒険者が現れました」

……………ほほう？

C1—10 お祓い屋？

「——お祓いの依頼を受けて来ました。Eランク冒険者のユズとい
います」

壁に浮かんだ鬼の顔を祓ってくれ、という実に怪しげな依頼を受注
したのは、胡散臭さ漂う自称霊能力者——ではなく、素朴な印象の
少女だった。

見た目の年齢は十二から十四ぐらい、この辺では珍しくはない若草
色の長髪を首の後ろで軽く括って背中に垂らしている。

如何にも長閑な田舎から出てきました、という感じの、人あたりの
好きそうな目つき。

わりと整った顔立ちをしているので、化粧をすれば化けるような気
がするね。

装いは如何にも冒険者らしく、関節各部にプロテクター(?)の付
いた無地の膝丈ワンピース。

肩から提げるは大体の冒険者が持っているのと同じ革製の鞆。

そして腰には細身の剣らしきものを収めた鞘に、加えて革袋が幾つ
か。

……何というか、動きやすさと女の子らしさを両立させた感じです
な。

ちよっぴり尻込み気味なのは、主に相対する領主さんのせいだろ
う。

まるで砂漠でオアシスを見つけたか如くキラツキラした瞳を向け
られていれば、よっぽど自分に自信がない限りは気後れするというも
のだ。

……しかしマジで凄い食いつきだな。霊能力者つてのを微塵も
疑ってる様子が無い。

ひよっとしてそういう冒険者ってありふれて——少なくとも

『私』は聞いたこともないみたいです。ハイ。

「え、ええと、それで依頼の方は……街の噂で聞いた限りでは、死んだ女性の恨みがこちらの館に取り憑いていると考えられるとのことでした。……」

「……ええ、大筋はその通りです」

彼女が冒険者として仕入れてきたであろう情報を、領主さんが補完するように説明する。

この数日ですっかり参ったのか、説明には息子くんが方々で恨みを買っていた事や、ここまでの恨みを向けてくる対象に関しても、噂になった女性以外にも山程の心当たりがある等、今までなら隠していたであろうことまで彼女が尋ねる前から彼の口より次々と暴露されていった。

もはや懺悔の体をなしてきた説明を、ユズと名乗った冒険者ちゃん は真剣な顔で聞いていく。

そうして領主さんが一通り話し終わったらしいところで、部屋の隅に意味深な目を向けて一言。

「確かに……今までに経験が無いほどの強力な霊が見えますね」

「おお……では、やはり……」

「ですが、今はそれほどの悪意は……既に恨みはほぼ晴らし終えているのではないかと」

うーむ……鋭いのか適当言ってるだけなのかはまだ分からんね。

実際、他人の恨みを代理で届けてる、つもりだけで私自身は恨みなんて無いわけだし。

更に言えば、恨みを晴らし終えてるってのもなかなか的確なところだ。

……というのも、ここ数日の私は本当に何もしてないのである。

壁鬼に関しては動くといっても部屋を移動するようなことはしないので、近付かなきゃ目に入るようなことはないし、視界に入れないきや害も無い。

誰も居ない部屋でただただ静かに笑ってるだけだ。……あれ、そう

言つちやうと十分怖いな。

「返せ返せ」の幻聴についても【夢枕の囁き】は結構前から使つてないので、親子揃つて本当の意味での幻聴を聞いているだけ。既に勝手に怖がつてるのを見守っているだけの状況なのだ。

大変美味しゅうございます。『靈力源』的に。

「し、しかし、毎夜私もを苛む声が続いているのですが……」

「……では、こちらをお持ちください。靈の弱い思念であれば遮断できるはずです」

そう言つて彼女が取り出したのは——如何にもな紋様が描かれた『御札』おふだでした。

……ここで御札と来るかー。

教会があつて十字架がある所に御札ですかー……和洋折衷つていい言葉だよね、うん。

まあまあ、これも靈の定番弱点には違いない。いつものようにレッツ実験だ。

ありがたそうに領主さんの手に握られた御札をつんつんとな。

はい、指先確認ー。欠け無ーし、痛み無ーし、痺れ無ーし。

次はバレない程度に搦んでみましょう。……はい、オツケーです。

……ふふふ。まだまだ敗北には遠いようだな。

「……………ええつと、次は、地下室の鬼の顔、でしたよね？」

「!! は、はいっ、そちらも何とかありますかッ!」

「ふえっ!?! み、見てみないことには何とも……」

ほらほらがつつき過ぎだよ領主さん。

合コンで引かれる男みたいになつてるから。落ち着きたまへ。

「——ふひゃ……っ！」

壁鬼と目が合った瞬間のお祓い屋ちゃんのリアクションがこちら。……やっべ可愛いなこの子。

ちなみに領主さん以下、館の方々は全員部屋の扉を開ける前から目を逸らしておりました。

「ど、どうでしょう……？」

「は、はい、ええと……驚きましたけど、こちらはわたしの手が及ぶ範囲だと思えます」

ほほう？ なかなか自信ありげね。

それではお手並み拝見といこうではないか。

そんな私の視線を浴びつつ、彼女が徐に取り出したのは先程も見せたような御札が一枚。

ニヒルな笑みを浮かべる壁鬼にずんずんと近付き、その顔の中央にペタリと叩きつけ——

《……おおっ!?!》

果たして御札を張り付けられた瞬間から、壁鬼の貌は苦しげなものに変化した。

逃げ出したいとばかりにグニグニ蠢きつつ、端からジワジワ削れるように消えていく。

……オイ、今「*I will be back*」って言っただろ、口の形で。やめろ、帰ってくんな。

「あ……あああ……」

消えゆく壁鬼を食い入るように見つめていた領主さん。

やがて、実に自然な動きで、その場に膝を折り始める。

「——ふええっ!?!」

振り返った彼女を迎えたのは、領主を含む大人三人の華麗な五体投地であった。



「——で、マジで依頼完了してきたわけ？」

「は、はい……」

依頼主から完了のサインを貰って、冒険者ギルドに提出。これにて依頼完了。

掲示されている他の依頼から察するに、なかなか良い額の報酬を受け取ったようだ。

……うん。初めて見る流れの筈なのに何の疑問も無く見守ってたよ。これが固定観念の怖さか。

「まさかユズの『不思議ちゃん設定』が役に立つ日が来るとはなあ」

「だからこの子のは設定じゃないって言ったじゃないか私は。ねえ、ユズ？」

「え、あ、は、はい……」

そしてそんな手続きを終えた彼女に声を掛けるは良い体格をした二人の男女。

大金を受け取った少女に因縁でもつけにきたのかと思ったが、どうやら元から知り合いの様子。

「分かった分かったこれからは信じるから……だからちよつと、な？」

「何言ってるんだいっ！ こいつはユズが一人で稼いできた金だよっ」

「わ、分かってるって。けどほら、こないだまでパーティ組んでたよしみで一杯ぐらい……」

……台詞だけ聞くと少女に集るクズ男だが、本気で言っている風ではないかな。

周囲の冒険者やギルド職員も何も言わないし、この程度の軽口が許される仲ではあるらしい。

女性の方もそれは分かっているらしく半笑いで窘めていたが……恐らくその両方が予想だにしていなかった一言を放ったのは、当の少女。

「い、良いですよっ。ここに居るみんなで飲みましょうっ！」

「え……ちよ、ちよつとユズ？」

「マジでっ!?! 良いのか!?!」

その宣言にざわざわつと反応したのは、併設された酒場にたむろしていた多数の冒険者達。

彼女がこんな事を言い出すのは相当珍しいのだろう。先の女性が困惑気味に問いを重ねた。

「……本当に良いのかい？ Eランクのあんたがそんなに稼げることなんて滅多にないだろ？」

「い、いえその、本当に偶然というか……泡銭みたいなものですし、この方が良いかなと……」

小さく潜めて「変な嫉妬を買うよりは」と呟いた少女に、女性が額に手を当て溜息を吐く。

手にした金袋が殆どそのまま酒場の店員の手に渡った瞬間、周囲から盛大な歓声が上がった。

「……あんたら、ちよつとは加減してやんなよっ！」

「「おうっ!!」」

口々に酒の追加を注文し始める冒険者達に、半ば諦め混じりに一喝する女性。

当の少女はと言えば、そんな彼らに笑顔で迎えられながらもどこか緊張に染まった表情で、その盛り上がりの中に身を投じるのだった。

「——周りといざこざを作らないように立ち回るってのも悪くはないよ。特にあんたは特定のパーティを組んでるわけじゃないもんねえ」

宴もたけなわ。ようやく何人かが酔いつぶれて静かになってきた頃。

いつしか隅でゆっくりと杯を傾けていた少女の隣に、大杯を抱えた先の女性が腰を下ろす。

そういえばこの世界、未成年者の飲酒に関する法律は……ああ、

やっぱり無いのか、『私』。

道理で明らかに未成年——この世界基準だと十五歳未満——な彼女でも、しつかり酒に口を付けてるわけだよ。流石に度数は低いみたいだけど。

「その……わたしは元々そこまでお金が欲しくて冒険者をしているわけでもないですから」

「ああ、前に昇級の方が重要って言ってたっけね。……師匠からの言いつけなんだって？」

「はい。少なくともCランク以上にならないと会うのは難しい、と」
「厳しい師匠だねえ。まあユズには魔法があるし、まったく無茶なこともないか」

……ふむ？ 魔法の才能の有無が冒険者のランクに影響あるのか。まあそれでもなきやこんな何処にでも居そうな女の子、な彼女が周りで酔い潰れてる筋骨隆々の冒険者達に混じっていられるわけもないし、そりやそうか。

「すると今回は領主様が依頼主だったし、一気に昇級が見えてきたんじゃないかい？」

「はい……あ、でも達成できたのは本当に偶然でしたから……っ」
……謙遜なのか、本当に自信があって受注したわけじゃなかったのか。

実際に壁鬼に通用する御札を持ってたわけだし、全く偶然ってこともなからうに。

しかし、さつき話題に出てきた師匠ってのは魔法の師匠なのか、はたまた——

「偶然だったって……いったい何をしたんだい？」

「え、ええっと……その、確かに幽霊さんは居たんですけど……お、お願ひしたらすぐに何処かに行ってくれたので……」

んー………これも嘘は言っていないな。実際私こっちに來てるし。

私がもう何もしてないのに勝手に悪夢を見てた領主さんも、御札を握って「これで大丈夫」と思っれば多分大丈夫だろう。プラシーボ

効果ってやつだ。

「噂になってた鬼の顔ってやつは？」

「え、あ……ぬ、布で擦ったらすぐ消えました。やっぱりただの染みでしたよっ」

布（御札）で擦ったらすぐ消えたね、うん。

もつとテキトーに誤魔化したって良いだろうに、正直な子だなーほんと。

「そっか……噂なんて当てになんないもんだねえ」

「そ、そうですよね……」

その後、酔い潰れた人間をその友人が背負い、酒場の前で解散する冒険者達。

少女もそんな一団の中に混じり、取り留めもない話をしながら宿に向かっていく。

街に滞在する冒険者御用達の宿だそうで、入っていく冒険者の数はかなり多い。

特に割と最近まで街全体が、来る者拒まず去る者許さねえ、な状況だったこともあり、街の宿は現在何処も満席な模様。

そのまま彼女は宿の自室に入り、しっかりと扉を閉める。

すう、はあと深呼吸をして、ぐっと顔を上げて。

そうして意を決したように——誰も居ない筈の空間へと口を開いた。

「あ、貴方は……女神様の眷属ですか？ それとも……め、女神様ご本人ですかっ!？」

.....
ウ^w
エ^a
イⁱ
ト^t。
ホ^w
ワ^h
イ^y
？

C l e e l l ワツト アム アイ……？

……えーと、ね。

確信はあつたんだよ？ 割と早い段階で。

冒険者兼お祓い屋な彼女——ユズちゃんには、私の姿が見えてい
るって。

具体的には、領主さんの手に渡った御札で実験した時だね。

あの瞬間「!？」な顔で私を凝視してたからね、この子。何とか取り
繕ってたけど。

その時点で彼女が霊能力者……もしくはそれに準じる何某かであ
ることは分かっていた。

それでもってそういう人間が、大体向こうの世界のそれと同じよう
な扱いという事も、その後の冒険者達とのやりとりで確認しました。

不思議ちゃん扱いってなんかリアルで辛いなー。あの人はフレ
ンドリーだったけど。

まあ、それはそれとして……何故にこの子は私を神 オア 神の眷
属扱いしてるんですかね。

とんでもねえ、わたしや幽霊だよ。と、冗談はさておき、この子の
中でいったい何があったし。

《私のどこらへんを見て神様系列の何かだと思っただの?》

「え……違うんですか……?」

違うよ? 全然違うよ? 何でそんなショック受けてるの?

「だ、だって……わたしにしか見えてないし幽霊とは明らかに違いま
すし……つい先日、女神様が奇跡を起こした街だって聞いてましたか
ら……」

オウ、ウエイト?!? 何で? 幽霊と明らかに違うナンデ!?

——あ、でも足あるな私。肌も青白くない、そして白無垢でもな

い。

そう考えると定番設定からは割と外れてる？ いや、それでも神様

よりかは幽霊寄りじゃね？

「御札を平気で触ってましたし、霊障も、血色も……神様じゃないなら、何なんですか？」

《何なんですかと聞かれても……幽霊のつもりなんだけど……？》

何か自信なくなってきたでござる。

「……………その、死んでからのどのくらい経ってますか？」

《ひと月……あれ、もうふた月ぐらい経ったかな？》

「普通の幽霊は死んでから一週間も経つと形が無くなっちゃいますよ？」

うん。それは知ってる。

……………というか、やっぱそれが幽霊の標準なのか。

「それにたとえ死んだ直後だったとしても、そこまでハッキリ姿が残ってる幽霊なんて、わたしは今まで見たことも無いです」

……………そっかあ。

あれえ、私ひよつとして幽霊じゃないのか？

まあ、よくよく考えると色々怪しいところがあるにはあるんよね。

今世の『私』こと、ヤーネⅡスペクハイド嬢は死んで、その場に私が残った。

転生の形式がいわゆる『憑依転生』だったとしたら、その構図にも領けなくはないんだけど……そんなリクエストをした覚えは無いのよ、私。

———今の年齢近くで前世の記憶覚醒、って感じで。

これが転生したあの時、私が神様に伝えた内容だ。

即ち今世の『私』Ⅱ前世の私^{雨巫}。同一の魂だとか、そんな感じの何某だった筈なんよ。

……………さてそうなる、無視出来ない疑問が生まれてくる。

果たして本当に私は幽霊なのだろうか？

そして幽霊だとしたなら——いったい誰の幽霊なのだろうか、と。

《……死んだ人間って、みんな必ず幽霊になるの？》

「え……？ いえ、多分死ぬ前に強い未練があつた人だけだと……思
います」

察するに、死んだけど幽霊にならなかつた人を見たことがあると。
そしてその境界線となるのが、死の直前に未練……強い感情を抱い
たか否か。

……ヤーネ嬢の死に関しては、幽霊になるだけの未練があつた
としても不思議ではない。

しかし実際には、私に記憶だけを残して彼女は逝つたらしいわけ
で。

そしてその瞬間の私はいえ、未だ記憶覚醒前……前世の享年が
十六ですけん、十二歳だつた『私』が『思い出す』までには後四年の
歳月が必要だつたことになりますな。

さてさてそうなる……私が幽霊になつたのはいったい誰の未練
によるものなんだろうなー？ これまた疑問が増えちやつたぞー？

『私』が死んだあの瞬間まで意識も無かつたのに、未練なんて抱ける
わけが——

……ん？ あれ？ ちょっと待てよ？

《ねえ、幽霊って……他の幽霊の記憶を貰えるものなの？》

「……………ハイ？」

え、何言ってるんですか？ ってな反応だね。

少なくとも彼女はそんな能力を持った幽霊なんて、見たことも聞い
たことも無い、と。

——記憶を貰って、幽霊を成仏させるのが私固有の力だと仮定したならば。

死んでから時間が経つほど記憶が消える幽霊。

ヤーネ嬢は死んだ瞬間私に触れ、全ての記憶を遺して逝った、という事で説明がつかか？

……どっちにしても、私が幽霊か否かとは別問題だが。

幽霊っぽい能力は色々持っている。

特に私自身には効かなかった御札だが、私が作った壁鬼にはしつかり効いた。

つまり私の能力が幽霊的なものであるということは確実というわけ——

「え……？ あの顔も貴方が作ったものだったんですか?!」

オウ、^{o h}そもそもそこが繋がってなかったのね。

——何を話すにも互いに認識の齟齬が多過ぎる。

彼女が知る一般(?) 幽霊と、幽霊(?) な私の違いを把握せんと話が進みやしねえ。

そんなわけで、まずは私の方から質問させてくれ、という頼みを彼女は了承してくれた。

Q. 軽い物なら動かしたり持ち運べたりするよ。

A. まあ、よくあることですね。

Q. 水面に、人に見える顔を作ったことあるよ。

A. あー……何かしらが映る物に、というのは見たことがありますね。

Q. 壁や床に黒い染みを作れます。顔の形にしたら動き出ししました。壁鬼はそれです。

A. そうだったんですね。あの表情もあなたが？

Q. いえ、勝手に動いてました。突然動き出したときはめっちゃビビりました。

A. ええ……。

Q. 他の幽霊や人間に触ると記憶や感情が入ってくるんだけど。

A. なにそれこわい。……憑依とは違うんですね？

Q. 憑依？

A. 昔、悪霊に憑依されかけたことが……そのときは頑張って抵抗しましたけど。

Q. 抵抗できるもんなんだ。試して良い？

A. 抗える気がしないので止めてください。あの恐怖は二度と味わいたくないです。

Q. そんなに怖がらなくても……。

A. 今まで見てきた幽霊とは比べ物にならない強さを感じるんです。輪郭にぶれが無いどころか足まであつて、殆ど透けてすらいななんて……。

Q. 幽霊の強さはそのあたりで判断出来るってこと？

A. 大体は。形がどの程度残っているか、どのぐらいはつきり見えるかが判断材料になります。

A. ……それにしても、領主さん達に憑依してたわけでは無いんですね。

Q. そうだけど、何で？

A. 死んでから時間が経っても形を残していた霊は、いずれも何かに憑依していたんです。私が過去に見たものだと、ネズミとかですね。

Q. あー……そういう感じで空腹を乗り切ってたんかな？

A. ……空腹？

Q. 空腹感っぽいからそう呼んでるんだけどね。力を使ってる。とだんだん感じるようになって、次第に力も使えなくなっていく。まあ、私はそんなに放置したことないから、そこから『型崩れ』起こし

ていくのかどうかは分らんけど。

A：型崩れ……。

Q：驚かせたり怒らせたりして、私……の起こした現象、かな？に感情を向けさせると、その空腹感（仮）が解消されるんで、私はそうやって現状維持してました。

A：……以前、愉快犯のようなことをしている幽霊を見たことがあります。そのときはいったい何の為に不思議に思っていましたか……。

Q：さもありなん。気付けたなら憑依よりはずっとハードル低そうよね。

Q：他の幽霊ってどんな能力持ってた？ 私にも出来るか試してみたいんだけど。

A：何が出来るか分からないものなんですか？

Q：……逆に聞くけど、人間って自分が持つ能力というのが分かるもんだっただかい？

A：え……大きな街の『鑑定石』を使えば、所持『スキル』の形で……。

Q：おおう、テンプレエ……で、それは幽霊にも使えるものなのかね。

A：あつ。

A：……え、ええと、わたしにだけ見える、青い火の玉を出していた幽霊がいましたっ。

Q：人魂か鬼火ってどこか……こうかな？

「——確かに、何に一番近いかと言われたら……幽霊、ですね」

いまひとつ、いまひとつ納得出来てない、という表情を浮かべる彼女。

彼女の中での幽霊の定義から、未だ私はだいぶ遠いらしい。そんなこと言われてもなー。

例によって例の如く、やってみたら出せちゃった熱の無い青白い炎——命名【鬼火】——を傍らにふわふわと浮かべつつ、今しがた貰った情報について考える。

心躍るのは『鑑定石』とか『スキル』って単語だね。スキル制だったんだね、この世界。

いや、『私』の知識にもその辺の情報はあつただけど、冒険者志望でもない限りは子供の頃に調べてそれっきりらしいんだよね。

魔法とかの特別な才能スキルがあつたら、それを基に人生設計することもあるけど、それでもなければ特に気にすることなく生きていくんだとか。

鑑定するにも一回いくらの形で都度お金取られるらしいし。

憑依？ については被験者は断られたけど、彼女の知る限りは幽霊に触られたら即発動って感じではなく、また気をしっかり持つてれば防げるらしい。

……となると、記憶を貰うあの現象が憑依に分類されるのかは現状不明だな。

そして話の途中で思いついたんだけど、あの空腹感（仮）の先にあるのが型崩れ、というのは割と有力説なのではなからうか。

さらに言えば、何かしらに憑依することも防げるっぽい気配。

……ただ、ハードル高いよね。死んだばかりなら倫理観も残ってるだろうし、他人に憑依しようとはなかなか思わないだろう。私にもその発想は無かった。

彼女が会った先輩幽霊氏も、そうして追い詰められた末のネズミ憑依だったんじゃないからうか。

それから心霊スポット作って自堕落生活してた先達が居たらしいね。

これまでに判明した延命(?)手段の中では、気付きさえすれば一番楽だからな。

ただ、続けて聞くと、この先達氏は既に祓われてるそう。目の前の彼女に。

今回のような依頼を受けて向かった廃屋でのことらしく、更に私のような会話の通じる相手ではなかったどころか、人の形が残った霊でもなかったらしい。

多分、驚かせて空腹解消にまで気付いたは良いが、それに固執し過ぎて人が寄り付かなくなり、やがてそれに関する部分以外の記憶が欠落していったのではなからうか。

だとしたら祓ってもらえてむしろ良かったんじゃないかな。私が判断することでもないけども。

「……えっと、今度はわたしから質問して良いですか?」

《ん? ああ、そりやもちろん》

こつちからは散々聞いたわけだし、ばつち来いですよ。

「貴方は……その、どのような御身分の方だったんでしょうか?」

《どのような、って——》

見ての通りの学生です——と答えようとして、はたと気付いた。

そういや私、向こうの世界の制服(冬服)姿だったではないか。

すなわち彼女にとっては全く世界観を異にする恰好。職業も何もサツパリ推測不能。

しかしだからといって、あなたの知らない世界で学生してました、とは言えないし——

《ご、ごく普通の一般人でしたよ?》

「ええ………?」

……やつべえ、自分には散々答えさせといて、いざこつちから質問したらはぐらかされた、的ない顔していらっしやる。

こつちとしては嘘は全くついてないんだけど、心が痛いよお。

「……え、えっと、じゃあ……どうしてあの屋敷からわたしについてきていたんですか?」

《あー……出来ればこの先あなたに同行させてもらえないかなー……
なんて》

「……………えっ」

聞かれて、私の口からポロリとこぼれたその言葉に、彼女は目を見開いた。

……いやいやそう驚かんでくれ。こう見えて私も割と切実なんよ？

これは今言われて気付いたことだが、私ってばこの世界では相当珍しい恰好をしていたわけだ。

そのことにずっと気付かなかった要因はといえば、これまで見咎められたことが無かったから。

それなりに大きなこの街で盗み聞きに精を出している間、視線を感じたことが一度もない。

それ即ち私が見える人間というのはこの世界でも凄まじく珍しいということになるわけで。

折角の異世界ライフ。独りさびしく漂うよりは、超激レアな『見える人』に同行したい。

それが私の、茶化しも誤魔化しもできない本音。

……勿論、悪霊する気は無いんで、どうしても嫌と言われたら諦めるつもりだけど――

《……ダメ？ 私、役に立つよ？ 自分で言うのもなんだけど、超便利だよ？》

「え、あ、あの――」

《危険な場所の偵察とか、密談の盗聴とかやり放題よ？》

「あ……」

《宿代とか食事代もかからないし、報酬の山分けも不要よ？》

「……………！」

うむ、揺れておる。……始めは「えっ、憑いてくるの……？」って

顔してたけど。

いやいや私、お役に立ちまつせ。

超の付く特殊技能でんこ盛りの、人件費の要らない新入社員という、超有望株でつせ。

雇う側に『靈感体質』必須とかいうクツソ厳しい条件さえクリアできていればな！

「……………」

彼女は暫し無言で、顔色をくると変えつつ思案に沈んだ。

私は合格発表を待つ受験生の気持ちでそれを見守り結果を待つ。

「……………一つ、聞かせてもらえますか？」

《おう、何でも聞いとくれい》

「その……………貴方の名前は？」

う。つ。ぶ。ず、未記名だったわ。……………受験だったら即落とされてたわ。危ねえ。

しかし……………名前か。

前世の名前『糸々山雨巫』は……………正直、転生した時におさらばしたつもりだった。

心機一転、新しい私で生きていこうと思ってました。……………生きられなかったけど。

そして今世は『私』こと『ヤーネースペクハイド』なわけだが……………私と『私』は別人だよなあ。

在りし日の『私』を知ってる人間に彼女が遭遇したりとかで、面倒な事になる可能性も無いとは言い切れないし。

それに何よりも——前世の名前は今ひとつ世界観に合わん！

……………いやいや全くのジョークってわけじゃないのよ？ こう、異物感というか……………これから先、目の前の彼女に呼んでもらう名前と考えると、ね？

郷に入つては郷に従え精神というか……折角だからこの世界に馴染んでいきたいかなつてさ。

というわけでこっちの人達の名前と並べて違和感無さそうな名前を……んー……。

——雨巫……雨……r a i nレイン？

《レイン……って呼んでくれる？》

「レイン、ですか。……分かりました」

その返答と共に彼女——ユズちゃんは若干寄せられていた眉を緩めて笑ってくれた。

瞬間、詰まっていた息が喉から漏れて、私も実は緊張していたんだなど、笑いが込み上げる。

「それじゃ、これからよろしくお願いしますね、レイン」

《こちらこそよろしくね、ユズちゃん》

祝、当選。……何か違う？

何にせよ、これでようやく私にも旅の道連れが出来たというものだ。

——私はレイン。

出生出所、共に不明の幽霊（暫定）。

そしてこれからは冒険者兼霊能力者ユズちゃんの相棒。それでいいじゃないか。

とんでもないスタートを切った私の異世界ライフ……l i f eライフ？
まあとにかく、諦めなければなんとかなるもんだねえ。

「……でも、幽霊に売り込みされる日が来るとは夢にも思ってません

でした」
せやろな。

——自分の目に映っているモノが、他の人には見えていない。それが、見えているのは、おかしい。

それが、見えるのは、気持ち悪い。

それが、見えると言ひ張るのは、間違ってる——

物心ついて間もない頃から、わたしは次第にそうした事を理解していきました。

たとえば、本棚の後ろから誰かがこつちを見ていても。

たとえば、机の下から背筋が凍るような声が響いていたとしても。

たとえば、友人の背中に青白い手が……手だけが張り付いていたとしても。

それらは決して、口にははいけない事なのだ。

変化していく周囲の態度や、向けられる視線から、何となく。

わたしが生まれた国では、五歳になるとお城で『鑑定』を受ける決まりになっていました。

この『視界』が『スキル』に拠るものだったら、誰かに話せるようになるんじゃないかと思っていました。残念ながら無関係だったみたいで。

その代わりにだったのか、私には平民としては珍しく、魔法のスキルが幾つかありました。

親類縁者にこうしたスキルを持った人間がいない中では、特に珍しいことだそうです。

両親がわたしの事で喜んでいるのを見たのは、この時が初めてだったと思います。

小さい頃から不気味な事ばかり言っていたわたしが、とても気味が悪かったようなので。

そうして、六歳になったわたしは学校に入れられました。

魔法スキルをはじめとする、一部の珍しいスキルを持った子供が、国のお金で通わせてもらえるようになっていく学校です。

両親は喜んで、わたしを寮に入れました。

……ああ、入寮は希望者に対する制度です。二人がそれを希望したんです。

わたしが両親に会ったのは、入学式の日が最後でした。……ええ、まあ、そういうことですね。

そこで知り合いになった子達にもそれとなく聞いてみたんですが……やっぱり同じ『眼』を持つお友達はいませんでした。

寮の四人部屋には、始めに季節が変わるぐらいの頃まで五人目が居たりしたんですけどね。

生きている人の声と、そうでないモノの声。

二つが大体聞き分けられるようになり、うっかり後者に返事をしてお友達から「えっ？」という目を向けられることも少なくなってきたある日のことでした。

郊外授業の一環で訪れた建物で、何となしに隅に向けた目が……合ってしまったんです。

見えていると、バレてしまったんですよ……其処に居た、『人』に。

それまで見てきたソレは何れも青い靄、もしくはそこから手足など体のどこか一部が伸びている姿だったのですが、その『人』は違いました。

ネズミの背中から瘤のように人の頭が生えていて……台座にされたネズミの苦し気に喘ぐような鳴き音と共に、青白く血走った瞳がぐるぐるりと忙しなく回されていました。

その瞳がぎよろりとこちらを見たとき、わたしは目を逸らせませんでした。

叫び声を上げないようにと咄嗟に口を手で押さえて——周りの友人や先生には見えていない、ということに気付いたのは、その直後でした。

普通の人からすれば、単なる変なネズミ、だったんだと思います。それを青い顔でじっと見ていたわたし。

わたしに見られていると、その『人』が確信を持つのも、当然だったのでしょうか。

その瞳が喜悦に染まっていく様子を最後に、わたしの意識は途切れしました。

——そんなにネズミが苦手だったのか、とお友達には笑われました。

女の子ならよくあることだ、と笑って庇ってくれる人もいました。けれどどちらの声も、当時のわたしの耳にはほとんど入っていませんでした。

わたしの視界にあったのは、確かめるように指を曲げ伸ばしするわたしの右手。

震えながらソレに伸ばした左手は即座に、荒々しく払われて。

右手首から見覚えのある『頭』が生えた瞬間、わたしは再度意識を失いました。

右手を縄で縛りつけると、その『人』が入っている感覚が左手へと移り、左手が動かさなく……いえ、勝手に動くようになりました。

続けてその感覚が肩を登ってきて——頭にまで登ってくると感じて——必死に拒絶しようとするうちに、抵抗の仕方をなんとなく掴めてきました。

そのまま身体の外に追い出すことは出来なかったですが、器の中に押し込むようなイメージで、片手の中に閉じ込めることが出来るようにはなっていましたね。

閉じ込めた手を縄か何かで縛ろうとすると、閉じた蓋が押し返されるような感覚があったので、その『人』をそれ以上暴れさせないために、それは諦めました。

——こうしてわたしは、なるべく周りから変な子だと思われない

ように気を付けつつ……時折勝手に動きだす手と付き合っていくことになったんです。



……………。

……………おうつふ。

いや、まあ……………尋ねたのは私からなんだけどもね？

以前の話の中で出た、憑依に関してそこまで怖がる理由とか気になつちやつたわけだね？

眠る度に身体を乗っ取られてないかと怯えたり、とか。

会話中に突然手が暴れ出して怪訝な目で見られたり、とか。

そんな肉体的にも精神的にも地獄のような日々を滔々と語られるとは思わなくてですね？

……………思った以上に過酷やん。霊能力者ライフ。

静まれ俺の左腕（ガチ）とか、中二病患者も真っ青だよ。

考えてみれば十五で成人なこつち基準でも未成年な彼女が一人旅してるとか、その時点で確実に闇深案件だったよね。聞く限りだと主にご家庭がですけども。両親からの扱いよ……………

私だったら絶対耐えられん。胡散臭いとか思つてマジすいませんでした。

《……………それで、まだそつちの手の中にいたりするわけ……………？》

「あ、いえ、もういないです。師匠に祓っていただきましたから」

そこから語られたのが酒場でも少し聞いた、師匠とやらとの遭遇。

要約すると、特別講師として招かれた高ランク冒険者だったそう
で、当時のユズちゃんの状態に一目で気が付き、何てモノをくつつけ

てるんだと目を剥いたそうなの。

そこでネズミ憑依霊をささつと祓った後、現在の彼女が持つ御札の製作方法といった対抗手段の数々を短い講習期間に大急ぎで仕込んでくれたらしい。

——『見える』ということは、人よりそうしたものを引き付けやすいとも言える。

当時の彼女に対し出来れば自分の手元に置いておきたいとも言ったそうだが、生憎どこぞの国で功績を残した際に職を授かってしまった多忙の身。

さりとて他国から未成年の有望な学生——その辺、彼女の評価は割と高めだったとか——を勝手に引き抜けるような権限も無い。

仕方なく自分が仕える国の情報と、自分に公的に会うにはこのぐらいの冒険者ランクが必要だ、と講習日の最後に告げて去っていったのだとか。

《——で、その師匠さんに会いに行くのがユズちゃんの目標ってわけね》

「はい。……まあ、まだまだランク的にも地理的にも遠いんですけどね」

しかし彼女にとってはそこまで焦がれるようなモチベーションでもないらしい。ここまで聞いた私にとっては意外だったが。

遠い明日にまた会えれば良いな、ぐらいの気分で旅を続けているそうなの。

案外メンタル強い……というか『痛み』に対して鈍感になっちゃってない？ マジで大丈夫？

ま、まあ、それはそれとして私は会ってみたいね。霊能力者であることはまず間違いないし。

彼女より霊に詳しくそうなその御仁から見て、私がどういう存在に映るのかもわりかし気になる。

彼女に同行する理由がまた一つ増えた、ぐらいで良いかなとも思う

けどさ。

一通り話し終えた彼女は、ふう、と息を吐いて馬車から見える景色に目を向けた。

そこには昨日の酒場で席を並べた冒険者も数名いて、視線に気付き手を振る者もいる。

和やかに見えるが、これでも商人の護衛依頼の最中、かつ彼女も依頼を受けた冒険者の一人。

基本は後衛魔法使いだという彼女は、主に馬車内にて不測の事態に備えておく役割を任された。

つまり、何事もなければ普通に乗合馬車の客状態なわけだが……魔法の使える冒険者というのが勝ち組扱いされる所以がよく分かる一幕である。

まあ、今回に限っては既に多大な貢献をしている……ということになっっているのだ。

何故ならば――

《……十時の方向、ゴブリン五匹》

「えっ、あ……し、進行方向左にゴブリンですっ、数は五体っ！」

彼女のややどもりながらの指示に、「またかつ」「マジかつ」「本当凄えな！」と馬車の周りに展開した冒険者達が三々五々に動き出す。

街から出た頃は半信半疑だった彼らも、こう何度も彼女の予言通りにモンスターに遭遇すれば、最早疑う余地はない。

当然ながら、彼女が突如として予知能力やら探知系やらのスキルを得たわけではない。

……そういう事例が無いわけではないそうだが。

彼女の相棒たる私が常に馬車の上空百メートル程を漂い、モンスターを見つけては降りてきて、その旨を伝えているだけである。

以前は馬車の速度以下だった私の浮遊速度だが、マースルの街で溢れんばかりの信仰心（？）を注がれた結果、足回り（？）が一気に改善されていた。

体感的には五十メートル走を十秒台というところだろうか。

……小学校低学年の全力疾走ぐらいのことです。めつちや改善されたのよ、これでも。

「——いやはや……女神様も太っ腹だねえ、こんな力を授けてくれるなんて。ねえユズ？」

「え、あ、は、はいっ、そうですね」

酒場でも親しく話していた女冒険者氏——何度か臨時で組んで仕事をこなした仲だとか——に話しかけられ、ややあわあわしつつも応対するユズちゃん。

彼女のような以前からの知り合いについては、何某か聞かれた際にはこう答えよう、というのを昨夜の時点でいくらか決めておいた。

基本的には「枕元に女神様が立っていて、祝福をいただきました」で通すことにしている。

冒険者相手にこう言っておけば、女神さまに祈りを捧げる冒険者も増えることだろう。

信仰をしこたま横取りしちゃった疑惑に対するお詫びの一環ってことだね。

……まあ、その辺についてはユズちゃんにも秘密なんだけど。私の感覚の話だからな！

そうこうするうちに、隠れていたゴブリン達を討伐してきた冒険者達が戻ってきた。

馬車を守りながらだったならこの規模でも多少苦労、というか面倒な相手だっただろう。

これに限らず非常に楽をさせて貰っている彼らの顔は一様にホクホク顔だ。

前衛冒険者は楽を出来て、後衛冒険者は暇が出来て、商人は積荷が無事。

誰一人損をしていない、我ながら素晴らしい活躍ではないか。

「……なんか、ダメになりそうです」

真面目やな！。

「……………前々から思ってたんだ。あんたは何かあたしらと別のモノを見てるってね」

「え…………」

……………うん？ 何か真剣な雰囲気の話になってるな。

「嫌な気配がする所でも、あんたの言う通りに進んでりや、無事に抜けられたってことが何度もあつたし…………」

「あ…………それは…………」

……………後でユズちゃんから聞いた話だが。

勘の鋭い冒険者が時々言う『嫌な気配がする場所』、というのはほぼ、『同業者が死んだ場所』だったそうだ。彼女が見た限り。

なのでその都度、死んだその場から動いた気配の無い幽霊の存在から畏の位置を悟つたり、まだ話の出来る死にたて幽霊から安全な出口を聞いたり……………というのをこっそりとやってたんだとか。

どうやらたまたま彼女と即席パーティーを組むことが多かったこの女性は、そういう状況に何度か出くわす内に、自然と霊感体質について理解を寄せてくれていた、ということだったらしい。

……………不思議ちゃんやら変人扱いやらせずに、ちゃんと見ててくれた人も居たんやねえ。

「それで思っただけどき。……………あんたが女神さまから貰った力つてのは、本当はもつと凄いものだったりしないかい？」

「ふえ？ ……いい、いえ、そんな事は…………」

……………うん、まあ、ちよつとしたスキルや魔法に比べたら、より凄い

モノなのは間違いない。

女神様から賜ったんじやなく、あくまで話し合いの結果パートナーになったんだけども。

そんなことを思いつつ見守っていたところ、彼女の口からとんでもねえ解釈が飛び出した。

「例えば、そう……女神様に直接お尋ね出来るようになった、とかだつたり——」

「はえ……？ い、いえ、そういうわけでは……」

……リアルタイムに神託受け取ってる、的なの？

もしそうならフットワーク軽すぎでしょ、女神様。

しかしなるほど。傍から見たら神託的オラクルな何某に見えるのか。まあ別にその認識でも——いや、それ不味くない？ 信仰心的なモノ横

取り疑惑再燃しない？ ……あ、やっべお腹にきちやってる靈力源増えとる!?

ちやうんです。そんなつもりはないんすよ、女神様。どうかご容赦下さいませ、平に。平に。

……これは早急にそれっぽい偽装を考えんとだなあ。

Chapter 2

C2-1 つかみどころがない彼女

(——チュウ、チュウ)

「……あちらにある廃屋、人数は三人です」

(——チュツ、チュウ)

「二人は扉の右側、残りの二人は部屋中央、未だ寝息を立てて就寝中のことです」

(——チュウ、チュウ)《タコ、カイ、ナー》

「んくっふ……っ!!? ひ、人質になり得る人物等は無し、以上ですっ」

「よし、突撃だっ」

偵察内容を聞いた前衛役の冒険者達が向かうは、奥まった路地裏に建つ一軒の廃屋。

古びた扉を一息に蹴り破れば、そこには警戒という言葉を夢枕に投げていた三人の男の姿。

「……はっ!? な、何だお前ら!?!」

「んあ? ……ゲツ!?! 冒険者!?!」

「う、嘘だろ? 何でここが——ぎやああ!?!」

これまで通り、誰に追われることも無かったという自負の中、事を起こしたその日の晩を高枕で過ごしていた男達。

まさかまさかの隠れ家強襲に浮足立った彼らは、用意されていた後詰めの後衛職の出番も無く、あっさりと無力化されるのであった。

街中にて強盗、誘拐等を繰り返してきた三人組の盗賊の発見および討伐依頼。

彼らは人通りの多い大通りにて騒ぎを起こしては、混乱に陥る人混みに紛れて犯行に及ぶという手口により、追跡捕縛はおろか犯人の特定すら困難にさせてきた難物達であった。

現場を押さえる以外に犯人の特定は難しく、しかしその場で取り押さえんとすれば周囲の住民に危害を加えられる恐れもある。

そもそもどれだけの人数を動員しようと、人の壁を活用し逃げ回る彼らを追うことは難しい。

そうして長らく多くの人間に頭を抱えさせていた依頼は、されど今

「……あの子のお陰で本当に楽できたわねー」

「ああ……まさかこいつらもあんな方法でねぐらを特定されるとは思わなかっただろうよ」

「分かつちやいたけど便利だよなあ……あの様子じゃ街中に限ったモンでもないだろうし……」

銘々強かに打ち据えられ、意識を刈り取られるに至ったは幸か不幸か。

散々に行政の手を焼かせた彼らを片手間に縛り上げながら、冒険者達の雑談は続く。

「採取依頼なんかもあつという間に対象を見付けられるらしいぜ？
受付嬢に聞いた話だけだよ」

「あたしが聞いたのは逃げた飼猫の捕獲依頼だったねえ。猫の方があの子の手元に走って来たのを見たってさ」

「……ま、話はその辺にしてさっさと引き上げようぜ。当の彼女を待たせちやいけねえし——」

難題を片付けたとある同業者の類まれなる能力について、彼らは口々に語り合う。

気絶させた男達を縛り上げ、引きずりながら廃屋を出た彼らは後詰めの位置に待っていた一番の功労者へと視線を向け——どこか微

笑ましくも奇妙な光景を目の当たりにした。

——開いた手の上に座るネズミに向かって、苦笑交じりに怒りを滲ませる少女。

小声で何事か訴える少女に対し、「やれやれだぜ」とばかりに前脚を広げ、肩を竦めるネズミ。

その仕草に怒りを煽られたか、掴む形に変えた手でギリギリとネズミを絞り始める少女。

「ぬおお……」とでも言っていそうな苦悶の表情(?)で、その手をぺちぺちと叩くネズミ。

「……………何だコレ」

「え……………あ、いえっ、これは……………何でもないですよっ?」

注がれる視線に気付いた少女が、握り締めていたネズミをぞんざいに放り捨てる。

「ぬわーっ」とでも聞こえてきそうな顔で飛んでいくネズミを、彼らは視界の隅で見送った。

「……………なんでも、なにも、問題はないです。……………ないですから」

「……………そっか」

微妙に泳いだ瞳で取り繕う少女に、それぞれ目を合わせた彼らは口をつぐみ。

ややあつて、ギルドに向け動き出した彼らを包むは、早朝ゆえの静寂であった。

他人の『スキル』について深く追及しないというのもまた、冒険者の不文律であるからして。

捕縛した盗賊達を連れ、ギルドに帰還。所要の手続きの後で報酬を受け取る。

受け取った報酬を依頼受領前の取り決め通りに分配すれば、臨時パーティは解散だ。

「……………なあ、毎度言ってる気はするけど、正式に俺達のパーティに入ってくれたりは——」

「すみません。そういうお誘いはお断りします」

そして行われる少女への勧誘と、それを丁寧に固辞する少女の手慣れた返答。

誘った冒険者達の表情は惜しさに染まっているが、無理強いをしないのもまた最低限のマナー。こうもハッキリと断られてしまえばそれまでである。

同じ想いを抱き同じように袖にされてきた者達に彼らが冷やかされる声を背中に、少女は楚々とその場を後にするのだった。



「——不意打ちはやめてくださいって言いましたよね？」

《いやー、まさかあのネタが通じるとは思わなくてさ》

毎度の如く似たような言い訳をして、全く悪びれてはくれず。

いつでも追及を飄々と躲す彼女に、空回りさせられた気炎は今日も溜息に変わる。

「そのネタというのを事前に仕込んだのは誰だと思ってるんですかっ」

《そら私しかおらんやろ》

「……………やっぱり分かってやってるじゃないですかあ！」

旅の途中で出会った『相棒』、幽霊のレイン。

本人は幽霊だと言うけれど、わたしが知る幽霊の定義からはあまりにも大きく外れていて。

それでも何に近いかと問われれば、一番近いのは幽霊、と答えざるを得ない、そんな彼女。

死にきれないと感じる程の悲痛な未練を残し、魂を擦り減らしながら現世に留まる存在。

そんな幽霊の一人とうそぶきながら彼女は今日もニコニコと、わたしの傍らを漂っている。

《それにしてもユズちゃんも結構有名になってきたみたいじゃない？

そろそろ二つ名が付くかもとか言われてたし》

「う……でも、ほとんどわたしじゃなくてレインの力ですし……」

《何言ってるの。私とやり取り出来るっていうユズちゃんの力じゃない》

実利の面を強く推されて始まった二人旅は、確かに思った以上にわたしに利が多かった。

けれどあのとき彼女に提示された以上のものを、わたしは既に山程貰っている。

まともな会話など殆どできないのが、普通。

まともな人の形など残っていないのが、普通。

また残っていても、青白く血走った理性の薄い瞳——それが幽霊という存在の、普通なのに。

「……二つ名が付くにしても、間違はなくわたしだけを評価したものじゃないですか。パーティ名なら良かったんですけど……わたしはこれまで単独冒険者で続けてきたことになってますし」

《そりゃ、幽霊が冒険者になれる規約なんて、あるわけないんだからしょうがない》

なのに彼女は『わたしにしか見えない』ことを除けば、生きた人間

と何も変わらない。

普通に話して、普通に笑って、幽霊であることを持ちネタにして笑い飛ばしすらする。

《もー、真面目だなあ、ユズちゃんは。あんまり細かい事ばっか考えてると……ハゲるよ?》

「やめてください。レインが言うところには冗談にならないです。この毛筆り幽霊っ」

《失敬な。ちよつと盗賊の隠れ家見つけてから夜が明けるまで暇だっただけだつて》

「……急に頭頂部がツルツルになってた事に気付いた人の顔なんて初めて見ましたよ、わたし」

《殺人強盗強姦……これまで好き勝手生きてきた盗賊に慈悲など要らぬと思うのだよ》

「それはまあ……そうですねどっ」

——霊が見える自分。

人と人との付き合いの中で、必死に隠し、押し込めていた本当の自分。

それを気兼ねなく曝け出して、笑い合える相手がいる。……それがこんなにも幸せなことだったなんて、今まで想像したことすらなかった。

今までずっと、本音の言葉は隠して生きてきたから。

不審に思われないように、排斥されないように、本音とは違う言葉を直ぐに用意して、そちらを口にする事に慣れ切っていたから。

ある時、《私が居るのが嫌になったらいつでもそう言っつてね。祓われたりしなくなつて、勝手にどこにでも行くからさ》と、言われて。口がいつもの癖で「分かりました」と答えた一方、心の中では「絶対やだ! 行かないで!」と悲鳴があがっていた。

そのあまりと言えばあまりな乖離に、思わず息が詰まって、一拍。お腹の底からこみ上げた笑いに蹲ったわたしに、レインは目を白黒

させていた。

レインに対してなら、もう本音を隠す必要が無いのは分かってる。
……流石にこの時の『本音』は、まだ口に出てはいないのだけ
ど。

「大体、どうしてそれでやるのが髪の毛を一本ずつ引っこ抜いてい
く、なんですか」

《初めは馬力も持続力も全然だったからねー。それぐらいしか嫌がら
せを思いつかなくて》

「……いや、なんで何より先に嫌がらせの内容を考えてるんですか」

《まあ、そりゃ……なんとなく?》

生前の自身が何者だったのかについて、レインは未だ何も教えては
くれない。

……初めて会ったあの日、明らかに「たった今考えた」とばかりの
偽名を名乗っておいて頑なにそこだけ隠そうとするのはどうしてな
のだろうか。

《——ん? あれって……》

「店先で子供に風船を配ってますね。客引きの一種でしょうか」

《わー、こっちにもああいうのあるんだ。ゴム……っばい何か製か。
ねえ、あれって中身は?》

「え? ええと……風魔法の応用で特殊な風を詰めると聞いたことが
ありますね」

《ほほう、空気中から水素かヘリウムでも抽出してるんかね?》

「へりう……? さ、さあわたしには……」

レインとの付き合いの中で次第に分かってきたのは、彼女の知識に
妙な偏りがあること。

物知らずというわけではないのだけど、実体験が伴っていないとい
うか……書物か何かから得た知識を逐一確かめているような印象が

ある。

おまけにどこか身分の高い生まれのような、それでいて価値観は変に庶民寄りな所もあって。

……きつと相当複雑な生い立ちなのだろうと、そう思えた。

だとすれば、出自を覚えてくれない理由も幾らかは思いつく。

例えば、生前の彼女の名前を知ってしまうだけでも、その人間に危険が及ぶという場合。

そう考えればその死に様が壮絶な未練を残すような……強力過ぎる霊としてこの世に遺るようなものだったことまで、容易に想像出来てしまう。

——今はニコニコと、幽霊としての生(?)を楽しんでいるように見えるレイン。

そんな彼女はいったいどんな人生を歩んで、どんな恨みを持って死んだのだろう。

……今はまだ、わたしに危険を振り払えるほどの力が無いけれど。わたしが師匠に会えるぐらいに……レインに認められるぐらいに強くなれたなら。

《……ん、どうかした?》

「……いえ、なんでもありません」

いつかその未練を、わたしが晴らしてあげたい。
晴らせるよう、力になれるようになりたい。

それが今のわたしに出来た、新しい目標だ。

C2—2 旅は道連れ世は……

《——ねー、ユズちゃん》

「むぐ、何ですか？」

現在お食事中のユズちゃん。献立は店の名物だという海鮮丼。

彩豊かな海の幸が、この近くで作られているというお米（ちよい細長い）の上で躍る様は非常に美味しそう——とは思いますが、食欲は沸きません。自分、幽霊なもんで。

しかしながら、ただ見ているだけしか出来ないわけではないのですよ。

《ひと口ちよーだいっ》

「あ……はい。良いですよ」

よそつてもらって、あーん……ではありません。それじゃ食えないっす。幽霊ですの。

ではどうするって？ ふふふ……私の『ひと口』とは、こうなるのです。

《承認確認っ、【憑依】！》

「……んっ」

はい、ユズちゃんに憑依します。でも身体は動かしません。そういう約束なので。

この憑依状態を維持したまま、一口食べてもらいます。

こうすれば宿主の感覚を共有して……うむ、うまあい。

産地直送、魚介類の旨味！ ここまでの新鮮さは前世の世界でもなかなか味わえんよ！

——以前彼女から聞いた先達氏の話を参考に、毎度の如く出来るかなーと思ってやってみたら出来ちゃったんよね、【憑依】。

とはいえ、最初から人間を相手に実行するのは色々と懸念が——

主に以前、迷子の少年相手に意図せず発動した【感情吸収】(暫定)の問題が——あったので、ここは先人に倣ってネズミを対象にした実験に踏み切ることに致しました。

結果、当初の懸念は見事杞憂のままに終了。やったぜ。

ついでにネズミ以外の生き物もということ、猫やら小鳥やら……ちよつと興味本位で虫への【憑依】なんかも試してみることに。

……何というか、一定以上の知能が無ければ大丈夫かなあ、なんて思いましたね？

こちらも結果だけ言えば、どの対象にも問題無く【憑依】に成功いたしました。

推測が合ってたかどうかは分からんけど、まあ何にせよ、せーふせーふ。

……あ、知能がありそうな相手には試してないよ。怖いから。

具体的にはモンスター諸兄ね。ゴブリンとか人間の子供並みにはあるらしいから……ね？

以来、飛行壁抜け等々私の幽霊ボディを活かした偵察を他人の前で使う時には、そこらの適当な生き物に憑依して彼女の手の上で報告する……振りをするという形式をとっております。

動物の使役に関するスキルは希少なながらもいくつか有るようで、その上で使役した動物と会話が出来るとまでいくと相当珍しいけど、説明がつかないレベルではないとのこと。

そこで今後は、ちよいと特殊な『調教スキル』持ちという触れ込みで活動することに。

スキル開示を求められる状況なんてよっぽど特殊な犯罪でもやらかさなない限り有り得ないんで、それで十分誤魔化しが利くんだってさ。

これでもう神のお告げ扱いされる心配は要りませんー。

さて、具体的に【憑依】することで何が出来るかという話なんだけ

ども……

対象を小動物かそれに準ずるモノに絞った場合、まあ役には立たない。先の偽装以外には。

例えばネズミを対象にした場合、ネズミに出来る以上の事はほぼ出来ないと言つて良い。

……猿回しで覇権を取れる？ やだよそんな異世界生活。

要は普通に私が幽霊状態で物を動かそうとする時の力……【念動力】でいつか。それ以上の力はまず出せないよね。大型の生物に憑依出来るなら別かもしれんけど。

それに感覚をある程度共有している(?) こともあって、体を可動域以上に無理矢理動かそうとすれば宿主が感じる痛みを同じように受ける。

憑依中に宿主が死んだらどうなるかは気になるけど、万一を考える
と試す訳にもいかんしなあ。

第二に調べたのは、死体への【憑依】は可能か。……結論から言つて不可能と同義だったよ。

より正確には、一応憑依は成立するが全く動けない、ときたまんだ。ネズミに憑依したらネズミに出来ることしか出来ないんだから、死体に憑依したら死体に出来ることしか出来ないのでは、というのがユズちゃんの見解。

へんじがない。ただのしかばね、に憑依しただけの幽霊だってわけだね。ぐうの音も出ねえや。

……で、ここまで検証を重ねてから最後に確認したのが人間相手。これについては、流石に赤の他人を被験者にするわけにはいかなかった。倫理的に。

となると頼む対象は、ユズちゃんしか居ないわけで。

しかし過去に質の悪いモノに憑依された経験から彼女は強い忌避感を示していたし、その当時の話を聞いた私としても好き好んで試したいとは思わなかった。

けれども不意に意識を失うような事態に陥った際に私が憑依して難を逃れることができるかもと考えると、何が起きるか分からない仕事を生業にする冒険者として試さないわけにもいかず。

最終的には、緊急時を除き勝手に憑依しない、申告無しに身体を動かさないという約束のもと、被験に及ぶことと相成った。

さて、やってみると【憑依】自体は何事も無く成功した一方、彼女側は何かを吸い取られそうになるような感覚があったとのこと。

……これはやはり【感情吸収】が発動してたのだろうか？ ……本当に、私の能力の中でも特に困ったヤツだよキミは。

続けて聞けば、憑依への抵抗と似たような要領で防げたのだという。

非常にありがたい……と思うと同時に、彼女以外の人間は憑依対象にするわけにはいかないかと結論付けた瞬間でもあった。……いやまあ、する気も無いけどさ。

さて【憑依】の感覚としてはまあ、ネズミその他とそこまで違いは無し。

了解を得てから身体を動かしてみたけど、これもまあ、問題無し。最後に本人が動かそうとするのと逆の方向に手足を動かしてみる、という実験をしたところ……何の抵抗も無く——私の感覚では——指定した方向に動かせちゃったんだよねえ。

これまた後で聞いてみて曰く、「以前に憑依されたときが子供に引つ張られる感じだとしたら、大人五人ぐらいにめいっぱい押さえ付けられたような感覚」だったそうです。……マジやばくね？

それを聞いて即、本当に本当の緊急時以外には使わないよと約束した私でありました。……絶対トラウマ直撃だからね、仕方ないね。

「むぐ……美味しいですか？」

《うん、うめえ。やっぱり朝採れたばっかの魚介を使ってるだけあって、新鮮さが違うよね》

「あー……それは確かに」

まとめると【憑依】の使い道は誤魔化し、緊急回避、そしてこの食事の感覚共有の三つ。

今の状態になって食欲も無くなれば、そもそも『食べる』という行為が出来なくなった私でも、こうして料理の味を堪能することが出来るというわけだ。……うん、地味。そして、美味。

《ん……ほい、ありがとね》

「あれ、もう良いの？」

結局食欲が無いことには変わらないしね。ただただ味を楽しむだけ。

そして【憑依】にも霊力は消費してるし。……憑いた対象を動かさうとしなけりゃ、ごく微量で済むんだけども。あとは多分、動かす身体の大きさに比例かな？

過去にユズちゃんに憑りついた霊が、たまにしか手を動かさなかった理由がよく分かる。

『型崩れ』から逃れる目的の憑依で、収入以上の霊力を使ってたら世話無いわな。

「……何度も言いますが、その『型崩れ』って言い方はどうかと思います」

こういうのは分かり易さ第一なんよ。

《まあそんな事より、この街にはどのぐらい滞在する予定なの？》

「ん……同業者の噂では、そろそろ一つ大きな依頼しごとが入るそうなんですけど……」

ユズちゃんの冒険者スタイルは、気ままに旅して気ままに依頼をこなす、これに尽きる。

旅を急ぐ理由があるでも無し、目標である冒険者ランクについても焦ってもしようがないので、辿り着いた街でランク相応の依頼がある程度こなしたら次の街に向かう、という流れを繰り返してここまで

やってきたそうなの。

一応、師匠が言っていた国を目指してはいるが、地形や国情から一直線に向かえるわけもなく。

今も迂回に迂回を重ねた長い旅路の途中とのこと。

……あれ、待ってユズちゃん年齢幾つ？ え、全盛期!^{じゅうよんさい}！ ……あ、いや、何でもないよ？

ええと……学校の卒業が十二歳の時で？ そこから冒険者歴二年？ え、それ進路指導とか……一年は国内で活動する決まりがあるけど、それを過ぎれば自由の身と。……マジかあ。

「大きな依頼ほど普通よりも昇級に近くなりますから、参加できるかは分かりませんが、どちらにせよ顛末を見てからにしようかと」

《なるほどねえ……まあ、ユズちゃんの好きなようにしたらいいよ》

「……わたしも一応聞きますけど、良いんですか？ どこか行きたい場所があったりは……」

《良いの良いの。私がユズちゃんに憑いていきたくていつてるだけなんだからさ》

彼女に同行するようになってから早数ヶ月。

今となっては彼女から離れるという選択肢なんて、私の中ではまずもって有り得ない。

《第一、行きたい場所なんてあるんなら勝手に行くつてば。国境が云々、地形が云々なんて障害、この幽霊^私の前で意味があるとでも？》

「……そっか……そうですね」

どこにでも行くだけは行けるだろうけど、一人じゃどこへ行ってもしょうがないんだもん。

物理的にもそうだけど、精神的にも、ね。

「……何ですか？」

《や、なーんでも？》

何処にだって、いつまでだって、『憑いて』いくよ。嫌だって言われ
ない限りはさ。

C2—3 銀の翼

——同業者間での噂通り、ここ海辺の街ムフトンに高ランクパーティーが立ち寄りました。

ランクはB、男三人女一人。パーティー名は『シルバリーエザ銀の翼』……これ普通の名前なの？ そっかあ。

パーティーのリーダーだという細身の剣士、ポルト。

重装備の斧戦士、クルガン。

目つきの鋭い弓使い、ラクス。

紅一点の魔法使い、サーシャ。

それぞれ個人でもBランクの肩書持ちということで、周辺地域では割と有名な一団、らしい。

そんな彼らは街に来て早々、冒険者ギルドの長から指名依頼を提示されていた。

なんでも依頼自体は暫く前から存在したが、解決しようにも地元の冒険者には荷が重い為、彼ら練達者の来訪を待っていたとのこと。

……近々入る大きな依頼しごとの噂ってそういうことだったのね。

肝心の内容は、街から約三日という距離にある遺跡を根城にした盗賊団の討伐。

依頼の詳細および諸条件を確認した彼らは、軽い問答の後でこれを了承。

続いて行われたのが、彼らに同行する低ランク冒険者の募集であった。

彼らがどれだけ強くとも、盗賊団を逃がさず討伐となると必要になるのは頭数。

また、この街のギルド側としても高ランク冒険者が訪れたこの機会に、なるべく地元の冒険者に経験を積ませたい。

そういった事情から、依頼の条件——強制ではないようだが——の中には、Eランク以上の冒険者二十名程度を同行させてほしい、

という要望が付記されていたようで。

その結果、地元の冒険者達が高ランクの先達の目に留まるべく集まってきたわけだが――

《いやあ……意外と、見てて飽きないね》

「(……まあ、皆さん必死ですから……)」

事の始まりは、剣の扱いには自信がある、と豪語した一人の男。

ならば見せてみる、と言われ一通り剣舞を見せた彼が浴びたは、
Bランク剣士の冷めた眼差し。

そこで動揺に揺れた瞳に何を映したのか――徐に短剣で^{ジャグリング}お手玉を始めたのが皮切りになった。

槍をバトンの如く振り回し、明らかに即席と分かる決めポーズを取ってみた槍使い。

仲間の頭の上に乗せた林檎っぽい果実を投げたナイフで割って見せた短剣使い。

水魔法を使つて作り出した水人形で、即席人形劇を演じて見せた魔法使い――明らかに周りレベルが違うので即採用された――等々、完全に方向性がそつちに固定。

終いにはこのタイミングで来店した冒険者が「……あ、間違えました」とUターンしていく程。

……いやほんと何だこれ。唐突に何が始まったんだよコレ。

いやまあ、実のところは始めに集まった冒険者たちをざつと見回し、必要な役割に応じて指名、という形で枠の六割程を埋めてあるの
で、後はもうノリで決めても良いやということなんだろう。

そして何よりこの状況を一番楽しんでいるリーダー剣士の好み。
これに間違いない。

それが証拠に、見事な芸を披露した者には採用不採用関係なく大いに
労いの言葉をかけている。

他三人も「やれやれ……」と肩を竦めつつも、そんなリーダーを咎

める素振りは無し。

ある種の信頼関係と言えば間違いではあるまい。……巻き込まれる冒険者が何ともアワレだが。

《……ね、もしユズちゃんがやるなら何やってた?》

「(え? うーん……さっきの人みたいに、魔法で何かしたかと)」

《ほほう、つまり人形劇?》

「(……いえ、あれはわたしには真似できませんよ)」

そんな混沌と化した面接会場を、離れたところから適当に駄弁りつつ見守る私達。

ただしユズちゃんは小声でボソボソ。今は周りに人目もあるからね。仕方ないね。

……え? そりやこの子は勿論、とつくに採用された側の席に座ってますよ?

即席大喜利大会が始まるより前、最初に採用された皆さんに「推薦したい奴とか居るか?」とリーダーが質問。すると皆さん満場一致でユズちゃんを指名した。

というのも、この街の冒険者とは既に大体一度は臨時パーティを組んだ経験があったのだ。

となれば我々の有用性もまた周知の事実と言って良いわけで。

その後、彼らから話を聞いた『銀の翼』の面々に請われ、少々のデモンストレーションを見せたところで当然の採用と相成った。

「——それにしても、意思疎通に特化した『調教』持ちかあ。普通の調教だと大体どんな気分か程度しか分からないらしいのに、凄いわね」

「え……は、はいっ」

そう言っつて、私達を興味深そうに見下ろすは、『鋼の翼』の紅一点、金髪に赤いとんがり帽子がトレードマークのサーシャさん。『光炎』の二つ名を持つ熟練魔法使いのこと。

性格きつそうなつり目を今は爛々と輝かせている——ユズちゃ
んの手の中の私に向けて。

「——チュウ」

はい、ネズミですよ。皆様のご期待にお応えして。

いやまあ、簡単に【憑依】出来る対象なら何でも良いんだけどね。こ
の世界だと割とどこにでも居るのよ、ネズミ。

「……ただ意思疎通が可能になるだけじゃなく、普通のネズミに比べ
急激に賢くもなるみたいね。斥候役や小物の運搬、単純な鍵の開け閉
めまでこなせるっていうのは本当？」

「は、はい。間違いないです」

「——チュウチュウ」

その声音は疑うと言うよりは、改めて性能の確認という感じ。

確かにこうして列挙すると実にハイスペックなネズミだなあ、我な
がら。

「へええ……ちなみに今は何か言ってる？」

「——チュウ」《めっちゃ見てくん——この人、で》

「……凄く凝視されているな、です」

「あつはは、そりゃ失礼」

翻訳（人力）。というか硬いよユズちゃん。

ひよつとして、高ランクの先輩に話しかけられて緊張してる？

ふむ……ではこんなのはどうかな？

「——チュイイ」《あと婚期気にしてそう、で》

「こん……っ!? ……お、女盛りで素晴らしいですね、と」

「……………うん、貴女は良い子ね。ところでそのネズミは絞めても良
いネズミ？」

婉曲化、失敗。

あ、ちよ、そんなに睨まんでもええやないですか。軽いジョーク、
ジョークですよ。

「あつ、だ、ダメです！ 素手で絞めたら汚いですよっ！」

「『《……えっ、そこ?》』」

まさかの返答に一同総突っ込み。いやあ、この子ったら突然何言つて――

………うん、私のせいだね、コレ。……知ってた? そう言わんでもろて。

いやほら、この世界って衛生の概念が殆ど無くってさ。

手洗いうがいの時点で病的な潔癖症とか言われるみたいよ。そりやまあその度に水汲みしなきゃなわけだから、仕方ないかもなんだけど。

初めの頃、偽装用のネズミを素手で取り上げようとしたユズちゃんにより、その辺りが発覚。

不思議がる彼女に、向こうの世界の伝染病の話を中心に衛生観念の大事さを語って見たのです。

具体的には、ネズミを媒体に広がったとよく言われるアレあたりを題材に、その症状、感染力、犠牲者数を滔々と。……これが中々に衝撃だったご様子。

以来、連れて来たネズミは決して素手で触らないよう気を付けてくれているのが伺えます。

それ以外にも余裕があるなら手洗いうがいを心掛けさせてたり。やっぱり健康第一だからねえ。

……その後、会話の中で年齢を聞かれたユズちゃんが正直に「十四歳です」と答えたところ、サーシャさんの口からボソッと漏れたのは「二倍、かあ……」という呟き。

どうやらこの方、御年二十八歳前後のようです。

十五で成人のこの世界だと、まあ……そっかあ。女盛りつてのもお世辞じゃないのにねえ。



——道なき道を掻き分け進むは、三十余名となった冒険者達。

天然の障害生い茂る悪路に辟易している者も多いが、目的地が遙か昔に滅んだ古都である以上、まともな道が残っている筈も無く。

「……おい」

「ああ、分かってる。——休息を取るぞ！」

その号令が耳に届いた瞬間、崩れるようにその場に腰を下ろした後で、普段より遥かに早い己の消耗に目を剥いているのは地元の活動歴長い冒険者達。

特にへばっているのは冒険者となつてからムフトンの街を離れたことがない、かつ街から何日もかかるような未開の地へ向かう依頼を受けた経験が無かつたらしい面々だ。

日銭を稼ぐぐらいが目的の低ランク冒険者だと、こういうことは結構あるらしい。

あの街がそんな活動スタイルでも稼げる程度には大きな街というのも影響しているのだとか。

《いやあ、みんな大変そうね》

「(……そう言うレインは楽そうですね)」

さてこの子はというと、これが比較的平気な側で、のんびり探した丁度良い岩に腰掛けている。

勿論今も疲れてないことはないだろうが、休息と聞いた途端に崩れ落ちる程ではない様子。

ランクは低いながらも幾つもの街を渡り歩き、受ける依頼も選り好みしなかった結果、こうした悪路の活動にも慣れが出来ているからというのが大きき理由だろうと当人は言う。

年齢、性別からして基礎体力で秀でているわけではないんだろうけど、それだけ歩き方や足場の緩い場所の進み方といった、体力の節約方法が身につけているんだろうね。

《けどまあ、草木が生い茂ろうが、足元がぬかるもうが幽霊には関係な

いし？　そもそもからして私、肉体的な疲労とは無縁だし？」

「……今はちよつとだけ、羨ましいです」

そんな彼女と声を潜めてこつそり会話。私の声は彼女にしか聞こえないけど、逆は別だからね。

普通の声量だと、彼女が虚空に向かって話しかけるイタイ人になっちゃうので仕方ない。

……あれ？　でもそういういえば私と出会った時に一緒に居た冒険者達からは『不思議ちゃん』とか言われてなかったかね、ユズちゃんや。「(その……あの人達にはうっかり墓場で聞き込みしているところを見られたことが……)」

さもありません。

「——全く、情けないなお前ら。街中や近場で済む依頼ばっかやってるからそうなるんだ」

「まあまあそう言うなよ。俺達だって最初の拠点を移すまでには中々時間がかかったろ？　慣れた職場を移るってのは、実力云々とは別の思い切りが必要だからな」

悪路に屈してへたばる面々を呆れ顔で睥睨する強面重戦士に、まあまあと宥めるリーダー剣士。

槍玉にあげられた一同が、倒れる寸前とまではいかないまでも——その間際を見極めて休息を取らせたようなので——「ぜえぜえと息を切らしながら気まずそうに目を逸らす。

そんな彼らを苦笑いと共に眺めるは、ユズちゃんを含む比較的余裕のある面子。

大体が余所からムフトンの街を訪れている者で、Dランクも何人か混じっているようだ。

「そうは言うが——見ろ、こつちのお嬢ちゃんの方がまだ余裕があるぞ？」

「……ふんふん！」

そう言っただけに指差しを敢行した重戦士、まさかのユズちゃんをこ

指名。

「当の彼女は急に矛先を向けられてアワアワ……いやいや落ち着けし。」

「……………」

そんな様子を目の当たりにした冒険者達が、誰ともなしに唸った音が重い空気に染みていく。

まあ、遙か高位の先達が息も切らしていない、というのは仕方ないと思えても、同程度のランクかつ成人前の女の子が自分達よりも明らかに余裕を持っている、となると話は違うよねえ。

始めは何故と思ったがこりや確かに、いちいち説明する手間も省ける便利な『教材』だ。

そして頂垂れる地元っ子たちに対し、さらなる『追い打ち』が放たれる。

「これでも一番楽な道を選んでのよ？　この子のネズミが調べてきてくれた、ね」

「あ、そ、それは——」

ええ、ここでも私、しっかり活躍してますですよ？

事前に確認しておいた目印——特徴的な地形や植物など、ギルドから提供された情報——を上空から視認、比較的『楽』にそれらに辿り着けるルートを逐次調べているのです。

そしてユズちゃんからBランクパーティーの皆さんへ伝達、割と簡単にルート提案が通りました。

多分、彼らとしても彼女の有用性を早い内に確認したかったんだろうね。

「……………」

「……何かこいつら思ったよりショック受けてないかい？」

「……ああ、ほら、こいつら俺達よりこの子と付き合い長いわけだから……………」

「情報の狂いの無さを良く知ってるってことか。……しかし本当に凄いな、この子」

「昨日も下手すればオレより早くモンスターの接近に気付いてたしなあ……」

……とまあ、その辺りを知らされた面々。一様にがっくり顔を落として放心。

そして道の良し悪しの評価は元より、モンスターの襲来まで正確に察知とあっては熟練の彼らもそろそろ下馬評を確信に移さざるを得ないよう。

街を出発してから一日と少し、ユズちゃんの評価は未だ爆上がりのも真っ最中である。

「……………あうう」

真面目つ子ユズちゃんの心労もマツハで更新中。

だから『それ』も含めて君の能力だってばー。早いとこ割り切れるように頑張れー。

「……貴女、本当にまだEランクなの？」

「あ、はい。もうすぐ昇格に必要な実績が溜まりますけど」

「そう……それじゃDランクとして……んー……」

つり目のサーシャ姉さん、ユズちゃんの傍で何事か思案を開始。

しかしまあ、同じ事を考える人間の顔は、全く同じとまで言わないまでも似通ってくるもので。

実績のある人間なら似たような判断をすると、彼女もここ数ヶ月で良く知っているわけで。

「え、えと、勧誘でしたらお断りします。すみませんっ」

「えっ、あ、あら……どうして？」

Eランク冒険者がBランクパーティーの勧誘を断るなど普通は有り得ないだろう。

その上、口にする前に断られたのは流石に予想外だったか、素で驚いた様子のサーシャさん。

やりとりに気付いた男三人も、口にはしないが非常に意外かつ割と本気で残念がっている模様。

「ええと、その……理由は言えないんですけど……ごめんなさいっ」

「そ、そう………なら、しょうがない、わね」

かなーり惜しそうにしながらも、それ以上は尋ねず引き下がってく
れる彼らは流石は高ランクになるまで大成した冒険者と言えるだろ
う。

個々の事情に許可なく立ち入らないこともまた、冒険者の鉄則なの
だから。

………うん、まあ、理由は言えないんだよね。これが。

仮にパーティを組むとしたら、『幽霊が見えること』が条件なんだも
んね。

条件に嵌らない相手には言えない。そして言える相手には言う必
要が無い。

この条件については私から出した意見ではない。ユズちゃんの方
から言い出したことだ。

なんでも当人曰く、臨時パーティならともかく固定パーティを組む
ならその全員が私が見える、認識出来るということを最優先にしたい
のだとか。

いやいやいや、そういう本物の霊感を持った人間ってほぼほぼ居な
いよね？

パーティが組めそうなら見付かる当てでもあるの？

………等々と尋ねたところ、これまでに一人だけ、すなわち師匠しか
知らないと言われました。

その師匠さんも、ユズちゃんが初めて出会った同類だと言っていた
そうです。マジかー。

……ユズちゃんは勿論、冒険者として果たした功績で国の要職にま
で就いたらしい師匠さんでも一人だけって、それとんでもなくレアな
んじゃない？

事実上パーティ組む気は無いって言ってるようなもんじゃない？

その辺も含めて「本当にそれで良いの？」と何度も確認したけど、当

人の意思は固いようで。

いやはやなんとも、出会った頃からすると随分と随分な心境の變化っぷり。

何でそこまで『そこ』に拘るかについては未だに教えてくれないんだけども。

……………何があつたんだろーね？ 本当に。

C2-4 遺跡の盗賊団

——二千年……三千年前とする説もあるらしい、遙か昔に栄華を極めたという王国、の遺跡。

石造りの家屋や、地下に広げられた住居跡は、意外なほど使用に耐える物が残っており、当時の人々の技術力の高さが伺える。

当時としても相当な版図を持ち、世襲制の王の穏やかな治世の中にあつたらしい王国の記録は、ある日を境にぷつりと途絶えている。

何かの要因による衰退とも、他国の侵略による滅亡とも考えづらく、その末路については多くの学者を今なお悩ませ続けているのだとか。

そんな王国の墓地の一つとされるのが、今私の眼下に広がるこの遺跡であり、現状盗賊の根城とされている場所であるそうなの……何ともバチ当たりの話だ。

まあ、遺跡の学術的価値なんて、向こうの世界ですら理解出来る人間は稀だけでも。

崇られたりしないのかとも思うけど、この世界の幽霊事情を知っていると、少なくとも二千年は経ってるらしい遺跡に霊が残ってる可能性はまず無いんだよねえ。

憑依やら驚かしやらで延命(?)しようにも、遺跡化するぐらい人通りが絶えて久しいわけで。

そうなると二千年は長すぎ、というか一ヶ月でもだいぶ厳しい。

ちなみに墓地といっても国民用の集合墓地ではなく、やんごとなき身分の方用のそれだとか。

……ピラミッドですね分かります。広がってるのは主に地下方向だけでも。

地下への入り口がある小神殿……跡地を中心に、石造りの小屋がちらほら。

……幾つかは使用感ありますな。現在進行形で盗賊が利用して
るっぽい。

えー、物資の保管庫に、石の屋根の上に建てた物見やぐらに……お
お、詰め所っぽいとこまで。

意外と統制とれてるね、この盗賊団。まあ、この規模なら当然か？

次はモブ盗賊の強さがどないな感じか調べましょう。

まあ、私が見たところでそこまで大したことは分からのだけど
も。

精々よく見る冒険者、すなわちGくEランク冒険者と比べて強そう
か否かぐらい。

んー……たまーにFランク相当なのが混じってる程度かな？ 弱
えな、オイ。数だけかよ。

まあ考えてみれば盗賊なんてやってる時点で、まともに働こうとも
考えなかった輩なわけで。

それに対して、たとえランク的には最低から一つ上にあたるFラン
クでも、そう名乗れるようになった人間ならば努力か才能あるいはそ
の両方が少なからず実を結んだ人種なわけです。

並べて比較すればそういう結論が出るのは当たり前前の話かな。

さて最後にそんな彼らのお頭を探します。……地上部分にはそれ
らしいのがおらん。

中央の大きな神殿(?)の地下かな？ ……おお、ちよつと他と
は毛色の違うのが居る。

その辺の盗賊より一回り大きな身体に、これまたデカイ剣。

丸太のような四肢に、伸び放題の髭に髪。いかにも悪人そうな面構
え。

これは知力よりも腕力で求心力を得るタイプと見た。

今はやや目つきの鋭い有能そうな部下とチエスっぽい卓上遊戯の
真っ最中……ってあれ、知力もあるのかこいつ？

遺跡には不似合いな家具は後から持ち込んだものだろう。部下と

もども上等そうな装備といい、いやはや金回り良さそうですねー。

奥の部屋にも何か色々積んであるね。行商人が襲われてるって噂もあつたし、強奪した光物でも集めてあるのかなーって。

……………ほほう。

……………ほほう。なるほどなるほど。

……………雀る時間は無いね。戻りませう。

「——と、いう感じのようです」

遺跡近くにあつた木立の影で、ギルドで用意してもらつた遺跡の地図を囲み、偵察の結果を聞く冒険者一同。

地図の上には盗賊に見立てた小石が並んでいる。見た感じの強さは石の大きさと表現だ。

「……………よし、作戦を立てよう。少し待つてくれ」

色々と、それはもう色々とか何か言いたそうなアレコレを無理矢理飲み下したような様子で相談を始める、Bランクパーティ『銀の翼』が面々。

その背中には、街の冒険者一同の「ああ、分かる分かる」という暖かな視線が注がれていた。

「……………マジやべえなあの子」

ぼそり、と呟いたのは、パーティの斥候役を務めるといふ弓使い^{ラックス}氏。その一言にびくつと身体を震わせ、こつちを見つめるユズちゃん。チュウ、と一鳴きしてサムズアップを返す私。

絞められました。解せぬ。

「……………ところで、そのネズミを使って見張りを黙らせることは出来るか?」

「いえ、それは……………」

「(——チュウ)」《大の大人がネズミに何を期待してるんですかね

？》

前脚を使つて「やれやれだぜ」のポーズを決める。肩も竦めてハドボイルド風味だぜ。

「……何て言つてるんだ？」

「あー……えつと……無理です、と……」

「……何故か無性にバカにされた気がしたんだがな……」

「う……」

おいこらー、ユズちゃん苛めんなー。

……あ、ちよつと、絞めるのやめてくださいユズちゃん。タツ^{T a p}プ。
タツ^{T a p}プ。



——盗賊の数は多いが、広範囲にばらけている。

地上部分の連中なら街から連れてきた冒険者達でも、多対一とならない限り対処可能。

これらを踏まえ、各小屋ごとに数人ずつ組分けした冒険者を向かわせて同時に制圧。

地下部分の本丸に情報が届かないうちに自分達Bランクパーティを含む一団で乗り込む。

リーダー^{ボルト}剣士^{ボルト}氏の口から告げられたこの作戦に、異を唱える者は当然いなかった。

「……四人。事前調査通りです。内二人が入つて右側のテーブルで歓談中。一人が部屋奥で藁の上に寝転がり、最後の一人は中央やや左で武器の手入れをしているようです」

「(盗賊にも比較的真面目な奴がいるもんだな)」

本丸周りの小屋の一つに回された三人の冒険者。

大柄な身体に合わせた大盾と大槌が似合うナイスガイと、比較的軽

装な片手剣使い。

その前衛二人に、後衛魔法使いであるユズちゃんを加えたバランス高めの即席パーティである。

——— 実際にはそこにチート斥候能力の幽霊が加わってるがな！

「扉に近い奴から不意打ちで倒して、まずは数の不利を解消するのが一番かね？」

「……あ、あと手入れをしている一人以外は、武器も手元から離しているようです」

「（それじゃそいつを最初に狙って、混乱しているうちに片付けるか）扉の前でひそひそと突入作戦を立てる三人。

即席とはいえ同じ街を拠点にしている冒険者同士、互いの能力はある程度把握している。

それを踏まえて細かい所を素早く確認。やがて各々の武器を構えて領き合う。

「（それじゃ行くぞ。……一、二の———）」

三……は口には出さず。蹴破られた扉に目を見開く盗賊。

最も迎撃態勢を取れる可能性が高かった男が見たのは、自分に向けられた細剣の切先。

「『ファイアボール』っ」

「なっ———」

顔面へと吸い込まれるように放たれた火の玉が、男の言葉を遮る。

腰を下ろしていた二人は、その様に反応する間も与えられずに部屋内に飛び込んできた冒険者の槌と剣により、それぞれ沈黙。

「なっ……なあっ!?!」

何なんだ。と言いたかったのか。それともただ意味の無い声が出ただけか。

泡を食って起き上がった最後の一人はと言えば、突如飛び込んできた三人、空っぽな自分の手、部屋の隅に立て掛けた武器と、次々と視線を動かし———

やがてどうしようもないことを悟ったか、引き攣り笑いを浮かべながら呟いた。

「……降伏は受け付けてるか？」

「まあ、無駄に痛めつける趣味はねーな」

振り上げられた大槌を、男は何処か安堵するような表情で迎えるのだった。

《……うむ、まさに一瞬の出来事》

「(全く無警戒のところ、完全に不意を突いた状況でしたし)」

加えて個人の力量も、Eランク冒険者三人 対 Fランクにも届かなそうなチンピラ四人、と比較にすらならん有様だったし、むしろこの結果以外になる筈も無いか。

不利になりそうなのは人数差だけでも、それも大して差が無いように割り振りされてるわけで。

ここまで完璧に不意打ち出来るのは、ユズちゃんを含むこのパーティだけだろうけど、他も大体似たような状況だろうね、今頃は。

「——全員縛り終えたぞ」

「それじゃ、近くの襲撃地点の様子見しつつ合流場所に向かうとするか」

「そうですね」

意識の無い盗賊達を冒険者必携道具、何の変哲もない丈夫なロープで縛り上げる。

……ああ、顔面に火の玉喰らった奴だけど、そこまで酷い状態にはなっていないよ。

火傷は当然負ってるけど、あの攻撃は意識を飛ばすのが主目的。

うちのユズちゃんは人間を生きたまま焼き殺して喜ぶサイコパスちゃんではありません。

「一応確認するが、周りに敵影は？」

「……無いみたいです」

手の中の生物——近くを飛んでた虫——に確認をとっている、振りをするユズちゃんです。

もうみんな慣れたもんだよね。ぶーんぶーん。

「……ここはもう良いので、他のパーティの様子を見に行ってください」

《りよーかい。ぶーんぶーん》

「くふっ……（その羽音？ は必須なんですかつ!?）」

《そんなわけなからう》

「……………」

「ど、どうかしたのか?」

「い、いえっ! 何でもありませんっ!」

「お、おう……………」

まったく何をカリカリしてるのやらー。

……えっ、終いにや火放つぞ? やめておけ。その術は（今の）私に効く。やめておけ。

《——まあ、どこも似たようなもんだよね。知ってた》

遺跡上空にふわりと浮かび、冒険者達が向かった小屋の状況をざっと見渡す。

どの小屋からも、大体同じタイミングで縄に繋がれた盗賊が引きずり出されてきている。

違いがあるとすれば気絶した盗賊と降伏した盗賊の比率ぐらいなものだろうか。

私によってもたらされた、異常に正確な情報を基に経験豊かなBランクが立案した計画の実行。

これで不測の事態が起こるはずもない。

あと気になるのは本丸の状況ぐらいだけでも——

「——があああああっ!!」

「……威勢だけ良くってもねえ」

「ぐああっ!」

「「お頭——!」」

ですよねー。

お頭さんは一応モブよりは腕が立ちそうってことで、そこそこ高めに見積もったのだ。

そのため万全を期してBランクの方々が直々に相手取るという筋書きになっていた。

正直に言えば、いいトコDランク程度かなーとは思ってたけどね。

ほら、甘く見積もって痛い目に遭う冒険者が出るのはマズイじゃない？

「凶悪な盗賊団の頭目と言ってもこの程度か。ちよつと期待してたんだがな」

「いやいや、そんな実力者がこんなせせこましい事するわけないじゃない」

その結果がBランク四人がかりの『かわいがり』である。これなんてイジメ。

戦力過多？ ネズミがそんな細かい分析出来る訳ないじゃないじゃないっすか。やだなあ。

「畜生があつ!? オレはこんなつ、こんなところで終わる男じゃねえんだっ!!」

「へいへい、それはお前さんが決める事じゃねーよつ……と」

「おごつ……があ……つ」

斧クルガン戦士氏の振るった斧の柄が、頭目の顔面に吸い込まれるようにめり込んだ。

ボキゴキつという景気の良い音から察するに、鼻の骨でも逝ったかな？

明らかな加減は生け捕りにするつもりだからかな。その方が実入りが良いもんね。

「ぢ……ぢぐ、しょ……つー!」

「おお、まだ立つのか。根性だけは一丁前かもな」

仮にも盗賊団の頭として肥大したプライドと意地が許さないのか、ダラダラと血を垂らしながら立ち上がる頭目。

……でも気付いてるのかな？ 余裕をもって捕縛を狙われてる時点で、この四人からは歯牙にも掛けない相手と判断されてるってことに。

でっかい剣を振り回して奮闘するも、いい様に転がされ、蹴られ、ボコられ……

苦しいねー。辛いねー。これまで好き勝手出来た分、余計に惨めだよねー。

ま、存分に地獄を見たら良いと思うよ。部屋の奥に積み上がった真新しい骨の数ぐらいはさ。

……どこもこんな奴ばっかで嫌になるよ、全く。

C2—5 光炎の乙女

「——よし、いいぞ」

ようやく気絶した大男をしつかりと縄で縛り上げたラクスが、街の冒険者達に手振りで合図。

得心した彼らが集まり、取り巻きを同じように縛り上げて数珠繋ぎにしていた輪に加える。

そこまで見届けた後でそれぞれの縛り具合を確認、ポルト剣士が代表して頷いた。

「よし、それじゃお前らもこいつらを合流場所に連れていけ」

「「ういっす」」

戦いを終え、気の抜けた様子で盗賊達を引きずって行く冒険者達を苦笑混じりに見送る。

……個々で見れば悪くない奴もいるけど、道理であたし達にお呼びが掛かるわけよね。

街にとって冒険者とは、労働力であると同時に防衛力の要とも成り得る貴重な人材だ。

けれど何せ冒険者って奴は質が安定しない。良くも悪くも。

軍隊でも手を焼く事態を個人で解決してしまうような御仁から、集まるだけ集まって街の治安を落とした挙句、いざ有事になると屁の役にも立たない破落戸まで、同じ『冒険者』の括りにいたりするのが困りもの。

腕の良い冒険者に滞在してもらうってのは、多くの街にとって生命线と言って良い。

けど外からやってくる腕利きが、そこに根を下ろしてくれるなんて幸運はそう多かない。

だからこそ今現在街に居る腕利きになれそうな冒険者の育成に力を入れるってのが、その土地のギルドにとって優先すべき命題になるわけだ。

あたし達からすりゃ、この手の依頼はありふれたモノだけ……こ

この連中は正直期待薄よね。

勿論、あたし達が暫く滞在して、鍛えてやることは不可能とは言わないけど――

「そこまでの面倒は見れんさ」

「……顔に出てた？」

肩を竦めるクルガン斧戦士に、やれやれと頭を搔く。

「ひよっこ共を物憂げに眺めている様を見ればな。どちらかというで見込みのありそうな奴が割合少ないことを嘆いてたんだろ？」

「サーシャは意外と世話焼きだからな」

「意外と、は余計よ」

じろり、と要らない事を言ったラクスに眼光を送るが、笑って流された。

ま、この三人との付き合いもいい加減長いし、この位で腹を立てたりはしないけどさ。

……でも世話焼きな女って、男好きする要素じゃない？ いや、あくまで一般的にね？

お節介とか、口煩いとかこいつらには良く言われるけど……昔からあたし以上に喧しく男の子を叱りつけてた友人に久しぶりに会った時には、優しそうな旦那さんを捕まえてたし。

少なくともマイナス要素ではないわよね？ ね？

……長く離れてた故郷に近寄るのは、相応の覚悟が要ると思いつたわ。おのれ裏切者め。

「……そろそろ行くぞ。地下部分の調査も依頼の内だからな」

「ああ、そーいやそーうだったか」

「遺跡の見取り図は……」

「ああ、これね」

荷物の中から、ギルドで預かった紙束を取り出す。

何十年か前、この遺跡が盗賊の根城にされる以前に、調査隊が入っ

たときのものらしい。

その時には残念ながら大した結果は出なかったそうだが、貴重な史料には違いない。

特に盗賊達に荒らされていたらことなので、討伐後に軽く状況調査をして欲しいとのこと。

「しかし素人が見て何か分かるもんか？」

「……まあ再度調査するにしても、危険がないかどうか一度冒険者を入れなきゃならんだろう」

「あとは盗賊が残っている可能性も……無いか」

「ああ、あの子の……『偵察』のお陰でね」

ただでさえ目に留まる者が少ない中で、とびきり異様な輝きを放っていた女の子を思い起こす。

……あたしが口に出したことで三人も同じく頭に過らせたのか、一斉に視線を遠くした。

佇まいや身のこなしなんかは、まあそこそこ有望かな？ 程度だったけど、持っていたスキルの性能がヤバかった。……マジでヤバかった。街の冒険者から聞いていたより遥かに。

「……正直あのネズミや虫はカモフラージュじゃないかと思うんだが」

「使役しているのは確かだし、『調教』系のスキルには違いないが……」

……不思議なんだよねえ。詮索するのは良くないと分かってはいても。

何しろ虫や小動物に偵察させたにしては情報が具体的過ぎるし、収集速度が凄過ぎるのよ。

手の平に乗せる一匹は見せかけで、実際は数十匹単位で使役、情報収集をさせているんじゃないだろうかというのがラクススの意見。

確かに情報が集まる速度に関してはそれで説明がつきそうではあるけども——

「前に知り合った奴に『調教』スキル持ちがいたが、細かな情報を集めさせるのはとても無理だと言ってたぞ？ 近くに他の生物が居るかどうか探知させる、ぐらいが精々だと」

『調教』系スキルの中でも意思疎通に特化しているのだと街で募集した時には説明されたけど、あれは明らかにそういうレベルじゃない。

その系統はあくまでその動物の主観による情報を何となく感じ取れるだけであるはずだ。

鼻の利く動物に近くに生物が潜んでいることを察知してもらって、あるいは待ち伏せされているのかも、程度の情報を手に入れられるのが普通の『調教』スキルの使い方。

隠れているのが人間だったとして物々しい様子か、はたまた商隊か何かか休息しているだけか、といったことを判断できる動物などそうそう居る筈がない。

……要は盗賊個々人の装備に力量の見立て、果ては今現在何をしているか—— 武具の整備だの卓上遊戯だのを理解できるネズミや羽虫がいてたまるかって話よ。

かといってそれらを『調教』していること自体は見た目にも疑いようが無いし——

「いやしかし惜しいよなあ……もうちょっと粘れなかったのか、サーシャ？」

「無理だと思っわよ？ こっちから口に出す前に断られたほどだもの」

相手が相手だから緊張はしていたけど、断ること自体にはえらく慣れた様子だった。

あれだけのスキルを持つてれば、普段から引きも切らずに勧誘に追われてるだろうからねえ。

「……………俺は、微妙だな」

「あら、どうして？」

「いやその……あんな子が居ると俺の存在価値がな……？」

「……………いやいやいや」

斥候としてBランクにまで至り、このパーティを支えてきたラクス

がこの一言。

一瞬、浮かび掛けた納得を振り払って否定した声が二人と被った。

「ほ、ほら、あの子の話はその辺にして遺跡の調査を始めようじゃないか。あんまりひよっこ達を待たせるのも悪いしな」

「そ、そうだね」

「あ、ああ、手早く済ませようぜ」

「ああ……本当に隠れてる盗賊も居ないようだしな……」

「……………」

事前の偵察——という域に収めていいのか——によると盗賊は地下部分上層の十部屋程度を寝ぐら及び倉庫に利用していたらしい。

襲った商人等から奪い取った家具や嗜好品を並べて、随分と贅沢を愉しんでいたようだ。

下層に盗賊の姿は無かったそうだが、何か粗相をしでかしていてもおかしくはない。

「……………」

永い時間が経っているにしては堅牢そうな遺跡の内壁を眺めつつ、下層へと差し掛かった頃。

遺跡の通路——二人以上横には並べそうにない——の壁や床を調べながら先頭を歩いていたラクスがそう呟いた。

「この先には少なくとも十数年、誰も立ち入った様子が無い」
「確かか？」

ポルトの念押しにラクスがしっかりと頷く。

そのやりとりに、狭い通路に辟易していたらしいクルガンが大仰に息を吐いた。

「となると、特に報告する内容はなさそうだな」

「ならさっさと地上に戻ろう。こう狭い所を這いずっていると、身体が固まってきそうだな」

「あんたねえ」

クルガンの言い草には呆れるが、とつとと戻ることには同意する。正直なところ埃臭さに黴臭さ、墓地特有の薄気味悪さが同居するこの空間には依頼でもなけりや浸っていたいとはとても思わない。

早いところ街に戻って、この陰気な感じを洗い流してしまいたいところよ。

その為に、わざわざ街で一番高い宿をとってまで風呂付きの寢床を確保したんだから。

……街までまた三日はかかるんだけどさ。

「まあ、盗賊どもが骨やミイラにまでは興味が無かったってことに感謝して——」

振り向いたラクスがあたしに……じゃない。その周囲に目を遣つて、不自然に動きを止めた。

「どうした？」と尋ねるポルトに一瞬目配せを送り、考え込むように口元に手を当てる。

「一瞬、違和感があった。何が、と聞かれても分からんが……」

「……お前の勘を今更疑いはしないさ。気が済むまで調べろ」
「……おう」

狭い通路内でなんとかすれ違い、ラクスが再び先頭に立って来た道に戻る。

真後ろに来ることになったあたしの耳に、壁を触ってはぶつぶつと呟く声が聞こえるように。

……あたしも勿論こいつの勘は信じてるけど、黙って考えられないのかしらね？

そんなことを考えながらラクスの後頭部を眺めること数十分。

再び立ち止まった彼が今度は突然脇の石壁を小突き始めた。

音を確かめるように数回、場所を少しずらしてまた数回。

壁に走るヒビを覗き込むようにしながらまた数回。

「……ここだ。……この先に不自然な空間がある」

確信を持ったようにそう呟き、壁の表面に指を這わせて何事か始めていて。

よくよく見れば、壁に付いた小さな石が彼の指先で複雑に動かされている。

……カラクリ仕掛けの扉か。

それなりの格式のある建物——神殿だの城だの——には、魔法による隠蔽を施した隠し扉はありふれてるけど、特別秘匿性の高い場所は魔力を介さない仕掛けで隠されていることが多い。

魔法に頼る隠蔽はそれがどれだけ優れていても、魔法による探知の可能性が残るからだ。

その点、こういう仕掛けは特別な情報が無ければ、いわゆる勘に頼る他ないところがある。

その分だけ防犯性を高められる……ってのは、ウン千年前からの常識だったってことかしらね、こんなところにそれが存在していたとなると。

「……一応確認したけど、地図には載ってないね」

「だろうな」

「古の遺跡の隠し扉……か」

ラクスの作業を見守りながら、自然口端が上がりそうになるのを何とか堪える。

ポルトとクルガンも似たような顔していることだろう。振り向かなくっても分かる。

……これで奮い立たなかったらとても『冒険者』は名乗れないものね。

「——開いたぞ」

「……随分嚴重だったな」

発見からさらに十数分。悪戦苦闘の末に何とか開いた扉を前にラクスが疲れを滲ませる。

その顔のまま振り向いた彼に、あたし達は三人揃って強く頷いた。

……一番槍は譲るわよ。当然の権利としてね。

あたし達の顔——三人揃って似たような顔をしていたに違いはない——に頷き返したラクスが通路へと身体を押し込み、あたし達がその後を追う。

似たような広さの通路を暫く通った先に、開けた空間が見えた。

一辺が大人二人腕を伸ばせる程度の、正方形の部屋。

身体を縮めるようにして進んできた通路を思えば、えらく広い場所に出たように思える。

部屋の中央には、控えめな装飾の小さな椅子。

そこに俯いた姿勢で佇む一体の……古い檻褻切れを纏った骸骨。

特に目に付くのは、その膝の上に抱えられた手に収まるほどの大きさの金色の箱。

「……宝の守り人、か？」

「宝を抱えたまま死ぬってのも、凄い話だが……」

たった今、ラクスが開けるまで何千年も開かれた形跡の無かった隠し通路。

その先にあった窓一つ無い小さな部屋で、静かに座ったままだった
軀。

……何だか、ちよつと、気後れするわね。流石に。

「これ、取っていいものなのかしら……？」

「それは……だが、ここまで来て……なあ？」

言わんとすることは皆同じだったのか、宝を抱いた骨を前に四人で顔を見合わせる。

暫くの沈黙の後……ラクスが首を振って呟いた。

「……この人物にとってどれだけ大切なものだったかは分からない

が、結局は何千年も前の話だ。今さら気にする必要もないだろう」
「あ……」

箱に近づくとラクスにポルトが手を伸ばしかけたが、止めはしなかった。

あたしもそうだが、クルガンも同じ気持ちだろう。

……ここまできて、手ぶらで帰るのはありえないわよね。

止めもせず、さりとして続きもせず、ラクスの背を見守っていたその視界の中に、何か奇妙な物が見えたような気がした。

ラクスもそれが見えたのか、一瞬立ち止まって……また椅子に向かって足を進める。

——カタン

ラクスの足が再び止まった。

あたしの息も止まった。

だって、ありえない、よね。そんな、ソレが、動く、わけ——

——カタカタ　カタ　ガタン

「あ……？」

「お、い……」

骨、が。

箱を抱えて、佇んでいただけの、骸骨が。

カタカタと、乾いた音を立てて、立ち上が、って――

「いや落ち着けっ！ ただの『スケルトン』だろっ！」

「……………あっ」

ポルトの一喝で、意識が切り替わった。

そうしてあたしが杖を構えたのと、ラクスが動き出した白骨――
スケルトンから距離を取ったのはほぼ同時。

……………うん。何を慌ててたのよ、あたし。別に骨が動いたっておかしくないじゃない。

そういうモンスターぐらい売るほどいるわよ。すっかり雰囲気
騙されてたわ。

「特別な装備もしていなけりや、骨の色も……………下位種のスケルトンだ
な」

「……………つたく、脅かしやがってっ！」

苛立ち紛れのラクスの拳がスケルトンの頭蓋骨を殴りつける。

……………いや、あんた弓士でしようが。弓使って……………骨系には効果薄
いか。

八つ当たり気味に殴り飛ばされた頭蓋骨がバラバラに砕けて床に
落ちる。

破片の幾つかがまた浮き上がろうとして……………諦めたように転が
った。

――ガタガタガタ ガタン

頭を砕かれた影響か、手足を出鱈目にガタガタ振り回すようになっ
たスケルトン。

普通の魔物ならこれで止めになるんだけど……………この手のモンス
ターは魔石をどうにかしない限り動き続けるのよね。全く面倒な
……………って、あら？

「……………このスケルトン、魔石が見当たらないわよ？」

「そういえば……」

同じスケルトンでも魔石の位置が微妙に違う事は偶にある。

大体は心臓の位置、でなければ頭蓋骨の中、なのだけど……前者ならアバラの隙間から丸見えのはずだし、後者であつても遮蔽となる頭蓋骨はバラバラになつて床の上。

なのにこいつは、残つた身体が未だがたと喧しく存在を主張している。

「あー……腰や脚の太い骨の中にでもあるのか？ 探すのも面倒だな」

「……それじゃ、あたしが一気にやつちやつて良いわよね？」

「……八つ当たりか？」

「うるさいっ」

あたしをラクスと一緒にするんじゃないわよ、全く。

そりゃ、まあ……ちよつとだけ驚いたけど。……ちよつと、その、鳥肌立つたけど。

……ああ、もう、さつきからガタガタうるさいわね！ この骨野郎がっ！

「浄滅せよっ、【セイントファイア】ッ！」

あたしの二つ名、『光炎』のもとになった金色の炎。

『炎魔法』スキルに『聖気』スキルを練り合わせた、あたしの十八番。

……本当はもつと高位のモンスター、特にアンデッドに対する切り札なんだけど。

まあ、いいでしょ。アンデッドには違いないし。

……コラそこ、「なんという、オーバーキル」「八つ当たりいくない」とか言うんじゃない。

しょうがないじゃない、魔石が見当たらないんだから丸ごと塵にするしかないじゃない。

八つ当たりじゃないわ、正当な制裁よ。
悪いのはあたしを驚かしてくれたこいつなんだから。

C2—6 古の災い

《——ユーズチャーーンっ!》

「……つく!?」

「……どうしたの?」

「え、いえっ、何でもないですっ」

空に響き渡る声に、喉から漏れた声をぎりぎり飲み込んだ。

その様子をたまたま近くで見えていたらしい冒険者に声を掛けられて、慌てて誤魔化す。

相変わらず彼女は、これに関しては一向に慮ってくれない……というか絶対面白がつてるよね?

慣れているとはいっても、気まずい思いをするのは変わらないのに。もお。

「……(レイン?)」

声のした方向を見上げれば、何やら大慌てでこちらに飛んでくるレインの姿。

遺跡の中心の様子を見てくると言って飛んでいったはずだけど、そこにはBランクパーティーの方々も居るはずですし、何か不測の事態が起こるとは考えにくいのだけど。

「(どうしたんですか、そんなに慌てて?)」

傍まで飛び寄ってきてゼエゼエと息を——してないので必要も無い筈では?——整えた後。

ぐっとわたしの顔を見上げたレインは、不意に真面目な顔つきになっって一言呟いた。

《………ヤバイ》

「……(はい?)」

首を傾げたわたしに、レインはどこか冗談交じりの——無性に腹が立つ口調で続けた。

《マジヤバイんですけどー？ ホントもーマジヤバイんですけどおー？ どんくらいヤバイかって言うと、マジヤバイ》
「イヤ意味が分かりません」

思わず素で呟いてしまい、聞かれなかったかと慌てて周囲を見渡して……溜息を吐く。

そうして、また何かの冗談かと戻した視線の先にあったのは、思いのほか真剣な眼差し。

《……ユズちゃんが、死んじゃう》

「……っ!？」

一瞬、混乱しそうになった意識をどうにか引き戻して。

もう一度、今度は浅く息を吐いて、レインの黒い瞳を見返しながら聞き直す。

「……それで、今回わたしは何をすれば良いんですか？」



二人旅が始まってから、私はいつも幽霊ボディを活かして偵察、斥候を行ってきた。

それすなわち、ユズちゃんの身に迫る危機を必ず私が先に見つけてきたということでもある。

彼女の生業は危険がいっぱい冒険者。当然、命の危険を感じる機会は数知れず。

まあ、別に新米というわけでもないの、大体は自力でなんとかしちゃうんだけどね。

ただ、明らかに次元の違う危険が迫っている、または私がそう感じたときには『ヤバイ』ないし『死ぬかも』という表現を使って伝えてきた。

それがいつもの冗談の延長なのか、本気の話なのかを切り替える私
なりの合図というわけだ。

「……でも『死んじやう』とまで言われたのは初めてですね。そんなに
不味いんですか」

《うん、Bランクパが地上に戻ってくるまでに急いで説明するから》
「Bランクパ……あ、いえ、分かりました」

兎にも角にも、まずは情報の共有から。

私が墓地の地下で知り得た事を、ユズちゃんに話し始める。

ただ、全部話すにはちよつと……ちよーつと量が多いので大筋端折
ることになるけども。

——遡ること数時間前、盗賊の頭目を見るも無残なボロ雑巾にし
たBランクパ。

彼らが次に取り掛かった遺跡の下層、墓地部分の調査に私は同行し
ていた。

……何故って？ いやほら、そういえば先に偵察に入ったときには
生きた人間を確認していったわけだけど、そういえば死おなんだ人か間は探
してないな、墓地なのに——とか思ってたね？

……二、三千年前の遺跡に幽霊が残ってるはずが無い？ うん、ま
あ、私もそう思ってた。

うん、居たんだよ、ご同輩。先に言っちゃうとね。

人間が入った形跡の無いところまで調査して、じゃあ帰ろうか、と
なった御一行だったんだけど、その中の一人が「なんか違和感ある」つ
て言い出してね。

通路の壁をどんと叩いて、「隠し扉だ。この先に空間がある」って
断言したのよ。

で、何か扉を閉めてるらしい複雑な仕掛けをカチャカチャし始め

る。

でも壁でも何でもすり抜けられる私が、大人しく開錠されるのを待ってる理由も無いよね？

……台無し？ ひどい？ せやな。

まあまあ、それはさておき……隠し通路の奥にあったのは、密閉された小さな部屋に大事そうに箱を抱えた骸骨一つ。

なんとその中に幽霊おなかまが——ん？ いや、箱じゃなくて、骨。……そうそう、憑依してたのよ。

以前私達は、死体に憑依するのは不可能と同義って結論出したけど、あれは憑依して動かすのが目的だった場合に限った話だったね。

考えてみれば他の幽霊にとつて憑依の目的って、型崩れ——あー、ここは『記憶の劣化』って言おうか。それを防ぐことだからね。死体に憑依すると死体に出来ることしかできない。……つまり、何も出来ない。

動く、喋るが出来なくなるのは当然、五感も酷く不鮮明に。ハッキリしてるのは思考だけかな。

それでも『記憶の劣化』だけは、何とか防げるみたいだよ。……真似したくはないけどさ。

……：……：自分が死んだってことは、彼女も理解はしてた。

死んだ直後、自分の遺体を見下ろしながら何故この意識が残されてるのかと考えて……：自分に『役目』が与えられたのだと思いついたんだってさ。

この場所が誰かに見つかってしまった時、自分諸共葬った『箱』について、その発見した誰かに伝えなければならぬ……って、ね。

ところが、ただまんじりと過ごしているだけで自身の記憶は削られてく。

このままでは役目を果たせないと泡を食った彼女は、あるとき偶然にも自分の遺体に入り込めば記憶の劣化を防げることに気付いちやった。

代わりに地獄と呼ぶのも生温い無限の退屈を味わう羽目になったわけだけでも……この『箱』を生み出してしまった国の主にはお似合いの罰だ——なんて、考えてたみたいだね。

動けない、何も出来ない。許されるのは思考だけっていう状態で——三千年。

動こうとしなけりや靈力消費も無いし、そりや理論上はだけど……想像も出来ないよね、うん。

まあ、時間の感覚なんて、もう欠片も残ってなかったみたいだけだよ。

……訪れた相手にどうやって伝えるつもりだったかつて？

それが彼女、自分が普通の人に見えない、声も聞こえない状態だったこと知らなかったんよ。

幽霊になってから誰も近くに来る人間がいなかったんならそりゃなつちやうよね。そりゃ。

でも、仮にユズちゃんが来てても駄目だったと思うよ。……何でって？

じゃあ聞くけど、三千年前の国の言語で喋られて何言ってるか分かる？ ……だよね。

……ああ、私には分かるよ、今ならね。

当然、読みにも書きにも全対応。

彼女の——三千年前の女王様の記憶、貰ったからね。

そうそう、前に一度話した、私の中(?)にある【記憶の本棚】なんだけど……何か、今見たら部屋みたいになってるのよね。

今まではボヤつとした本棚等々のイメージがあって、意識を向けると一人称視点で記憶の鑑賞が出来るって感じだったんだけど、今は壁も床もあるししっかりした部屋になって、意識を向けるといつの間にかその部屋の中に立っている。

で、そこにある本を手にとって取って広げると同じように記憶を覗ける、つて感じになったのよ。

蔵書数というか、記憶の量が増えたからシステム更新、みたいな？
三千年分入ったからなー。

今後は【記憶の部屋】とでも呼称しようかね。

……ああ、ごめん、話戻すね。この辺の考察は後にしようそうしよう。

さて、何が問題かって言うと、この女王様が抱えてた『箱』の中身のよ。

何でも、三千年前に栄華を誇った彼女の国を瞬く間に滅ぼした『災い』だとかなんとか。

……ヤバイじゃないですか？ うん、ヤバイね。だからそう言ったじゃん。

で、その『パンドラの箱』——底に希望は入ってないだろうなあ——が、現在Bランクパの手によって地上に向けてばく進中というわけだよ。

……滅茶苦茶ヤバイじゃないですか？ うん、滅茶苦茶ヤバイね。だからそう言ったじゃん。

……い、一応これでも頑張ったのよ？

女王様の骸骨動かして「崇りじやー」つてやって追い払えないかってさ。

普通にモンスターだと思われたよ。……そう、スケルトン。まあ、そりやそうだよね。

ぶん殴られて頭の骨粉々にされた上に、何か金色の炎で灰も残さず滅却されました……

聖なる炎がどうか言ってたし、供養にはなっただって。たぶん。

……憑依では遺体は動かせないはずじゃないかって？ ふふ、憑依では無く【念動力】です。

ああ、新能力つてわけでもないよ？　今まで手で触る——つもりでやってた事を一度に三か所以上、手を使わなくても出来るようになったっただけ。

射程としては大体腕の届く範囲ぐらい？　にある物だけ。砕けて散った頭蓋骨を拾い集めようとしたらぎりぎり届かなかったよ。馬力については相変わらずだし。

粉の表面に凹み作るのが精々だった頃から考えれば、十二分に進化してるんだけどねー。

「……………で、わたしにどうしろと？」

《それは、ほら、危険だから元の場所に戻せって説得、とか？》

「……………無理です」

危険性を知っているのは私と会話が出来るユズちゃん一人。

その情報源も「幽霊から聞いた」という、信じられる要素ゼロの一点のみ。

……………これで他人を納得させられたら、舌先で国を盗れるような逸材ではなからうか。

《それじゃ……………人目に触れる前に、箱を奪い取って逃げる》

「もつと無理です」

他の冒険者の成果に手を出そうという時点で一発アウト。おたずね者一直線。

そもそもからしてBランクパの4人相手にEランクのユズちゃんが腕尽くにしろそれ以外にしろ、立ち向かえるはずもない。

「こっそりと、中の危険だけを排除する手段は無いんですか？」

《少なくとも女王様の記憶には無いねえ》

当時の叡智でもどうしようもなかったからこそ、女王様本人が自身のみが知る隠し部屋を使い、自分ごと葬り去るという最終手段を取ったわけだし。

ちなみに正確には国を滅ぼした『災い』の分け身……………一部がああ箱

に入っているらしい。

じゃあ本体はと言うと……現在こちら近辺に人の営みがあるわけだから、三千年の内に何某かの要因で消え去ったんだらうけど、それを地下で朽ちていった女王様が知るはずもない。

「……レインなら、箱を開けずに中を確かめられますよね？ どうだったんですか」

《あー……少なくとも、『災い』はそのまま残ってるかなあ》

いつかの水樽よろしく箱に顔突っ込んでみたところ、中には試験管的な容器が詰まっていた。

女王様の記憶も参考に考えるに、ありや細菌兵器の類じゃないかね？

今の時代、こちら一帯の人間が生きているのは三千年の内にその抗体を得たからという可能性も考えられないこともないが、そんな分の悪い賭けにユズちゃんの命を賭けるわけにもいくまい。

《被害が局所的なものだったら、とにかく逃げてもらうことも考えられるんだけど……》

「……ダメなんですな？」

例えるなら感染力と、ついでに致死率も極高の細菌兵器。

伝染病の知識どころか衛生の概念すら乏しいこの世界で、そんなものがひとたび解放されれば、あつという間に大陸中を覆うことは想像に難くない。

《今日明日中に海の向こうの大陸に行けるとかならワンチャン》

「これまでで一番無理ですな」

……可能だったら大陸丸ごと見捨てて逃げたのかつて？

そらそうよ。こちらら聖人でも英雄でもない、いち冒険者（ついでに幽霊）ですよ？

何よりも優先すべきは自分らの命。まあ私はもう持ってないから、実質ユズちゃんの命唯一つ。

それがこのままでは風前の灯火。だからこそめっちゃ焦ってるわけ。

《……………仕方ない。ここはプランBだ》

「……………何故かそこはかとなく不安なんですが？」

失敬な。全く考えなしという意味ではないぞ、今回は。

というか何故にこのネタが通じるのかね。……………雰囲気？ なら仕方ない。

《というわけで、ユズちゃん》

「……………はい」

……………そんな「嫌な予感がする」って顔全面に書かんでもえーやん。

こちらとらちやんと実績もある騒ポルターガイスト霊ですことよ？

ただね、私一人じゃいかんせん演者キャストが足りなくてですね。

《今回は、君の演技力に期待する》

「……………はい？」

大丈夫、大丈夫。

人間死ぬ気になれば何とかなるって。

実際、ダメだったら死んじやうし。……………頑張って。いやマジで。

C2—7 怨霊作戦・序

——ひと仕事を終え、街へと帰還する最中にある冒険者一行。

捕えた盗賊を含め五十人を越える大所帯となった影響もあり、その進行速度は往路に比べ幾分と緩やかなものであった。

遺跡を離れ、最寄りの街道に出たのが本日の午後。

道なき道突き進んできた疲れを取るべく、普段よりやや早めに張らせた野営陣地の中。

その中央、一回り大きなテントの中で、『銀の翼』の面々は険しくなった顔を見合わせていた。

「……やっぱり魔法が使われてるような気配は無いよ」

「箱の方もだ。何度確かめてもおかしな罫の類は無い」

「そうか……」

魔法使いのサーシャは陣地一帯の魔力反応の感知を。

斥候役を務めるラクスは、遺跡から発掘した金の箱を再々度調べた結果を告げる。

やはりというべきか、先日と変わらない二人の答えに、リーダーのポルトは溜息を吐いた。

「……そっちはどうだった？」

「ああ……今日の内に大体全員、念のために盗賊どもにも尋ねておいたんだがな？」

こめかみを押さえつつ、次にポルトは斧使いのクルガンへと顔を向ける。

彼が調べていたのは、一行の中に広がりつつあるとある現象について。

とりわけそれを『聞いた』人間がどれだけ居るかであったが——

「ほぼ全員……特別その日の寝つきが悪かったヤツを除いて、という

ところだ」

「……盗賊の中の誰かが犯人ってことは？」

「あれが演技だったら、盗賊なんぞやってないだろうよ」

その『現象』に襲われた人間はみな大なり小なり「薄気味悪い」と怯えを示している。

また一行の全員が全員、每晚『聞く』わけではないところもまた『現象』の異質さが際立つ。

……実害が出ているとまではいかない点は救いとも言えるのだが。

「それじゃ確認するが……昨夜は聞こえたか？」

ポルトの問いに、三人は互いに顔を見合わせながらゆっくりと頷く。

「あとはそれぞれが聞いた内容の擦り合わせを……それも昨日までと同じか？」

「ああ、多分……いや、初めの頃は空耳だと思ってたから、あやふやだけどね」

「……気のせいで無ければ、一昨日より音量が大きくなっていったな」

「声だけで姿は見えんが、若い女性の声で——」

『持ち出すこと能わず』『開けるな』『其は大いなる災いを秘めし禁忌の箱なり』

——遺跡を出発したその日の夜から、一行を襲うようになって『現象』。

それは日々の眠りに就かんとするその時、耳元に囁かれる何者かよりの『警告』であった。

「少しずつ言い回しや順番が変わることはあるけど、大体その繰り返しだな」

「……本当に、魔法が使われた形跡はないんだよな？」

「あたしに分かる範囲はね。……昨夜なんか、あんたが眠る傍で確か

めてたけど全くよ」

毎度の話し合いも事態の解決には一向に結びつかず、四人の間に鬱々とした空気が漂う。

迷う視線の行きつく先は、今はテントの中央に鎮座させた金色の箱。

『警告』の中に出てくる『禁忌の箱』という言葉。

それが果たして何を指すか、予想できない者など此処には居ない。

「……誰だか知らないが、回りくどい事をするもんだ」

ラクスが言い放った一言に、三人の目が集まる。

そこに定められたのは、戸惑いと、どこか安寧を求め縋るような視線。

「やっぱり、遺跡の宝を狙った誰かが犯人……って言いたいわけ？」

「……普通に考えれば、そうだろう？」

この『現象』に見舞われ、冒険者としての彼らが最初に思い至った答えは皆同じ。

すなわち「自分達の功績を妬む誰かが、それを手放すよう仕向けている」というものだ。

このような考えを抱く人間は何も冒険者に限らずともありふれているし、そういった感情を影に日向にぶつけられた経験など幾度でもある。

普通に……普通に考えれば、今回もそれに準じる何かと判断して相違無いのだ。

——その「何者か」が、如何にしてこの『現象』を起こしているのか。

更にそれが彼らに全く感知出来ない、という点を除けばだが。

「……普通、なあ」

「何だ？ お前まで『呪い』だの『祟り』だのと言いつ出す気か？」

「……お前まで？」

苛立ちを浮かばせるラクスに、ポルトがぴくりと眉を上げる。

「……俺が話を聞いた何人かは、そんな事を言い始めてるな」

その疑問に答えたのは、他冒険者達から情報を集めていたクルガンだった。

「どうも遺跡の祟りがどうの、と言い始めた奴が居て、それが広がったらしい。聞いた奴の中にはお守りだとか言っていていかにもな御札を握ってる奴までいたぞ」

「御札って……十字架とか、女神像じゃなくて？」

「ああ、そっちの派閥も居たな。……そうそう、例の女の子は御札派だったぞ」

「いや、それはどうでも——って、そういうえば、その子は？」

雑談のような内容を聞き流そうとしていたサーシャが、不意に氣勢を上げる。

感知、探知、索敵の類に限れば上級冒険者である自分達をも確実に凌ぐだろう人材が一行の中に含まれていた事を思い出したのだ。

「あの化け物染みた探知能力なら、何か気が付いているんじゃない？」

「あー……人一倍怖がって御札ばらまいてたぞ」

「………そっかあ」

「………なんか、想像つくな」

彼女の脳裏を過るは、同行する冒険者の中でも一段と年少の、凄まじい『スキル』を持つ少女。

だが同時に『正体不明のモノに殊更怯える姿』も頭の中で違和感なく像を結び……同様の思考に至ったらしい者同士で苦笑いを浮かべ合う。

「何というか……小動物？　みたいだものね、あの子」

「庇護欲誘うって、ああいう子のことを言うんだなあ……」

「……いや、あのスキルでも探知できないからこそその、反応かもしれないぞ」

「！　ああ、言われてみれば」

それは、確かな実力を持つと自他共に認められた自分達にも、今まさに覚えのある感覚。

己の『規格外さ』を誰よりよく知るだろう少女なら、その思いもひとしおだろう、と。

「……それでも、一度は協力を仰ぐべきじゃないか？」

「何か、あたしらとは違うものを感じてるって可能性もあるものね」

それが、四人のテントに件の少女が招かれるに至った経緯であった。

「———そ、それで、わたしが？」

「ああ……まあ、そう緊張しなくていいから、座ってくれ」

彼らの前へとおずおずと足を踏み入れるは、若草色の髪を揺らす少女ユズ。

不安げな瞳でテント内を見回し———やがてその視線は、ある一点を捉えて硬直した。

「———ひっ!？」

瞬間、少女は傍目にも明らかな恐怖を宿し、両手で口を抑えて後退り。

その予想より過敏な反応に、戸惑わされるのは『銀の翼』の四人。

「ど、どうしたんだ？」

「……そ、その箱、が。例の、ですよね？」

「例のって……」

サーシャの目配せを受け、クルガンが一瞬考える素振りを見せた後で、頷く。

「俺達が箱を持って遺跡から出てきたのを見た奴と……『箱』って単語を『聞いた』奴がいるからまあ、そこそこ、話は広まってるな」

「……そう。それならしようがな———へっ?」

『崇り』の在処(?)についてどの程度認知されているかを確認し、先の話し合いで出た少女の情報も合わせて、それならこの反応にも頷ける———とサーシャが納得しようとしたその時。

視線の先で広がった少女の行動に、彼女は声を詰まらせた。

何処からともなく御札を取り出ししては、べたべたと自分の身体に貼り付けていく少女。

腕、脚、衣服に、果ては顔——目を白黒させる四人を余所に、突然の奇行は続く。

「え……………えつとユズ、ちゃん？　それは？」

「御札です」

見りや分かるよ。……………という言葉を目前で飲み込む一同。

「いやそうじゃなく……………何で急にそれを身体に貼りつけてるのかなって」

「……………その箱に、良くないモノが憑いているのが分かるからです」

「……………は？」

少女の答えに呆気にとられたのは一瞬。次いで一同の目が一度に鋭くなる。

顔を強張らせた三人にサーシャが目配せを送り、それぞれが小さく頷く。

「どういう意味かな？」

「……………わたし、幼い頃から『そういうもの』が見えるんです」

手持ちの御札を貼り終えたのか、少女は未だ落ち着きのない視線を箱に向ける。

金の箱を穴が開くほど凝視し、上級冒険者達の刺す様な視線に気付く素振りもない。

「昔、質の悪いモノに憑りつかれたことも……………『彼ら』は『見える』相手には特に敏感で、だからこうして身を守る為に御札を、でも——」
目の前を凝視しているにも関わらず、遠くを見るかのように虚ろな瞳を見せる少女。

少女の様子を睨み付けるように観察していた一同が、知れずゴクリと喉を鳴らした。

「こんな御札じゃ、防ぎきれないかもしれないかも……………ツ!？」

突如、ビクつと身を引いた少女に、どうしたのかと彼らが口を開こうとしたその瞬間。

——コトン

四人の耳に、微かな音が響いた。

「「「……………」」」

顔を見合わせ、ゆつくりと、置いていた箱の方へと顔を向ける四人。そこには、変わらぬ金色の光沢を湛えて鎮座する箱。

「……………あ」

「おい……………」

気付かなければ良かったと思えるのは、いつでも気付いてしまった後のこと。

職業柄、観察力に優れた彼らは誰ともなしにそれに気付く。

——僅かに、それでいて確かに分かる程度に、箱の向きが変わっている。

さらにその表面には、間違いなく先程までは無かった——手形にも見える微かな黒ずみ。

それはまるでたった今、誰かがそれを持ち上げていたかのような。

「…………わ、わたし…………もう戻っていい、ですか?」

がくがくと身体を震わせ、吃音どもりながらそう尋ねる少女を引き留める者は居なかった。



《——何だかんだ言って、なかなか堂に入った演技が出来てたじゃない》

「……………演技じゃないです。素です」

テントから十分に離れたところで、疲労困憊という様子でユズちゃん
んがそう呟く。

……………分かってる側からすると、ノリノリに見えたんだけどなー。

「開いたら死ぬ箱が眼前にあったら誰だって怯えもしますよっ」

《……………さもありなん》

『災い』の具体的な内容については、以前話した伝染病の強化版、的な説明をしている。

あの話で潔癖のケが生えたぐらいだったし、あれだけ大袈裟な反応にもなるか。

「なのにあんなに無造作に持ち上げて……………何かの拍子に開いてしまったり中身がどうかなくなったらと考えてしまったら、ああもなりますよ……………」

《えー……………そこ台本通りだったよね？》

「そうですけどっ」

……………どうやら混じりつ気無しに本気の反応リアクションだった模様。

まあ、おかげで『手に入れた宝を曰く付き扱います』という典型的な怪しい奴認識は逃れられただろうし結果オーライですな。

……………ここであるの四人にどう見られるか、は割と正念場だったからねえ。

《他の台詞にも嘘は殆ど入れてなかったもんね》

「ええ、まあ……………良くないモノが憑いている、御札じゃ防げないというのも、箱の後ろにいたのがレインである以上、嘘じゃないですし」

《……………それは私が良くないモノだと言いたいのかね？》

「……………」

これ、目を背けるでない。

《まあ、否定はしないがなっ》

「しないんだ……………」

遺跡から発掘されたお宝。その実態は地上を壊滅させかねない災厄。

それを説明して納得させる、力尽くでどうにか、影響外に逃げる——何れもまず無理である。

そうなる後は、『決して開けてはならない』と何とかして認識させる。これしかないだろう。

しかし私がどう頑張ったところで、直接触れる、話しかけることができない以上、『気のせい』ないし『アンデッドモンスターのせい』にされてしまう。

事実、『崇り』の噂が出始めたあたりで、彼らの間ではサーシャ氏の使う『光炎』とやらで箱を炙ってみるか、なんて案も出ていたのだ。

発見した時にスケルトン——彼らの認識ではそうになっている——が現れた事から、その手のモンスターが関わっているのではというところに及んだらしい。

『中身』を心配して却下してくれたのは良かったと言うしかない。彼らと私達とではその心配の方向が全く異なるけども。

……古代の叡智で作られた箱がその程度でどうかなるとは思わんけど、心臓に悪いわっ。

魔法やモンスターが実在するこの世界で、それらとは異質な『ナニカ』である意識させるのはなかなか難しい。

必要なのは、そうした（この世界的に）常識的な考察を否定してくれる存在。

要は怨霊（私）の仕業というのをどうにかして納得（？）させる。むしろそれ以外ありえない、というところに思考を誘導する役目が必要となるわけだ。

当然ながらこの役目は『生きた』人間にしか出来ない。

そして事態を把握できている生きた人間など、ユズちゃん以外にいるはずもない。

しかしながらこの役割、分かかってやるとなると相当な演技力を要求される。

……この真面目っ子ユズちゃんに嘘と見抜かれられないような演技をさせる？ ……どうやって？

——嘘がつけなければ良いじゃない。

というわけで数日の時間を使い、私が色々と種を撒いておいたわけである。

彼らを襲った『現象』とは、言うまでもなくご存じ【夢枕の囁き】だ。また今回は多数に聞かせるべく、頃合いを見て陣地中央で声を張り上げてました。喉痛い。

見張りや何やらで寝てない人間もいれば、単純に寝つきが悪くて入眠のタイミングがズレる人もいたりするんでこれで聞いたり聞かなかったりという状況が生まれます。めっちゃ喉痛い。

なお、私の声が素通しで聞こえちゃうユズちゃんは耳塞いで寝てました。

これも結果として『件の少女は人一倍怖がっている』という噂を補強してくれたみたいね。

次に御札のばらまき。……一枚作るのに結構苦勞するらしくて、ユズちゃん割と渋顔でしたが、こういう仕込みは手を抜いちゃいけないのでね。

……実際に囁きを防ぐ効果があるか？ あるんじゃないかな？
分からんけど。

私本体には全く無力な御札氏ですが、前に私が作った『壁鬼』こと【霊痕】を消せたわけだし、私の能力に対してある程度干渉出来るのは間違いない。

しかし、その人が眠ったタイミングと私がリサイタルしてた時間が一致してたかは分からんし、以前の領主親子のように私の能力抜きに普通に悪夢を見る可能性だってある。

……事前に検証してなかったのが悪いと言えばそうなんだけども、これに関してはなー。

なんせ睡眠中の相手が対象という面倒な条件に加えて、安眠妨害に

しかならなそうなのこの能力をこんな形で使うことになるとは夢にも思わなかったんやもん。

そのせいで今困つてると言えばそうなんだけども……この件については、この辺にしとこうか。

そして本日、これらの仕込みの結果が出たわけですな。

狙い通りの呼び出し、からの『ナニカ』の存在を臭わせ、仕上げは【念動力】＋【霊痕】！

効き目についても私にはすぐに分かるのだよ。『霊力源』という形でな！ いやあ甘露甘露。

「……これで手放してくれるでしょうか？」

《盛大にビビってるのは間違いない。けどやっぱ止めの一押しは必須かなー》

「うう……」

この後の為に用意した台本がよっぽど気が重いのか、ユズちゃんがこれまた渋顔をつくる。

……とはいえやらんわけにいかんよ？ マジで命掛けなんだから。それじゃもう一度細かい台詞合わせと小道具の点検を――

「……何だかいつもより生き生きしてませんか、レイン？」

………気のせいじゃにやい？

「——っ!!?」

その時、悲鳴を上げなかったのは男としての最後の意地だったろうか。

「痛っ!? 何? 敵襲?」

崩れた姿勢を支えるべく伸ばした彼の手は、傍らで眠っていた彼女の脇腹をついていた。

起こされたと感じた瞬間、身に染みついた経験が、寝起きの身体に臨戦態勢を取らせる。

しかし、その鋭く開かれた視界に映ったのは、ひどく怯えを浮かべた仲間の顔。

「う、あ……」

「ど、どうしたのよ、ラクス? いったい何、が——」

問いかけるサーシャの言葉にも答えず、彼は何かを指し示すように震える腕を上げていた。

尋常でない様子を訝しみながら振り向いた彼女の声もまた、吸い込まれるかの如く虚空に散る。

——ズズツ

微かな、しかし、確かな音を立てて。

地虫の這いずるが如き速度で、されど滑るかのようになめらかに。

——ズズズ……ズズツ

鈍く輝く金の光沢を、どことなく薄黒く濁らせ。

誰に触れられるでもなく、誰に指図されるでもなく、にじり動く、『箱』。

——コトン ……ズズツ

『それ』がほんの僅かに、『跳ね』たその瞬間。
その表面、周囲にまでに黒く浮かび上がるは——無数の『手形』。

「——ツ!!?」

悲鳴を上げてへたりこむ——とはならなかったのは、高位の冒険者を支える自負故か。

しかし思考を埋める混乱と恐怖には抗えず、二人は弾かれたようにその場を飛び出していく。

そうして、俄かに人気ひとけの消えたテントの中。
無数の手形により真黒に染まった、『箱』は

——カコツ

「——彼女はいったいどうしたんだ!？」

「わ、分かりませんっ!!? 急に起き上がって……」

深夜と呼べる時間、野営地にて恐縮する冒険者を問い詰めるは『銀の翼』がリーダー、ポルト。

彼ら『銀の翼』はこの日、二人一組で役目を分けて行動していた。ラクスとサーシャは自分達のテント内で、件の『箱』の見張りを。そして残りの二人は件の『少女』の見張り兼様子見を、だ。

多くの冒険者がひと所に集まったこの野営地では、固定のパーティを組んでいる者でなくとも、数人毎に一つのテントに集まり休息をとっている。

彼らも冒険者なれば、数人で協力し合い不寝番を立てるのは当然のこと、同じ依頼を受けた者同士、誰に言われるともなく数人毎のグループを作っていたわけである。

事態解明の一助となればと呼び出してみれば、実に奇妙な言動を始めた若草髪の少女。

直後の『現象』に少なからず動揺してしまつたがために、その場の追及は出来なかつたが……何か二心を抱いている可能性が高い。

それが彼らが冷静になつて——というより、説明がつかない『現象』に疲れ果てた末に出した暴論であつた。

目に見える者が何かしらの行動を起こしていた、ということであつて欲しい。

説明可能な何某かによる意志であつて欲しい。

そんな焦燥感からくる願望がもたらした浅慮……という自覚すらも彼らにはあつたのだが、他に行動指針を見付けられなかつたというのが実情である。

——そしてこの日、遠目に確認する限り少女の行動に不審な点は見られず。

精々が風変わりな御札を拵えては希望する冒険者に配つていた程度……製造元だつたのかよ、と目撃した二人で眩いた程度。

普段なら斥候役のラクスがこの役割を担つただろうが、今回は相手が相手であつた。

尋常ならざる探知能力の前に自分の隠密能力では太刀打ちできないと判断したラクスが、むしろその方面は素人に近い二人の方が、変に構えさせずに済むと主張したのである。

そんな彼らの視線に気付いていたのか否か——間違いなく気付いていただろうが——少女は特にそれ以上の行動を起こすことは

なく、同じテント内の冒険者とそれなりに友好的に接しながら就寝した……かのように見えた。

事は起こったのは、二人が「当てが外れた」とばかりに額を押さえつつ自分達のテントに戻ろうとしたその瞬間である。

「……………」

「——おいっ!? おい、ユズっ!? ……駄目だ、聞こえてねえ!？」

顔見知りからの呼び掛けにも反応せず、幽鬼の如き歩みで何処かへと向かおうとする少女。

俯いた顔は若葉色の髪に隠れ、その表情は何えず。

「……何が起きたか、動き出した時から見た奴はいるか？」

「あ、えっと……隣で横になって暫くしたと思ったら、いきなりガバッと起き上がって、ああして外に向かって歩き始めたんです。何もかも突然のことで何が何やら……」

飛び出してきた冒険者の一人を捕まえ、目を離れた僅かの間起きた事を聞き出す二人。

聞かれた人間もまた、頻りに首を傾げながら思いつくままに呟く。

「魅了か何かの状態異常の可能性は？ 軽度なら軽く刺激を与えてやれば緩和されるはずだ」

「……考えもしてませんでした」

「だああつ！ これだから田舎の冒険者はっ」

「よせ、今は猛っている場合じゃない」

数日振りに感じた街の冒険者のレベルの低さに嘆息するクルガン。

ポルトも顔では同意しつつ、今もゆらゆらと歩き続ける少女に近付かんと動き出したところで、あるものに気付き足を止める。

「——うん？ ラクス、サーシャ？」

それは、少女の肩越しに見えた、こちらへ向かってくる別行動していた筈の仲間の姿。

一瞬遅れた思考が行きついた先は、その二人が見張っていたはずの『箱』について。

「おい、お前ら何でこっちに——」

二人を糾弾しようとした間際、またしても彼の思考は一時停止を余儀なくされる。

何故なら、駆けてきた二人の表情が、明らかな異常を訴えていたからだ。

「——う、動いてっ、箱がつ!?!」

「——跳んで、て、手形がつ、手形でっ!?!」

「お、落ち着けお前らっ!?! 何言ってるか分からねえよ!」

……問題は、それがどのような異常なのか、まるで推測できなかったことであつたが。

「……とにかく、何があつたかを順にだな……」

「は、箱が……あの箱が……」

「気のせいじゃなかった……やっぱりあれは絶対気のせいなんかじゃなかったのよ……」

恐慌状態に陥つた二人を宥め、状況を確認しようとする彼の視界の端で、少女は未だふらふらと何かに誘われるように進んでいく。

少なからずそちらに意識を割かれつつも、彼は今一度問い掛けを重ねた。

「箱が、具体的にどうなつたんだ?」

「……動いて、跳ねたんだ。何も……周りには本当に何も無かつたのに……」

「箱の、表面……あ、あとその周りにまで黒い手形がぶわっと浮かび上がって……」

氣勢はやや下がつたが、内容はより支離滅裂になった。

高位冒険者の風格もどこへやら、すっかり動転した二人を呆れながら見つめ——二人の背後に広がる光景に、彼は三度放心を余儀なくされる。

いつの間にか、少女は振り返り、こちらを見つめて立ち止まっていた。

光の消えた瞳。微かに震える、薄く半開きの唇。

そんな少女の胸元で、水を掬うように合わされた両手。

その手の中に鎮座する——黒に変色した箱。

「……クルガン、何が起きたか、見てたか？」

「俺達のテントの方向から例の『箱』が飛んできて、あの子が広げた手の中に納まった。……俺の目がおかしくなったんじゃないかな」

肩越しに行われる会話に気付き、ラクスとサーシャもはっと目を合わせ、振り返る。

四人と、周囲の冒険者十数名の視線を浴びた少女の身に、再び変化が始まった。

「な、何だありや……っ!?!」

誰かが漏らした声が、月明かりと、そこに加えられた奇妙な光の中に消えた。

新たな光源は少女の身体。そこに大量に貼り付けられた御札から。それらが突如、青白い炎に包まれ、音も無く燃え尽きていく様だった。

「——サーシャっ!?!」

「っ!?! ち、違うわっ!」

ポルトの問いかけに、一瞬逡巡したサーシャが首を横に振る。

その意味は『魔力が関わっているか』。そして答えは、否。

「……どうする? 箱を引き剥がしてみるか?」

「なっ!?! おいおい無茶を——」

クルガンの呟きに、畏れと怯えが入り混じった声を上げ目を剥くラクス。

そんな彼の言葉を、夜闇を照らす閃光が遮る。

それは、少女の身に残っていた御札が一度に火を噴き、一瞬にして

燃え尽きた光だった。

「「……………」」

——何かが、起きた。

なにかが、変わった。

そう断言できる程の得体のしれない十二力を、その場の全員が少女から感じ取っていた。

ほんの僅かの間、少女の瞼が一度閉じられ、そしてゆっくりと開かれる。

そこには消えていた光が再び、しかし明らかに変質を起こして輝いていた。

「《——え……ヨ》」

少女の口が、パクパクと動く。

何かを確かめるかのように。何かを思い出すかのように。

喉を引きつらせ、呻くような音を漏らしながら。

「《——かエ……よ》」

少女の手の中にあつた箱が、ゆっくりと浮き上がる。

小刻みに震え、微かに上下しながら、やがて少女の首元の高さへ。

自由になつた手が離され、その右手は勢い良く正面へと翳され——

「《控えよッ!!》」

声音は少女の、されど悍ましいまでの寒気が乗せられた一言が、その口から放たれる。

それは物理的な重圧すらを伴って、野営地に存在する全ての人間の耳朵を叩いた。

「あ、が……っ?」

どさり、と。

一人の冒険者が力無く倒れた。

「お……」

「う、あ……」

一人、また一人と倒れ伏していく冒険者達。

その足元で、小さな虫やネズミまでもがその場に縫い付けられ痙攣を始め。

「う……お、おい、だいじょ……う……?」

その状況下で動かんとしたのは、少女が渡した御札を握っていた冒険者。

しかしそんな彼も、倒れた仲間らに駆け寄ったところで、糸が切れたかのように地に伏せる。

倒れた彼の手中で、握り締められた残骸が黒炭となって崩れ去った。

「……………何だよ、こいつは」

「……………」

やがて、その場に立ち続けていたのは、僅かに四人。

無数の死線を越えてきた練達の冒険者『銀の翼』だけがこの少女の

——否、その身体を借りたナニモノカの前で、蒼白となった顔を並べながらも意識を保つのだった。

(
.....
)

《
.....
》

(
.....
そうですか)

《
これはな.....ちやうねん
》

(
.....
?)

《
.....ちやうねん
》

(
.....
)

《
.....
》

(
.....
)

《
.....
》

「——あんたは、何者なんだ？」

目の前に佇む『それ』に対し、ポルトが誰何の言葉を絞り出す。

上級に勘定される冒険者として、そしてパーティを率いるリーダーとして積み上げてきた場数と経験が、ぎりぎりのところで彼を踏み止まらせていた。

「《……ふむ。我を何者か、と問うか》」

ゆつくりと、どこか優美さを感じさせる動きで、それは思案するよ
うに腕を組んだ。

外見は人付きの良い少女の姿そのままに、しかしその瞳は元の深緑
色から、吸い込まれるような漆黒へと変貌している。

対峙する彼らに今なお叩きつけられている、魔力とは決定的に異なる『気配』が、理解及ばぬ『ナニカ』の存在を如実に示し続けていた。

「《今は亡き……其方からすれば、遙か古代に没した王国の最後の女王、というところかの》」

「「……っー」」

幾らか迷いを込めて告げられたその言葉に、四人は一様に息を呑み、次いで顔を見合わせる。

また各々が驚愕しつつも、それほど不審に思うことなくそれを受け
入れていることも確認した。

この数日間あり得べからぬ事態に振り回された彼らにしてみても、『彼女』によりもたらされたこの情報はどこか納得できる答えでもあつたからだ。

「……その箱を動かしてたのは、あんただったんだな？」

「《うむ。……あの程度しか動かせなんだがな》」

「《この数日、私達に話しかけてきてたのもっ》」

「《ああ。……もう少し明瞭な意思の伝達が可能であつたならば、こう

も強引な手段を採る必要も無かったのじゃがな」

箱を見張り、調べていたことで最も『現象』との遭遇率が高く、幾度も戦々恐々といった思いをさせられた二人の問いに、実にあっさりとした答えが返ってくる。

やがてポルトが、そこに生まれた根本的な疑問を口にした。

「それじゃ、あんたは……俺達と話したかったのか？」

「《そうじゃ》」

纏う気配とは裏腹な、軽い口調の肯定。

しかしそこから続いた言葉は、彼らの心胆に別の意味で悍ましい寒風を叩きつけた。

「警告をしたかったのじゃ。我がこの身を以て封じた大いなる『災い』——栄華を誇りし我が王国を瞬く間に滅ぼしおったそれを、持ち去ってしまった其方らにな」

「……………わざわざ、い？」

どうかそう呟いたポルトの耳に、「《よもや今になってあの封が解かれるとはの……》」と、どこか遁世染みた呟きが響く。

「《今の世にも再びこの地に築かれた文明が……人の営みがあるのは其方らを見ておれば分かる。それを我らの負の遺産が滅ぼしてしまふ、などとなられてはあまりにも忍びない。仮にも為政者の立場に居た者として、死んでも死に切れぬわ》」

「……………」

傍目にも分かる程の自己嫌悪に歪んだ表情を浮かべ、吐き捨てるように告げられた言葉。

言葉通り、文字通りの執念が滲み出たその姿に、恐怖も忘れて再び顔を見合わせる四人。

……同時に隠された財宝を見つけたと、どこか浮かれていた自覚の

あつたその目が一斉に泳ぐ。

「……それで、俺達はそれをどうすればいい?」

「《……この事を知った上で、適切に処理せよ、としか言えぬ》」

「おいっ!?!」

無責任にも聞こえる答えに、ラクスが目を剥く。

そんな彼の様子に、女王の——少女の顔が泣きそうな顔へと変化した。

「《我らにこれを後世に遺さぬ術すべが在ったのなら、そうしておく。それが出来なかつたからこそ、今この場に残ってしまつておるのじゃから
のう》」

「う……」

「ああ、そりやそつかあ……」

悲痛な無念を滲ませる女王の答えに、ばつの悪そうな顔で目を逸らすラクス。

サーシャは痛みを堪えるようにこめかみを押さえつつも、納得の息を吐いた。

「《私の望みはたった一つ。我らが遺してしまった災いが、今代の民を害することなく再び闇へと葬られること。それが叶うならば手段は問わぬ……尤も、今代に如何なる手段があるのか、我には知る由もないのじゃがな……》」



——おっけい、大体台本通り。

これでまともな神経してればこの箱をどうにかしようとは思わんはず。

一時はどうなる事かと思つたけども、なんとか修正完了つてことで。

予定より『観客』少なくなつてるけど、この四人にさえ聞いてもら

えてれば……うん。

……何で観客少なくなったのかって？ いやあ、それは………何
でやるなあ。

………確かに【憑依】状態で叫んでみるなんて検証したこと無
かったけどさあ。

冒険者達もそこらの小動物もついでに盗賊達までバタバタ昏倒し
ちやっただけけど？ 目の前のベテラン四人以外見事に全滅なんや
けど？

何なの？ こんな能力いつの間に生えてたの？ 実はマンドラゴ
ラの幽霊か何かだったの、私？

ここから演技も本番だと思つて、ちよつと気合い入れただけなのに
こんななるとは……いや、ほんと、ちやうんやって。そんなつもり
なかったんやって。

まあ、でも、伝えるべきことは大体伝えられた。目的は達した。う
ん。

終わり良ければなんとやら。大丈夫だ、問題無い。無いったら無
い。

(……本当にこれで大丈夫ですかね？)

おおう、声を出さない会話……【念話】？ 上手くなったね、ユズ
ちゃん。

(何度か全身の操作権をレインに渡してきたからでしょうか。魂だけ
で動くと言いますか、そんな感覚に何だか慣れてきましたよ)

そっかあ。慣れちやっただかー。

……慣れちやっただ大丈夫なもんかなー、それー。

ま、まあ、今みたいな状況では割と本気で便利だし、多少はね？

演技の出来ないユズちゃんに演技をさせる方法、その二。【憑依】し
た私が全身操る。

緊急時以外はやらない約束だけど、今がまさに緊急時ですよ、ええ。

……事態を緊急にしたのは私？ ええい、やかましいわつ。

「——ひとつ、聞いてもいいか？」

おっとつと。

「《何じゃ？》」

女王モードで応答。……何だねその目は、ユズちゃんや。

魂だけでよくジト目を表現できるね、器用な……って、それは兎も角。

私だって流石にネタや酔狂でこんなことをやってるわけではないんだってば。

——あの遺跡で私が受け取った、三千年分の女王様の記憶。

そこには当然、女王という役職に求められる振る舞いに関する記憶だっけきっちり含まれてる。

カリスマ溢れる物腰、姿勢、仕草、流し目から息遣いに至るまで。私はそれを忠実に再現し、彼女が何があっても伝えたかった情報を今、生きる彼らに届けるだけ。

遺してしまった『災い』に関して、この地に生きる後世の人々に関しても、女王様が抱いていた感情をほほほほそのままに。

口調だけは私の勝手なイメージだけど。……何故って？ いやあ、言語の壁は強敵でしたね。

「俺達はその箱を見付けた時に襲い掛かってきたスケルトン。……あれはあんただだったのか？」

「《うむ。呼び掛けが届かぬようだったので、我が亡骸を必死に動かしての。……まあ、そちらの女子おなじに見事に燃やされてしもうたが》」

「え、あ、その……すいません」

「《いやいや、仕方あるまいて。それに、数千年越しにようやく吊ってもらえたと思えばの》」

……だからジト目で睨むのはやめてください。

女王様だっけきつと納得してくれてるって。知らんけど。

「それと、その……あんたが憑りついてるその子は大丈夫なのか？」
「《む？ ああ、大分怖がらせてしまったようじゃが、我が出ていけば問題無かろう》」

「そうなのか……しかし何だつてその子に憑りついたんだ？」

「《……それは、憑りつけそうな体だったからとしか言えんのう》」

【感情吸収】の問題が未解決なこともあるけど、それでなくとも会話もできない相手の身体には入りづらいんだよね。倫理的に。

最低限「入りますよー」「どうぞー」のやり取りが出来ないとちよつとねえ……

……実際問題、ユズちゃんみたいな体質の持ち主つてもうちよつといないもんなんかな。

ユズちゃんが知ってる限りだと師匠さんだけらしいけど、このベテラン四人ならそれらしい人の情報を持っていたりしないもんだらうか。よし、ついでに聞いてみるべ。

「《私の時代では降霊術士などと呼ばれていた者達がこの娘に似た雰囲気をしておったのじゃが、今の時代にそのような職は無いのかの？》」

「……すまんが、聞いたことないな」

「霊能力者とかいう胡散臭い連中なら……」

「《むう……まあ我も往年の頃は胡散臭い連中じゃと思っておつたしの。この身体になって初めて或いは虚言でない者もおつたのじやろうか、と思つたくらいじゃ》」

うーん……やっぱり向こうの世界と変わんない感じかなあ。

私がユズちゃんと出会う切っ掛けになった例の領主さんにしても、そういう人間を対象に依頼を出したんだらうけど、『領主の依頼』に手を挙げたのがユズちゃん一人だったことから察するに、いわゆる本物のつてやつはそうそういないだらうなー。

(……………レイン?)

おっと、脱線してたね。
そんじゃ、そろそろ撤収に移ろうか。

「…さて、名残は惜しいが、我はそろそろ逝くとするかの。……数千年振りの他者との会話は実に楽しかったぞ」

「あ……」

女王様の言葉——実は私が聞いたのとほぼ同じ——に、俄かに神妙な顔になる四名。

……しかし君ら、最初の怯えっぷりはどこへやらだね。対応力高いと言うかなんというか。

「其方らの世界が、我らの世界と同じ末路を歩まぬことを切に願おう。……未来に厄介なモノを遺してしまった我らを、どうか許してくれ——」

というわけで、これまた私が聞いた女王様の台詞で締めます。

……実際、私は単なる伝言役だからね。それ以外については基本知らんよ。

後のことは、この世界に『生きている』人間の手で何とかしてくださいな。



——カクン、と。

少女の身体が糸を切ったように崩れ落ちた。

「……いかんっ！」

倒れ込もうとする身体を、駆け寄ったクルガンが抱き止める。

それと同時に、身体に貼られた御札の残骸に未だ燻っていた青白い炎が音も無くかき消えた。

「……どうだ？」

「……まだぼんやりとしているようだが——おい、大丈夫か？」

「う……は、はい」

クルガンの巨体越しに、控えめな声が聞こえてくる。

……同じ声で、こうも印象が変わるとは……あれが女王様の威厳って奴か。

「……そうだ、箱は——っ」

女王様とやらが話している間、その顔の辺りに浮かんでいた金色の箱。

そちらに意識を向けた瞬間に視界に入ったのは、誰かが手を添えてでもいるようにゆっくりと、地面に向けて下降していく箱の姿。

「……………」

ラクスが何度か俺達と目を合わせつつ、コトリと地面に着地した箱を拾い上げる。

見れば表面に付いた薄黒い手形も消えて、見付けた時と同じ鈍い光沢を取り戻していた。

「……任された、つてことでもいいんだよな？」

「そう思うしかないでしょうよ」

「正直……荷が重いがな」

思い返せば『災い』とやらに関する具体的な説明は一言も無く、ただ与えられたのは『瞬く間に一国を滅ぼした』なんていう物騒過ぎる情報のみ。

ひよつとすると、この箱を開けるだけで辺り一帯ドカン、なんて可能性もある。

おかげでちよいと中身を確認しようなんて考えは間違っても湧きやしない。

……あの女王様はそれを見越して、俺達にも敢えて説明しなかったのかもな。

「お前さんは聞いてたのか？」

「え……あ、はい。身体を取られている間も意識はありましたから」

それなら後は俺達四人と、この子とで口裏を合わせれば事を広げずに済むか。

女王様の一喝で他の冒険者の耳が塞がれていたのは幸運と思うべきだな。

「……で、どうする?」

「……実際にこれをどうするかはひとまず置いて、まずは箱の事を知つちやつてる人間にどう説明するか、じゃない?」

「単純に『中は空だった』で良くないか?」

「『朽ちて塵になっていた』という方が信憑性があるんじゃない?」

「二、三千年前の遺跡だったか? 確かにその方が有り得そうだな」

対外向けにはそんなもんでいいか。

「箱そのものに関しては……とりあえず俺達で管理しておくしかないか」

「最終的には、どこか人の手が入らないところに埋める、とかかしら?」

「それでいて獣に掘り返される心配がないように……とかだな。まあ追々考えるか」

「そんなわけで、他言無用で頼むぞ」

「わっ、は、はいっ!」

……そう睨まなくても、その子なら大丈夫だと思うぞ。

「……しかしまあ—— 凄いモン見たな」

「……………ええ」

しみじみと呟いたラクスに、サーシャもまたこめかみを押さえながら同意した。

「古の王国の女王様の幽霊、か。酒の席で話してもこれは信じてもらえないよなあ」

「信じてもらえない経験を積み重ねてこその上級冒険者だからな」

「あら、それじゃユズちゃんも上級冒険者の仲間入りかしら?」

「え、そ、そんな、わたしは、その、怖がっただけですし……」

いつの間にかサーシャに抱えられて、ふるふると震えている少女。

念の為にと圧をかけているんだろうが……なんというか、ほどほどにしてやれよ?」

「それを言うたら、ラクスとサーシャも怖がつとただけだろ」

「な、何だと!? サーシャは兎も角、俺がいつ怖がつてたつて!」

「……ちよつとラクス!? それは聞き捨てならないわよ!」

……二人とも、テントからここまで走ってきたときのことを覚えてないんだろうか。

あの形相はとてもしゃないが、人様には見せられない有様だったぞ?
?

「それにしても、あの女王様曰く降霊術士? なのか君は?」

「ええと……『御祓い屋』を名乗ることがありますが」

「御祓い……実際この御札はああいうのに効果あるの?」

「ええ、まあ……一応は」

彼女曰く、あの箱に浮かんでいた手形をつけるのが精々、というよ
うな霊が相手なら御札による対処は可能らしい。

御祓い屋というのも大々的には名乗らず——胡散臭いだけなの
で——その手のモノと思しき依頼を見付けた時にのみ、その肩書で
受領するのだとか。

……言われてみれば確かに、そんな感じの依頼を数年に一度くらい
見かけることがあったか。

こんな依頼、胡散臭い奴に適当に金を塗り取られるだけだろってイ
メージだったがなあ。

「今回は相手の力が強過ぎて、ほとんど意味が無かったみたいですよ
どね……」

そういつて溜息を吐きつつ、少女は御札の燃え残りを剥がしてい
く。

……オイ、何を物欲しそうな顔で見てるんだ、その二人。

「………在庫ならまだ少しはありますけど」

「売ってくれ（ください）」

……お前らなあ。

……俺も一枚くらい買っとくかな。いやほら、本物がいるって
知っちゃまったし、なあ？

C2—10 古よりの宝物

——軽く息を吸い込む音と、次いで一瞬の風切り音。
キィ、とも、キュ、ともつかない鳴き声と共に、足元へポタリと落ちてくる二つの物体。

『ルーモスバット』とか呼ばれる、蝙蝠型のモンスター……らしい。
モンスターとしての番付は堂々の最下級。理由はまあ、弱いからだ。

一応吸血用の牙はあるが、素肌にも食いつかれない限りは怪我をすることもなく、そして仮に噛み付かれたとしても吸われる量は高が知れている。

更にその体は余程非力な人間でもなければ一撃で倒せるというほどに脆弱。

しかしここまでの低スペックモンスターでありながら、冒険者を含む一部の人種から憎まれる、というほどではないものの、苦々しく思われているというのが面白いところ。

その理由はこのモンスターの習性にある。

暗い場所、とりわけ洞窟や遺跡というやつにはほぼほぼ確実に生息し、そういう場所を進むのに必須となるだろう光源に対し殺到してくるのだ。

すると大体は松明か何かで塞がっている方の手に向かってくるわけ、残る片手で叩き落そうとすると、その小さな体がなかなか厄介となる。

それなりの心得を持ち、落ち着いて迎撃すればどうということもなわけだが、狭く暗い場所を探索している時にひっきりなしに襲ってくるとなれば、その評価もさもありなんといったところ。

さて、そんな『面倒なやつ』を苦も無く切り落としたるは我らがユズちゃん。

細剣の一振りで、壁に止まっているところを狙いすまして一閃です。

……襲ってくるんじゃないのかって？ 光源を見付けなければね。

《いやあ、こういう場所の探検は他の冒険者が居ない方が楽で良いよねえ》

「……それもどうかと思うんですけどね」

青白い光で照らされた横顔に、いつも通り悩まし気な表情を浮かべるユズちゃん。

悩みの多い子だなあ、と呟きつつ【鬼火】を浮かばせながら憑いていきますは私。

彼女にのみ見える光源となることを利用した『無灯火行軍（無灯火とは言っていない）』。

先日は御札を燃やすことで、演出としての火にもなれると見せつけてくれた【鬼火】氏ですが、先に思い付いたのはこちらの用途となっております。

暗所の探索をする場合、これが意外と便利なんよ。少なくとも夜目がきく相手に手にした光源を一方的に発見される心配が無い。

勿論、私達だけで行動しているとき、という制限が付いちやうけどね。

《それにしても蝙蝠の癖に光に頼るなよ。音使えよ、音》

「音……？」

おや、エコーケーション反響定位は、この世界では一般的な知識ではない模様。

まあ、元々集光性をもっていた、もしくはそうして探索する人間が立ち入ることで、光の近くに獲物がある、という擦り込みが行なわれたかのどつちかだろうけどね。

——さて、そんな蝙蝠モンスターに襲われる此処はどこなのか？ お前らいったい何処でなにしているのかって？

現在地を一言で表すならば、遺跡です。

二言にすれば、前人未踏の、が枕についた遺跡でございます。時は盗賊退治の依頼を終えて街に戻ってから更に数日というところ。

さてさて、何故に私達はそんな場所をほつつき歩いているのでしょうか。

当然何の当てもなく突然発見したわけではありません。出来るわけありません。

……あ、いや私があっちこっち飛び回れば不可能ではない？ いや、やらんけど。

《………あ、そこ落とし穴があるみたい。あとその右の壁に触ると槍出てくるってさ》

「うわあ……相変わらず容赦の無い」

鬼火の明かりを頼りに、じつくりと石床、石壁を眺め眇めて罨を回避していくユズちゃん。

たまに壁の中へ顔突っ込んで罨チェックしつつ、『記憶』を基にナビゲートするのは私。

………そうです。『記憶』によって見付けた遺跡なのですよ、此処は。

——あの遺跡で私の中に入ってきた、古の女王様の記憶。

そこには当時の建造物、現在でいう遺跡の所在地に関する記録も当然ながら含まれております。

そこで街で仕入れられる情報とある程度突き合わせて、まだ発見されていない、かつあの墓所のように地下方向に伸びた建造物を当たってみたわけですよ。

一件目は入り口ががつり土砂の下。

二件目は事前に情報が見つからなかったけど踏破済み。まあ、そんなこともあるよね。

続く三件目で引き当てたのが此処だった。記憶に曰く、女王様当人のお墓らしいですよ。

……え、女王様の墓はあそこじゃないのかつて？

いや、あそこは『災い』を封じる為に選んだ場所だからね。

一応、高貴な身分の人間が入れられる墓ではあったらしいけど、為政者が入る墓は基本別に作るものだったんだってさ。

……前回の遺跡をピラミッド的なアレだと思ってたが、むしろこっちこそが本物だったか。

しかし、世界が違えど人間が作る文明ならそれなりに似通ってくるものなのかねえ？

《……あ、ストップ。開けた瞬間色々飛び出してくる扉みたい。ちよつと裏廻って動かないように細工してくるべ》

「……どうしてこう、やたらとお墓の防衛機能を充実させてるんでしょう？」

そこはほら、そういう文化だからとしか言い様がない。

あといわゆる盗掘狙いの賊が後を絶たなかったからとか。

現代の感覚からしたら、そもそも墓に価値あるものを入れるのやめなよ、と言いたくなるけども。

「……とところで、目的は副葬品、なんですすよね？」

《まあね。……女王様の記憶だけじゃ今に至るまでに盗掘されてないかどうかは分かんないけど、この具合だとそのまま残ってる可能性は高いと思うよ》

壁抜けしてチェックしてきた罫の大部分が現役稼働してたし、ここまで誰かが入り込んだ形跡も見当たらないので、経年劣化を免れられるものならそのまま残ってるんじゃないかなろうか。

具体的には宝石、貴金属類に、当時の技術で作られた特別な武器あたり。

中には考古学的見地から価値のある物もあるだろうけど、その辺はまあ私達には、ね。

「この遺跡については公開するんですか？」

《……ユズちゃんがそうしたいなら？ でも公開するととなると色々面倒臭くない？》

「それは、まあ……」

《それにそうしちゃうと、ここで拾った物を独り占め出来なくなるだろうし》

「……っ」

独り占め、という言い方が不味かったか、ちよつと眉を寄せるユズちゃん。

まあ、この真面目っ子さんならそういう反応になるとは思ってたけど。

いやいやしかし、今回の私には錦の旗があるのだよ。

《収められてるのは元々女王様の持ち物なわけで、その女王様の三千年越しの悲願を叶えてあげた私達こそが受け取るべきだと思わない？》

「そ、それは……」

女王様の言葉を伝えることが出来たのは、偶々私達二人があの場合に居合わせたからだ。

他の人間では女王様の言葉は聞こえず、また仮に聞こえたとしても言語の壁に阻まれる。

……そうなれば、近日中に女王様の危惧した通りの惨劇が発生したことは想像に難くない。

すなわち私達は今回さりげなくもこの辺り一帯の街々を、ひいてはそこに暮らす数万という命を救ったことになる。となれば、それなりの『旨味』を要求したところで、バチは当たるまいて。

《苦勞した人間にはそれ相応の報酬が与えられるべき。でも称えてくれる相手がいないので報酬は自分達の手で貰っていきます。……何かおかしい？》

「………むう。良い、のかなあ……」

私の物は結局ユズちゃんの物になるんだけどね。どんな物があつたとしても持てないし、私。

そのユズちゃんにしたって今回は本当に危ない橋をひーこら言い

ながら渡ったわけなんだから、堂々と受け取る権利を主張していいだよ。

——という見解を伝えたところ、彼女はむしろ今までより難しい顔で頭を抱えてしまった。

何故だ。解せぬ。

「本当にレインは……我が道突き進むというかなんというか……」

《幽霊が人の顔色を窺ってどーするよ》

「……………ええ、まあ、分かりました。わたしも今回は納得しておきます」

そうして遠い目で「大変な目に遭ったのは事実ですし……………」と彼女は呟いた。

その調子で、貰える物は貰う、ぐらいの気概を持ってくれたらいいんだけどねえ。

「……………ところで、また別の『災い』を見つけちゃったりしないですよね？」

《ないない。……………あ、次、天井落ちてくるから、部屋入ったら一旦バツクね》

「ひいつ!? だからどうしてこう……………」

《そんでその先の落とし穴、右から二番目が順路ね。他は全部剣山、一見順路に見える通路の先は致死性盛り盛りの混合毒ガス部屋だったさ》

「……………こういう場所、建築途中にも山ほど死傷者出てそうですよね……………」

《殺意高いよねー》

そもそも下手に公開したらしたで死屍累々だと思っただよね、この遺跡。

私達以外の誰が宝に辿り着けるんだっていう……………いや、わりとマジで。



「――納得する、と言った心が挫けそうなんですが？」

制作を指示した人間の記憶＋幽霊ボディという二重チートを活用し、殺意しか感じられないデストラップ塗れの遺跡を突き進むこと数時間。

目の前に積み上げられた財宝を前に、三度頭を抱えるユズちゃんの姿がありましたとき。

《冒険者が宝を前にしたんだから、もつと喜びなよー。ほら、これとか凄くない？》

「すごいですよ。すごすぎるんですよ。……これなんか純金ですよ
ね、きつと」

煌びやかな首飾りを摘み上げ、やけっぱちにそう呟くユズちゃん。

……うん、まあ、現実問題としてこんなこつそり換金なんてまず無理だよな。

「ただだけ悪い人間に襲われるか分かったもんじゃないよね。寧ろ死ぬまで襲われるよね。」

「首飾りの形した処刑器具だな、ハハッ」

《確かに首もげそうだけでも。そしてキャラ変わってます戻ってきてくださいユズさん》

明後日の方向に目を据わらせ、乾いた笑いを浮かべるやさぐれユズさん爆誕。

「ちよつとぐらい凶太くなってほしいとは言ったけど、そっち行っちゃらめえ。」

《まあ、この辺の美術的な装飾品については後にするとして……思った通り当時のまま残されていることは確認出来たし、お目当ての実用的な副葬品の方を確認しましょうよ、ユズさんや》

「……………分かりました」

若干やさぐれ感を背中に残したまま、彼女が向かっていくは傍らに佇む豪華な棺。

……女王様が別の場所で潜んだ状態で死んじゃったから、副葬品だ

けが中に残ってるんだよね。

そして、その品目についても頂いた記憶の中にバツチリ残ってます。

女王様当人がそこまで？　と思うかもしれませんが、当時の人々とつての副葬品というのは、そこに葬られる人間が死後の世界に持っていく物、という扱いだったようなので。

そりゃあ、未知の地へと旅立つ際の荷物を自分で確認しない人間はいませんわな。

当の女王様は私に触れて成仏(?)しちやっただので、彼ら副葬品は持ち主を喪ったとも言える。

それを私達が持つていく分には、女王様も気を悪くはなさらないですよ。たぶん。

「……本当に大丈夫ですかね？」

《大丈夫だってば。それに、ほら………必要だと思っただし、さ》

「……レイン？」

あ、やつべ、ちよい本音漏れた？

……ええい、そんな目で見ないでくれ。こういう空気は私にや似合わんのだよ。

——女王様の記憶を頼りに役に立ちそうな……特に戦力面に寄与してくれそうなものを探す。

そうすることで、可能な限りユズちゃんの生存率を上げたい——彼女を納得させるべく色々と理屈を捏ね回したけど、私の本音はそこにある。

既に彼女は冒険者としてそこそこ、それこそあっさりやられはしない程度の位置には居るけど、可能ならもつともつと強くなつて欲しいんだ。……ひとえに、死んじやわない為にさ。

幽霊が何を、と思われるだろうけど……今の私には何人もの死んだ人間の記憶があるわけだよ。

今世の『私』に、この世界で会った二人、今回の女王様——彼女達が抱いた死ぬ寸前の記憶、死に至る瞬間の感情を、私は知ってし

まったんだ。

……きついんだよ、あれ。

少なくとも、見知った人間に同じ思いを味わって欲しくない、と思うぐらいには。

絶望と諦念の中で死んだ『私』は勿論、女王様のような覚悟の上のそれであっても。

だからこそ、私の全力全精力全霊能力をもつてでも遠ざけてやる。そう決めたんだよ、私は。

「……分かりました。そういうことなら、わたしも腹を括りますよ、レイン?」

《……むう》

生暖かい視線に、堪らずそっぽを向いてしまった。

……だから言いたくなかったんよお。こんなの私のキャラじゃないんよお。

……もし、万が一、私達の努力の甲斐も無く『そう』なっってしまったとしたら。

そのときは、まあ……私が即座に彼女の苦しみを止めてあげることになるのだろう。

幸か不幸か、それが出来る能力が私にはあるみたいだし。……考えたくもないけどさ。

それはそれとして何に由来する力なんだか、未だにさっぱり分かんないんだけどね。

何で幽霊が幽霊成仏させてるんや。いや本当に。

「——で、レインが言ったのって……これ、ですよね……?」

そう言ったユズちゃんが棺から取り上げたのは、その腕ぐらいの長さの金属製の短杖。

杖全体は暮れの夕日を思わせる深い朱色の金属で形成され、先端には深緑に輝く大粒の宝石。

……おお、こうして見るとユズちゃんの瞳の色にそっくりやな。

膂力は見た目相応な彼女が片手で軽く持つていることから、重さは言うに及ばず。

全体にそれっぽい装飾——私に魔法に関する知識がゼロなのでそう見えるが、女王様の記憶に曰く、持ち主を補助する魔法陣的な云々——が精緻に彫り込まれ、素人目にも分かり易く高尚な魔法の品感を放っている。

持ち手側にも漆黒の宝石——先端の物よりやや小振り——があしらわれ、この二つの宝石が杖の効果をより高めている……らしいですよ、はい。

《うん、見るからに凄い杖。記憶通りだけど。……で、どんな力を持つてるかは分かる?》

「……わたしに分かるのは、魔法を使う時に何らかの補助効果があるだろう、ぐらいですね」

苦笑混じりの見解を聞くに、学校で習った程度の知識では高度過ぎてサツパリとのこと。

そのかわりにと言うか、持つただけで身体の中の魔力の流れがより円滑になった感覚があり、魔法使いにとって相当に有用ということだけは感覚的に理解出来るんだそう。

「しっかり調べようと思うと、大きな街で『鑑定石』を使わせてもらえないかと」

《前に言ってたスキル特定のみ? 物でもいけるんだ》

物品鑑定にも使えるのか『鑑定石』。

……あくまで実用に関する情報が分かるだけで、宝物的価値とかは対象外? さいで。

「使用料を取られますけどね。それだけの価値はありそうですけど」

《ほほう……ま、今回に限っては性能の調査は必要無いけどね》

「えっ？ ……レインには分かるんですか？」

《私にや分からぬ。しかし女王様の記憶からそれらの情報を探せばよいのだよ。使用感とか》

「……使用感」

その響きに、何だかなあ……という感じの表情を浮かべるユズちゃん。分からないでもない。

いやでも大事だよ、使用感。某通販サイトとかだと「お前明らかに使ったことないだろ」なのが混じってたりで、あんまり当てにならないかったりするけども。

そんなわけで、この杖に対する女王様の評価をどどどん。

・消費魔力量軽減 ……通常時の半分ぐらい。 ……すごい。

・魔法威力向上 ……同じ魔力で倍ぐらい。軽減合わせて四倍。

……ヤバイ。

・魔力回復速度向上 ……握ってるだけで超回復する。 ……なにこれこわい。

・魔力蓄積機構搭載溜めて、撃てば威力増加。 ……え、ちょ、どんだけ溜められるの、コレ？

・自動修復 ……表面の魔法陣含め、擦れたり削れたりしても即再生。 ……えっ、マジで？

・高耐久 ……大型モンスターに踏まれても折れません。

……調べたの？ ええ……。

《——以上、女王様の個人的感想含む。今の時代の杖としての番付はどんな感じ？》

「………その、国宝級とか、そういう域じゃないかと」

《ほうほう国の宝かー。女王様の持ち物だもんね。さもありなん》

「いやいやいやいや、女王様も明らかにドン引きしてるじゃないですか!？」

いやあ、なんか国のお抱え職人一同が予算自由と告げられて大暴走

した結果だそうですよ。

出来上がった杖の性能、および使われた金額に女王様も総白目でお喜びあそばせたそうで。

……ちなみに生きてる間にこの杖を振るったのは性能チエツクの一回こつきりだったとか。

《ただ、一つだけ問題があるんだよねー》

「一つどころじゃないです。……まあ、見た目に関しては先端を除いて布を巻けば、高価な短杖で誤魔化せるでしょうけど……で、レインの思う問題というのは？」

《よくぞ聞いてくれました！……名前どうしよっか》

「……はい？」

おう、鳩が豆鉄砲くらった顔ってこういうヤツなのかね。

いや、名前だよ名前。ここまで特別感ある武器が『女王様の杖』じゃ格好付かないじゃん？

勿論、杖が完成した際に付けられた名前はある。

しかし今の言語には無い音がふんだんに使われてて、この世界の現代人には発音出来ないよ。

意味も私にしか分かんないし、折角の強力な武器がそれでは勿体無いと思わんかね。

「……いえ、その、そんなことより……」

《それにほら、今度からユズちゃんにも『二つ名』が付くって話になつてたじゃん》

「あ……ええ、まあ」

今回の盗賊退治依頼完了で、ユズちゃんはめでたくDランクへの昇格が決まり、それに合わせて『二つ名』の取得も決定したのである。

……誤解の無いように言っておくが、Dランクになると必ず二つ名を貰えるわけではない。

冒険者の中でも突出した能力、スキルの持ち主をその地のギルド員が推薦、その周辺ギルド間の協議の上で、二つ名を与えることが決ま

るらしい。

特異な『調教』スキル——という事になっている——によって目を付けられていたからこそ近々Dランク、というえらく早い段階からその可能性を示唆されていたわけだ。

普通は早くてもBランクが見えてくる頃にならなければその兆しすら与えられないらしい。

いやはや圧倒的じゃないか、我が相棒は。

《あ、折角だし決定した二つ名を聞いてから、それに合わせた名前を考えよっか》

「……………ええ、まあ、いいですよ、それで」

……最後に小さく「なんでも」と聞こえた様な気がするが、きっと気のせいだ。うん。

それじゃ、無事に貰うものも貰ったし帰ろっか。

「……………無事にここから帰れますかね、わたし」

あー……………帰るまでがデストラップダンジョンだからね。

私が居るから大丈夫大丈夫。たぶん。

Chapter 3 C3-1 狐憑き？

《うーむう……………》

「…………どうしたんですか、レイン？」

広大な山林に挟まれた街、ミイグル。

前回が海辺の街だったので、次は山間^{やまあい}……なんてのは関係なく、単に例の墓地から最も近かったという理由で滞在していた街の中。

そこで私は今、この世界で受けた中でも一二を争う——まではいかんわ。めちやくちや色々あったし、せいぜい七八ぐらいだわ——
衝撃に額を押さえていた。

《いや、その……………こういう方向で来たかと。ユズちゃんは予想してた？》

「まあ、スキルによってネズミや虫を扱う姿が注目された結果なわけですからね。外から見れば」

——冒険者に付けられる『二つ名』。

それは対外的な評価及び実力の指標となる『ランク』とはまた別に、個人を表す目に見えた証。

一定以上の名声を得た者、もしくは特別な功績を挙げた者ないしその周囲が強く希望した際に、彼ら冒険者の互助組織たるギルドより与えられるものだという。

《……………当人としてはどうなの？ 気に入ってる？》

「良し悪しもそうですけど……………感慨深いなあ、というのが大きいですね」

さて、授与の流れはそれとして、では実際の呼び名はどのように決まるのか？

基本的には、それまでの活動実績を踏まえてギルド側がそれっぽいものを考えるらしい。

既に浸透した通り名等が存在するならば、そのままそれを採用することが多いそうだが。

「……………レインは気に入らないんですか？」

《え？ ああ、いやいや、そういうんじゃないのよ？ これはこれで……………うん》

「……………」

今回決まった名前も特段波風立てなきやならんような代物じゃない。

ギルド側としても、有望と見込んだ人間に不名誉な名付けをするはずもないわけで。

だから、そう……………何の問題も無いんだよ？ 付けられた当人の反応からしても、間違いなく。

《……………でも良かったの？ こう、付けたい名前があつたりとかは？》

「……………いえ、あまり考えたことも無かったです。第一、もつと先の話だと思つてましたし……………」

例外となるのは、当人が特定の名前を強く希望した場合など。

また、どうしてもというなら再審議を求められる制度は用意されているという。

……………そこまでこじれた例は本当に数えるほどしか無いらしいが。

「ああ、でも、やっぱり……………自分の中に喜びがあるのを今、少しずつ実感してる所どころですよ」

《そう……………そっかあ》

わりと珍しい感じの笑顔になつてゐるあたり、当人的には本当にまんざらではないらしい。

だから、まあ、何も問題は無いんだよ。……………私が気にしない限りは、
さ。

「Dランク冒険者——『狐鼠姫』のユズ。……えへへ」

……かわいいよ？　かわいいんだけどもね？
いやあ………これが世界間ギヤツプってヤツかあ。



《——ちよつとその辺飛んでくるね》

日も落ちて、宿に戻った後の事。

難しい顔で何かぶつぶつと呟いていたレインは、不意にそう言つて天井へと浮かび上がった。

「え……あ、はい。いつてらっしやい？」

《うん、また明日ね。おやすみ》

「あ……」

その返答に振り返った視界に映ったのは、天井の向こうへと消えていくレインの足先。

いつも賑やかな彼女が居なくなつて、残るのはシン……と静かになつた部屋。

……今に始まつたことでもないの、とつくに慣れているはずなのだけど。

「……ちよつと無神経、だったのかな」

冒険者として、二つ名が付くほどになれたのは正直に言つて嬉しい。

間違いなくレインのお陰だと分かっているけど、それを踏まえても、なお。

……そんな風に舞い上がった気持ちでいたからなのかな。

いつも通りな筈のやり取りの中でほんの少し、彼女との間に壁を感じ

じた気がしたのは。

——幽霊であるレインは、眠らない。

旅の間、わたしが眠っている間の番をしてくれるお陰で、寝不足で疲弊する心配もない。

それに対して《幽霊の有効活用》《まさに適材適所》とレインは笑って言うけれど、どうしても申し訳なきが先に立ってしまう。

……翌日、起きたわたしに殊更元気に話しかけてくるレインを見てみると、猶更に。

——眠らない、食べない、疲れない。

良いことばかりのようにレインは言うけれど、彼女だって元は普通の人間だったはずだ。

もしわたしがそんな身体になってしまったら、果たしてあんな風に笑っていられるだろうか。

あんな風に、いつでも明るく振る舞っていられるだろうか。

……本当に、いつも、いつでも——笑っているのだろうか？

わたしが街の宿で泊まる時、いつもレインはどこかへ飛んでいく。

始めの頃に《寝顔をじっと見られてたら寝にくいでしょ？》と言われて、頷いたのだけだ。

わたしにしか見えないレインは、わたしが眠っている間、何をしているんだろう？

……わたしの知らない所で——わたしの知らないレインは、どうしているんだろう？

「……女王様の記憶、か」

古の女王様の言葉を伝える為に、わたしの身体を使ったレイン。

そのとき、その言葉から迸った威厳と威圧で幾人もの冒険者がたちまち気を失ってしまった。

そんなつもりじゃなかったとレインは焦っていたけれど……もしかしてあれは、久し振りだったせいでやり過ぎてしまったんじゃないだろうか。

「レインだったら……本当に、詰めが甘いんだから」

多分、それだけ本気で焦っていたということでもあるんだろう。

あの時わたしにした説明の中で矛盾があったことに、多分レインは気付いてない。

女王様らしい仕草について記憶から倣ったと言っていたけど……それが本当ならあの口調はどう説明するというんだ。

女王様の時代の言語と今の言語じゃ全く違っているのだと、あんなに何度も念押ししたくせに。

あんなお姫様のような言葉遣いを、いったいどこで学んだのか。

その源が古の女王様の記憶でないとすれば、自ずと答えは見えてくる。

「……たしか、南の山を越えたところにある国で、急死したお姫様の話があったはず」

初めて会ったときに聞いた「死んでから一月か二月ぐらい」というのが本当だったら、時期にもそこまで違いはない。

伝え聞いた話とは少し違っているけれど……女王様の言葉を代弁していたあの時の振る舞いが、彼女の素に近いのだとすれば、その違和感も少なくなる。

「……Dランク、かあ」

件のお姫様の死因は病死ということになってはいるけれど、それまで全くの健康体だったお姫様が突然人前に現れなくなり、その一年後に突如亡くなったという発表がされたんだとか。

……こんなの、何か後ろめたい事があったのだと嫌でも分かっ

ハイどうもー、陽気な幽霊レインちゃんですよー。

ただいま夜空に浮かぶお月様をバックに、適当に歌声響かせながらのヒーローごっこ中です。

いやー、毎度思うけどやばいねこの開放感。

下を向けば見渡す限りの大自然。上を向けば輝く星々の大パノラマ。

おまけにこの高さなら、どんだけ声を張り上げても騒音公害とか言われる心配も無いときた。

今のところ、幽霊ボディが一番得したと思ってるのが、こうやって特に理由も無くおもいつきり大声で歌えることだったりするんだよねえ。

こんなに気持ちいいなら、前世でも尻込みせず一人カラオケにでも行くべきだったかな？

いやまあ、ここまで爽快なのは空飛んでるおかげもあるだろうけどね。

飛行速度も上がって疾走感もマシマシですよ。やつふう。

先日は怨霊騒ぎから女王様降臨まで、一連の流れで結構な人数を大いに、しかもそれなりの日数ビビらせたおかげで『靈力源』もどっさり回収。

それによって基礎性能(?)がまたちよいと上がったわけだ。その一つがこの飛行速度。

遂に『浮遊』から『飛行』の域に入れられそうな速度になってきました。

いやはや、これで探索性能も益々上がりますなー。

いやいやしかし遊んでばかりもいられん。前回の反省と能力のより詳しい検証をしとかんと。

特に憑依状態で初めて気合い入れて声出して、あんなことになったからね。

今回は結果的に面倒が減ったが、知らん能力が毎度そう都合よく作用する保証などないわけで。

……いやほんとマジで焦ったわ。アレがぶっつけ本番の恐怖か……。

【憑依】状態で『叫ぶ』ことで、謎の……本当に謎な威圧により周囲の人間を昏倒させる能力。

ただし、一定以上の実力があれば耐えることも出来るらしい。要検証。

……真面目に割と有用そうではあるよね。憑依前提の能力だから緊急時限定だけど。

ひとまず【叫喚】とでも名付けておくか。

モンスターにどの程度効くかとか、今度こそちゃんと検証しておかないとだなあ。

続いて新たな仕様？ が見つかった【鬼火】君。

火のように見えるだけで、熱も無ければ着火も出来ない彼(?)でしたが、唯一御札は燃やせることが判明。更にそうすると他の人間にも見えるようになるということが分かりました。

ただしユズちゃん曰く、その場合も相変わらず熱は持っていないとのこと。

……身体に貼った状態で燃えてたし、熱あつたら割とマズかったね。ぶっつけ本番の以下略。

しかしそれはそれでエネルギー保存の法則はどこへ……ファンタジーにそれは野暮か。

《———で、後は……この部屋か》

【記憶の部屋】なる名称を新たに与えた、私の中(?)に生まれた謎空間。

今までは何となく「記憶を見たいな」と意識を向けると柵が見える、みたいな感覚だったのが、今は【入室】を意識すると部屋の中に居るようになった。

……何とも形容しがたいね。変な感覚だけど、ちゃんと外の様子も

見えてるし。

例えるなら特撮ロボの操縦席内と、そのメインカメラが映す景色が同時に見えてる、みたいな？

この状態でもちやんと外にある（？）私の身体は動かせる。

……ながら運転してるみたいで行儀悪く思えてくるな、コレ。衝突の危険なんか無いけども。

内部については、広間と呼ぶほどでもないけど手狭には感じない。床や壁は木製……に見えるけども、この辺は私が『そう』作り上げただけだよ、多分。

例外になるのは、外から取り入れられた——私ではない部分だけのはず。

今世の『私』ことヤーネ嬢の半生の記憶を収納した棚。

初めての人里で出会ったミナ少女の、大部分が削れてしまった記憶を収めた小さな棚。

マースルの街の女性、ロザリー氏の僅かな記憶を留めた小箱。

そして今回の女王様の……九分九厘が自身の遺体に憑依中の、何も出来なかつた記憶の大棚。

……これで発狂しなかつたって、覚悟ガンギマリ過ぎん？ 流石女王を務めた人間か。

しかし殺風景だなー、絨毯ぐらい欲しいなー、紅い絨毯——ああうん、出たわ絨毯。

棚の上に乗せた写真といい、四人の記憶以外は全部私の一部ってことだね、やっぱり。

……好き放題家具を出そうとしたら霊力使うのかな、これ？

いや、外の何かに対して働きかける能力ならともかく、私の中(?)を改装(?)してるだけなわけで……何にせよ必要性を感じないから放置でいいや。誰に見せるでもないんだし。

………しかしまあ、不思議だ。……何がってほら、ちよいと異色過ぎやしないかね。

私がイメージする『幽霊』に掠りもしてない気がするんよ。この【部屋】関連の能力だけが。

今までの「やってみたら出来ちゃった」な各能力が見付かったのは「幽霊っぽさ」から連想して「出来るかも」から「やってみた」のが要因であることが殆どだ。

けれど【記憶の引き受け】(暫定)に【成仏促進】(暫定)、ついでに【感情吸収】にしても、能力を見付けたその時に「出来そうかな」と思った覚えは全くもってありやしない。

そう考えるとやはりこれらは、私とは別の『何か』が関係しているのではないだろうか。

それに最近忘れてたが、私が『誰の』幽霊なのかもいまいちハッキリしないし……

いやそもそも幽霊なのかどうかもいよいよ怪しく……ぬむむう――

………もういいや、考えるのメンドクサイ。

第一、考えて答えが出るような問いとも思えん。

何故か彷徨える霊を成仏させられる、陽気な『幽霊っぽいナニカ』。略して幽霊。

もうそれで良いじゃないか。正式名が分からなくて困るわけじゃない。

《……よし。気を取り直して杖の名前でも考えよう、そうしよう》

ユズちゃんの生存率を上げるべくちよいと強引に握らせた、元は女王様の副葬品である例の杖。

普段は目立たないよう先端だけ露出するように布を巻いた上で、腰に差す形で携帯されている。

壊れにくさなんかもバツチりだし、これは間違いなく今後長い付き合いになるだろう。

ならば格好良くて、しつくりきて、愛着が沸くような名前を考えてやらなきゃーね。

……本人は正直どーでもよさそうだったけど。良いじゃないか、私の自己満足でも。

今はそのぐらいどーでもいい事に頭使ってたいい気分なんよ。

《さて、無難なのは神話なんかの有名どころからとつてくることだけど……》

今回それは問題あるのよなー。主に約一名から断固たる抵抗を受ける構図しか見えない。

あと変に捻った名前付けて、説明が必要になるのもよろしくない。こういうのは最低限字面からイメージ沸くのが条件よ。

となると特に説明の必要無しに分かる名前で……あと可能なら私の中ちゆうに……もとい、遊び心にヒットして、それでいてあの二つ名にマッチするような……むむ、何気に難題だのう。

今朝決まったばかりのユズちゃんの二つ名、『狐鼠姫』。

……虫と鼠を操る様から「昆虫こんちゆう」と「鼠チユウ」を合わせたネーミング？

いや狐コどつから出てきたんよ。……狐が付いて「狐憑き」？ 誰が

狐だ！ 私か（自己解決）。

とまあ冗談はさておき……「その手の」依頼を解決してきた実績に紐付いた名前なんだろうね、真面目に考えると。ギルド側はその辺り把握してたってわけだ。

そんで「そういうもの」と「狐」を結びつけるのは世界を隔てても共通だったと。多分だけど。

《……あ、いつその事その方向で、怪談からとつてみるとか？》

神話や英雄譚を由来にするよりは、ユズちゃんの心のハードルも低

くなるかもしれん。

さてさて、それなら何か良さげな怪談は——

『あああああああああ——————————ツ!!?』

………誰だよ、こんな時間に大声で叫んでるのは。近所迷惑な。

どの口が言う？ いやいや私はちゃんとその辺り配慮して高空^{ここ}まで上がってきたんよ？

ご近所の安眠妨害にならないよう、こうして誰の耳目も届き得ない遥か上空に——

………おう、待て、ウエイト^{w a i t}。

ここ上空何百メートルだと思ってるんだ。

気が乗ってぐんぐん飛んでたもんだから、森や山が足の方向に広がる高さだぞ。

そんな私にこうして目線を合わせてくるとは貴様いったい——

『あ、貴女は何者ですか?!?』

………こっちの台詞だ。ばかやろう。

C3—2 夜空の歌声

——僕の名前はラビ。先日、最下級Gランクを抜けたばかりのFランク冒険者です。

冒険者と言ってもまだ名ばかりで、こなせる仕事は便利屋、雑用係と言われそうなものが精々。

一応、叩き売りされていた金属製の短い剣を買い、その店員さんに教わった通り毎日手入れはしていましたけど、鍛錬以外で振り回したことなんて殆ど無くて。

依頼の為に立ち入った森の中を歩く時に、邪魔になった蔦や枝を薙ぐのに使うぐらいでした。

………そう。そうだ。僕は、森の中を歩いていた。

ギルドで受けた依頼、『薬草採集』を目的に、馴染みの採取地に向かっていたんだ。

あ、いえ、結構どこにでも自生していて繁殖力も強い植物なので、特に採取地と決まった場所があるわけじゃないんです。

けど何度目かの同じ依頼を受けて採取していた時に、まとまった量が群生しているところを偶然見付けていました……

だからその日も朝早くから、真っ直ぐその場所に向かって——

気が付いたら僕は、空に浮かんでいたんです。

いつからなのか、仰向けになって、流れていく雲をじっと眺めていて。

「どうしてこんな事してるんだっけ……？」と思った瞬間、初めてのその状況に気がきました。

それからすぐは訳が分からなくて、とにかくその場で叫んだり騒いだりしていた筈です。

そのうちに飛ぶ……と言って良いのか、思う方向に進めるようにはなったので、とにかく地上を目指して降りた後で、街に向かって飛んでいきました。

それで、街門のところで顔馴染みの門番さんを見付けたので、声を掛けたんですが——はい、気付いてもらえませんでした。まるで僕が見えていないみたい……

気付いてもらおうと肩に伸ばした手がすり抜けてしまうのを目にして、いよいよどうしていいか分からなくなっただんです。

——そうして途方に暮れていたその時でした。

空のずっと上の方から、とても楽し気な、美しい歌声が降りてきていることに気が付いたのは。

身体の芯を突き抜けるその歌声に、不安や心細さが柔らかく溶かされていくようでした。

まるで心の奥深くにまで暖かく語りかけてくるようで……それで理解したんです。

ああ、この声は——迷える者を教え導く、女神様の歌声なのだ、と。

この歌声の導く先へ行けばいい。

そう思った僕は、夜空に向かって飛び始めました。

じきに歌は聞こえなくなりましたが、僕の中にもう不安はありませんでした。

そうして飛んで、飛んで、飛んで——

いつもの森が足元に小さく見えるぐらいにまで飛んだところで、僕は見付けたんです。

月明かりを背に、不思議な衣装に身を包んだ神秘的な女性の姿を――



《――私は女神およびその眷属的な何某^{アレ}ではなーいっ!?》

長々と語らせておいてなんだが、取り敢えずそれだけは大声で主張させてもらう!

というか人の与り知らないところでどんな解釈をしてくれてるんだ少年よ!?

……ええい、シヨックを受けた様な顔になるな!

神秘的な衣装って、こりやただの学生服だよ、学校指定の!

ほんともう、何でどいつもこいつもそういう誤解をするかな!?

っーか歌声聞かれてたよ。べた褒めされたよ。一種の吊り橋効果か?　こそばゆいわ!

《で、では、僕はどうしたら……》

《知るかっ!?》

見ず知らずの人間にいきなり導師扱いで進退全てを託されても困るわ!

おいこら、そんな捨てられた子犬のような目をするんじゃない。

!?!?　　十六?　　……タメ年じゃん!　　マジかよ

……オーケイ、クール、じゃない。クールになれ、私。

思わず突き放してしまっただが、今の彼にとって相談出来る相手というのが極端に少ないことを、他ならぬ私が誰よりもよく知っているではないか。

ひとまず彼の証言で分かったことを整理しよう。そうしよう。

夜空の中、雲と並走する私の前に突如現れたこの少年。

生身でこんな上空に来れるはずも無く、当然霊体だ。透けてるし。

そして当人の証言からして、自分の身に何が起きたのか、今の自分がどんな状態なのかを何一つ理解出来ずに混乱を極めた状態で私の歌声に……誘われてきたというのが大筋の経緯らしい。

『導く』というのも全くの勘違いとも言えん。……その、ほら、最悪私に触れば然るべき所には逝けるだろう。彼の状態を推察する限りは、おそらく、きつと、十中八九。

だがしかし……うん、まずは色々確かめるべきだ。思い込みで行動に移すのはよろしくない。

私が転生する原因になつたどこぞのトメさんがくれた教訓だ。……今頃どうしてるんだらうね、轢き殺されるとこだった嫁さん。確かめようもないけどさ。

《……君はその状態になつてからどのぐらい時間が経ってるか分かる？》

《え——あ、は、はいっ！ え、ええと時間は……あれ……？》

《おう……思い出せる範囲で良いから。……君はそうなつてから、朝日をもう一度見た？》

《み、見てません。……と、思います》

すると大体半日、最長で一日、かな。

それでも既に結構……普通はこんなに速いもんなのか。記憶の欠落って。

あらためてラビ少年の姿をじっくりと観察。

……全体的に青白くて、輪郭がところどころボケてきている。あ、

でもまだ足はあるな。

髪が辛うじて黒髪だったと分かるぐらいだし、肌の色なんかもうサツパリだね。

これがもう少し時間経つと人型も保てなくなって、言葉も《オアア……》になるんだね。

……あれはほんと怖かった。ミナちゃんには悪いけども。

《あ、あのう……それで、これから僕はどうしたら……》

《んー……》

……さて、どうする？

『型崩れ』の防止手段なら私は知っている。教えることもまあ、出来なくはない。

しかし様々な方法によって延命(?)しようとした先達の末路もまた見聞きしてしまってる。

誰かをビビらせて——というのを長く続け、目的意識以外が削れ去ったらしい前例に始まり、生きた人間への【憑依】なんかは、昔のユズちゃんが経験したトラウマ体験を誰かにさせるということになる。……これこそ悪霊ルートだよな、思いつきり。

骨への【憑依】はその辺の問題こそ無いんだけど……ちよつとだけ『追体験』してみた限り、あれは発狂しなかった女王様が例外過ぎると思うんよね。凄過ぎて参考にならんやつ……。

というか、そもそも延命……うん、敢えて『延命』と言わせてもらうが、させてどうするんだ？

何の意味があつて『延命』するんだ？ 幽霊が。

何か未練を残して死んで……というならそれを果たすために、でもいいだろうけど——

《……あれ?》

《ど、どうしたんですか？》

《いやその……君、何か未練があったの？》

《……えっ？》

そうだよ、そもそも何かしらの『未練』が無けりや幽霊にはならんはずじゃないのか？

少なくともこの世界の幽霊はそういう仕組みのはずだ。ユズちゃん曰く。

……私の事は早めに横に置いてく。『(略して)幽霊』は話に入ってくんな。ややこしくなる。

私を知っている二つの前例——ミナちゃんにロザリーさん——は、どちらも死に際に抱いた強い感情が原因で幽霊になったらしいと思える。それぞれの記憶を見る限り。

時間経過で削れていく中でも原因となった記憶だけは最後まで克明に残るはずだ。……彼女達はそれでひどく苦しんでいたわけだが。だがさっきの話にはその辺が出てこない……どころかそもそも彼は自分が死んだ瞬間のことさえ認識していない。

それでもこうして幽霊になっているとなると——

《未練というか、こう……病気の母親の為に薬代を稼いでた的な何かがあったりは？》

《はあ……？》

これは古の女王様の幽霊化パターン。実は彼女も自分が死んだ瞬間を明確には認識しておらず、その前から抱いていた非常に強い目的意識が要因となったっぼいんよ。

自分達が遺してしまった過ちを何が何でも後世に伝えなければ、という思いが彼女の魂を現世に留まらせたのだと考えられるんだよね。

このケースを考えるに、前々から「どうしても」という想いを何かしら抱いていれば死ぬ瞬間を認識出来なかったとしても、幽霊になることはあり得そうなんだが——

《いえ、特にそういうのは。家族もみんな元気になっていますし、冒険者に

なったのも他に出来る事が無くて仕方なくでしたから》

むう、空振りか。ますます解せぬ。こいつ本当に幽霊か？ ……鏡
見ろ？ 映らんよ。

冗談はさておき、彼に何があつて今の状態になったのか調べてみな
いと判断出来んな、これ。

《…よし、さっきの話に出てきた採取地っていうのを見せてもらおう
か。案内して》

《え……？ わ、分かりました。こつち……かな？ はい、こつちで
す》

チラチラ向けられる彼の視線を無視して、少々強引に案内させる。

……こいつまだ私の事を女神様的なナニカと認識してるな、言の端
からして明らかに。

既に記憶が削れ始めていることもあつて、のんびりと説明してる時
間も無いし行動を促す分にはその方がむしろ好都合ではあるけども。

……今すぐに手を触れて【成仏促進】させてしまってもいいのかも
しれない。

しかし彼の状態には微妙に謎が残るし、万が一幽霊以外の何かで、
それを成仏させてしまったとしたら、何というか、ちよつと……気分
が悪い。

後から【記憶の部屋】を活用したとしても、その謎が解けるとは考
えにくいしねえ。

それにしても、生きた人間に触れば感情を吸収、幽霊に触れば成
仏って……ちよい危険物過ぎやしませんかね、私？ とんだ悪霊だ
な。さすが『狐』？ やかましいわ。

どつちも使い方次第であつて、一概に悪い事とは言えんのだけでも
……むむむう。

C3—3 手探り

《——ええと、この辺りになります》

ラビ少年——同じ年を相手^{タメ}に少年呼ばわりは不味いか?——に案内され辿り着いた場所は、たまたま出来た木々の隙間という感じの小広場だった。

確かに彼の言う通り、狭い範囲に一種類の草が結構な密度で生えているのが分かる。

これが件の採取依頼が出されている薬草ということなんだろう。

ちよいと見渡した範囲には、彼に繋がりそうな何かは見当たらなかった。

……まあ、そこに関しては大した期待はしていない。

《それじゃ、手掛かりはここからということ……ちよつと集中するから離れててね》

《え? あ、はい》

そういつてラビ君に離れてもらい、目を閉じる。

今からやるのは、つい先日一気に増えた『霊力源』を基に考え出した、新たな探索方法。

……ただこれ、割と集中力が要るんよ。途中で話しかけられたりすると面倒に思う程度には。

《全方位……『探知開始』!》

《お、おおっ!?!》

……いや、そんな良い反応^{リアクション}されても困る。何か出たりはしないのよ、残念ながら。

ただ単に「念動力」こと私の手（つばい感覚）を、霊力の限りに広げるだけだからね。

幽霊ボディを活かした探索、偵察は確かに上げつない。チートも良

いとこだ。

しかし情報を得る手段を視覚に頼ってるようでは心許ない。幾ら壁も起伏も無視して最短距離を往けるといっても、私の移動速度はそこそこだし、隠れてるものを見落とすことだってあり得る。

そこでもっと効率的な手段は……と考えていた中、ふと頭を過つたのは先日遺跡での一件。

あのとき私は地上に戻らんとするベテラン四人組をまあまあ必死に引き留めようとする過程で、【念動力】の新たな仕様を発見した。

私の腕が届く範囲なら、三箇所以上『手に持つて』動かせる。

これによって主の成仏した物言わぬ白骨を人形劇よろしく動かしたわけだが、驚いた彼らの手で無残にも頭蓋骨を砕かれました。床に散らばった骨片を拾おうとしたら、微妙に範囲を外れていてちよい浮かすのが精一杯だったというわけだが……つまりそれ、触れる感覚自体はあったわけなんだよね。

そこで、改めて私は考えたのだ。

——私の『手』って、果たしてどこまで伸ばせるんだろう、と。

しっかりと物体に影響を及ぼせるのは、私本来の手の届く範囲程度。

しかし範囲外の物体に対しても、手……の感覚を伸ばせば、触った……っぽい感覚は得られる。……毎度ながら形容し辛くて面倒くさいんだよなあ、私の能力全般。

では動かすという目的はスパッと捨てて、伸ばせるだけ伸ばしたなら果たしてどうなるか？

その答えがこの探知技……の皮を被った『手探り調査（幽霊式）』というわけだ。

無数の『手』を全方位に伸ばし、周囲の物体を一斉に触診。

隠れていようが見え辛かろうが、端から端まで触って調べる。

気配を消そうが透明になろうが、私の『手』から逃れることは不可

能なのだよ！ そんな手段が実在してるかどうかは知らんけど！

「触る」だけに留めて「動かそう」としなければ、霊力の損耗はごく微量。

当然、私に「触られた」と分かる、すなわち見破られたと察するこ
とが出来るのはユズちゃんのような霊感体質の人間のみ。

いやはや、実に素晴らしく、そして私らしい身も蓋も無い能力だと
思わんかね？

ユズちゃんにもそう言ったところ「まさにレイン」と呆れ顔。ど
やあ。

今扱える霊力量ならば、ちよつと広い程度の閉空間ならほぼほぼ丸
ごと有効範囲。

野外だと……今触れてるのが、あの辺の木までか。んー……二、三
十メートルはありそうか？

返ってくる感覚は触覚とは多少異質ではあれど、少なくともそこに
ある物が硬いか柔らかいか、滑らかなのかざらざらなのか、ぐらいの
違いは何とか分かりますぜ。

先日の女王様デストラップダンジョンの墓のような入り組んだ場所でも大活躍です。何し
ろ「触る」意識を抜いとけば「触らない」ことも出来るからね、私。

槍やら毒やら飛び出す罫でも、部屋や通路每どうこうって感じの大
掛かりな罫だろうと、壁一枚透過して「触ってみれば」その存在は一
発で分かる。

そうやって所在さえ掴んでしまえば、後は顔突っ込んでじっくり調
べれば良いのだよ。

今回の場合は植物、土、虫、石、そしてそれら以外の何かの判別程
度なら余裕……要はこの辺に人間一人が倒れてるなら、着てる服やら
肌やらの感触ですぐに分かるって寸法だ。

さあて、後は探索済み範囲を広げるべく『手』を伸ばしながらゆっ
くり移動ーっと。

草がわっさわっさ——

石がごろごろ——

ああ、この辺土肌露出してるな——

お、この木の洞案外深い——

う、毛虫……でも大してリアルな感触は返ってこない。いやーありがたいつすね。

………居ねえな。まあ、予想通りではある。

やはりラビ君の身に何かが起こったのは、この辺りに辿り着く前だったんかね。

彼の供述でもここに向かったとはあっても、辿り着いたとは言ってなかったからなあ。

今のところ、私が想定しているラビ君の死因（？）は次の二つ。

一つは、モンスターないし大型の獣に死角から襲われ一瞬で意識が飛んだ、というもの。

何かに集中していて——特にここで薬草採取に気を遣っていた隙に——つて可能性が高いと思ってたが、どうもここには何の痕跡も無さそうだ。

もう一つは、ここに来る途中で足を滑らせたか何かで崖下にでも転落したんじゃないかと。

まあ、どっちの場合でもこうして【手探り】を続けつつ、彼の行動経路を辿ってけば何かしらは見付かるでしょ。たぶん。

………人為的な事件の可能性？　そこは考えてるとキリ無いから横に投げて放置よ放置。

イヤ、だって、そこまでは知らんもん。手を出す義理も縁もありやしない。

………それ言ったら、今こうしていらん手間掛けてる義理も無くな？

その辺は、まあ、掛かる手間の尺度の問題というか、その………良

いじゃないか、別に。

《——あ、あの、どうですか?》

……ちよいと、ラビ君や。話しかけるなつて言ったやん。

いやまあ、流石に無言が長すぎたか。私も何か余計な思考に逸れてきてたし。

《……次は、ここに向かうまでの道を調べます。案内して》

《え……は、はい……》

そして例によって説明はしない。面倒くさ……いからではナイヨー、ホントダヨー。

少しでも彼の記憶が欠落する前に行動しようというのが建前でして、H A H A H A……ふう。

《あ、あの……一つ、お願いしたいことがあるのですが……》

《……うん? お願ひ?》

《は、はい! その……聞いて頂けるなら……》

……まあ、取り敢えず聞くだけは聞こうじゃないか。

今君に何か頼まれたとして、私にそれを叶えられる保証は微塵も無いが——

《手を………僅かで構いませんので、御手を触らせては頂けませんか?》

《………は?》

ど、どうした少年。ちよつと放置され過ぎて、おかしくなったか?

それともこう……アレか? 思春期特有の発情期的なアレだったりするののか?

《え!? い、いえ、決してそういう事ではなくっ! 何故か、その……

貴女の手に触れれば、安心出来るような気がすると言いますか……》

あー……………これ、アレだ。

私が出会った最初の幽霊こと、ミナちゃんが言ってた……………アレだ。何故そんなことが私に出来ると感じたのか、その根拠は不明な——アレだわ、多分。

彼女の場合は存在、というか魂(?)が限界ギリギリな状態だったからだと思ってたけど、まだ余裕ありそうな彼もってことは、これは幽霊の本能みたいなものなんだろうか？

……………というか、こんなこと言ってくるって時点で、彼が幽霊なのはほぼ確定か？

しかし何が理由で幽霊になったのかは未だ謎のまま……………彼の『記憶』を浚えば何か分かるか？

いやいやしかし……………うーむ……………やはりここは——



「——っ!？」

二つ名決定翌日。いつものように冒険者ギルドに足を踏み入れた瞬間、一斉に向けられた視線に思わず息を呑んだ。

……………悲鳴を喉で抑えきれたのは、レインに鍛えられたお陰、かなあ……………。

こればかりは感謝したくないなあ、なんて思いながら、視線を横切って依頼書が張り出された掲示板に目を向ける。

……………いつもならレインも一緒に依頼の確認をしたがるのに、まだ戻ってきてないなんて、昨夜はどこまで飛んで行っちゃったんだろう？ ……心配はしませんけどね。レインですし。

「……………おっー!」

「……………?」

依頼書の前に居た冒険者の一人が、わたしを見た途端にギルドの外

へ走り出していった。

……何だろう。こんな反応をされたのは初めて——じゃないや、うん。

レインと一緒に旅をするようになって、彼女の偵察能力をわたしの『スキル』という触れ込みで活動することに決めて——それからは結構見るようになった反応。

つまり『それ』を期待するような、それでいて急ぎの依頼が舞い込んだという証。

「……人捜しの依頼、ですか？」

「あ、ああ。ユズさん、いや『狐鼠姫』に任せられるならそれが一番だからな」

「ああ、やっぱり……ではさっきの人は……」

「依頼人を呼びに行ったんだ。かなり切羽詰まってるらしくてな……」

緊急性が高い行方不明者の捜索、かな？ それならやけに注目される理由も分かる。

……そんなに皆でチラチラ見なくたって、受けますよ。受けない理由なんて無いですからね。

「……………あれ、今…………？」

「え、ああ…………ほら、流石に自分より高ランクの冒険者をちゃん付けはちよつと、な」

「そ、そんなのわたし気にしないですよ？」

「イヤむしろ気にした方が良いんじゃないか？ 君、じゃなかったユズさんならもつと高ランクになるかもしれないし、そうならもつと格式張った依頼が来ることもあるだろうし…………」

……言われてみれば、そうだ。

レインの為に、わたしはもつと高ランクの冒険者を目指さなきゃいけない。……師匠に会いに行く為、というのもあるけど。

ランクが上がれば受ける依頼も相応のものになり、依頼人も大きな

商店の主や、場合によっては貴族になることも考えられる。

……うん、これからは少しずつ高ランクの冒険者らしい振る舞いも身に着けていかなないと——

「……ッ!? ま、まあ急には変われないだろうし、ほどほどにな!」

「えっ? ……あ、はい。そうですね」

先日会った高^{サー}ランク^ンの女性^{シャ}冒険者^キを参考に、高ランクらしい威厳のありそうな顔を……と考えていたら、何故か慌てた様子で引き留められた。

……何か変な顔にでもなっていたのかな? 今度、レインに練習に付き合ってもらって——

「……ヤツベエ、何だ今の。かわええ」

「何かオレ、ヤバイ方向に目覚めそうになったわ……」

「あ、くそ、俺正面から見れなかったんだ! ズルいぞお前ら!」

………わたしは何も聞いてません。ええ、聞いてませんとも。

レインに見せる前に鏡で確認してからにしよう。うん。

「———お願いしますっ! どうか彼を見付けてくださいっ!」

悲痛な声でそう叫んだのは、それからすぐにギルドに飛び込むようにして入ってきた女性。

それから彼女に遅れて、ついさつき外に出ていった冒険者が頭を掻きながら姿を見せる。

……彼からわたしの事を伝えられて、そのままこの調子で走ってきたんでしょね、この人。

「落ち着いてください。あなたの依頼は———」

「こちらが、この方の依頼内容です」

表から女性の足音が聞こえてきたあたりで席を立っていた職員さんが間に入り、一枚の依頼書がわたしの前に差し出された。

……ちゃんと依頼の体裁が整えてあったんですね。この女性の様子からして相当突発的な事態だったように見えるんですけど。

「……こちらの方が依頼に来られたのは昨日深夜です。既に業務時間は過ぎていましたがあまりに逼迫した様子でしたので……書類整理等々で遅くまで詰めていた職員が特例で対応しました」

わたしの驚きを察したのか、職員さんは疲れを滲ませてそう言った。

……えっと、お疲れ様です。

「昨日から彼が帰ってきてなくて、彼が森に入っていたのを見たって人がいて、森の中は危険なモンスターが出るのについて、私が前から散々言ってきたのに——」

「内容は昨夜から行方不明となっている男性の搜索。また彼はフランクの冒険者です。薬草採取の依頼を受けていましたから、そのために森に入ったと推測されています」

軽く錯乱し始めている女性の台詞を遮る形で、職員さんから詳しい説明が入った。

誰かにこんなに心配される冒険者なんて珍しいな、と思いつつ話を聞いていく。

『狐鼠姫』様、搜索に必要なものはありますか？」

「……最低限男性の身体的特徴や当時の服装、入っていったという森の情報と……『捜させる』にあたり、男性の持ち物か何かがあれば」

……本当はレインが探す分には場所と顔、背格好の情報あたりがあれば十分ですけど、わたしのスキルは虫や小動物の『調教』ということになってますからね。

遺留品のように想像されそうな「そういう物」も、あれば嬉しい、ぐらいには言っておかないと不自然になってしまう。

「え、ええとっ！ 髪は黒髪で！ 肌は色白でも色黒でもなくって！ 背は高くも低くもなくって！ 目が二つに鼻が一つ——」

「何度か対応した職員が用意した人相書きがありますので、こちらを」
何の指標にもなっていない女性の言葉を再度遮って、依頼書の上に人相書きが重ねられた。

……本当に、ギルドの職員つて大変なお仕事なんだなあ。
心の中で職員さんを労いつつ、渡された人相書きを確認して――

「……………えっと、これは」

「とある職員が用意した、人相書きです」

「あ、はい」

えっと、何ていうか……何だろう、これ。

いや、人の顔に見えないとかの致命的な問題があるわけじゃないんですけど……

花が散らされているといいますが、無駄に輝いて見えるというか……

まあ、特徴はとらえていますし、これでも人捜しの目的は果たせますよ？ うん。

……なんかもう、ほんとうに、おつかれさまです。

「……………分かりました。準備が出来次第、調査に向かいますね」

取り敢えず、向かった場所が分かっている上に、街を離れてから二日と経っていないとくれば、レインがアレで調べてくれれば何かしらは見付かりますよね？ 多分。

……本当にレインの力は、「台無し」とか、「身も蓋も無い」とかいう評価を本人が嬉々として下しちやってるのが質が悪いというかなんというか。

「ああつ！ ありがとうございます――」

「ありがとうございます。お気をつけて」

……それは遮らずに言わせてあげても良いのでは？

何にしろ、レインと合流してからになりますね。

わたしがギルドに顔を出していることも予想してるだろうし、彼女のことなら……

《――ユーズちゃんっ》

「……………」

ほら、聞き慣れた声が空の上から聞こえてきた。
噂をすれば……………というのはちよつと違うかな？　なんてね。

相談することは色々あるけど、とにかくまずは受けた依頼の話と、
この人相書き、を——

……………あれ、ちよつと待ってください、レイン？

なんでわたしの視界に、幽霊が二人見えてるんですか？

《連れてきちゃった。…………てへっ》

《え、えエと…………はじめマシて？》

「……………」

視界に飛び込んできたのは、二人の幽霊。

見慣れた顔をイラツと……………もとい、どこか無性に腹の立つ笑顔に変え、拳をコツンと自分の額に当てるといふ、何故か非常にイラツと……………イラツと来る仕草を取ったレイン。

そしてその隣で、所在なさげに佇む、時々輪郭を崩しながら佇む男性の幽霊。

……………ねえ、レイン？　そちらの方はどなたですか？

透けて、その上崩れてきてるといふことは、わりと時間の経った幽霊さん、ですよね？

それとその方、何だか極々最近見た事がある顔のような気がするのですが？

具体的には、そう——今この手の中にある紙面の上で。

「……………どうかしましたか？」

「イエ、ナンデモ」

不思議に思ったらしい職員さんの声に、咄嗟にそう返せたわたしは『不測の事態』というものに随分と『慣れ』を得ることが出来たんだと思う。

それ自体は冒険者としてとても有用な技能だと、頭ではそう判断しているよ？

……でもね、レイン？ わたし、そこに関してだけは絶対に感謝はしないからね？

C3—4 迷える少年

《——だからね？ 何でいつも私の第一印象は神様系なのか、というところについて一度議論をしておきたいと思う所存なのですよ》

「知りません。どうでも良いです」

ぐぬぬう、突っ込み鋭くなったねユズちゃん。あたしや嬉しいよ。

「そんなことより、この道で間違いないんですよね？」

《うん、人の足で行けそうなどこ選ぶとね。そこそこ遠回りなんだけど、しょうがないよね》

私先導のもと道なき道を進みつつも、その足取りに淀みは無く。

時折、手に握る細剣で邪魔になる草葉を刈りつつ彼女は進む。

その姿はさながら森ガール……は服ファッション装の話だっけか。何にせよ今日も頼もしい限りですなー。

「また調子の良い事を……でも確かにこれは、足を滑らせでもしたら大変ですね」

《せやねー》

この山林、結構起伏が激しくて傾斜がきついところも多いもんねえ。

その上、向こうの世界みたいな登山道なんて整備されてないし、豊かに茂った木々の枝葉が空を覆い尽くしちゃってるもんで、よっぽど気を付けてないと方角もすぐに見失うことになるときた。

なるべく安全そうな場所選んでコレだからねー。

下手に距離を稼ごうと険しい道を選んで、気を抜きでもしたらどうなるかってねー。

《……………》

どうした少年、元気が無いぞ？

まだ逝くには早い、頑張るんだ。

「……………それにしても、レイン？ 本当に、本っ当にワザとじやなかったんですよね？」

《そんな心外なあ……私が彼に出会ったのと同時期に搜索依頼が出てたなんて知るわけないやん》

「それは、まあ……わたしが依頼を受けるタイミングを狙ってた、とかないですよね？」

《知ってたら狙ったよ。当然じゃん》

「……………」一瞬、納得しそうになったじゃないですか。断言しないでください、そんなこと！」

——真夜中の遊覧飛行を楽しんでいた私の前に、突如現れた少年幽霊（仮）。

彼が今の状態になった経緯……幽霊であるとする物証を求めて少しずつ、少ーしずつ探索範囲を広げつつ、採取地と街の間、その周辺の山道までを捜し回ること丸一晚。……結果はどうかって？

——何の成果も!! 得られませ

「得たから案内してるんでしょ。何言ってるんですか、レイン？」
ああん、ボケ潰しはらめえ。

……………ええ、まあ、見付けましたよ、彼の身体。一晩かけて、どーにか。

何でそんなに時間かかったかって、そりゃあれよ、先を越されてたんですよ。

崖と呼んでも良さそうな斜面に、おそらく自然に出来たと思われる洞穴。

其処を住処にしていた一体のモンスターに、意識の無い彼の身体は運び込まれていたのだ。

……道理で彼が通った道筋近辺を幾ら探し回っても見付からなかったわけだよ。

発見した少年の身体に、少なくとも私に分かる範囲で大きな外傷は無し。

お陰で血の匂いもなく、獣等呼び寄せることはなかったのだと思われる。

その結果が二足歩行の豚こと『オーク』によるお持ち帰り、だったのは果たして幸か不幸か……

《……………》

というわけで、現在私達に憑いてきているラビ君、どうやら傷心中のようでございます。

まあ、今からモンスターに回収された自分の身体を迎えに行こうってんだから複雑だわな。

「……………わたしも目にする機会が多少はあったので慣れはしてますけど、見たいとは思わないです。ましてやそれが自分の身体となると……………」

《んー、まあ、私が確認したときはキレイだったよ？》

さて、そのオークがいったい何のために？ と、いつも通り『私』の記憶に問い合わせた結果、エライ情報に辿り着いてしまいました。…………『雑食系』なんだってさ、この世界のオーク。

さて、そんなのが少年の身体を己の住処に運搬する目的ということ……………ね？

…………キレイな状態で良かったよマジで。私にグロ耐性は無いんだってばさ。

《しかし、さつきから静かだねラビ君。今なら時間もあるし多少の質問は受け付けるよ？》

《喋るのがむずかしっ……………難しいんです》

ユズちゃんの口が動き、喉が動き、はっとした表情になって、すと目が細められる。

……傍から見ると、何してんだこれ、だなあ。
はい、現在ラビ君【憑依】中でございます。誰につて、ユズちゃん
しかないわさ。

今朝私が顔合わせに連れてきた時点で、若干『型崩れ』が始まって
たからねえ。

これを防ぐ、というか現状維持する確実な手段となると、まあこれ
しかないわけで。

「……………」

人助けとはいえ、やはり不快らしいユズちゃん。割と珍しく眉を寄
せて不機嫌顔。

一瞬、手が懐の御札を取り出しかけて……息を吐きつつ引っ込め
た。

《「あの、すみませつ」……すみません、ユズ、さん》

「……………いえ」

おーおー、謝罪もままならんね。頑張れ少年、私も通った道だ。

いや実際難しいのよ？ 身体の使い分けというか……憑依した身
体を動かさないようにしつつ、霊体の方で喋ったり動いたりするのつ
て。

私も出来るようになるまで結構練習したし。

「…………レインに比べれば、抵抗しようと思えば出来る分ましですけど
ね」

《うん、ごめん。あれはほんとごめん》

ラビ君と私とでは身体を動かされる時に感じる力が全く違うそう
です。私には分からんけども。

昔悩まされた悪霊に比べれば必死さが無いためかだいぶ控えめな
ので、彼女が気を張ってる限り彼は指一本動かさないようです。

……でも険しい山道を進んでる以上、ずっとそつちに気を張ってる
わけにもいかないのがねー。

「……………そういえば、ラビさん」

《は、はい、何でしょうか？》

「わたしにまで敬語を使わなくても……まあそれはともかく。わたしは行方不明になったあなたの搜索依頼を受けてここに来ているのですけど——」

ちら、とユズちゃんがこちらに視線を向けた。

……はて、これはどういう意図かしらん？

「——依頼が出されるのが異様に早い、というより、過剰なくらいにあなたの身を案じる女性がいたのですが、心当たりはありますか？」
おお、何だいその情報。……しかし言われてみれば、最底辺にしろ冒険者を名乗るラビ君に、たった一晚帰らなかっただけで搜索依頼ってのは確かに過剰反応だな。

それだけの感情を発露する女性——ああ、成程。さっきの目配せはそういうアレか。

しかし私にそんな話題振られても。

確かにそーいうお年頃の乙女ではあったけど、そういう方面にはあんま造詣深くはないぞ。

周囲の女子グループがそういう話でキャイキャイ盛り上がってるのを、離れたところからぼーっと眺める立ち位置でしたんで。

……あー、そういえばあっちの友人達って今頃何してるんかなー。
もしも異世界に転生したら、とか言ってバカ話した日々が懐かしいよ。

まさかアレが現実になるとは思わな……今更だけど転生者に数えていいのか、私？

《——僕をそんなに心配してくれる相手、ですか？ ……ちよつと思いつかないんですけど》

「え……う？ じゃあ、気に掛けてくれるギルド職員さんならどうですか？ 凄く、その、気持ちの籠った人相書きを用意してくれたみたいなんですけど」

……おおっと、思考が逸れとった。いかんいかん。

さて話を振られたラビ君はというと、これまたどうも空振りっぽい

ご様子。

話題に出た人相書きについては、私も見せてもらった。何か妙なファイルターかけてるといふか、本当にこんな風に見えるの？　と言いたくなるような出来栄で……背景に花びら散らしたくなつたよ。

今回の依頼を普通に受けていたとして、アレで彼を探せた自信は正直無いでござる。

《うーん……？　知り合いと呼べる異性がいないわけではないですけど、少なくとも彼女達は僕が居なくなつた程度を気にすることは無いと思います》

「……と、言いますと？」

《顔を合わせる度に「無様で見られない」とか「この程度のことしか出来ないなら冒険者なんてやめた方が良い」とか、いちいち僕を否定する言葉ばかり掛けられて……だから、ギルドに向かう道を変えたり時間をずらしたりして、なるべく彼女達の視界に入らないようにしていましたね》

「……………」

《……………》

ユズちゃんと顔を見合わせた。

……いや、まだだ。まだ分からんよ。

「そ……それで、そう言われたあなたは彼女達に何と返していたんですか？」

《……腹が立ちはしましたけど、言われることは事実ばかりなので特に何も。……なのに気付けば誰かしらが近くに來ていて、文句を言つては帰っていくんですよ。……僕が気に入らないのはよく分かつたから、放っておいて欲しいと常々思つてましたね……》

……私の視界にあるのは「これもしかして……」という顔である。おそらくユズちゃんにも今、同じような顔が正面に見えていることだ

ろう。

「……えつと、その『文句』というのを、そのまま聞かせてもらえませんか？　なるべく一言一句正確に……その、覚えている範囲で構いませんから」

《ええ？　ええ、別に良いですけど……えつと、たしか——》

ユズちゃんが彼にそう問いかけ、女性達の『文句』の内容を聞き出す。

現状、記憶が薄れつつあるラビ君でも日々聞かされ続けた言葉はそれなりに覚えていたようで、彼の主観が取り払われた『文句』が露わになった。

” そんな仕事より、お花を育てていた方があなたにはお似合いだと思いますよ？”　b y　花屋の娘

” 正直なところ貴方に回せる依頼というのは……つかぬことをお聞きするようですが、事務仕事に興味はありませんか？”　b y　ギルド職員A

” アンタなんか冒険者が務まるわけじゃないじゃない！　モンスターに追い掛けられて情けなく逃げ帰ってくる前に、ウチの店で接客の一つも覚えてみれば？　ま、アンタじゃまともに使い物になるまでに十年は掛かるでしょうけどね？”　b y　酒場の娘（今回の依頼主）

《彼の周囲にはツンデ……回りくどい女性が多いみたいね》

「(どつちに過失があると言えはいいでしょうね、これ……)」

まとめて翻訳、概略して曰く、「冒険者として上手くいかないなら私が養ってあげる」といった逆プロポーズに近い表現を、日々異口同音に投げかけられていたようである。

対して彼はラブコメ系の難聴主人公ばりに明後日の解釈を重ね、必要以上に卑屈になっていた、というあたりで私達の見解は一致した。

さらによくよく聞くと、私達が認識した依頼主（幼馴染）、ギルド職員Aの他にも、行きつけの薬草店の看板娘だ、宿屋の娘だ、果てはたまたま知り合った良家のお嬢様なんて存在が発覚。

勿論いずれの女性とも、特に親しくしたことなくありませんけど——というのが彼の主観。

……うん、ラブコメの主人公だわコイツ。

「……考えてみれば、わたしも彼とは初対面じゃないですね。ちよつとした揉め事が起きていたところで会って、少し話をした覚えがあります」

《まさか粉かけられてた？ 先輩冒険者枠？ フラグ立ってた？》

「ふらぐ？」

ユズちゃんも彼の物語の登場人物ないし攻略対象である可能性が微レ存……？

いやいや、お前なんぞにウチの子はやらんぞ、絶対に。

「よく分かりませんが、わたしはレインの子になった覚えはありません」

まあまあ、細かいことは気にしない。

《——あ、そういうえば大事なことを忘れてたわ》

「ふえっ？ 何ですか、レイン」

《それよ、それ》

「それ？」

くるつとターンして指差す私に、きよとんと首を傾げるユズちゃん。かわいい。

……と、そうじゃなくて。聞いてこないもんだからすっかり忘れてたじゃんかよう。

《その杖。名前を考えてる途中だったの、すっかり忘れてたわ》

「あー……え、今それ気にします？」

気にするよー。もうすぐ初陣だつてのに名前が決まってないなん

て悲しいじゃんかー。

私とその杖だったら今頃猛抗議ですよ？

「いや、杖の気持ちになられても……」

《武器の名前、ですか？》

《最近手に入れたんだけど、良い名前が思いつかなくてねえ。何か良い案ない？》

ユズちゃんが腰に差した杖——悪目立ちしないよう布が巻いてある——を彼に見せるように「念動力」で取り出す。

このタイミングで？ と彼女は首を捻ってるが考えようによっては彼女以外のこの世界の人間に意見を聞けるまたとない機会だ。むしろここで話題に出さない手はないのだよ。

……これに関していまいちユズちゃんは消極的なんよね。「変な名前じゃなきゃなんでもいい」みたいな投げやり感が滲み出てるというか。

その点イイお年頃のラビ君なら、こつちの世界のそーいうアレを提供してくれるんじゃないかと密かな期待を込めていたりする。

布を一部ほどけば、露出した持ち手部分が早朝の薄闇に緋色の薄光を滲ませる。

なかなか神秘的なその様子に一瞬息を呑んだ少年は、暫しの沈黙を経て重々しく口を開いた。

《………『シャニムズサイン女神の道標』》

「《却下》」

ダメだった。コイツ未だに女神私の事しか頭にねえ。だから違うつつってんだろ。

……というかそろそろ本物の女神シャニムさんに怒られかねんから、マジでやめれ。

《え、ええと……では、『リリアンズストーチ女神姉妹の灯火』とか……》

《そういう事じゃねえんだよっ！》

「巻き込まないでっ!？」

そしてユズちゃんも、この方向性には全力拒否の構え。当たり前

か。

武器名に自分らを指して『女神の——』とか、お病ちゆうに気にしても重態過ぎるわ。

……ん？ 「巻き込む」ってどういう意味かな、ユズちゃんや？ これ、目を逸らすでない。

《……一応、命名の由来を聞いておこうか。ただし女神云々は全略で》
《あ、その……こうして木漏れ日を反射する様が、まるで灯火のように見えたので……》

確かに薄暗い山林の中、木々の隙間から差し込む陽光を浴びて朱く煌めく様子は実に趣深い。

……というか表面揺らめいて見えるんだけど、普通の金属ではないんだらうなあ。知らんけど。

ふむ……『灯火トーチ』ね。杖の名前としてそういうのはありかしらん？

「……変ではないです」

ならばそこにユズちゃんの二つ名を合わせて『狐灯火フォックストーチ』……安直過ぎるな。

それならむしろ『狐灯きつねび』の方が……ってそれじゃ杖の名前らしくない。

狐……『狐の嫁入り』。ダメだ、嫁にはやらんぞ！ あ、いや、そもそも『狐』は私か。

あ、そういえばそれっぽい怪談を由来にしようかと考えてる途中でもあったな。

んー……それでは女神云々を置き換えて——

……後から聞いた話だが。

このとき私の出した命名案を聞いた瞬間にユズちゃんが抱いた印象は「あ、あれ？ 思ったよりまとも……？」だったらしい。……心外な。

C3—5 牡丹の灯り

「……………?」

不意に感じた何かの気配に、彼女は手元の作業を止め、顔を上げた。目の前に横たわる彼の様子に変わりはなく、しかし感じた気配はごく近く。

耳をぴくぴくとそばだて、見慣れた住処をぐるりと見回す。

「……………」

立てた耳が拾う音にも、目が映すものにも、異常を訴えるような何かは存在しない。

やがて気のせいかと思い至り、彼女は再び意識を手元に戻す。

「……………」

再び生じた違和感。それも今度は視界の端。

即座に振り向くとともに、感覚のあった辺りに手を回す。

しかし顔を向けたその場所に、何某かの気配は無かった。

「……………?」

首を傾げ、何度目を凝らそうとも、薄明かり差し込む入口と、そこに繋がる土壁が広がるのみ。

住処の入り口からそう遠くない場所で作業をしているにしても、自分が振り向くまでの間に外へ出られるような距離ではない。駆け出していくような足音も聞こえなかったとなれば尚更だ。

何をどのように考えても、「誰か」や「何か」の存在を疑うには至らない。

「……………」

彼女の視線が天井と、それから足元に向けられる。

天井から零れ落ちた小石か何かが、たまたま視界の端をかすめたのではないかと。

またそれほど小さな何かであれば、落ちる音が耳に入らずとも不思議はないかと。

自身の中でそのような解決を付けた彼女は、再々度手を動かし始める。

「……………」

彼女にとってその作業は、焦りはせずとも急ぐ理由のあるものだった。

ただでさえ最近ご無沙汰であったことも手伝い、腹の奥が期待に疼いているのだから。

とはいえ下拵えを疎かにしては折角のエモノが台無しになると、自身の内で猛る心を抑え――

「? ? ? ? ?」

再びの違和感は、これまでとはまるで毛色の異なるモノであった。

視覚……ではない。

聴覚……でもない。

嗅覚、触覚……彼女の識^しる何れ^{いず}の五感とも合致しない奇怪なる感覚。

気付けば知らぬ間に片膝を立て、手に握っていた道具は地面に転がっていた。

口からは荒い息が漏れ、指先がぶるりと震える感覚すら奇妙なほどに遠く。

——外に出よう。

「!? !!?」

浮つく頭から弾き出された命令に、全身が疑問を訴える。

されど残された意識が理解に追いつく暇も無く、彼女の脳は矢継ぎ早に指令を送った。

——直ちに外に出よう。

——出る。

——朝が来た。

——出るべきだ。

——朝なのだから出るのは当たり前だ。

——出る。

——出なければならぬ。

——外へ。

——丁度出ようと思っていたんだ。

——出る。

——外へ。

——出る。

「……………」

いつしか、彼女は丸太の如き己の脚で立ち上がっていた。

住処の土床をゆうると踏み固めながら、背を向けていた入り口へと振り返り。

そのままズリズリ、ズリズリと、自らの身体を引きずるようにして彼女は歩き出す。

その視界の中央に、ただ柔らかな紫紅の灯りだけを映して。

「——っ！」

早朝の空、低空に浮かぶ陽の光が、薄暗い住処に慣れた目を炙る。半ば反射的に上がった腕がそれを遮り、彼女の視界を影が覆った。

「……………!!?」

次の瞬間、彼女の頭を埋めたのは直前までの自身の行動に対する疑問の噴流。

何故ここに、何故、何の為に——そんな思考の渦を宥めようとしていた彼女に再々度、そして今度こそは理解出来る異常を本能が捉えた。

——強大な魔力の気配。

——自身を害する敵意の存在。

度重なる驚愕に疲弊する己を叱咤しつつ、彼女は背後を振り返り……それを見上げる。

まだ夜にも近い暗青色の空を背負う人影。

その手から伸びたシルエットの先に輝く、目の覚めるような黄白色の光。

それは夜闇に煌めく星のようで、また雲の彼方に揺蕩う月のようでもあつて。

あたかも道を違えた旅人を牽引するが如き『灯火』が、彼女の眼を奪った。

「オ……………」

理解に費やした時間は一瞬。

そこに渦巻く魔力の波動に、自身の本能が起こした行動の意味に、

彼女はようやく気付く。

同時にその時間の浪費が、己が身を^{手遅れ}へと叩き込んだというこ
とにも。

「――放て……【牡丹灯火】っ！」

ピアニイトーチ

……ああ、これは、知っている。

相手は『人間』だ。

それも、こちらを見れば逃げていく個体とは違う、『力』を持つ人間。

「ブゴ――」

自身の喉から漏れた断末魔が途絶えるのが、何処か遠くに聞こえ
た。

視界を埋める光、「熱い」と思う間もなく『己』が消えていく、悍ま
しい喪失感。

「――」

ああ、でも、これなら理解出来る。

分からないままに終わらなくて良かった。

理解出来ない『終わり』でなくて良かった。

誘い出された先にあつたのが、光に焼かれる『終わり』であつてく
れて良かった。

そんな想いを最後に、彼女の意識は輝く熱の中へと沈んでいった。



《……ロマン砲って、良いよね》

「……言わんとすることは何となく分かりますけど」

眩き合う私達の目の前にあるのは、首から上を爆散、もとい融解させたオーク（雌）の死骸。

たった今この惨状を作り上げた杖——命名【牡丹灯火】ピアニートーチを見つめ、それから顔を見合わせた。

……何をしたかと言われたらアレだ。この杖の機能の一つ。魔力蓄積機構^{チャージ}。

杖無しでもある程度は可能だし、この杖ほどでなくとも同機能を持つ物は幾らでもあるという。

それでもこんなに底無しに蓄積出来る代物なんて——と彼女から色々所感を語られたものの、この世界の魔法というヤツに全く縁の無い私にその辺の感覚は分からん。誠に遺憾ながら。

私にとって重要なのは、ユズちゃんの手非常に強力な攻撃手段が存在するようになったという一点のみだ。……時間さえかければだが。

そこで今回は、私が洞窟内に引き籠り中のオークを外に引っ張り出しにかかり、彼女は出てきた相手を狙い撃てるように崖上から照準を定めつつスタンバイ、という分担作業を試みたわけだ。

……図らずも杖名の元ネタに近い役回りが出来て満足、なんて思ってたのは内緒である。

そして結果から言えば、この作戦はピタリと嵌った。

私の【鬼火】（御札着火。なんか紫紅色に変わってた。何故に？）に気を取られて誘き出されたオークが洞窟から頭を出したその瞬間、溜めに溜められた魔力による火魔法が炸裂。当のオークは何か気付いたように振り返るも時既に遅く、僅かの抵抗も許されぬまま無残な姿に。

正面から戦えばそれなりに苦戦するはずだったとのことで、楽な戦いになって良かった……と言って終わりにしてしまいたいところではあるのだが。

「……この杖の初陣が対人でなくて良かったと、心から思います」

《……さもありなん》

機能の確認はしていたし、威力の推定も——感覚任せではあれ——やっつてはいたんだけど、実際に撃つてみたのはこれが初めてだったんよね。

……ねえ、コレ使った魔法自体は——あ、やっぱり前に盗賊相手に撃つたのと同じヤツ？

これももう無双出来るんじゃない——溜めに凄い時間かかるし対面からじゃまず無理？ そっかあ。

《……これほどの力をお持ちとは……流石はめがみ——》

「いや、杖っ！ 杖の力ですからっ、今のは！」

ユズちゃん、必死の弁明。

というか今また女神云々言いかけたやろ、少年？ やっぱ人の話聞いてねえよコイツ。

全く何度も訂正してるつてのに聞き分けの無い……と言いたいところなんだけど、これそういう問題じゃないかもしれないのよね。面倒な事に。

何がって言えば、わりと彼ギリギリなんだよ。その、『型崩れ』的な意味でさ。

進行抑えるべく彼女に憑依した時点で輪郭ぼやけてて……その影響だとすると責め辛いよね。

……ま、その心配もここまでの話だ。

《ほら、いいからあなたはさっさと行くとこ行きなさいつての》

《え——あ、はい。ありがとうございましてっ》

「んう……っ」

憑依状態を解除して、一目散に飛んでいくラビ少年。

……ふむ、少年が抜ける瞬間のユズちゃん若干えろ——イエ、ナンドEMONAIデス。

《……いけるはずだよな?》

「ええ、まあ……オークの習性からすれば間違いなく」

《そっかあ……んー……》

「……レイン?」

《いやあ、何だか最近カルチャーショックって言葉が身近になったなあと》

「……???'」

首を傾げるユズちゃんから視線を逸らし、何ともなしに朝焼けの空を眺める。

いやはや、世界を隔ててもこの美しさは変わりませんな。無限に眺めてられる気がするよ。

……。

……。

……遅っせえな、おい。はよ出てこいや。

いや、ひよっとして何かややこしいことにでもなってるのか?

見た目には分からんところに傷でも付いてたとか。

《……ちよつと様子みてくるわ》

「え、あ、はい」

同じく朝日を眺めてたユズちゃんに見送られ、今は亡きオークの巣穴に吶喊。

おーい、少年ー。生きて……もとい、死んでるなら返事しろー。

「……………」

《まったたく、返事の一つも——ああ、なるほど?》

そんな私を出迎えたのは、適当に敷かれた草の上で横になっていた

ラビ少年、の身体。

光源の遠い巣穴の中でゆっくりと——上体が起こされる、その瞬間。

《おはよう、少年。……ま、もう聞こえてないだろうけどね》

——夜空で一人リサイタルを楽しんでいた私の元へ引き寄せられた幽霊（仮）少年ラビ。

彼がその姿となった経緯を求め、またその肉体の所在を求め、山林を搜索すること凡そ一晚。

搜索の末にオークの住居という場所で彼の身体を発見したそのとき、私達はとんでもない驚愕を突き付けられることと相成った。

……息してたんだよね、彼の身体。イヤ意識は無かったんだけども。

え、じゃあコレ他人の空似？ と呟いた私に、いや間違はなく僕ですよ!! と返した少年。

しかし現にこの少年は生きてるし……と首を傾げる中で、私はある不思議な現象に気付く。

なんと少年の霊体（？）が、目の前に横たわる身体に引き寄せられているのではないかと。

未練を残して死んだ人間の幽霊かと思いきや、肝心の未練に心当たりのない霊体。

一方、意識は無いながらも確かに呼吸を続け、近付いた件の霊体を引き込まんとする肉体。

当人は私が指摘するまで気付いていなかったが、両者に何らかの繋がりがある事だけは明らか。

一見矛盾した少年の状態に、私の頭にある一つの単語が浮かび上がった。

——ひよっとしてコレ、『生霊』ってやつなんじゃね？

何かの拍子に身体から飛び出してしまった魂。

彼をそんな存在だと仮定すれば、意識を失う瞬間が記憶に無く、ま

た未練という言葉とも無縁でありながら霊体化した理由にもどうにか説明は付く。

まあ実際の理屈なんぞ私にや分からんが、ともかく肉体側からの反応もあるわけだし、このまま彼の霊体をつつ込めば無事に解決万々歳——なんて訳にはいかなかったんよね、うん。

何故って、だってほら……ここ、オークの住処だったんだってば。

家主たるオークの様子を窺ってみれば、彼の身体を前にひたすら何かの準備を進めている最中。

具体的にはまるで何らかの『薬』でも作るかのように、石を削った器に草や虫など様々なモノを放り込んですり潰しておりました。

……え、こんな文明的な行動するの？ というのが私が受けたカルチャーショックその一。

更にその行動の理由について『私』に知識を求めたところ——私は再びの文化的衝撃と共に、取り敢えず急ぐ必要は無いのかな……？ という結論を出すに至る。

何故ならこのオークが、少年の身体を傷付けることは無いと分かったからだ。

何というか、その……あんまり分かりたくない理由でもあったんだけども。

《……『雑食系』、かあ》

「全ての個体が、というわけでは無いそうですよ？ それに一説によると『面食い』なのだとか」

曰く——この世界の雌オークさんは見目麗しい少年を食べる（意味深）習性をお持ちであり。

しかも美味しくいただく（意味深）為に元気になる（意味深）薬まで御作りになる、と。

……ねえ『私』？ 何でそんなこと知ってたの？ 助かったけど。

……ねえ？ ねえってば。

「わたしも改めて見たいとは思わないですし、結果的には彼が意識を失っていて良かったですね」

《……………せやな》

睡眠か——げふんげふん。ちゃんと意識がある相手じゃないと、その……………デキないとかで。

その、ほら……………物理的にタタナ——げつふんげふん。……………何してんだ、私。

いやあ……………この世界に来てから一、二を争うレベルの衝撃情報だったよ。今度こそは。

道理で住処にお持ち帰りされた彼の扱いが丁重だったわけだよ。……………はあ。

彼を起こすだけなら、この時点で霊体を肉体に突っ込めば多分何とかなったと思う。

ただそうするとバリバリの底辺冒険者である彼に、それなりの実力を求められる対オーク戦へと挑ませることになる。……………敗ければ即お亡くなり（貞操的な意味で）になる戦いに。

ここで私一人での解決を断念、夜明けを待ってユズちゃんを連れてくる事態となったわけだ。

……………まさかその日の内に搜索依頼になってるとは思わなかったし、それを受注した直後つても予想外だったんだって。いや、ホントに。

「それはまあ、もう良いですけど。……………それよりレインこそ良かったんですか?」

《ん? 何が?》

「その……………彼からレインにはお礼の一言も無かったじゃないですか。一番骨を折ったのは——」

《いやいやそれはしょうがないでしょ。彼の主観じゃ知りようがないしや》

さて目出度くキレイな肉体に戻ったらビ少年なのだが、まだ幾つか小さな問題が残っていた。

当初は今回の件について、説明および口止めを——私について女神云々と何処かで語られても困るので——予定していたのだが、こちらでも想定外の事態に見舞われることになる。

肉体に戻った時点で私の声が聞こえなくなるのは想定内だったし、どれだけ軌道修正を試みても輪郭ふにやふにやな生霊の彼にはどうも通じなかった為、その辺の口止め云々は事が済んでからと考えていたところ——その必要はキレイさっぱり無くなっていたのだ。……彼の記憶ごと。

失われていた記憶の範囲は、採取の途中で足を滑らせてからオークの巣穴で目を覚ますまで。

すなわち、生霊だった期間だけがスッポリと。

……あまりにも都合が良すぎるので色々と尋ねてみたが、少なくとも彼に演技の様子は見えず。

そもそもが圧倒的高ランク——彼から見ても——であるユズちゃんの詰問に恐縮しきりだった少年の様子に、そこまで疑う気になれなかったというのも正直なところ。

藪をつつくという程でもないが、仮に記憶が残っていて何処ぞで口にしたとしても、彼が正気を疑われるだけでは？ という結論に至り、それ以上の追及は止めることにしたのだった。

「それに……いまひとつ彼に『助けられた』という意識が無かったのがなんとも……」

《そりゃあモンスターが無残な死体だけ見せられて、これに襲われるところだったんだよ、なんて言われても実感湧かないでしょ》

頻りに首を傾げつつ洞窟から出てきた彼は、まず出口に佇んでいた見覚えのある高ランク冒険者および傍らに転がる無残なオークの死骸に硬直。

搜索依頼を出されていたこと、意識を失ってから約一日経過してい

ることにさらに瞠目。

高ランク冒険者から詰問を受けつつの下山に、街に戻ってきた頃にはすっかり憔悴。

ギルドにて二、三の事務手続きを終えた後は、感謝の言葉もおざなりに、ふらつく足取りで街の中へと去って行ってしまったのであった。

これにはユズちゃんも依頼完了の手続きをしてくれたギルド職員さんと一緒に苦笑い。

まあ、この程度で気を悪くするような狭量な心根はしてないからね（後方腕組み感）。

《それに彼の周りの人間からは、彼の分まで溢れるぐらい感謝されたわけだし》

「あー……ええ、そうですね……」

一方、彼の搜索依頼を出した女性およびその同類の皆さまは実に凄まじかった。

どこから聞きつけてきたやら、私達が街に戻る頃にはズラリとギルドに揃い踏みである。

……イヤ、一箇所に集まって大丈夫？ 戦争始まらない？ と心配したのも束の間、あちらから少年の姿が見えた瞬間、歓声と共に猛烈な勢いで突撃開始。

手続きの最中も次々と少年に話し掛け、彼の視線の外では無言の睨み合い。

諸々を終えて帰路に付かんとする彼に「五月蠅い」とばかりに邪険にされても構う様子も無く、そのまま背中にくっついていった者も何名か。

……あれもうツンデレどころかヤンデレ化してるのも半分ぐらいいるよね？

あの状態で何故あかも鈍感でいられるのか。最早あれこそ怪談だよ。
ミステリー

「喜ばれたのは良いんですが……正直、気疲れしました」

《何人か、ちよい険悪な視線も向けてきてたよね。こう……増えるのか？ 的な》

「その内、そんなつもりは無いと分かってもらえたのか、多少マシになりましたけどね……」

依頼人および人相書きを用意した職員さんは掛け値無しの感謝を口にしてくれたただけだねえ。

問題は後からやってきたお歴々。表面上は感謝を口にしつつも「また彼の周りに女性が増えた」と言わんばかりの冷視線を思い思いに注いでくれやがりました。

……まったく、うちの子を何て目で見てくれやがる。

どこぞの男のハーレムパーティーにどうぞ入れる訳ねえだろーが。

少なくとも私の目の黒い内はな！ ……既に黒くねえな、私の場合。

「……だからレインの子になった覚えはありませんからね？」

H A H A H A。

《そんなことより、あの後ハーレ……書き割りの中にいた御令嬢から依頼持ちかけられてたけど、どうするの？ 受けるの？ 》

「言い直した方がより酷くなってるような……そうですね。受けるつもりでいます」

ラビ少年の話には、「良家のお嬢様」としか出てこなかった令嬢さん。詳しく聞くに、王都から学園の長期休業を利用して遊びに来ている男爵令嬢さんのこと。

依頼内容自体は後で説明することだけど、捜しモノの依頼で実績を重ねるユズちゃんに直接ということは、まあ……そういう感じの頼み事でしょうな。

——ちなみに彼との『馴れ初め』は、この街の中でちよつとした揉め事に巻き込まれた折に、彼（を含む周囲の通行人十余名）に助けもらったんだとか……それ彼から認識されていますかね？

まあ、彼の口からも出てきたし、全く印象ゼロってこともないんだろうけど。

ただまあ、あれだね。他の面々に比べると熱量はそこまででも無かったかな？

彼に対する視線も、どちらかというところと青田買的な方向で期待を寄せてる感じだったし。

確かにあれだけ主人公染みた体質の持ち主になら、万馬券的な意味で手を付けとくのはアリかもしれないよね。……関わり過ぎると競争相手ライバル(?)から刺されそうなのアレコレも含めて。

《初の貴族相手の依頼……あ、でも私と出会ったときも領主様からの依頼だったわけだしそんなに構えてもないかな?》

「いえ、そんなことはないです。不安です。すごく」

お、おう……軽く聞いたなら何か強く主張された。

依頼主人とはさつき割と普通に話してたやん。どうしたんだね、ユズちゃんや。

「そこで、その……レインに協力して欲しい事があるんですが……」

あら珍しい。まあ私に出来ることなら、いっくらでも頼ってくれちゃってくれて良いですわよ?」

……とは言っても貴族相手の交流なんて、私に大した事が出来るとは——

「……わたしに、礼儀作法を教えてください」

……ウエイト、ホワイ? 何故それを私に頼る。

C3—7 お茶会

——私の名前はサラークリイサム、13歳。

レイオード王国の学園に通う、男爵令嬢よ。

クリイサム家は王国の隅っこの、端っこの、小さな小さな領地を戴く貧しい小貴族。

貴族の末席に着いてはいるけど、級友達おともたちが話題にするような贅沢とは殆ど縁が無いくらいには。

お父様は頑張ってくれているけど、こればかりは仕方ないと思うしかないわよね。

むしろそこから私が王都の学園に通う分のお金を捻出してくれたことに感謝しないとだわ。

……その辺りの苦勞を聞かされたのは、入学の為に王都へ出立するその日のことだったけど。

かけられた期待の重さに目眩がしたのも今では良い思い出よ。

そうして始まった、高位貴族との格差を日々思い知らされながらの学園生活も、どうにか問題を起こすこと無く半期を乗り越え無事長期休暇に……とはいえ級友達ならいざ知らず、その期間中に王国領の端にある男爵家領地にまで戻るのは厳しかったのよね。……主に路銀的な意味で。

かといって王都近郊に滞在するというのは、それはそれで宿代が高つくし。

曲がりなりにも貴族家が滅多な宿は選べないし、そこで裕福な商家と宿を競り合う事態にでもなったら致命的よ。万一ふっかけられたら矜持のせいで降りるわけにもいかなくなるもの。

それらの事情及び懐具合を勘案して、休暇の間滞在することにしたのが、ここミイグルの街。

王都から（懐的に）そこそこの距離、それなりの規模、そして何より男爵家に相応な格のある（懐的に）とても良い宿を見繕うことの出

来た街というのが決め手だったのよね。

……大きな荷物を宿に置いて、鞆片手に初めて街中を廻ってみたその日の内にひったくり被害に遭った時にはどうしようかと思っただけだ。

おまけに、ただでさえ少ない所持金を盗られて堪るかと思っただけに力を入れて踏ん張ったら、ひったくり犯が宙返りしながら店先の商品棚に突撃していった時には、頭が真っ白になったけど。

瑕疵があるのは突っ込んだ男の方だ、と周囲が揃って証言してくれただけで、弁償が最小限で済んだのは本当に幸いだわ……。貴族として多少懐から出さないわけにいかなかったけどね。

それから……。その時に証言者をまとめてくれた少年がまだ低位の冒険者だと知って、それとなく粉をかけてみたんだわね。……。経過は芳しくなかったけれど。

あれは絶対将来大成すると私の勘が言っていたのよ？ 男爵家の手が届くのは今しかないって。

けれど私のそんな主張は、領地からついてきてくれた側仕えのフオークには通じなくて。

青田買いは成功すれば大変素晴らしいので頭から否定は致しません、それでもせめてもう少し信用できそうなランクの冒険者に目を付けてくださいませ、と言われてしまっただけ。

ならばと思っただけを掛けたのが——掛けてしまったのが、まだDランクながら早くも二つ名を与えられたという、この方だったのよね……。

「——本日はお招きいただき、ありがとうございます存じます」

ギルドにて当人と相対したとき、私とそう変わらない年齢であるこ

とにまず驚いて。

その場で軽く言葉を交わし、物腰の柔らかさやそこそこに教養のある様子にまた驚かされて。

その話を聞いたフオークが、ならば学園で開くお茶会の練習を——学園では日常にお茶会が開かれているが、私はまだ主催側を経験したことが無かった——兼ねて顔合わせをしましょうと言いだしたので、あちらが泊まっている宿を介してその旨を打診して。

程なく色よい返事が貰えたので、宿に一室を借り、こうして彼女を招き入れて。

「何分浅学の身ゆえ、不作法をお目に掛けるかと存じますが、ご容赦いただければ幸いです」

目の前で披露される^{おねえさまがた}上級生達もかくやというその立ち居振る舞いに、私は——おそらくお茶を用意するフオークも——白目を剥きそうになるのを必死に耐える羽目になっていて。

「……良い香りのお茶ですね。職業柄こうした物に触れる機会が限られておりますので、月並みな賛辞となってしまう面映い限りですが」
……そういえば冒険者って、出奔した元貴族だとか身分を隠した御落胤だとかが期間を限定してなることもあるんだっけ、なんて目まぐるしく考えちゃって——

あー、頭の中に流れ始めた走馬灯が、遂に現在に追い付いちやったわー……あははー……

………やっべえ、明らかに練習で呼んで良い相手じゃねえよ、コレ。

「——そろそろ、依頼について伺ってもよろしいでしょうか？」

「え……あ、そうだつ……いえ、そうですわね」

緊張の中、お茶会をつつがなく進めるのに夢中で、これが冒険者への依頼の場だということが、すっかり頭から抜け落ちていたらしい。相手から指摘されたことにまた背筋が寒くなった。何をやってるのよ、私い。

……いや、多分無意識の内に、依頼について考えたくなくなっていたんでしょね……

「……お嬢様？」

「フオーク……あれをお見せして」

「……かしこまりました」

こんな依頼を目の前の相手に出して良いものだろうか、凍える背中を冷たい汗が流れる。

そうは言っても、今からそれらしい依頼をでっち上げることなど出来ないし選択肢なんて無い。

丁度私と同じ思考の中に居るのだろうフオークに、結論を目で訴えて——やがて諦めた彼女が相手に見せるべく一冊の古書を取り出した。

「……そちらは？」

「先日入手した、古い書物ですの」

来訪初日にひったくりが突っ込んだ店で、弁償にと買い取った雑品の中にあつた品。

何処から出た何時の時代のものかすら私にはサツパリだったけれど、暇を持て余して眺めていたら興味深いモノに気が付いたのよ。

「見ていただきたいのは書の中ほどにある——この地図ですわ。こちら、この付近一帯の地形に酷似していると思いませんか？」

「……確かに」

鋭い眼差しを紙面に滑らせ、僅かの思案の後に彼女はそう頷いた。

……偵察や探知に長けた冒険者だと聞いてはいたけれど、こんな地図から断言出来るものなの？

それこそ遙か上空から一帯を観測したことで無い限り……いえ、

この期に及んで相手の能力を疑うだなんて失礼をこれ以上重ねるわけにはいかないわ。

「では、この地図に付けられた印は……」

「ええ、これは、その………いい、いわゆる『宝の地図』ではないかと思うのよっ」

言い切ってしまった後で、顔が熱くなってくる。

うう……誰よ!? 冒険者ならこんな適当な言い分でも高揚してくれる、なんて考えたのは!?

……そんな目で私を見るのは止めなさい、フオーク。分かってるからあ……。

「すると、ご依頼の内容は……宝探し、ですか?」

「………ええ、そうなるわ」

「……その場合、依頼の報酬はどのようになるのでしょうか?」

何だか視線に微笑ましいものを見るような温度が含まれるようになったような……。

思ったより、気を悪くされていないようで何よりだと、今はそう思うしかない。

それだけに、これから自分が言う事を聞いてもこの調子のままでいてくれるか既に胃がキリキリ痛んでしかたないのだけれど……

ええい、今更空手形は切れないのよ! 腹を括りなさいっ、サラ!! クリイサム!

「……宝の有無の保証は無いので、地図に示された場所を調べていただければ依頼達成と見做し、その旨をギルドに報告します。もしも宝物が見つかったならば、その換金額を試算した上で半額を報酬として支払いますわ」

——要約すると「ただ働きしろ。もし宝が出たら山分けな」だ。

提示してしまった今になって、湧き上がっていた逡巡が罪悪感になって身の内を駆け巡る。

どう転んでもこっちの懐は痛まない……何とも『貴族らしい』言い分じゃないか。

相手が凡百の冒険者だったなら、そこまで意図を読まれる心配は薄い。

そもそも貴族からの依頼をこなした、という実績だけでも十分な報酬となるのだから、そこまで不平等な申し出でもない筈なのよ？

……相手にとって『それ』が利益足り得るという前提あつてのものなんだけども。

「……………」

案の定、目の前の冒険者はパチパチと目を瞬かせ、口を引き結んでしまった。

胃液が昇るような緊張の中、目の端で確認したフォークの顔色も悪い。

在野の冒険者への依頼としては、大枠を外れているとされる程ではない筈で。

けれど推定される彼女の出自からすれば、礼を失していると判断されても仕方の無いライン。

この方がどちらの立場を優先されるかで、対応はまるつきり異なるモノになるだろう。

……下手をすれば、家にまで類が及ぶ可能性も——い、いえ流石にそれは無いわよね？

あちらもどんな形にせよ冒険者という立場を使っているのだもの！
気を悪くされたとしても、相応の範囲に収めてくれるわよね!?

……ちよつと、フォーク？　そこで目を逸らさないで!?

「——分かりました。その内容で依頼をお受けします」

思考に沈んでいた表情——怖いほど動きが見えなかった——
を失礼に当たらないギリギリの範囲で凝視する時間を終わらせたのは、不意に浮かんだ微笑みだった。

……その笑みが、どこか喜悦を含んでいたように見えたのは、きつと私の願望のせいだろう。

この後自分が何を言っつて、どんな話をしてこのお茶会を締めつけたか、後から思い起こそうにも、まるで記憶に残っていないかかったほどのだから。



——これから貴族相手の依頼を受ける、ということと理由に、何故か私が礼儀作法についての教示をお願いされたのが数日前。

まあ『私』の記憶を引っ張り出せば何とかなるか、と講義の一つもしようかという矢先、宿宛にお茶会の誘いを送りつけられ、ユズちゃんあわや卒倒。

結果「背に腹は代えられません！」と即座に『緊急事態』を宣言し、全身の操作権を渡してくる彼女の姿がありましたとき。……それでいいのかユズちゃんや。

かくして『私』こと、ヤーネースペクハイド嬢を模倣した私が、ユズちゃんの身体を動かす形で今回は対応することに。

毎回こうとはいかんだろうけど……まあ、今後についてはまた後で考えれば良いことだよな。

あ、ちなみに『私』って伯爵令嬢だったよ。それにしても質素な生活してたけど。

内情は火の車でも外面では舐められないように金を掛けずに張れる見栄は徹底していた『私』。

その立ち居振る舞いは教師役の家人に手放しで褒められる程だったみたい。……スゲーなあ。

更にダメ押しとして、以前も使わせていただいた古の女王様の経験

も倍プッシュユ!

マナー云々は文化が違うんで参考にはならんけど、見る者に響くカリスマ的所作は流用が利く。

あちらにしてみれば興味か戯れか、いち冒険者をお茶会に誘ったはずが、やたらと完璧な作法と溢れる気品カリスマを見せつけられたわけだ。さぞ面食らっただろうよ。

男爵令嬢とその護衛……側仕え? の両名から結構な霊力源を回収できたのがその証左だ。

私的にも、私の記憶にあるわけではないのに慣れ親しんだかのごとく優雅に身体が動かせるのはなかなか新鮮な感覚だったねえ。

………ますます『私』||私の魂共通説が怪しくなってきたんだけども。

ま、まあ環境が人をつくるって言葉もあるし、多少はね?

《——さて、とりあえずは乗り切ったわけだがユズちゃんや。お茶会の最中に私が言ったことはどのぐらい覚えられたかな?》

「ええと……指先まで意識を切らさず、一つ一つの動作を急がず優雅に。それから——」

そしてただ私が操縦するだけというのも勿体無いので、『私』モードで対応しつつも各人の動作および発言について、都度【念話】にて解説しております。

いやはや、見ようによっては非常に贅沢な授業だったかもわからんねー。

《………ふふっ》

「レイン?」

《どーよ? 私を相棒にしてて良かったっしょ? 感謝したっしょ?》

「……っ! はい、とてもー!」

虚を突かれたように目を見開いたユズちゃんだったが、一拍置いて満点の笑顔で頷いてくれた。

いつもは困ったような苦笑なことが多いだけに感慨も深い……というかどんだけ貴族との応対が辛かったのよ、君？

《——んで、依頼についてだけど……これまた驚いたよねえ》

「……そうですね」

冒険者的には主題はそつちだったわけだが、これが微妙に悩ましいものであった。

受ける受けないは報酬を聞いたあの瞬間に軽く相談して、返答してあるわけだが——

「レイン、この印の場所って……」

《うん、間違いないね》

件の男爵令嬢がどこかから手に入れたという（推定）宝の地図。

そこに記された印が指す場所を理解したとき、私達も少なからず仰天させられていた。

「《——デストラップダンジョン女王様の墓所》……ですよね」

おそらくあわよくば、或いはまず無いだろうけど——という淡い期待のもと出したと思われる男爵令嬢の『宝探し依頼』は、まさかまさかの大当たり。

その場所に未だ金銀財宝が唸るほど残されていることを、他ならぬ私達がよく知っている。

まさにあのお嬢様は奇跡に奇跡を重ねた『当たりクジ』を見事に引き当てたというわけだ。

「……貴族の方々なら、あの絢爛豪華廻な首飾り器とかでも換金できるんじゃないでしょうか」

《……一般人より何とかかなりそうなのは間違いない》

しかし一方で、むう、と懊悩するユズちゃんの姿。どうもあのお嬢様に思う所があるらしい。

提示された報酬というか、提示の仕方その他諸々に引っかかっているような節が出ている。

《地図という貢献からすれば、分け前半分つても暴利ではなくない？》

「……確かに損は無いとは思うんですよ。だからあの時も賛成は、しましたし。ただ……」

《ああ、まあ冒険者を歓待してみせて断りにくくするとか、わりと姑息な事はしてるよね》

「ええ……それに、もしこの依頼をわたし達以外が受けてしまったら……」

《あー……すし詰めデストラップ群に美味しくいただけられるかもねえ》

再びむむむ、と唸るユズちゃん。……まあ、その心中は察せなくもない。

もともと財宝は自分にはとても扱いきれない代物ばかりだったし、分ける事は構わない。

断ることで別の誰かが墓荒らし（ぎせらい）になったらと思えば、确实に対処出来る自分達が受けるべきだ。

しかしあんな、「冒険者（オマエラ）にとってはありがたいだろう？ 喜べよ」とばかりの依頼を出す相手に、本当に存在する財宝を半分とはいえ渡していいのか。……こんなところかな？ 多分だけど。

《……ユーズちゃん？》

「っ、レイン？」

……私も前の世界に居た頃なら、同じように受け取って憤慨してただろうなあ。

《あの場でも出されたお茶とお菓子、覚えてる？》

「え？ あ、はい……緊張して味は分からなかったですけど」

《あの状態でも!? 味覚は共有してたやん!? ……ま、まあいいや。

アレの事なんだけどさ」

あれは『私』にとつて非常に懐かしい味だった。なんせ愛用していた茶葉だったからね。

……愛飲、じゃないよ？ 質素儉約を大前提に、外面を最大限繕っていた『私』が愛用だ。

《あのお茶ねえ……貴族令嬢が愛飲してると言い張れるギリツギリの格で、一番安いヤツなんよ》

「え……？」

ユズちゃんの顔が困惑に染まる。

そんな彼女に畳みかけるように、私はあの場で見付けた違和感を列挙していく。

《お茶菓子の方も同様ね。日持ちがして、嵩張らなくて、『愛用』でギリ通る。そんでまとめ買いにも対応してくれる良いお店だったなあ……》

「っ、レイン……それって……」

《付き人が女性一人だけだったつても地味にヤバイ。普通はハツタリの利く護衛を一人か二人はつけるもんよ？》

「それは、その……奥に控えていたのでは？」

《そんなのが居たならそう伝えてるよ。あの令嬢一行があの人だけなのは『探知』済み》

「……………」

……私が何を言わんとしているか、ユズちゃんも既に何となく察したのだろう。

けれど自身の常識が揺らぐというか、まさかそんなという表情を浮かべていらっしやる。

《……貴族ならば裕福、ではないのだよ。けど周りからの視線に対しては、常にそう見えるように振る舞わなきゃならない。だから結構難

儀してたりもするんよ？

……少数派ではあるけどね《

そうだよね、『私』？

C3—8 お手紙

拝啓

皆様お変わりなくお過ごしでしょうか。平素は何かとお心にかけて下さり有難うございます。

前回の便りにて含めました通り、私は現在王都近郊の街ミイグルにて来学期までの余暇を過ごす身分となっております。

時に何事も無ければ次の便りは再び王都の地を踏んだとの報告になるかと存じておりましたが、つい先日予てよりの教えを守り身代を持ち崩す恐れなき投資を行ないましたところ、望外の結実に至りましたため急ぎ筆を執った次第となります。

事を簡潔に書き記せば、出所も定かではない古地図により示された土地の調査を一人の冒険者に依頼した、という一文になります。

当然ながら、定式の報酬にて事足りる冒険者を対象にする心算のもとにありました。

ここミイグル周辺には既知の遺跡が数点存在すること、搜索という分野でギルドより非常に高く評価された冒険者が居合わせていたこと、また後述致します報酬にて受領していただけたこと等の佳運はあれど、益を得られる蓋然性は低いと思慮していたことを、ここに記しておきます。

発見された遺跡が全く未知のものであったことは真に青天の霹靂と呼ぶべき事態でありました。

そこで種々の成果の目録、およびその内の一つをこの手紙に同封致しました。

ギルドを通した配達依頼ではなく、大金を必要とするギルド間配達を利用する連絡としたことにつきましては、同封した首飾りの威容にご理解いただければ幸甚に存じます。

件の冒険者『狐鼠姫』様との間では既に得られた成果を金銭にて試算し、その半額を報ずるとの契約を交わしております。

幸いにして、私が学生の身分を終えるまでならば、支払いの履行を

お待ちくださるとのお言葉を頂きましたので、支度相応の期間は得られたかと存じます。

ところで、発見された遺跡の占有権は当面クリイサム家に帰属する運びとなりました。

早晚、方々より追加調査の許可を求める懇請が殺到すると存じますが、取り立てて謝絶出来ない故の無い限りは、受諾すべきではないと具申致します。

何となれば、件の遺跡が刑場もかくやとばかりに永の眠りに満ち満ちた墓所であるが故であり、ひいては益を守るではなく無為に散る命を減らすためであると標榜ください。

またそれにあたり『狐鼠姫』様の意向により、得られた限りの遺跡内部の情報の半分をギルドに移譲いたしましたので、ご活用ください。

それでは、ご多忙とは存じますが、どうかご自愛くださいませ。

再びクリイサムの地を踏み、お会いできる日を楽しみにしております。

敬具

親愛なるお父様へ

サラより

追伸

『狐鼠姫』様は他国のお生まれであり、現在は家名を持たれていないそうです。

追伸の二

この首飾り一つでクリイサム領の収益五年分は固いとかフオークが言うんですがマジですか？



「——マジだそうだと、娘よ」

クリイサム男爵家現当主 デイツシユークリイサム。

数日前に届いた愛娘からの手紙を読み返した彼は、ふっと息を吐き

つつ椅子に腰を下ろし——最近急激に薄くなった気がする頭を抱えた。

「……どうすつかなあ。マジでどうすつかあ、これえ……」

「……落ち着いてくださいませ、御館様」

今回の事は清貧——と言えば聞こえは良いが——を旨とする男爵家としては、降って湧いた幸運、と呼んで差し支えないものではあった。

その一方で手紙でも予想されている通り、突如として繁忙の極みへと飛び込まされ、誰も彼もが——当主すら例外無く——内心で悲鳴を上げる事態が引き起こされているわけだが。

現在の彼を主に悩ませているのは、この手紙に対する返信について。

文面の先に娘の表情を想像しつつ、文字通り悲喜交々な胸中を脳裏で捏ね回す。

「……ひとまずは御館様よりお嬢様へお褒めの言葉は必要でしょう。家の教えを守り行動した結果多大な利潤を獲得されたのですから」

「う、うむ。そうだな……利潤には間違いない」

『債権者』様からお気遣いを引き出されたことも非常にありがたい。支払いまでに頂けた時間は勿論、遺跡関連の対応の大半をギルドへ投げられるようになりましたからな」

「……………」

いつの間にかクリイサム家の内では、件の冒険者を『債権者』と呼び表すようになっていた。

……勿論館の外でその呼び名を出すことは決して無いが。

元の契約に厳密な支払期限を設けていたわけではなかったようなので催促されるようないわれは無いにせよ、何せ額が額である。

声高に請求されたとしてもこちらから何も文句は言えない状態にある以上、そちらの意味で懐を握られていると言って何ら差し支えない。

現場(?)でどのどのようなやり取りの末に決まった事柄かは不明であれ、これもまた娘の功績に数えて相違ないと、彼はやや投げ遣り気味に勘定する。

「例の首飾りを見せて回るだけで方々への支払いは何れも待つていただけることになりましたし、あの品だけでも幾ら感謝しても足りませんからなあ……」

「……ああ、それもあつたな……」

そもそも家の名前を担保にどこぞから債務を負う、ということはクリサム家のような、貴族が張らねばならぬ見栄を懐事情が追いきれない下級貴族には珍しいことではない。

返済期限の解消の為に、あつちの商家からこつちの商家へ債権を移し、その都度嵩増す利息に青色吐息———そのような悩みが綺麗に一元化され、また現金化への苦労は見えども返済の目途は間違いなくついているのだから、喜ばしい以外の感想などあろうはずもなかった。

「初期投資を最小限に、どう転んでも損害は小さく。お嬢様が御館様の薫陶を正しく受け継がれた何よりの証左でありますな」

「それは、その、そうなんだが……」
執事の言葉に相槌は打ちつつも、男爵の視線は手紙の文面から離れない。

——特にその末尾に、思い出したかのように書き連ねられた追伸から。

「……一つ目の追伸が不穩過ぎるんだが？ 何故わざわざ『現在は』とか書くんだ娘よ!?!」

「それは、まあ、そのように見受けられたということでしょうなあ……」

おまけのようなその一文が、件の人物を単なる冒険者として扱うこ

とを強烈に戒めていた。

仔細が分からずとも、こんな書き方をされてしまったては『そういう事』として扱う以外に彼らに選択肢は無い。

「隠されているのか、既に家を出られているのかは分かりませんが……こちらから無作法をしない限りは憂う必要はないでしょう」

「ああ、勿論そうなんだが、しかし——」

建前、を口にする執事に同意しつつも、ガリガリと薄くなる頭を掻く男爵。

二度、三度、目を皿にして文面を睨んだ彼は、声に苦悶を込めて叫んだ。

「既に何かやらかしてゐる心配がするんだが!? 文面からこう、なんとも言えない敬意というか、畏敬の念的なものが滲み出てやしないか!?」

「……まあ、あちらから言い出されない限りは気が付かない振りをするればよろしいかと」

娘への厚い信頼(?)を叫びながら、天を仰ぐ男爵。

半笑いで遠い目をする執事の顔も「もう、なるようになあれ」と言わんばかりである。

「……というか初めは余裕が無くて気付かなかったが今読み返すと——『私は教えられた通りにしたんですう! こんな事になるとは思わなかったんですう! 私は悪くないですう!!』としか読めんぞ! 全力で保身に走ってないか娘よ!？」

「……筆を執るお嬢様のお顔が目には浮かぶようですなあ」

「しかも追及を避けるために当分領地には帰って来ないつもりだろう!?」

「無理に帰らせようと思えば学園を退学させるぐらいしかありませんが——」

「そんなことしたら、支払期限まで一緒にやってくるだろうが！」
「期限はお嬢様が学生の身分を終えるまでですからな。……お嬢様も上手くやったものです」

手紙にもある通り、初めは大したものが見付かるとは——そもそも何かが見付かるとも——期待してはおらず、仮に見付かっても手持ちで支払いには事足りるという考えだったのだろう。

しかし支払いを自身からクリイサム家へと変更するというのは、娘の口から咄嗟に出た言い訳であっただろうし、事実その事が男爵に伝わったのは手紙による事後報告である。

さらにはそんな横紙破りを冒険者に受け入れさせた、という負い目まで作っているのだ。

もたらした利益が常識外れだからこそ褒めざるを得ない流れになっっているが下手をすれば——否、普通に勘当放逐も視野に入る大失態である。それは保身にも走ろうというものだ。

しかし、そんな失態を犯した娘に然るべき対応をしようものなら、折角与えられた数年の猶予を自らの手で不意にすることになる。それは今のクリイサム家にとって絶対に取れない選択だ。

即ち自身を何事も無く学園に通わせることが家としての至上命題——そこにこぎつけることで時間を稼ぎ、なんとか挽回の機会を見出そうという思惑が透かすまでもなく曝け出されていた。

「いやはや……本当に御館様の薫陶をしつかりと受け取っておられますなあ」

「……おい、不敬だぞ」

「おや、ではお暇をいただけるので？」

「そんな余裕があるわけないだろうっ」

堪えきれない悪態を吐く男爵は、それでも先程より幾分か心を落ち着かせたようである。

澄まし顔の執事にもう一度だけ溜息を吐き、気を取り直すように顔を上げる。

「とにかく『債権者』様へ向け、御館様より支払いに関する正式な連絡が必要でしょう。現状では単なる口約束ゆえ、空手形とされかねませんからな」

「我が家にそのようなつもりは無いが……まあ、そうだな」

契約の相手がクリイサム家に、ひいては男爵家当主たる自分がこの変更同意、誓約したことを取り急ぎ件の冒険者に伝える必要があると彼は考える。

徐々に遺跡の情報があちらこちらへと広まり、他の貴族家等からの注目も集まりつつあることもあって、こちらの誠実さを内外へ見せることもまた急務であるからだ。

まだ件の遺跡から出土する品々の価値までは広まっていない——価値に吊り合う持ち込み先を探している最中である——から良いが、それらがひとたび明るみに出れば、この注目具合は今の比ではなくなると予想される。

そうなるまでに、如才ない対応をした実績をなるべく積み重ねておくべきでもあった。

「……そういえば、件の遺跡に入らせろ、という訴えはどこからか来ているか？」

「いえ、今のところ、ギルドへ向け、で済む相手ばかりですな」

「……………ひよつとすると、これに関しては『債権者』殿の発案だろうか」

「その可能性もありますな。しかしそうすると……いったいどれほど危険な遺跡なのでしょうな」

先んじて冒険者ギルドに半分が流されたという、遺跡内部の情報。手紙の文面からうかがえるのは、それを成果の一つと捉え、あちらが一足早くその半分の権利を行使する、ということにしたのだろうか。り取りだ。

文から予想される娘の心情からして、成果の扱いに関してこちらから申し出たとは考えづらく、したがってこの部分はあちらの意向なのではないかと彼は思案する。

そして現状自分達から見えているのは、ギルドを通してその情報を得ただろう者達が、そこから男爵家へ許可を取りにくる気配が一向に無いという事実。

ただでさえ目が回るような状況にある中、駆け込んでくる者が居ないことに安堵すると同時に、手紙の中でも妙に仰々しく表現されていたその実態が、どんな代物なのかと恐ろしくもあった。

……そんなヤバイ遺跡を調査し生還した彼の御仁への畏敬の念も強まるばかりであったが。

「……こちらから連絡が届くまではお嬢様の近辺に居られるのでしようし、いつそ専属護衛として打診してみるのはいかがでしょうか？」

「む？ ……ふむ」

執事の提案に、男爵は暫し考え込む。

同行させたフォークは側仕えとしては十分でも護衛としての能力はお世辞にも高いとは言えず、自領から丁度良い人材を用意できなかったことは、悩みの種であったのだ。

「特定の分野に特化しているらしき事が書かれています。他の能力が無いとは考えにくい。またあちらの都合としても悪くはないでしょうし、受けてくださる公算は高いでしょう」

「……では契約を承知した旨とその打診、あとは娘に先の手紙では分からん細かい部分を報告するよう含めるとするか」

娘の手紙を脇によけ、返信用の便箋を取り出し、男爵は未だまっさらな紙面と改めて向き合う。

暫し額に手を当て唸っていた彼は眉間に深く皺を刻みつつ、不意にその口角を微かに緩めた。

「……ようございしましたな。お嬢様を処断せずに済んで」

「む……」

内心を言い当てられた男爵のひと睨みを、執事はやはり柳に風と受け流す。

男爵はしばし向けていた視線を溜息と共に逸らし、どこか遠くへ聞かせるように呟いた。

「……次の学期の終わりには腹を括って帰ってくるんだな、馬鹿娘よ。
その頃には路銀の心配など無用の長物と化しておるからな」

C3—9 お買い物

——急遽招かれたお茶会にて全力出して男爵令嬢をビビらせた結果、その護衛に就いて王都に行くことになっていた。

……何を言っているのかわからねーと思うが私も何を以下略。

私達が女王様デストラップダンジョンの墓所から持ち帰った財宝は、やはり男爵家にとってもかなりの大事おわごとだったようで———というか領地との手紙のやり取りを盗み見た限り、上を下への大騒ぎを起こしたらしく。

手紙の最後に、悩み倒したような崩れた筆跡で娘へと送られた「よくやった」の一文が、彼女の御父様こと男爵様の複雑な心情を如実に物語っていたといえるだろう。

サラ嬢もまた届いた手紙を読みながら青ざめたり赤くなったり涙ぐんだり、実に情緒不安定な様を見せていた。……見ているのは側仕えさん（と私）だけだったが。

まあ、この父娘の間でどんなやり取りがされようと、払うもん払ってくれるならこちらとしてはどうでもよかつたんだけど……問題になったのが専属護衛とやらの打診だ。

時期がくれば学園に戻るべく王都へ向かうことになる彼女達は、当然その道程に護衛を雇う。

また将来的な解決の目は見えようと、今現在用意できる金額にはそれなりに制限がある以上、そこそこの腕の冒険者——例えばドラックとか——を見繕うのは自然な流れである。

……しかし今回、私達に求められた役目はそれだけではなかった。聞くと、王都の学園では一人から二人程度の護衛を連れて行動することを推奨しているとのことなのだが、どうもクリイサム家は入学の際に丁度良い人材を用意できなかったのだとか。

……お茶会にて給仕を務めていたフォークさんが腕利きだったりはしないらしい。具体的には、有事の際にお嬢様を抱えて逃げるのが

精一杯とのこと。

勿論側仕えとしては、さんじゅ……ごによごによ歳の大ベテランだそうだが。

あくまで『推奨』であり、高位貴族の令嬢令息の中にはフオークさんのような見た目のいわゆる『仕事人』を傍に付けている者もいるので誤魔化しは利くが……できればちゃんと腕の立つ人材を手配したい——というのが、盗み見で知り得たあちらの事情で。

話し合いの場で提示されたのは、こちらの『債権者』の立場と支払い期限の条件から、サラ嬢に同行できるのは都合が良い——のではありませんか？ という『お伺い』であった。

……なんかもう、どっちの立場が……とか言い出したら野暮だね、こりや。

ちなみに『私』＋女王様コンボを使って応対したのはあの一回きりである。

あれは『お茶会』に誘われたからであって、冒険者としての素の対応とは別なのでね。

あちらもその方がありがたかったのだろう。連絡と打診に訪れた際、初めてギルドで会った時の振る舞いに戻っていたユズちゃんに安堵を隠せていなかった。お二人とも。

申し出に関しても、元から王都には立ち寄るつもりだったからと微笑んで快諾したユズちゃん。

貴族様の誘いに卒倒しかけてたあの頃からは、信じられない成長振りですなー。

「……レインのお陰で色々見えてきましたからね。一口に貴族と言ってもその言動は色々理由があつたんだなあ、とか」

《あー……でも一般イメージ通りの貴族も居るには居るからね?》

「それは勿論分かってますよ? でも、その……やっぱ、同じ人間なんだなあというか……」

《……そっか》

まあその間にも何度かあった話し合いの場では都度『私』による解説を入れていたし、そのうちあちらも取り繕っていても仕方ないと思いはじめたのか、貴族の仮面微笑を緩ませてきていたしね。

男爵様からの沙汰が届き、諸々の対応が本決定される頃には知人友人という風情で会話ができるぐらいの仲になっていたのはお互いにとって幸いというべきだろう。今後の仕事内容を考えるに。

——あ、そうそう、手紙の盗み見にて発覚した『ユズちゃん他国の貴族説』については、私はなーんにも言ってます。

これについて当人に伝えるか否か、じっくり十秒ほど考えて保留を選択致しました。

……いやほら、あちらさん本当に何も言わないし聞いてこないしで、伝えても寝耳に水かなと。

勿論、そっちの方が面白そう、と判断したのは否定しないがな！



《——そんでここは……いわゆる蚤の市ってやつかな？》

「王都に一番近い街というだけあって、結構な賑わいですね」

クリイサム家の紋付き馬車に乗って山間の街ミイグルを発ち、数日。

辿り着いたのは、これまで私が見てきた中でも一際喧噪激しき商業の街シワヒであった。

……え、道中？ そりや平和なもんだったよ？

そもそも王都近郊の街道で、そうそう事件が起きるわけないじゃないですか。やだなあ。

街の中央を縦断する大きな通りの両側を、所狭しと軒を連ねる露店達。

宣伝呼び込みの声を高く張り上げる人間の姿もあれば、積み上げた商品の影で「好きに見ろ」とばかりに間口を広げる店の姿も。

向こうの世界の駅前商店街の雰囲気まんまやな。……あ、でも冒険者用の武具とか魔道具とか並べてるところあるわ。あの辺の一角だけはわりとファンタジーしとるね。

「——さあ、この街に来たからには掘り出し物を探しますわよ、ユズ様！」

「ふふ……ええ、お供しますね、サラ様」

今晚の宿の手配を側仕えに任せ、意気揚々と市場に繰り出すはサラお嬢様。

肩を竦めるフォークさんと一瞬の目配せの後、微笑みと共にその傍らに付くユズちゃん。

ひと月程の付き合いです、すっかり慣れたようで何よりです。しかしテンション高いな。

「件の古文書を手に入れたのも、こういう露店でのことだったそうです。すから無意識の内に期待が高まっているんじゃないでしょうか」

さもありません。

とはいえ幾らテンプレ世界だったって、そんな出会いがそうそうあるとも思えんけど。

「——こっちはごく普通の地図。こちらは……ああ、どなたかの日記ですわね」

「そんなのいったいどういう経緯で売り物に……？」

《……落とし物拾ったとか？ いや知らないけど》

「——魔法スキル用の杖……私には縁の無い代物ですわね……はあ」

《ほうほう普通の杖ってこんな感じか……うむ、違いが分からん！》
「……………」

「——普通に綺麗な首飾り、ですわね」

「……普通に綺麗な首飾り、ですね」

《イヤ君ら首飾りに引つ張られ過ぎじゃない?》

そうして始まった二人の異世界版ウインドウショッピング
(ショーウインドウガラス板は無い)。

いやしかし貴族のお嬢様のお買い物というも、もつと次々荷物が増えてくもんだと勝手に思ってたけど、本当に商品を見て歩いただけやね、この二人。

まあ領地の経済状態が急に上向きになったからといって財布の紐が急激に緩んだりはないか。

……にしても、ここだけ切り取ると普通にショッピング中の女友達やね。

「——あ、これ隣の領地で作られている絹織物ですわ」

「わあ、綺麗ですね……手触りも良いですし、とても丈夫そうです」

《ほほう、こんなのがあるということは養蚕を確立してる場所があるわけだ》

「これが元はモンスターの吐いた糸だとはとても思えませんわね」

《……えっ》

「ええ……しかもかなり凶暴なモンスターなんですよね」

「あら、ユズ様は戦った経験がおありなんですか?」

「はい、以前依頼で……その時は冒険者十数人で挑みましたが、大変な仕事でしたよ」

《えっ……あれコレ、マジで言ってる……?》

「普段は繭に籠り獲物を通りがかるのを待っているので近付かなければ無害なんです……目的がその繭糸であって逆に討伐してはならない相手なので、複数人で足止めしている間に繭を回収する必要が……しかもこれだけ丈夫な糸を吐くだけあって、本体の頑強さも尋常ではなく……」

「まあ、そんなに……」

《……………》

………なにそれ私の知ってる蚕業と違——いや、うん、何でも
ない。

最近、本当にカルチャーショックつてのを感じてばっかだなあ
……。

「——そちらのお嬢様方。指輪に興味はありますか？」

「え？」

「あら？」

そのありふれた呼び掛けが発されたのは、居並ぶ露店の一つ。

そこには広げた布の上に並べられた幾つもの指輪を前に座り込む、

小綺麗な男の姿があった。

「お勧めはこちらの宝石をあしらった指輪ですよ」

「あら……綺麗な宝石ね」

「綺麗な宝石ですね」

「お二方によくお似合いと思えますよ」

「そうねえ、私によく似合いそうだわ」

「そうですね、わたしによく似合いそう……あ」

「……………」

「……………えと」

「……………おやおや？」

「お、お譲りしますわっ」

「い、いえいえこちらこそ……」

「ふむ？ 失礼ですが、お二方の関係は……」

「実質的な立場はユズ様の方が上ですわ！」

「わたしは只の冒険者ですよ！ サラ様は男爵令嬢なんですから！」

「……………なるほど。では——」

「ではこちらを頂いていきますわね。……………行きましようか」

「ええ、よくお似合いですよ」

……………え、ちよ、何？ 何が起きたの？ 急に揃って黙り込んでしまったと思ったら……………それに頂いていくってその指輪……………ちよ、ちよつとお二人さん？ お二人さーんっ!?

「——ふう」

手配されていた宿の一室。

ベッドに勢い良く倒れ込めば、ぼふん、という音と共に柔らかく受け止められた。

「あ………良い宿をとってくれた——のねえ……」

今までの寝床に比べれば数段上、と即座に分かる肌触り。

少々はしたなく思いつつ、誰にも見られやしないと割り切つてもふもふと感触を楽しむ。

……崩れかけた口調は流石に整えた。変に慣れるとうっかり漏れてしまいかねないし。

「………運気が向いて来たわ」

眠気を誘う暖かさの中で、しみじみと呟く。

直近の苦勞、心勞を頭に過らせて、それでもなお天秤はそちらに傾くと己の中で納得が沸いた。

「お金さえあれば何もかも……とまで美味くはないけれど、大半の問題が片付くのは確かだもの。のんびり胡坐を搔いてるわけにはいかないにしてもね」

天井を眺めながら、近く迫る問題について思い起こす。

……この身に詰まった幸運を大手を振って活用するには、越えねばならぬ課題は未だ多く。

けれど焦る必要までは無い……そう、これから先、時間はたっぷりあるのだから。

「もう何日か滞在したくもあるけど……そうもいかないかあ。少なくとも王都に着くまでは余計な日数は使えない、のね……」

目を閉じて、頭の奥から今の旅路の予定を引つ張り出す。

前の街での滞在期間が予定より伸びた影響もあり、明日には王都に

向かって発っておかないと、これ以上の不測の事態に対応出来なくなってしまうと言われていた。

「……焦らない。焦らない。これまで長く長く耐え忍んできたじゃない、私」

色々な意味で残念ではあるけれど、この身の立たされた状況を鑑みれば無茶は出来ない。

上手くいつているからこそ優先順位を違えてはならないのだ。諦めよう、潔く。……潔く。

「……………んんー……………」

我ながら形容しがたい呻きが喉の奥から漏れた。

今日一日の分だけでも、目に収めてきた様々な物品の姿が脳裏を過る。

——欲しい。

——手に取りたい。

——使ってみたい。

届きそうで届かないところに並ぶ、身目麗しき煌びやかな品々。

眼前で誘惑を放つそれらを前に、沸き出す想いをどれほど堪えてきたことか。

「……ダメ。ダメよ。冷静になりなさい、私い」

手に入れる手段があるからと言って、考え無しに使えば待っているのは破滅だけだ。

刹那的欲求の満足を優先して、大局を見失うなど一生の恥。

何より今後の展望は既に明るく開けているのだから、ここで道を誤るなどあつてはならない。

「そう、そうよ。それに何より——こんなに良いモノを手に入れたのだから、ね」

視界の中央に、指輪を嵌めた手を掲げる。
数度、裏返したりもししながら、矯めつ眇めつそれを眺めた。

傷一つ見当たらない、白く美しい素地。

手入れを繰り返しても直ぐにざらつくそこの品とは違う、滑らかな触り心地。

手に入れてすぐ故の違和感は未だ残れど、そんなことはじきに気にならなくなるだろう。

「……性能で見ればもう一つの方が良さそうではあったけど、別に荒事に使うわけでは無いもの。見栄え重視が一番よね。私の場合は特に」

早く感覚を馴染ませるべく指の曲げ伸ばしを繰り返しながら、掲げていた手を胸元に添える。

とくんとくんと心なしか早く思える鼓動もまた、冷めやらぬ興奮を助長した。

「ああ………楽しみだわ」

今一度、指輪にあしらわれた紫の宝石の光を収めながら、ゆつくりと目を閉じる。

そうして身体に迫りくる、暫くぶりの安らかな睡魔に身を任せて。

その夜見た夢は、今までの私には想像も出来なかっただろう栄華に溢れていた。



「——問題ありませんか？」

「ええ、確認は済みました」

「では……出発いたします、お嬢様」

翌日早朝、確認の声に馬車の中から領けば、御者台へと向かう足音となつて返ってくる。

ややあつて、動き出した馬の歩みを伝い、窓から見える景色がゆっくりと動き出した。

何気なく視線を動かせば、目に入るのは馬車内に積み上がった荷物。

……荷馬車を別に手配する必要があるに抑えてきたということなのけど……改めて見ると、こう、貨物と一緒に運ばれている感じが——こ、今度からは余裕が出来るはずよね、うん。

昨日の時点で欲を表に出さなくて本当に良かったと実感する。

こうして馬車の中に不自由なく座れるだけの空間が、二人分残っているのだから——

「……あつ」

「?」どうかしまし——あつ、あー……」

馬車の中、対面席に座る『狐鼠姫』様。

その手の平の上に、堂々と鎮座する一匹のネズミ。

どうしても異物感を感じさせられるその光景に、思わず視線が固定された。

……さつきまで今から進む道の索敵をされていたのだから、当然と言えば当然なのか。

そんな私の視線に気付いたのか、グツと親指(?)を立てて背中を向けるネズミ。

何とも言えない表情で若干目を泳がせるはその主。

……つい最近己が行った選択が、ぼんやりと頭の片隅にちらついていた。

「……大丈夫です。わたし達が同乗している限り、不測の事態には遭遇させませんから」

「え、ええ、勿論それは信用していますわ」

「この後、暫く進めた所で一度街道を外れてもらいます。少し森の中を通ることになりますけど、了承して頂けますよね？」

「……ユズ様がそれが必要だと仰るならそうなのでしょうね。分かりましたわ」

　　瞼を閉じれば容易に思い起こせる、このネズミその他がもたらしてきた数々の実績。

　　現実と認識出来るまでに時間は掛かったけれど、こうも積み上げられては疑う方が愚かだろう。

　　ただ、その、ええと………私の選択は間違っていない、うん。

「——チュウツ」

　　………こうして時々流し目を向けてくるネズミがどうしても気になるけども。

　　そしてそのネズミを握り締めにかかるのは何か意味があるんだろうか？　謎の多い人物だなあ。

「——『狐鼠姫』様」

　　先の宣言通り、街道を外れた馬車が森の中を進むこと十数分。

　　鬱蒼と茂る木立ばかりが見えていた窓に、少しばかり開けた空間が見えた時だった。

「………着きました？」

「ええ、しかしこのような場所があるとは……伺った通りとはいえ、やはり驚きますね」

　　二人のやり取りからして、出発した時点での目的地に辿り着いたらしい。

……頭の奥から周辺の地理情報を引き出ししても、大したモノがあるとは出てこないが、いったい何の目的でこんなところに向かっていたのだろうか？

「……サラ様。暫くここに馬車を停めておくことになりましたが……折角ですし、一緒に辺りを少し散策しませんか？」

「え？ ……え、ええ構いませんけれど……」

突然の申し出に、少し考え——そう間を置くことなく了承を返した。

傍に控えるフォーク共々、多少不思議には思えどこの人の事を信頼しているのだから、当然だ。

彼女に先導される形で馬車を降り、背後にフォークが控える形で歩き出す。

ゆっくりとした足取りで向かう先は、木々の中に自然と出来たらしい草の生い茂る広場。

背の低い草を踏みしめるように進んだ彼女は、その広間の中程で不意に立ち止まった。

「……………？」

ゴクリ、と。

息を呑み込む微かな音が、背後から聞こえた。

それがすぐ後ろに立つフォークが漏らした音だと、理解したのは一瞬後の事。

けれどその理由までは分からず、意識の一部がそちらに引き寄せられたその時だった。

「——あなたは、何者ですか？」

.....

.....ええ.....？

うーん.....

めんどくさ。

「っ!!」

「あ.....ッ!?!」

めんどくさ。めんどくさ。あゝあ、めんどくさあ。

なんで？ 何でバレたの？ どこでバレたわけ？

完璧だったじゃん？ 完璧に模倣してたはずじゃん？

このサラリクリイサムって男爵令嬢ちゃんをさあ!?

記憶から、感情から、仕草や振る舞いまでかんつつつべきにイ！

「やめてよね、そういうの？ 人の努力を何だと思ってくれてるわけ

？ こちとら用意に何十年とかけた乾坤一擲の大勝負だったわけよ

？ なにしてくれてんの？ ねえ？ねえってば?」

「折角何年も何年もかけて、あの冴えない男を遠隔で操れるまで慣らしてやってさあ?」

「このお嬢様が”私”を手に取りたくなるように、頭中誘導して

やってさあ?」

「ちゃんと周りの人間も同じ認識になるように、溜め込んだ力を大放
出までしたんだよ?」

このままいけば、この見目麗しき貴族令嬢様に成り代わられたつての
にさあ!

しかも丁度これから景気が良くなるって、超優良物件だったつての
にさあ!

こんななんつちやつたら、どう転んでもスンナリとは行かなくなっ
ちやうじやんかあ!?

「どこで気付いてくれたか知らないけど……人の気持ち踏みにじって
楽しい? ねえ楽しいの? なあ、何か言ってみろよ、このネズミ娘
がよお!」

「……………っ」

……………なーんて。

何も言えるわけ無いよね?

「私の力で魂を直接縛り付けてんだもん。身体が今動かせるわけない
よね?」

「昨日はそこから思考を傾げるだけで許してあげたけど……もうそん
な余裕は無くってさあ?」

「溜めに溜めた魔力は昨日で大半使っちゃったから、もうそうやって
ちよつとの間、縛つとくのが限界なんだよね。それだつてこのまま
じゃすぐ解けちやう。だからさ——」

えーつと……男爵令嬢ちゃんの持ち物に良さげなモノは無し、と。
そしたら、うん、一番近いのは、ネズミ娘本人が腰に差してるアレ
かあ。

「しょうがないよね？ 私ってば荒事には向いてないんだもん。動けない今の内にヤッチャウしかないからさあ。……あんたのせいだかんね？」

「……………」

……動けない身体で、視線だけ私を睨んでら。

あはっ、良いねえ……。ご自分の細剣でブツ刺されるまでそうやって睨んでられるか——

「——えっ?」

なんか、耳のすぐ近くで乾いた音が聞こえたような。

パシンって、なんか、なんだろう……。革でも叩いたみたいな音？

そんで……。何で？ 何で私の視界は——回ってんの？

あ……。？ 身体も、傾いてる？

あちこち擦ったみたい……。なんでこんなに、地面が近いの？

それに……。何で？ 何か、その……。……痛い？

「い、イッた、いづつ……。い……。……??？」

……………わかんない。

わかんない、わかんないわかんないわかんない。なにがおきたのかなんにもわかんない。

なにがあつたの？ なにをされたの？ わたし……。あいつはわたしに、なにをしたの？

「——親父にもぶたれたことないのに！ ……つてどこかな?」

……なん、で？

なんであいつ、しゃべってるの？

なんであいつ、うごいてるの？

なんで、なんで……なんでなんでなんでなんでなんで
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで
なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで
なんで

「なんでわたしにこうげきできるんだよお————っ!??」

「《……説明してあげるわけないじゃん、ばーか》」

「——それは、本当のことですか？」

《流石にこんなことで嘘はつかないよ、私は》

「そんな……でも確かに思い返せば、我ながらおかしな返答をしていたような……」

《……その返答とやら自体を私は聞いてないし見てないんよ。突然二人して……店主合わせて三人揃って黙り込んだようにしか、ね》

「……その原因が、今サラ様の手の中にある指輪、ということですか？」

《店主か指輪、はたまたその両方か……だったんだけどね。さつき見に行ったら首傾げてたんよ。何で露店なんてやってんだ俺……つてな感じでさ》

「ああ、それで……でもどうするんですか？ 幻覚を見せられるんじゃないでしょうも……」

《何を仰る。相手の力が通じないと保証された私という存在がいるではないかね？》

「……通じないというより認識されてないのでは？ いえ、出来るわけないんですけど……」

《効かないって意味じゃ同じことよ。それで身体を奪う力なんてモノ持つてる相手ならさあ……上手くすれば確実に隙を狙えると思わない？》

「……」

《……駄目かな？ なら盗み聞いたあちらさんの目的考えるに、このまま気付かない振りしてればこっちは何もしてこない可能性もあるにはあるけど——》

「いえ、やりましょう、レイン」

《……！》

「わたしは——『友達』を見捨てたくはありませんから」



「——なんで……なんで私の術が効かない!?　なんで動けて……!?」

サラ嬢の身体で地面に這いつくばり、恨みタラタラ睨め付けてくるわ、露店で目を付けてきたと思しき暫定『悪霊付き指輪』氏。

嵌めた人間の身体を現在進行形で奪っていたり、なにやら魂を縛る云々と御自分の能力を丁寧^にに解説してくれたけれども、やはりそれも私には通じぬようだねえ?

「《だーから親切に説明するわけ無いってのよ。誰かさんとは違ってね?》」

「ぐ……お、おまええ……ッ!」

おや、どうやら気付いたかな?　そうそう、動く気なら初めっからいつでも動けたんでねえ?　良い気になって色々解説してくれるのをこれ幸いと聞いていたわけですよ?

——先日シワヒの街の蚤の市にて、唐突に起きた（私目線で）謎の現象。

後からユズちゃんに確認してみれば、彼女の主観では特筆するようなことは無い客引きのもとに指輪を購入したと言うんだから驚き桃の木山椒の木。

慌ててサラ嬢の様子を覗けばこれまたビックリ、まるで物珍しいモノでも愛でるように己の手を撫で付ける姿があるではありませんか。この時点で予想出来た、お相手さんの能力は二つ。

一つは周囲の人間の意識を一時的に奪い、また都合の良い記憶を植え付ける能力。

もう一つは何らかの条件の下、他人の身体を操る能力。

……無制限ならあの場で二人とも操れば良いからね。片方だけつてことはそういうことでしょ。

だがしかし、その能力が私に通じないということは既に実証済み。そしてそして、そんなご都合主義な力を持った輩なら尚更、予定外の行動を起こされれば下手に足掻くより先にイー^{e a s s y}ジーな解決に手を伸ばしちやうよねえ？

それが街中ならば通行人なり宿の人間なり、無関係な第三者を巻き込んだ凶行を憂慮する必要が出てしまうが、お生憎様にもここは街道からちよいと離れた林の中。

関係の無い誰かが偶然に通りかかる可能性など、まさしく皆無。

すなわち君の行動は、何もかも私の予想以上に予想通りだったというわけだよ、H A H A H A !

(まあ、それは、良いんですけど………あの、レイン?)

はっはっは、何だね、ユズちゃんや?

すっかり慣れちゃった【念話】の声音が何だか困惑に染まっています?
ぜ?

(いや、その………この部屋は、いったい何なんですか……?)

………。

……いやー。

それは、その………予想GUYです☆

何でユズちゃんが【記憶の部屋】の中に居るんですかねえ……？

……いやマジで何故だよ。何でだよ。今までの憑依じゃこんなこと無かったやん!?

相手の幻術(?)から守るといふか、匿うイメージぐらいはあったけどさあ!?

まさかアレか？ 検証の時に「誰に見せるでもない」とかフラグ立てたせい!?

ええい、毎度毎度何かしら不測の事態を起こさんと気が済まんのか、私のボディは!?

《え、つと……ユズちゃん？ 一応聞くんだけど、そこから身体、動かせる?》

(え、あ……な、なんとか？ 視界が二つ重なるので混乱しますけど……)

あー……だよねえ。すつごい変な感じだよねえ、その視界。

でも頑張ってくれとしか言えん。なんせ私に戦闘技能なんか皆無なんだ。

あちらの使う能力、『認識改変』(推定)を私が防ぐ、ないし動けなくなった身体を私が使つてどうにかするというのが第一案。

相手がサラ嬢の身体を使っているのが私の【憑依】と似た条件だとすれば、戦闘能力は操る身体依存のはず。となればこの時点でも勝算は十分に見込めてはいた。

荒事向きじゃない、というあちらさんの発言をどこまで信じるかというのもあったわけだが……ユズちゃんが彼女の意思で自身の身体を動かせるというならそれに任せるのが一番だ。

学校で六年、実地で二年。立ち位置は後衛といえど彼女が磨いてきた戦闘技術は伊達じゃない。

……私がこれまで集めて(?)きた記憶の持ち主の中に、そっち方

面に精通した人間でも居たら条件は変わったんだけどね。お茶会の時の『私』+女王様みたいに。

伯爵令嬢、村生まれの幼女、一般女性に女王様。見事に荒事担当が皆無なんだこれが。

いや、そもそも意図して集めてきたわけでもないんだけどね？

(……とにかくさっきの話で本体がああ指輪だというのはよく分かりました。時間があれば嵌めた人間以外にも影響を及ぼせるみたいですが……少なくとも手から外して引き離せばサラ様を解放出来る可能性は高そうですね)

《だね。……いける?》

(……相手を傷付けずに抑え込んで、というのはあまり慣れてませんが、やってみますよ!)

「ぐ……く、来るなあ!?!」

痛むんだろう身体でどうかこうにか立ち上がった相手さん——
——『指輪霊』とでも呼ぼうか。

そのまま逃げ出そうとする指輪霊を、無手のまま追いかけるユズちゃん。……友達の身体に傷を付けたくないもんね。仕方ないよね。……ただどうにも足取りが……突然の二視点デュアルカメラのせいですね分かりません。本当に、申し訳ない。

(……でもコレ、慣れたら自分の動きを省みるのに凄く便利なような……)

《なんか有用性見出しちゃってる!? そ、そういうのは後にしようよ、ね?》

(わ、分かっています! 言ってみただけですよ!?)

ゆ、ユズちゃんもだいたい私のアレな能力に慣れてきちゃったよねえ……。

あたしや慣れさせちゃったこと自体に罪悪感がじわじわ来とりますよ、あはは……。

……アレ？　ちよつと待て、ウエイトだユズちゃん。自分の動きを省みる？

私の場合、見えるのは部屋の中と外の私が見てる景色であつて、私自身の身体は見えぬぞ？

その口振りからして君には君自身の身体が見えてるんよね？
じゃあソレ私と仕様が違——

「く、そ……っ！　近付くなあ!？」

(……っ!?)

「《うおつとお!?!》」

サラ嬢の指から何か出た!?!　いや、正確には指輪からか、多分!

この前のシヨツピング中の発言からして、サラ嬢に魔法系スキルは無いはずだ。今の魔力弾的な攻撃が彼女に出来るはずが無い。

……というか今考え事してたんだよ！　いきなり予想外の攻撃してきて邪魔すんじやねえ!

(わたしの口で急に叫ばないでください、レイン！　呼吸が乱れますから!)

ごめんツ!

「ご、こんなことならそっちの身体を選んどけば……なけなしの魔力が——こうなつたら!」

(……っ!)

《あ、あれ？　どうしたの、ユズちゃん!?!》

そんな突然の攻撃すら見事な反応で回避してみせたユズちゃんだったが、指輪霊の次なる行動が見えた途端に足を止めてしまった。

内心で首を傾げた私に、微かな焦り混じりの【念話】が届く。

(わたしの後ろにフォークさんが……避けると彼女に当たります!)

《……あ、やっべ忘れてた!　そういえばあの人も動けなくされて

たっけ!?!》

理由を言われて振り返って——ユズちゃんの身体は動かさずに——みれば、直立不動のままこちらに必死の視線を送るフォークさんの姿があつた。

……そうなんだよねえ。流星にこの人だけは遠ざけられなかったんよ。

お嬢様の異常に関してユズちゃんの言葉を受け入れてくれはしたんだけど、化けの皮を剥がしにかかるその場に立ち会うことだけは譲ってくれなくつてさ。

当人の職務を考えればしようがないとはいえ、残さざるを得なかつた懸念点。ウイークポイント

そこをしつかり狙つてくるとは……汚いなさすが悪霊きたない。

他人の身体乗っ取りにためらい無いだけはあるなあ、ちくしようめ

!

《どうするの、ユズちゃん!?!》

(……同じだけの魔力をぶつけて相殺します!)

私にそう伝えたが早いかな、腰から手に取ったは我らが切り札【牡丹灯火】。

その姿に何かしら感じるものがあつたか、ギリ、と齒を鳴らした指輪霊は咄嗟にサラ嬢の指先により一層の魔力を集めて弾丸の如く発射した。

当然、ユズちゃんはそれに即応、同量の魔力を集めていつかのような炎弾に——ん? 同量?

《ねえ、ユズちゃん? その杖の威力向上効果、忘れてないよね?》
(……あ)

え? いや、あ、じゃなくて。明らかにあつちの弾とサイズ違いますやん。

ソレそのまま撃つたら『こんがり男爵令嬢』出来上がり待ったなし
ですよん！ 何してんの!?

……いやコレ私のせいだな？ 急に考^タえ事^スめつちや増やしたもん
ね。もうゴメンとしか言えぬ。

(調整……は、間に合いませんね。なるべく威力を抑えます！)

《だ、大丈夫なの、それ!》

(少し火傷はするかもですけど……どのみち無傷で抑えるのは難しそ
うですから!)

《わりかし割り切ってらっしやる!》

驚く私を余所に、構えた杖先から急激にサイズを縮ませた炎弾が発
射された。

……ま、まあ相手に十三歳の男爵令嬢相応の運動能力しかないなら
ともかく、あんな抵抗手段をお持ちとなればある程度は仕方ないか。
しかし鉄火場での判断は割とクレバーよね、君。

撃ち出された魔力弾に対して、縮めた炎弾はそれでも一回りは大き
く。

ぶつかり合ったそれらが一瞬の拮抗の後で残したのは、薄く残った
炎の壁。

その進行方向には渾身の力を振り絞った直後で動けない様子の指
輪霊……の宿ったサラ嬢の姿。

「く……そがッ！ こんなもので！」

悪態を吐きながらも、指輪を嵌めた側とは逆の腕をかざした指輪
霊。

なるべく受ける炎を少なくする為か、壁を裂くように炎を振り払わ
んと——

「……っ? ぎ、ぎいやああアアアああああアアああああアアああああ

ノ無いもんねえ!?

今度はいつたい何さらしてけっかんねん、こんのパルプ○テボデイ
は!?

……あ、指輪霊さん!? それともサラお嬢様!? と、とにかくお氣
を確かに!?

ちよ、そんな勢いで転がったら——うわっ、木に激突した!? え、
衛生兵、衛生兵——!?

この身体は男爵とはいえ貴族令嬢……蝶よ花よと敬われる人間の
筈じゃないの？

そんな立場の人間を漸く引き当てたつてのに、なんでこんなことに
ならなきや——

「……あ、やつと落ち着いてきた？ ええつと……でもどつちだ、こ
れ？」

……！ あの、ネズミ娘の、声……！

あ、あいつ……この期に及んで何を暢気なことを言ってくれてんの
!?

そもそもこの子はお前の護衛対象だろうが!? 操られているとは
いえ、なんツて攻撃を——

「……うん、大きな怪我は無さそうかな？ あちこち引つ掻き傷だら
けではあるけど」

………は？

ど………どこをどう見たらそんな感想が漏らせんの!?

痛みに痺れて確認出来ないけど、四肢の半分以上が感覚すら無くな
ってるのよ!?

どう考えても怪我云々どころか、確実に命が危うい域にあるはずで
しょうがあ!?

「……え？ あれ、ほんとだ。火傷もどこにも無いね？ ……もしか
してさっきの魔法、彼女の身体は傷付けてない？」

え………えつ？

あ、れ……？ ひよつとしてこの子の手足、ちゃんと付いてる……？
腹が抉れたりとかも、してないの……？

目が片方無くなったりとか……あ、頭が欠けて血が零れてたりも……あれエ……？

……じゃあ、何なのよ。この『痛み』は？

何なのよ、私を感じている、この『不快感』は？

この『喪失感』は………いつたい誰が、何を、失った感覚だつて
いうわけ……？

「《そつかあ、そういうことなら——もう一発撃つところか、念のため》」

……えつ。

ちよ、ま……待ちなさいよ!? 今なんて言ったの、あんた!?

さ、さっきの魔法をもう一発つて……そ、そんな事されたら確実に

「《……うーん、本当に腹芸が苦手なんだねえ、君?》」

——ツ!??

こ、こいつ、分かってて……ツ!

い、いや駄目だ、ダメ。今はそんな事を考えてる場合じゃないツ!

「……っ、ああ、ッ!」

「《うわつと、逃げた!? とうかまだ動けたんかい!?!》」

うるさいわ! 動ける状態じゃなかったわよツ!

今も平衡感覚すらぐつちやぐちやで、いつ転んでもおかしくない
わツ!?

それでも逃げなきや今度こそあんたに消されるでしょうがあ!?

「《……ん、そんじゃコレ使おつか——『跪けッ!』》
「……………っ!?!」

は、あああ……ッ!?

から、だが……いや、魂が縛られて……!?!?

こ、この術……まさか、私と同じ——

そ……そうか、こいつ……っ、そうだった、のか……ッ!
道理で私の術が……私に抵抗出来る理由が——

……………じゃあ、なおさら、なんでだよ。

何で私を攻撃する?

何で私の邪魔をする?

おまえも……お前だって、私と同じだろ?

私と同じことをして、生きてきたってことだろうがッ!?

自分は良くて私はダメとも言える気なのか!?! このっ、薄汚い偽善者があ!?

「《ようし、効いたねえ。それじゃ……年貢の納め時ってやつだよ?》
「あ……………っ」

……………まだ、だ。

お前が、そうなのなら。

そういうことだと分かったなら……まだ手は残ってるッ!

「おま、エ………の……ッ」

「『うおう、こつち向いた!? な、何を——』」

「お前の身体イレモを寄せエツ!!」

……………。

……………。

……………入れ、た?

これが、あのネズミ娘の身体の中、なの……………?
それにしては……………何だか、感覚が……………
いや、とっかかりが無いというか……………?

——っ?

……………なに、これ……………?
ここから先に、進めない……………??
まるでここに、かRogamus:Curritべでもあるみた—

え?

今、何か……。

気のせい……？

……。

そ……それにしてもどうなってるの、こいつの身体は!?
上も下も分らないし、手も足も感覚が……っ!

こ、これじゃまるで……真っ暗などうSolinsenondoi
etくつにで、も……ッ!?

……

な……なにが

いつ たEaresatttingerepotestい……!??

う そ

なんで ?

なんなの、これ……？

なんでわた
き え しのか らSalinsenondoletd
だ

いやだ

やだ やだよ

わた しきNotaeinigrainfaciesvert
ipossuntaitakunai

しに たク ナSutraslegiturapudmona
chos,quoddoletdesuo ツ

や ダ

死にたくなArgentiniinsenondoletoiヤダ消
えたFaciesutaminsuperficiacquaep
onerrepotestクナイ許して助けテ嫌Marcamning

ramrelinquerepotestinquacuquer
retetigeritだ消エタクないごめんなサイ死にタクナイ
許シて助けて嫌だイヤダイヤだいやだ嫌こんナところで死にたくな
い終わりタクナイ怖い助けてクSacraeresinsenon
doletdaサイシニタクナイ許してお願いしマス嫌だEasom
niorumimpedirepotest助けて痛いTalis
maninse nondolet消えタクFlammamnonh
abecalorisenecalisisinvisibilis
potestcreareない許してキエタクナイ死ニタクナイ助
けテゴメHaecflammaeosquaintradomum
suntforisducetんなサイゴメンナサイゴメンナサイ
助ケテオネがいキエタクナイEarebumcorporaviv
endovim嫌ダシニタクナイイヤダイヤダゴワイ嫌嫌イヤイヤ
イヤIlla vox animosaliorumtorpore
mhabetayaAliorumanimasintus serva
reeteascustodirepotest. Potest
atemnocendisolasabaliispossess
aslargiripotest.

•
•
•
S e r v a t u s .

N u l l a m u t a t i o .

「——ユースさま あああああーっ!!?」

「ひゃわっ!」

《うわあお》

街道をちよいと外れた森の中。

響き渡るは、御令嬢云々を空の彼方へとかなぐり捨てた第一声。

……うん、もう、これだけで察せるよね。色々。

乗っ取られてる間の意識あったのね、この子。そら怖いわなあ。

「ご、ごわがっ！ がら、だ、がってにつ!! う あ、あ、あああ
あーっ!」

「……よしよし。もう大丈夫ですよ、サラ様?」

勢い良く飛び付かれて驚いた様子だったユズちゃんも、すぐに察して慰めモードに。

ボロ泣き状態のサラ嬢を抱き締めかえしてナデナデ……やっべ、何この絵面。尊い。

「あー……うう、あああ………」

「辛かったですよね……怖いですよ、自分の身体が自分以外の意思で動くあの感覚……」

そしてまさかの彼女が味わった恐怖を共感出来ちゃう人材とい
ね。

……何というか、今回の事といい、そもそも私達と縁が出来た経緯
といい、ある意味鬼のような引きの強さしてるよなあ、このお嬢様。

たまたま選んだ街で、たまたまとんでもない遺跡の情報手に入れ
ちやつて。

そこでたまたま選んだ冒険者が、たまたま私達で。

それで今回もごく普通にショッピングしてただけなのに、たまたま何かヤバそうな『ナニカ』に目を付けられちゃったという。……私達が居なきや今頃どうなってたやらだよ。

良いモノ悪いモノ問わずに引き寄せちゃうような星の下にでも生まれちゃったんかねえ。

(それはそうと、レイン? ……最後、どうなったんですか、アレ?)
《……分かんない。ぶっちゃけなんにもわがんにゃい》

何故か相殺のおまけみたいなの火の粉でやたらダメージ受けたらしい指輪霊を追いかけてみれば、当人(?)は超絶苦しんでたのに魔法による外傷は特に付いてなかったという事実。……のたうち回ってたせいで擦り傷だらけではあつたけど。

……あれこれひよつとして推定憑依中の指輪霊さんにだけダメージ入ってる? なんて考えからもう一発撃つぞと言ってみれば、絵に描いたような「やべえ」な顔するもんだから確信したよね。

そして超慌てて逃げだした背中に向かつて、かつて暴発したマンドラゴラ疑惑の秘技【叫喚】の初となる意図的使用により足止め成功。

さてトドメだとばかりに杖を向けた瞬間……決死の覚悟で何かしてきたっばいんだけども——

(なにか……部屋の外に何かがあぶつかってきた感じはありましたよ?)

《ああ、うん。【記憶の部屋】に壁ドンされた的な感覚あつたよね》

そこから何かくぐもった声が聞こえた気がして………うん、それっきり。

何がどうなったやら調べようにも、どうしていいやら正直言つてサッパリ分からぬ。

そも『部屋』自体が割と意味不明なのに、その『外』とかいう概念が訳分からな過ぎてな—。

(……今までのように、記憶が増えていたりはしないんですか?)
《しないのよ、それが。……そもそもあいつ幽霊だったのだったのよ、
疑問なんだよねえ》

身体の乗っ取りは【憑依】で片付くにしても、認識改変(推定)に
魔力弾まで撃つてきたりと、私達が知ってる幽霊とも『幽霊(?)』と
も微妙に食い違ふんよね。

少なくとも私にあんな事が出来るとは………またやってみたら
出来ちゃったらどうしよう。

……け、検証は後にしよう、そうしよう。今はこれ以上話をややこ
しくするもんじゃない。

それに、私もユズちゃんも今回あちらさんの『姿』というのを全く
見れていない。

加えてあちらさんも、私の存在に気付いていた節が一切無かった。
……最後の瞬間を除いて。

なーんか互いに互いを全然違うモノと勘違いしてたんじゃないや? つ
て疑惑が沸いてきますなあ。

そもそも指輪を媒介にしてたつてのが——ん?

《あ、そういえば当の指輪は?》

「指輪? ……あ、サラさ——」

「え………ひい!? こ、こんなものツ!」

「《あつ》」

己の手に嵌ったままの指輪に気付くや否や、指から引っこ抜いて力
いっぱいブン投げるサラ嬢。

イヤ多分その指輪には何の罪も無いというか……まあ、気持ちは分
からないではない。

分からないが………とりあえずちよつとチェックしとこうか
ね。

えーと、この辺に——あつたあつた、どれ……んむう?

(……どうでしたか?)

《紫色だった宝石が無色に変わってた。あの中に居たって事なんかね?》

(……宝石に憑依って、出来るものでした?)

《物相手には試しとらんね。……いや、遺体も物といえ物だけでも……》

草葉の陰へと投げ込まれた推定無罪(?)の宝石付き指輪さん。なんとイメチェン(?) 済み。

しかし変化は一応あったとはいえ、それが何を表すやらの特定なんて出来るはずもなく。

一応と思い『部屋の外』なる謎概念へ意識を向けようとしてみるも、暖簾に腕押し糠に釘……と表現出来るような手応えすら全く無し。……ダメだこりゃ。

《ま、分からんもんはしやーない! とにかく彼女が助かって良かったね、って事でここは一つ》

(……そうですね。今はそれだけ分かれば十分ですか)

幾ら考えても答えが出ない事に、ずっと頭やら時間やら使ってもしょうがない。

そんな私の言葉に、ユズちゃんは苦笑いで頷いてくれました。……部屋の中から。

……うん、コレの検証だけは急務だね。何がどうなつとるんや、マジで。

「ああ、お嬢様が御無事で本当に良かった——のですが、その……そろそろ私も助けていただけませんか……?」

「《……あ》」

やっべ、忘れてた。……というかまだ動けないままだったの、
フォークさん!?

いやマジで何なのあいつの能力!? やっぱ絶対幽霊じゃないよ、あ
いつ!?

幽霊っぽい要素がちよつとあつただけの得体のしれないナニカだ
よ!?

……………鏡見ろ? 映らんよ。



《——王都よ、私は帰ってきた!》

「……………なんですか、それ?」

《ああいや、一応やっつくべきかなー、と》

シワヒの街を出立してから数日。途中で起きた色々の衝撃も漸く
薄れてきた頃。

ついに我々は王国が首都レイオードへと辿り着いたのであつた
……………とまあ、語り口はさておき。

実際には『私』としてはともかく、幽霊のレインとしてここに来る
のは初めてだ。

それでも何となく、帰ってきちゃったなと感じたりするのは、やは
り『私』に引つ張られている部分がどこかにあるということなんだろ
うか。

……………後で『私』の家ことスペクハイド邸がどうなってるか、ぐら
いは一応確認に行こうかな?

まあ家主も何も一人残らず現世から居なくなっちゃったわけだし
貸家になってもなつてたり……………って仮にも伯爵家の屋敷がそれは無いか。

《……………ユズちゃんの的にはこの王都はどう? 出身国の王都も見た事あ
るんよね?》

「……賑やかだとは思いますが、特に代わり映えはしないですね」
《ありや、そういうもん？》

「深く見れば違いはあるんでしょうけど、いち冒険者として見ればそういうものじゃないかなと」

と、まあまあドライな感想を呟きつつ、通りを歩くユズちゃんなのでした。

うん、まあ、王都なんて言われても何の思い入れも無けりやそんなもんかね。

さてさてそんな彼女は現在、サラ嬢一行とは別行動中。

なぜならあの二人は今、王都滞在中に使う予定の屋敷を常駐する使用人（一名）を加えた布陣でこれからの使用に堪えるように整えている最中なのである。

流石にそれに冒険者が手出しするわけにいかんし、真昼間の王都の貴族邸の中で護衛の必要性もないだろうということで、一兩日の自由時間が与えられたわけだ。

……こつちについて来たがってたけどね、お嬢様。

いやいや君は指示出しに残らなきゃいかんでしようよ、とその場の全員から宥められていた。

いやあ、あの指輪の一件以来めっちゃくちや懐かれたよねえ……まあ、あれはしょうがない。

………え、あの後一回「お姉様」呼びしても良いか聞かれたのマジで？

それで返答は……？ え、断っちゃったの？ そんなあ、もったいねえ!?

まさか能力検証の為に席を外してたせいで、そんな絶景を見逃していたとは一生の不覚！

……その一生は既に終わってる？ せやったわ。

「イヤ何目線で惜しんでるんですか。……それにしても私達が来るの

は分かっていたはずなのに、今から屋敷の整備をするものなんですね」

《あー、そこはホラ、人手の問題もあるからさ》

あの屋敷を普段一人に管理させるともなればね。……貴族的には最小級ではあつたけど。

それでも維持だけ……主に外から見た時の見栄えだね。それを悪化させないだけで手一杯だよ。

人家つてやつは人の手が入らなくなるとあつという間に寂れていくから……人手が増えた時点で改めて整えることにもなるわけだ。

「……本当に、内側を知ると色々とも悲しくなってきましたね……」

《あー……いや、いわゆる想像される通りの暮らし振りをしてる貴族だつてちゃんと居るんよ？　というか多分そっちの方が多い……か
どうかは、微妙、なの、か？》

「……侯爵、伯爵といった方々に比べれば、サラ様のような男爵、子爵の方が数は多いですよね。となると割合としてはやつぱり……？」

《え？　あー、ほら、爵位の高さと領地が豊かな土地かどうかはまた別問題だから。伯爵家以上に裕福な男爵家、とかいうのもないわけじゃないし》

「……そういうものですか？」

そういうもんです。実際『私』より羽振りの良い子爵令嬢とか居たし。記憶に残ってたし。

その記憶の中じゃ、家格に合わない高位貴族の令息に付きまどつては眉をひそめられてるけど。

それを見掛ける度に『私』は「常識が無い」と憤慨して………んう？

「……レイン？　聞いてますか？」

《え？　あ、ごめん。ちよつと考え事してた》

「もお……レインにも重要なことなんですから、ちゃんと聞いて下さいよ」

ごめんて。……しかし私にとって重要なこと？ この王都で？
いや、逆にどこならとも言わんけど、この幽霊(?)に関わるよう
なことなんてそうそう——

『鑑定石』があるはずですよ、王都ここになら

……なるほど。それは重要コンテンツ。

——私を『鑑定』したら果たしてどうなるのだろうか？

この疑問はこれまでの旅路の中でも、実は結構な頻度で話題に上っ
ていた。

通常の鑑定結果で分かるのは、名前に種族と年齢、そして所持する
『スキル』。

スキルは生来のものが殆どだが、稀に新たなものが追加されている
こともあり、その要因は人によって様々……というか特定出来ていな
い事例が殆どを占めるとか。

……逐一確認出来るもんじゃない以上、そりゃそうなるわな。

冒険者をはじめとする、スキルが生存率や仕事の選択肢に直結する
ような職業の人間であれば、そういった事例を胸に再鑑定を行うこと
もあるだろうが、それでもなければ幼少期に一度鑑定してそれつきり
というのも珍しくない。

物品鑑定に関しても、そうそう必要に迫られるような機会は無く。

なので『鑑定石』を設置した施設は、その希少性と重要性に反して
意外にガラガラ閑古鳥。

今日の私達もその例に漏れず、王都のど真ん中に建つ荘厳な建物の
中へとほぼスループラス状態で入室出来ましたとき。

そこで待っていたのは、見上げんばかりのサイズの透き通った青色

の石柱。

そしてそれを固定する台座から床、壁に天井にまでみっしりと教会のステンドグラスを思わせる精緻な装飾が広がっている。

……『私』の記憶との齟齬は無いね。時期としては七、八年前……まあ、そんなもんか。

しかしなんかえらい手の掛かってそうな一室なんだけど、その……維持費とかどうなってんの？

鑑定料もそんな高くなかったし、これでやっていけんの？ 公共施設扱いかもしれないけどさ。

ねえ『私』、その辺について何か——あ、知らないか。そりゃそっか。

どうしても気になるなら受付の人にでも聞けって話やね、うん。そこまでじゃないわ。

「……わたしも一応調べてみましたけど、やっぱり何も変わってませんね」

おう、^{o h}私が部屋見てる間に『鑑定石』に触れとるやないかい、この子。

まるでSFの光モニターみたいなそれがユズちゃんの眼前に浮かんで……いや、ここだけ見るとむしろフルダイブゲーム系のワンシーンやな。

……案外その手のゲームが現実になった系だったりするんだろうか？ この世界。

特に面白い要素は無いって？ まあまあそう言わずに私にも見せとくれい。

名前 : ユズ

種族 : 人間

年齢 : 14
スキル : 『火魔法』、『水魔法』

わお、シンプル。

今を去ること九年前、これと年齢部分を除いて同じ表示が出たことでユズちゃんは親元を離れて学校へ行くことになったんだよなあ。

……あ、気になってるんだから人の批評してないでさっさと調べて？ あ、はい、すみません。

では改めまして……刮目せよ！
これが私の鑑定結果だ！

名前 : inanisipse{n}nuUrit[n]
種族 : privatusd,p.d_k.o.d,@
年齢 : 15601371429
スキル : 『aliquidssimileeXspiravit』

……。

……。

……。

えー。

Chapter 4 C4-1 学び舎

——こうして此処にいますと、学校という場所で過ごした記憶を思い起こすことが度々ある。

隣の友人と他愛の無い話をするひと、課題の多さに嘆きを漏らすひと、先の授業について周囲と議論を交わすひと——生徒がみんな貴族という事や、その最低年齢が十二歳といった違いから、それぞれの光景は構図が似た物ではあっても雰囲気は結構な違いが見えるけれど。

しかし今のわたしの立場は生徒ではなく、その護衛の一人です。

護衛対象たるサラ様が授業を受けている間、その教室から壁一枚隔てた控室で他の生徒業の護衛の方々と共に待機しておくのが、今この時間における役割。

勿論、何かあればすぐに動けるように……というのは今回に限った話ではないですね。

軽く見渡す限り、ここに同じ職業冒険者という意味での『同業者』の姿はありません。……同じ業務の最中だといえましょう。

……令息令嬢の護衛に好き好んで無位無官の冒険者は選びませんよね、普通は。

あつたとしても相応の実力……というよりは実績を持った、いわゆる『雲の上』の方々の方で。

そんな中に一人混じった『無位無官の冒険者』であるわたし——ですけど、思ったほど注目を浴びる羽目にはなっていない。

荒事など専門外な側仕えでありながら「護衛を兼任しております」という態度——ハリボテを駆使してきたというフオークさんから受けた事前指導……に加えて誰かさんに身に付けさせられた『黙っていれば良家の子女に見える所作』のお陰なんでしょう。……多分。

きつと。

実際に周りを見ても荒事など専門外です、という身体付きなのに眼光は異様に鋭い女性だとか、おっとり微笑んでいるようなのに、視線を向けるだけで寒気が止まらない御婦人とか居ますし。

むしろ筋骨隆々の男性とか、一目で強そうだと分かる人の方が安心出来るまであるというか……やっぱり貴族の世界ってコワイです。

……わたしもどちらかと言えばそういう分なりにくい側の一人だと思われてるのでしようけど。

まあ、その……トラブルを未然に避けられるのは良い事ですね。ハイ。

それにしてもこの時間……馬車の護衛等と違って周囲の人達との雑談も出来ないですし、無暗に立ち歩いたりも憚られますし……ハッキリ言ってしまうと暇ですね、すごく。

外から暴漢でも飛び込んでこない限り出番も無い……その場合も動くのは警備の方ですか。

……うん、本当にやれる事が何も無い。

そろそろ一回戻ってきてくれませんか？ けっこう本気で退屈で――

《――たらあいまあー》

(あつ、おかえりなさい、レイン)

ああ、噂をすれば……とはちよつと違いますかね？

わたし以上に退屈を堪えきれなかった幽霊さんが、散歩(?)から戻ってきました。

(今日はどちらまでお出かけで?)

《んー、食堂裏とー、屋上とー、校舎裏とー……あとトイレ》

(……何その並び)

誰にも見えない聞こえない、壁も扉もなんのその。

そんな身体を活かして、今日も彼女は思いのままに学園内を飛び回

る。

レインですもんね。仕方ありません……けど、今はちよつとだけ羨ましいかな？

《そっちはどーお？ 元氣してるー？》

(退屈してるー)

《だよねー、知ってるー》

最近レインの口調にも慣れてきたので、時々わたしも同じ調子で返すようになりました。

思えばこうして念話の為に憑依してもらうのにも抵抗無くなってきたなあ。便利だからなあ。

(それで、今日は何か面白いものでもあった？)

《んむ。この前の修羅場の続きが観れたぞよ》

(修羅場……？ あつ、本命の彼女さんに二号の存在がバレた男子とかいうアレですか？)

《そうだよそれそれ。いやー、これが見事な紅葉作つて一旦収まったかなーと思つたら、どこから聞きつけたやら、なんと三号ちゃんの乱入に発展してねー》

(ええ……有り得るの、そんなこと?)

《令息令嬢つて言つても高位貴族の長子でもなきや割と自由恋愛許されるからね。……二股三股はそれとして普通に処されるけども》

レインが見付けてくるゴシップ情報——ばかりでもないですけど——の報告が、最近割と本気で救いになってきているわたしが居ます。

何というか……こういう所にいる令息令嬢も、普通に人間なんだなあと益々実感するとうか。

……生徒の平均年齢が高いかからか、そういうのも何だか生々しいものが多い気がしますけど。

《……ああ、あと幽霊ご同輩見付けた。ユズちゃん後で祓つといて》

(えっ？ レインも出来るでしょ？ 成仏促進)

《……何が悲しゆうて女子トイレに憑りついたおっさんの記憶を得にやならん》

(分かりました。この後で祓いに行きましょう、迅速に)

あの人達の記憶が収められたあの部屋にそんなのが並ぶなんて、こう……なんか嫌です。

というか幽霊になってまで何してるんですかその人。どんな未練があつたらそうなるんですか。

……気持ちは分からなくもない？ 何言ってるんですか、レイン？
わたしは許しませんよ！

——今までレインから話には聞いていた、【記憶の部屋】およびそれに付随する能力。

彼女の中……としか形容しようが無い謎の空間と、そこに本棚という形をとって並ぶ記憶達。

そこにわたしを招き入れることが出来ると知った時、彼女はとにかく仰天していた。

異なるモノを映して重なる視界に混乱するわたしの傍で、彼女も頭を抱えたまま空中三軸回転を繰り返して……今更だけど、アレはどういう感情からくるリアクションだったの？ いや、予想外かつ想定外だったのはこの上なく理解出来たけどね？

一応、わたしにも彼女が過去に出会ったという幽霊の方々の記憶を見ることは出来たけれど……まさか他人の記憶というのがあそこまで鮮明というか、下手をすれば『自分』を失いかねない程に危険なモノだなんて思っていなかった。……あの時の様子からして多分、レインも含めて。

途中で彼女に引き剥がしてもらわなかったらどうなっていたか……おかげで見たのはごく僅かな範囲だけなんですよね。彼女の都合はもう少し客観的な視点も選べるらしいのになあ。

……まあ故人とは言え、あんまり他人の記憶を覗くのもどうかとは

思いますけど。

《——しっかし半年も経ってると話題にも出ないなあ……ううむ、あの屋敷の状態は……》

(……レイン？ どうかした？)

《え？ ああ、いや、何でもないよ？》

あの一件で、彼女の歪に思えた知識の源泉にも多少は理解が及んだけど……

彼女がいつたい何者なのかという点については、余計に分からなくなってしまう。

今までの発言が当人の記憶からなのか、はたまた別の方の記憶由来なのか判別出来なく——

(……………)

《……どしたの？ なんか、【念話】なのに刺さるような視線を感じるんだけど？》

(いえ……つくづくレインは魔訶不思議だなあと思っただけで)

《突然の罵倒!?! ……いやコレ罵倒か？ い、いやともかく急に何なのん!?!》

……その辺りの指針にもしたくて、『鑑定石』まで引っ張っていったんですよ？

何しろあの石の『鑑定結果』というのは、神様が定めていると言われてる代物です。

本人にすら仔細不明なその身体(?)についても、何かしら情報は得られるんじゃないかって、少なからず期待してたんですよ？ これでも。

……なんだったんですか？ あの鑑定結果。数字を除けば一文字も読めなかったんですけど？

「ああ、コレ私の母国語……じゃねーわ」って何ですか！ じゃあど

この文字なんですか!?

唯一読めた年齢にしたって、156億歳ってなんなんですか!?! 意味が分からないですよお!?!

(……………若作りお婆ちゃん)

《え? ……………イヤ違うよ!?! アレ絶対なんか表示がおかしくなってる……………というか全体的にバグってたんだってば、きつと!?! 地球⁴⁶さんのトリプルスコアなババアじゃないから、私!?!》

(……………チキユウさん?)

《あ、やっべ通じるわけないやん!?! と、とにかく違うから! ねっ!?!》

……………やっぱりまだまだ、わたしが知らない、聞かされていないことは多いらしい。

でも、まあ、いいかな? これからは無理にレインから聞き出そうなんて思わなくても。

だって、なんだか……………当人にも説明出来ない事柄なんじゃないかなって気がするし。

なんなら一番ワケ分からない、って思いをしているのがレインな気がしてきたし。

……………実は神様もワケ分からな過ぎて匙投げた、とかだったり……………ないですよね?



「——ロクシーヌブルーヴァ公爵令嬢! 君との婚約を破棄させてもらうー!」

(……………レイン?)

《待つてちよつと待つて今私脳がバグってるからちよつと待つて》

授業を終えたサラ様と合流し、学園内にある食堂へと向かおうとしていたそのとき。

唐突に聞こえてきたその男性の声に、足を止めたのはわたし達に限ったことではなく。

「……………エモン様、それはどういう意味の発言でございましょう?」

「ふん、頭の回転の悪い女だな! 今日限りで君との縁を切らせてもらうと言っているんだ!」

(あの、これ……………何が起きてるんですか?)

《そりや学園には来たけどさあ、令息令嬢一杯だけどさあ、それでもコレはどうかと思うなあ》

言い争っている(?)二人の男女の姿に、ポカンと立ち尽くす周囲の人々。

傍らでブツブツ呟いているレインの声だけが、わたしの耳には嫌に響いていて。

「これで僕は晴れて自由の身となる! これからは『真実の愛』にこの身を捧げるのだ!」

「……………真実の愛、でございませうか」

熱に浮かされたような発言を繰り返す男性に、唯々冷ややかに言葉を返す女性。

視界の端では、彼らを囲む形になった人々の気まずそうな目配せが続いていて。

《……………やるならやるで卒業パーティーでやるべきじゃね?》

(卒業パーティーなら有り得るの!?)

そんな中で聞こえた一言に、危うく叫びそうになるのを堪えながら
声を送った。

それ、いつものからかい……ですよ、レイン？

なんか素で呟いてた気がしてちよつと聞くのが怖いんですけど？

《あつ……ごめん適当言った。どのタイミングでも有り得んわ》

(だよね?! 有り得ないよね?! ……というかこれどうしたら良いの
?)

《……サラ嬢の意向を上げれば良いんじゃない?》

(……ですね。貴族同士の揉め事について冒険者^{わたし達}が考える必要は
ないですよね?)

ようやく脳みそが再起動を始めたらしいレインと、心の中で話し合
い。

結果として出てきた、至極当たり前な結論に従ってサラ様の顔を仰
ぎ見て。

「…………やるなら卒業パーティーじゃありませんの?」

《「卒業パーティーなら有り得るの!?!」》

溢された呟きに今度こそ堪らず叫んでしまい、渦中の二人に劣らな
い注目を浴びる羽目に。

……ああ、本当にわたし、知らないことばかりだなあ……。

「——本当に、すみませんでした……」

「い、いえっ、ユズ様には何ら瑕疵はありませんわっ!?」

学園食堂で起きた、突然の騒動から約半日。

王都にあるクリイサム家の屋敷に戻って来たところで頭を下げたわたしに、サラ様からは慌てた様子でそんな反応が返ってきた。

「いえ、でも……わたしの発言から急に場が収められたと言いますか……まだ話の途中だったのに強引に解散させたように思えたんですか……」

「あれは、その、むしろそうなって然るべきと言いますか……言われてみればそうじゃないか、とその場の人間が一斉に気付いたといえますか……」

思いもしない言葉に堪らず叫んでしまったあの瞬間から、流れたのは数秒の沈黙。

一挙に集まった視線に慄いたわたしを余所に、動き出した警備の方々が騒ぎの中心に居る二人を——特に騒ぎ立てる男性の方を——別室へと撤収させる形で事態は一息に収束した。

それでもどうにも座りが悪いというか、あるべき流れを寸断してしまったのではというわたしの不安に、何だか困り切った顔で首を横に振るサラ様。

そこから教えてもらえたのは、あの状況が如何に有り得ない光景だったかについてだった。

学園の中、食堂という場所においてあれ程声高に自身の意思を主張する、という点がまず一つ。

また二家の間で話し合うべきだろう『婚約破棄』なる件を不特定多数の前で口にしたばかりか、両者の様子からして明らかに男性側から

一方的に宣言したと思われること。

おまけに『真実の愛』などという演劇の中でしか聞かない言葉（演劇でならあるんだ……）を、恥ずかしげも無く使用したあの宣言。

細かく言えば他にも色々……ともあれ何れに照らし合わせようとも『有り得ない』言動であり。

それ故にその場の全員が陥った『思考停止』を破ったという意味で、わたしの発言を咎める方はおそらく居ないだろうとのこと。

言われて肩を撫で下ろしたわたしの前で、けれどサラ様は小首を傾げつつ呟く。

「——イヤ本当にどうして卒業パーティでならアリ、なんて思ったりしたんでしょう、私……？ あつ、過去にそのような事例が起きていた、なんて記録があったりもしませんからね、ユズ様！」

「えっ、は、はい……？」

……時々、サラ様達にわたしはどう思われているんだろうと疑問に思うことがある。

様々益をもたらした冒険者として信頼されている、にしても扱いが何かおかしいような……？

これについてレインに聞いてみても、なにやら笑って誤魔化されるだけでしたし。

……その時の表情からして、絶対何か知ってて黙ってる感じだったけど。

たぶん、その方が面白いから、とかですかね。……まったくもお。

「それにしても、あのお二方……いえ、エモン様男性側からの一方的な宣言でしたが、どうしてあの方は突然あんな行動に及ばれたのでしょうか……？」

「……あの二人の関係について匂わせるような噂等は無かったですか？」

続けて思案に首を傾けたサラ様に、そう尋ねてみた。

それはつい先日あの学園に足を踏み入れたばかりのわたし達に比

べれば、何かしら予兆を見聞きしていてもおかしくないと思つての言葉であつて。

「……………ユズ様。私は、男爵令嬢です」

けれどその問い掛けに返つてきたのは、どこか哀しげにも見える真顔だつた。

「え？ ええ、存じてます」

「渦中のロクシー又様は、公爵令嬢に有らせられます」

「あ…………縁遠いと？」

「それはもう、天と地ほどに。私の事など視界に入れたことすら無いかもしれないぐらいには」

「…………そういうものなんですわ」

「そういうものなのですわ」

…………同じ教室で机を並べる仲と言つても、わたしの考える『学友』とは話が全く違うらしい。

わたしがすっかり慣れてきた納得を噛みしめる中、不意にサラ様は吹っ切れたように微笑んだ。

「…………まあ結局どちらの家も遥か雲の上ですもの。後の事は二家の間での話に終始する筈。驚きはしましたけれど、これ以上この件について私達が気を揉む必要などありませんわ」

「そう、ですか…………」

…………頭の片隅にちらりと、嬉々として『情報収集』に飛んでいった相棒レイシの姿が過つた。

わたしも訳が分からなかったし、事の次第を確かめるには最適だと思つて送り出したけど——

「むしろ変に首を突っ込んでしまつて、高位貴族家同士のやり取りに巻き込まれる事態になつては堪りませんもの。何も知らずにいるというのもまた一つの処世術ですわ」

「……………」

……………大丈夫だよね？

レインが何か碌でもない情報仕入れてきて、そこから問題に巻き込まれたりしないよね？

う、ううん、大丈夫だ。レインの姿はわたし以外には見えないし、その声も聞こえない。

たとえ彼女が何か厄介事を見聞きしてきたとしても、わたしがそれをわざわざ口にしたりしない限り……いや、いつそのこと何も聞かなければ——

《ユズちやーんっ！ やっべえわあ！ ヤツベエ情報仕入れてきちやっただわーっ！》

「……………っ!？」

「……………どうかされましたの、ユズ様？」

「い、いえっ……………何でも……………」

……………まさに噂をすれば、影。……………いえ、彼女に影は無いですけど。ほんとに、本当にどこかでタイミング計って出てきたりしてるんじゃないですよ？

いえ、今はそんなことどうでもいいです。彼女が何か言う前に——

(ソレ、わたしには教えないで下さい。いいですね、レイン?)

《えっ? ……あ、うん。……………ごめん?》

……………どんな情報は聞いてみないと分かりませんが、レインの声音からして絶対とんでもない代物です。雰囲気で見分かります。……………絶対悪戯する時の笑い方だったもん、今の。

そう毎度毎度大人しくからかわれてなんてあげません。わたしだって慣れてきたんですからね？

……あれ？ ちょっと、レイン？ そんな隅っこに行つて何して……え、まさか拗ねてるの？

折角重要な情報も持つて来たのに、つて……わ、分かつた分かりましたから！ 教えてくださいお願いします！ ……あ、でもいつもみたいなからかいはナシですよ、今回は！

えっ、一世一代の舞台を邪魔された逆恨みが待っている？

………えっ。



「——き、きやあああッ!?!」

絹を裂くような女性の悲鳴。

続いて聞こえたのは、バシヤリという水音に、床に硬い物が叩き付けられた音。

突如響いた音にざわつく空気を感じながら、出元となつたのだろう教室の窓を見上げた。

「……何が起きたのでしょうか?」

「……さあ、何が起きたんでしょうね」

視界の端で動き出す警備の方々を見送り、首を傾げるサラ様に額を抑えたい気分ですら返す。

現場になつたのだらう、上階の教室が俄かに騒がしくなるのを耳に留めながら、彼女を促す形で校舎の中へと避難した。

(……で、何をしたんですか、イタズラ幽霊さん?)

《いやいや、イイ歳して子供染みた嫌がらせを計画する輩にお灸を据

えてあげただけですがな》

校舎の中を歩きながら、わたしの元に得意顔で戻って来たレインに【念話】を送る。

……というか子供染みたって……まあ確かに、さつきその様子を聞いたときにはわたしも本当にそんな真似をしようとする御令嬢がいらっしゃるのかと呆気に取られましたけど。

《校舎に入ろうと近付く頃合いを見計らって、上階の教室の窓から水をぶつ掛ける。定番と言えば定番だけど、やるならやるで校舎裏に呼び出して……とか、もつと自然な手段が取れんもんかね》

(イヤ何の定番なの？ そしてどこに文句言ってるの？ ……で、レインはそんな輩に何を?)

《……覚えてる？ 私が最初に気付いた幽霊的能力が何だったか?》

(え、確か水面に……ああ)

……それならさつきの水音とそれに続く床を叩いた音は、わたしに掛けようとしていた水の器を取り落とした——いや、恐慌から投げ捨てた音かな?

手の中に抱えた器を見た瞬間、見知らぬ誰かと目が合ったら怖いでしょうね、相当に。

(まあ、それはいいとして……なんでまたそんな事やろうとしてるんですか、その人?)

《知らぬ。分からぬ。理解出来ぬ。……会話は盗み聞き出来ても其処に至るまでの思考に関してはサツパリやからね……。なんなんだ、あいつ。いやマジで》

……先日の『舞台』を邪魔をされた腹いせに、わたしを標的にした嫌がらせを計画する。

その行動の意味も経緯も理解出来ないのは、わたしが貴族の世界に疎いせいではないらしい。

レインもまた腕を組んだままクルクル縦回転して思案を……だからどうというポーズなのそれは?

《……ま、他にも色々計画されてたけど、こんな調子で未然に潰していくか適当に反撃しとくからユズちゃんには気にせずお仕事頑張っただね》
(……それは、まあ、良いですけど。ちなみにこの後は何が予定されてるんです?)

《その辺で確保した人類の仇敵をこっそり荷物に忍ばせる、だったかな。お望み通り服の中にでも入ってやろうかと思うよ? 計画者の》
(うわあ)

本当に、ホントに貴族の家に生まれた方々が考える事なんですか、それ?

子供染みだ、を通り越して完全に幼児の発想というか……むしろ大丈夫なんですか、この国?

……わたし達が心配するべきことじゃないから大丈夫? え、それってつまり……あ、ハイ。

(……でも別に荷物の中ぐらいなら騒ぐほどでもないですけどね?)

《……えっ》

(えっ?)

《えっ?》

え、だって例の虫ぐらい冒険者をしてれば幾らでも……あ、あれ? レイン? どうしてそんなジリジリと距離を……え、違いますよ? 平気なだけで好きとは言っただね——あ、ちよつと!? その誤解は流石に……あ! さては一回躲されたからやり口変えてきましたね!? もお!



「——きいやあああつ!?」

「——ギヤアアアアアア——ツ!?」

「——ヒアウイイイイいああああッ!？」

「……………最近いったい何が起きてるんですの?」

「さー、なにがおきてるんでしょウネー」

……………暇潰しの対象が日々聞こえてくる悲鳴と、その解説が変わってきたわたしが居ます。

とかいい加減諦めましょうよ。段々悲鳴が凄くなってきたるあたり、うちの幽霊さんから容赦が無くなってきたるんでしょう? ……わたしが言うことじゃないでしょうけど。

(……………今回は?)

《食堂の鍋に汚水混ぜようとしてやがった。もう目的が迷子……………いや、それは最初っからか》

戻って来たところを呼び掛ければ、額を抑えるレインと目が合った。

……………彼女も段々やり返しを楽しむというより、辟易が先に来ちゃってる気がする。

(ええ、それ被害が大きくなり過ぎじゃ……………どうやって止めたの?)

《そりやもう、厨房に忍び込んだ瞬間『鬼の顔』集団が満面の笑みでお出迎えよ》

(わあ、こわい。……………そんな目に遭っても続けるんですね)

《ホント、しょーもない事に熱意を燃やす輩ってのは何だっぺこう……………何かね、その目は?》

(イエ、なんでも?)

《……………ま、いいや。次の妨害行ってくるね。……………しかし護衛用の控え室にネズミの腐乱死体って、怒らせる人間が多過ぎるやろ常識的に考えて……………》

そんな事を呟きながら、また天井の向こうへと飛んでいくレインを見送った。

……容赦が無くなってるのは彼女のせいじゃないですね。もう形振り構わないというか……

ここまでくると嫌がらせ……嫌がらせ？ を成功させた方が問題になる気がするんですけど。

………というかそもそもどうしてレインだけが対処に奔走する事態になってるの？

最初の頃の小さな嫌がらせ（未遂）はともかく、ここ数日は大勢が迷惑を被りかねない内容だ。

それにレインが未然に防いでいるといっても、返り討ちに遭った犯人を検めに向かっているのは周囲の人達であって………そこで何が為されようとしていたか、分からない人達ばかりな筈がない。

いい加減、わたし達以外に対処に動く人達が現れてもいいはずじゃ

「……ところで、その、ユズ様？ 実はご相談したいことが、出来てしまったのですが………」

「サラ様？ ……わたしに相談、ですか？」

「ええ、先の授業の終わりしなに………こちらを頂いてしまいました」

「これは……お茶会の招待状？」

いつものように授業を終えて合流したサラ様の手には、見慣れない招待状が握られていた。

……御令嬢同士で非定期にお茶会を開くことは知っていますし、傍に控える形で参加したことも今日までに何度かある。

けれどあくまで御令嬢同士の催しであるはずで………わたしに相談とはいったい何が………？

「その、私の護衛であるユズ様を参加させて欲しいと………ロクシン様から」

………ロクシーヌ様？

あれ、それって公爵令嬢様の御名前、ですよね？

上から順に、公爵侯爵伯爵子爵男爵……えつと、とにかく、サラ様

も雲の上だと仰ってらした、公爵令嬢様からお呼び出し、ですか？

……わたしを、名指しで???

………。

……あ、あはは……。

レイン、タスケテ。

「——本日はようこそおいでくださいました、『狐鼠姫』様」

「本来ならばもう少し早くこの場を用意するべきでしたが……こちら
の不幸際が続きましたこと、謝罪させていただきましたわね」

「……あら、何故かと問われますの？ 決まっているではありません
か」

「私の軽慮浅謀なる『元』婚約者様と、無知蒙昧なる『小娘』の暴走を
一挙に引き受け、あたかも何事も無かったかのように制圧してくだ
さっていたのでしょうか？」

「……………ふふ、そうですわね。貴女様は何も、と」

「公爵家の者も感服しておりましたのよ？ 曰く、誰かが企みを妨害
していることは疑い無いにも関わらず、その痕跡の一切を確認できな
い、と」

「これ程の手腕を持つ者であれば、是非とも我が家に引き入れたいと
も考えて———そうですか。いえ、ご存じないということであれば仕
方ありませんわね」

「それでは話を戻させていただけますが……ご足労頂いた要件は他で
もありません。かねてより、淑女にあるまじき行いに精を出しておら
れる、件の『小娘』についてになりますわ」

「昨今はどなたかを標的にした些末事に熱を上げられては、ご親切な
何者かの手により引き留めていただいているようですが………ふ
ふ、誰とも知れませんが、お優しいことですよわね？」

「では本日は心優しい『何者か』様に伝わる事を願った、『世間話』の
場といたしましょう」

「さて……かの令嬢が現在ののような振る舞いを始めたのは、いつの頃からでしたか」

「以前から己が家格を弁えず、あちらこちらの令息に近付いては目に余る行為に勤しんでおられた方でしたが……益にはならずとも害にも成り得ぬと、目溢しを差し上げていたのですけれど」

「……………いえ、元婚約者エモン様の本性を暴いてくださったことにだけは、感謝せねばなりませんね」

「けれどいよいよ学園の和を乱し始めたとなれば、このまま放任は許されせんわ」

「未遂に終わっているとはいえ、その手中には不愉快な計画が幾つも存在していましたもの」

「彼女にはその不遜な思惑を抱いた罰を与えると共に、自らの立場を改めて分からせて差し上げる必要がありますわ。……そこで私、丁度良い方法を考えましたの」

「———今度、学園の階段から突き落として差し上げませんか？」

(……………なんで?)

《……………そのテンプレは要らんとするの》



公爵令嬢様からサラ様を介してわたしに届いた、お茶会への招待、という名のお呼び出し。

以前と同様に、女王様モードのレインに対応してもらった後ろで聞いているやり取りは、けれどどうにも首を捻らざるを得ない方向へと進んでいった。

話の始めはわたしが——本当はレインが、だけど——対処していた『嫌がらせ』について。

多分妨害に悲鳴を上げていた犯人を調べること、標的が誰だったかを突き止めたんだろう。

それからギルドに問い合わせ得られる情報や状況証拠を合わせることで、それがわたしによる『反撃』だと判断したらしかった。

……でも痕跡を残さない手腕と言われても……その、大体はレインが起こした心霊現象だから、跡が残るわけないというか……。

お抱えの申し出もちよつと……少なくともわたし、この国に永住するつもりはありませんし……なんだか、もう、本当にすいません、公爵家の皆様。

そこからはあくまで世間話として、ここ数日の『嫌がらせ』の発起人について聞く事になった。

……いえ、まあ、例の騒ぎの直後にレインから計画者として名前を聞いてはいたんですけど。

——ファルフアールティーン子爵令嬢。

どうやらこの人物が、現在学園で起きている一連の騒動の元凶である……らしい。

公爵令嬢とレイン、両方からそうだと指定されている以上、疑いの余地は無いかなあ。

先日の『舞台』で声高に宣言されていた、『真実の愛』の対象となる女性だ、とか。

子爵家の出身、という身分にも拘わらずより高位の家の令息に無遠慮に近付いている、だとか。

『嫌がらせ』の事を除いても、御令嬢として宜しくない事を色々やらかしている……だそうで。

正直わたしにはどこまでが問題なのかよく分からないんですけどね。……嫌がらせは別として。

異性でも学友とちよつと話をするぐらい別に良いんじゃないや………
そっかあ。

……と、とにかくその人の振る舞いが放置できなくなった、というのは分かります。

レインが全て未遂に終わらせていると言っても、わたし個人への嫌がらせの域を超えて学園中に迷惑を掛けかねないものになってましたし。

そこでロクシーヌ様は彼女をかなり強引な手段で排斥する方向で計画を始めているのだそう。

……公爵令嬢という方が計画だなんて、それっってもう『決定事項』と言つて良いですよ？

それ自体は貴族の方々の間での話ですし、結局害は無かったとはいえ散々標的にされた身として擁護する気には間違つてもならないですけど……

その……それを止めるための手段というのが、どうして――

「嫌がらせに嫌がらせで返すつて……なんでわざわざ相手と同じ土俵に……？」

《おかしいよなあ……やっぱなんかおかしいよなあ……？》

ロクシーヌ様の『お誘い』に違和感を覚えたのはレインも同じだったらしい。

先の勧誘も含めてお茶会の最中はひたすら言質を取らせない形で潜り抜けてくれた彼女は、今もわたしの傍でブツブツ呟きながら頭を捻っている。

《言質を取らせない会話は貴族の嗜み》だそうだけど……やっぱりコワイ世界だなあ……。

「……でもここで彼女を階段から突き落とすことに何の意味が？」
《……瑕疵を付けるため？》

「え？ ……誰に付くの？ この場合」

《そりやまあ……計画した公爵令嬢さんに？》

「ですよ。 ……なんで？」

《……さあ、なんでだろうーなあ……？》

……分からない。

あの人達の行動理由が全然分かんない。

そもそもレインにも分からないものが、わたしに分かるわけも……
あれ？ そういえば――

「あの場に居たサラ様も、場の雰囲気には慄きはしても疑問を持っていた風ではなかったよね？」

《……ああ、そういえば居たね、あの子。すっかり彫像になってたけど》

いつかのわたしのように、カチンコチンに緊張したまま「主賓としてお招きいただいたからには腹を括りますわ！」の一言で、わたしと一緒にお茶会に参加されていたサラ様。

けれどあちらの目的が実質わたしだけなことに気付いて、こっそり安堵の息を漏らしたところを《それでええんか男爵令嬢……》とレインには呆れられていた。

……レインが居なかったらわたしも確実に同じような状態になってただろうし、そこに関してはあんまり人の事は言えないけど……まあ、それはともかく。

「サラ様の反応からして、やっぱりこの国ではそこまでおかしなことでもないのかな？」

《え、いやあ、そんなはずは……？》

うんうん唸る彼女から、《そんな記憶は……あれえ？》という呟きが

聞こえてくる。

……前に口走っていたことも合わせて考えると、やっぱりレインがこの国出身の貴族——の幽霊さんの記憶も持ってるんですね。それが現状と食い違っていて困惑しているんだとしたら、この反応も頷ける。

《これじゃまるで……いやいやしかしそんなわけ——》

「……レイン？」

《ああ、うん、ごめん。何でもない。……で、どうしよつか？》

「……どうしましょうね？」

レインに聞かれて、改めてこれからの行動について考えてみる。

件の子爵令嬢様の行動については、後は公爵令嬢様が手配した方々が対処するとの事ですし。

嫌がらせ返し(?)への参加についても、レインが例の女王様モードで断ってくれたし。

……流石にその行動自体を咎めるような諫言は出来なかったと言っていましたけど。まあ雰囲気で誤魔化してるだけで、立場はずっとずっと下ですもんね。

理解出来ない応酬がこれからも続くらしいことに首を傾げる想いはあるけど……だからといって特にこれ以上わたし達が何かする必要なんて無いよね? ……元々わたしは何もしてないけど。

この前サラ様も言っていたように、貴族家同士の諍いなんて関わらずに済むならそれが一番だ。

………うん。決めた。

この学園におけるわたしの雇い主はサラ様で、役目はその護衛なんだ。

それに関係する事以外、特に気を揉む必要なんて無いはずだ。

それじゃあまず、気を取り直して——

「あの人を階段から突き落とすに行こっか」

《……………ユズちゃん?》

あれ、どうしたんですか、レイン?

そんな顔して……………何かわたし、おかしい事でも言いました?

え、いえ、ですから……………ファルファ様、でしたよね?

今からその人を探して、階段から突き落とすに……………そういう話をしましたよね?

え、え、だってそうしないといけなくて……………

ロクシー又さまから、わたしはそうたのまれて……………

……………それは、ことわったじゃないか?

え、え、え、だってこうしゃくれないじょうさまのおもうしつけですよ?

いちぼうけんしゃのわたしが、ことわれるわけないじゃないですか。

そうですよ

そうするために

そうすると

そうだから

それが、わたしの、やくわりで——

……え、ひょうい？
まあいいですけど……

……

……

え？

《——あ、成程。やっと分かったわ………クソツタレが》

C4—4 舞台

——上手くないかない。

上手くないかない。

上手くないかない。

上手くないかない！

あの草みたいなの頭の虫女が現れてから、何もかもが上手くないかない！

今頃私の傍に居てくれるはずだったエモン様は、どこかにお隠れになっちゃって！

なのに居なくなるはずだった公爵令嬢は、今も優雅に学園に居座ってていて！

そんな訳の分からない事態を引き起こしてくれる異分子イレギュラーには、さつさと退場してもらおうと……なのに……なのに……！

「——ああああっ！ もうっ！ いったい何なのよ、あいつはあ!?!」

苛立ちから放り投げたティーカップが、甲高い音を立てて部屋の扉に傷を作る。

床に散らばる砕けた欠片と、ジワリと広がるお茶の染みが煮立っていた頭を僅かに冷やした。

「はあ……はあ……」

……おちつけ。

そうよ、落ち着きなさい、私。物に当たってどうするのよ。

何よりこんな行動、淑女として、心優しい令嬢として有り得ないで

しよう？

それに、部屋の外には使用人だつて控えているんだから、こんな風に騒いだりしたら――

「お、お嬢様？　今の音は何が――」

「っ、何でもない、っわよ！」

案の定、異常に気付いて呼び掛けてきた使用人にギリギリのところ
で取り繕いつつ声を返す。

……あやうく激情のまま怒鳴り返すところだったわ。今この部屋
の状態を見られるのとどっちが不味いか分かったもんじゃない。

「ちよつと……そう、ちよつと手が滑つてカップを落としてしまつた
だけよ！」

「え……で、ではすぐに清掃を――」

「あ、ああ大丈夫よ！　大したことにはなっていないわ！　……あなた
達の手が必要だと思つたらちゃんと呼ぶから、それまでは勝手に私
の部屋に入ろうとしないこと！　良いわね!！」

「は、はあ……?？」

扉を隔てて聞こえてきたのは、困惑を滲ませたような応答。

それでもややあつて響いた、部屋の前から遠ざかつていく足音に思
わず息を吐く。

……誤魔化せた？　誤魔化せたわよね？

全く……今までずつと気を付けてきたのに、こんなことで疑われる
なんて馬鹿げてるわ。

……うん。二度とこんなことがないように、今一度胸に刻んで
おきましょう。

私は淑女。

私は令嬢。

今の私は――ファルファアティীগ子爵令嬢よ！

「……………そうよ、私は……………今の私は、みんなに愛される貴族令嬢……………なのに、何で……………っ！」

もう一度、思い出しては込み上げてくる怒りを必死に抑え込もうとして。

けれど折角整えた盤面を無残にひっくり返された憤りは、どうにも収まりそうになくて。

「う、ううう……………っ！ ああ、もう……………ッ!!」

結局、人目が無いのを良いことに寝台に飛び込んでしまうしか、とまずれば暴れ出しそうになるこの身体を抑える術を見付けられず。

先の惨状を増やす事態を防ぐためにも、滑らかなシーツの中で思考に沈むべく視界を覆った。

——なんで、あいつにだけ、私の力が効かない？

これがそもその問題。私の筋書きシナリオが崩れた、全ての元凶。

理由は全く分からない……………けれど、それならそうと受け入れるしかない。

大人しく役者になってくれないのなら、早急に舞台を降りてもらおう。

男爵家の護衛になんて元々大した『役どころ』は用意してなかったし、恙無く退場してくれさえすれば話はそれで済む。

……………あの時点での私はまだそんな風に、あの女の存在を軽く考えていて。

私が己の考えの甘さを突き付けられたのは、その翌日のこと。

毎朝迎えに来てくれていたエモン様の姿が見えないことを不思議に思っ、周囲に尋ねた言葉に返ってきた一言だった。

——人前であんな醜態を晒した男が、何事も無く学園に通えるわ

けがないでしょう？

………意味が、分からなかった。

だって私は、そんな結果を望んでないのに。

私が望んでない以上、そんな展開ある筈がないのに。

……あの女は、私の力が効かないだけじゃなかった。

周りの人間から、私の力の影響を解除する力もあるんだ、と。

私が作り上げてきた『台本』を破り捨てる力の持ち主なのだ、気付けたのはその時だった。

今までのように、他人を介して事を起こすのは危険。……そう判断するしかなかった。

下手を打てば、私までエモン様のように『退場』させられかねない。

折角手に入れた今の身体を、この立場を、不意にされるだなんて絶対に嫌だもの。

力を使って追い出すことは不可能でも、自分から辞めるように仕向けることは出来るはず。

そう考えた私は、だからこそ私一人で出来る最大限の手段を実行しようとして――

……まさかそれすら上手くいかないなんて、完全に想像の外だった。

なんで、あいつが行く先々に何を仕掛けようとしても、仕掛ける端から崩れていくの？

あの水の中の顔も、壁に浮かんだ顔だって絶対に見間違えなんかじゃなかったのに……っ!?

喉けようとした虫なんて、背中につ、口に……ッ！ うあうっ、思出しちやつたじゃない!?

……いつたいなんなのよ、あいつの力は!? 私の力の妨害だけじゃないっての!?

虫やネズミを使役? 学園の中にネズミなんか居やしないじゃない!

虫対策だつてこれ以上なく念入りに——う、やば、あの時の感触
思い出し………お`エ

※しばらくお待ちください。

………

……許さ、ない。

許さない、わよ……あの、虫女あ……

あんたがどんな力を持つてようが、諦めるもんですか……

このまま泣き寝入りなんて、絶対に受け入れてやるもんですか
………っ!

此処はっ! この学園はっ!! 私の為に設えられた『舞台』なんだ
からッ!!!



「——ごきげんよう」

「っ、ファルファ様……ご、ごきげんよう」

寝台の中で更なる惨事を起こし、改めて復讐を固く誓ったその翌
日。

学園の廊下ですれ違った令嬢へ掛けた挨拶に、返ってきたのはどこ
か固い声色だった。

「……なにか？」

「い、いえ、何でもありませんわ」

そう取り繕いながら、足早に去っていく姿に思わず首を傾げた。

……はて、彼女には何か『役』を与えていたかしら？ ……いや、あ
あ思い出した。その必要も無かった令嬢だったわ。

だって彼女、元からあの公爵令嬢の取り巻きだった一人だもの。

私がわざわざ『設定』しなくても、そういう『役回り』を自主的に
やってくれてる子だわ。

……あら、そんな子が今みたいな反応にしていたということは……
ひよつとして、いよいよ？

ふ、ふふ……そうね、そうよね？ 裏ではきちんと進行してくれて
いたのね？

随分と遅いからまた妨害されたのかもと思っていたけど……ふふ、
そうもいかなかったようね？

あの虫女の力がどこまでかは分からないけど、少なくとも『範囲』は
そう広くないはずだ。

むしろあの食堂の時みたいに、自分の声を聞かせることが条件なの
かもしれない。

だとすれば尚更、コレを妨害することは出来なかった、ハズだ。

なにせあいつの立場は何処まで行っても、いち冒険者、いち護衛。
それも男爵家の、だ。

一方、今回の『役者』は天下の公爵令嬢様。あいつと対面する由な
どあるわけがない。

……これ以上、私の邪魔を、出来た道理が無い！

「ん、ふ……っ、ん、んっ」

漏れ出そうになった笑いをどうにか堪える。

ちよつと周りに人目が無いからって、今漏れかけた笑いは流石に淑
女らしく無さ過ぎだ。

……むしろ今の学園はどこにあいつの影響で私の力を逃れた人間

の耳目があるか分からないし、あいつを排除出来るまでは気を張り続けているべきなのか。……全く、本当に厄介な……。

………まあ、いい。

それに考えようによつては、今までがちよつと簡単過ぎたとも言える。

何でも出来過ぎて……うん、何もかも思い通りになるからと、多くを望み過ぎたかもしれない。

今からエモン様を取り戻すのは多分無理だろうけど、他に幾らでも候補は居る。

あそこまで『進行』させていたのは彼一人だったとはいえ、まだまだ時間はあるわけだし。

……でも流石に目標人数は下げるべきかしら？ それでも三人ぐらいは欲しいけど——

「……！」

誰か、居る。

目の前に迫る階段の上、踊り場に落ちる影で、誰かが其処で待っているのが分かる。

公爵令嬢ご本人か、それとも実行役か——そういえばそこは指定してなかったわね。

「……ふふっ」

それに気付いていないフリをしながら、ゆつたりと階段を上っていく。

さあ、これで後はどう転ぼうと、あの公爵令嬢様はオシマイ。めでたく『舞台』から退場だ。

……ちよつと痛い思いをするかもしれないけど、そのぐらいは必要経費よね。

これが済んだら、次は何から手を付けようか。

あまり多くの『役者』を巻き込むとまた邪魔されかねないし、暫く

はごく狭い範囲で『攻略』を進めていくことになるかな？

まあ、まずはその『攻略対象』を厳選し直すところから……顔と性格は勿論として、財力辺りはどのぐらいを及第点とするべきかどうしでも迷うのよねえ。

貴族家としての位はそこまで高くなくても良いんだけど。

将来何かの責任を負わされるような家の女主人になんて、あんまりなりたいと思わないし——

「ウォーターズプラッシュ」

……は、へ？

なに、コレ、水……っ!?

ッ、おま、えっ、虫おん——



構えた杖、「牡丹灯火」から放たれたのは、怒涛と表現すべき銀白色の水流。

けれど真横から放たれたそれに押し流されるはずだろう子爵令嬢様の身体は、その水流の只中にぼんやりと立ち尽くしたまま——全てが過ぎ去った其処に、へたりと座り込んでいた。

「す、っい……っ」

「……ファルフア様！」

微かに聞こえてくる呟きと一緒に背後から抜け出してきた人影の主は、公爵令嬢ロクシー又様。

水流が過ぎ去った直後にも関わらず、濡れた痕一つ無い踊り場に一瞬驚いて——そこで視線を向けなくてください。わたしにだって割と予想外なんです——座り込む子爵令嬢ファルフア様の元へと駆け寄っていかれた。

——レインに【憑依】されている状態で、放つ魔法。

あの指輪霊(?)の一件で何某かの不可思議な効果があると発覚した、レインの能力。

わたし達にその術理は分からないけれど……身体を傷付けることなく憑依した『ナニカ』だけを攻撃出来るという一点については疑いようが無かった。

それでも万が一を考えて、以前の火魔法じゃなく水魔法を使ったけど……なんというか、まるで『魔法の幽霊』とでも言えそうな水流だったなあ。……レイン、わたしあんなの聞いてないよー？

「あ……………？ つ、わたくし、は……………」

「……………ファルファ様、お加減は……………私の事が分かりますか？」

「ロクシーヌ、様……………ツ!? も、申し訳ありませんっ！ わたくしは決してあのような……………！」

「……………いえ、良いのです。事情は凡そ分かっていますわ」

……………うん、経過はどうあれ結果は思った通りになったみたい。

以前の時とは違って、憑りつかれるより前の子爵令嬢様を知らなかったから、実はちよつとだけ半信半疑でもあつただけけど。

「わ、あ……………やりましたわね、ユズ様！」

「……………ありがとうございます。ですが、これはどちらかと言えばサラ様の功績ですよっ！」

「え？ そ、そんな……………私などユズ様が居なければ何も……………」

「それを言ったらわたしも、です。……………子爵令嬢様に杖を向ける、だなんて普通許されませんし」

後ろから輝く笑顔で駆け寄り労ってくれたサラ様に、殆ど反射的にそう返した。

……………なんだか寄せられている信頼の分だけ心苦しく……………どうしてレインはいつもあんなに飄々としてられるのかなあ、もお……………。

——— 当人の意思ではない『何者か』によつて、子爵令嬢様は身体を操られている。

そんな突拍子も無い主張を公爵令嬢様をはじめとする方々に受け入れてもらえたのは、サラ様が皆々様を説得してくれたから。

ファルファ様を襲っている現象が以前自身の身に降りかかったモノと同じなのだ、訝る人々に説明してくれたおかげだから。

最終的に「我がクリイサム家の名に懸けて、これに嘘偽りは無いと誓わせて頂きます！」という彼女の言葉で、公爵家の方々も今回の事を了承してくれた。

《お、おう……えらいモン背負っちゃったね、ユズちゃん……》というレインの言葉に遠い目にさせられたのも、この場の結果に辿り着けたのなら、まあ……うん。

……というか、事に気付いたのはレインで、この不可思議な魔法もレインの力で……やっぱり、わたしこそがこの場においては何もしてないような。

それこそがわたしの力なんだから胸を張れと、レインにはまた笑い飛ばされるだろうけどなあ。

「……ありがとうございます、『狐鼠姫』様。後の事は我がブルーヴァ家が……ティীগ家の事も含め、悪いようにはしないと約束いたしますよう」

「ええ、ご配慮痛み入ります」

「こちらこそ……この功には、後日必ず何らかの形で……勿論、クリイサム家も含めて報いさせていただきますね。……それでは」

そう言つて、まだ少しふらついた様子のファルファ様と共に、お付きの方々を連れて歩き去っていくロクシーヌ様。

……その途端、すぐ傍からなんだか気になる眩きが聞こえてきて、思わずそちらに顔を向けた。

「……………我が家に、報いる……………プルーヴァ公爵家が、クリイサム家に……………」

「……………良かった、ですね？ サラ様」

「っ、はい……………ッ!!」

……………以前、レインから聞かされていた『挽回』というのもこれで何とかなるんだろう。

本当に、一時はどうなる事かと思ったけど、結果は全て丸く収まったと言えそうなのかな？

そうして感極まった様子サラ様を宥めながら——踊り場の壁の向こうに目を向ける。

銀白の水流が、ファルファ様の身体からナニカを押し流していた、その先へと。

(ねえ、レイン？ ……そっちは、どうなった？)

《よお……………ちよつと顔貸せや——ご同輩》

C4—5 物言い

《——おつかしいとは、思ってたんだよねえ》

壁の向こう、押し流した水流の先にあつたそこは、無人の教室。

《幾ら何でも、現地人の皆さんの思考おかしくない？ って》

《まるで、テンプレを実現するためにあるみたいだなー、なんて》

《それこそ、ほら……賢い設定のキャラ作るために、周りの知能指数下げました的な、さ？》

言いながら、あんまり良い表現じゃないなあなんて思いつつ、そいつに近付いていく。

《……折角転生するなら、お嬢様になりたい。……これは分かる。スゲー分かる》

《特別な魔法とか、特殊な力とか欲しい。……激しく同意する。現代人の哀しき性サガよね》

《愛されお嬢様的な、ちやほやされる立ち位置になりたい。……まあ、分かる。折角だもんね》

ちよいちよい自分の古傷なんかも突つつきつつ……しつとり濡鼠で転がるそいつへと。

《転生させてもらったこの世界、なんだかゲームの世界みたいだなあ。……まあまあ分かる。割とそういうところあるよね、この世界》

《貴族令嬢に転生したし……あれ、コレって乙女ゲームみたいじゃね？

……ギリ理解出来る》

《よっしゃ、乙女ゲーに見立てて逆ハーレム作つたら！ ……セーフ寄りのアウトかなあ、既に》

やがて辿り着くは、私を盛大に泳ぐ目で見上げるそいつの眼前。
そこから一度、膝立ちで腰を落とす——目一杯力を込めて、その
胸倉を掴み上げた。

《乙女ゲーには悪役も必要だよな！ よーし、適当な女の子に『悪役令嬢』やってもらっちゃお☆ ——それは分からねえよ》

……まあ、なんだ。

手に入れた力でどうしようってのは、そいつの勝手だよ。基本的に。

その力つてのが自分で培ったモノか他から与えられた代物かで心象は変わってくるだろうけど、そこに関しては私も他人の事は言えんわけだしさ。

けど、どつかで線引きは必要だろうよ。

他人に迷惑をかけない、とか。

人の嫌がることはしません、とか。

小学生の道徳の授業で出るような題目ぐらいしか、私も明示出来やしないけども。

どっからがアウトで、どこまでがセーフ？ ……そんなの私にや分からんさ。

あんたがやってきたことを、セーフという奴も居るだろう。

私がやってきたことだって、アウトと言われたなら仕方ない。

勿論私は反論するさ。誰からどう言われようと、私の中でアウトな行為はしていないってね。

……あんただって、そうだろう？ 自分の中ではセーフだから、やってきたんだろ？ 今まで。

………おい。なあ、目え逸らすなよ。

じゃあ、何か？

この世界の人達の事を、ちゃんと『人間』だと——『キヤラ』^{NPC}じゃないと分かっていながら、あんたはあんなことやってたと？

ちゃんとそう認識した上で、『役者』だの、『台本』だの口走ってたと？

ははっ、そりゃあいいね！ 私もわざわざ使い古されたSEKKY Oをしなくてよくなるよ！

………あん？ いつの間にか？ いつからそれを？

壁に耳あり障子に目ありって知らない？ つまりはそういうことよ。

まあ、私も即座に結論が出たわけじゃあないけどね？

最初も最初の時点で分かったのは、あの婚約破棄騒動の裏側に居たのが、まさかの子爵令嬢ってことぐらいだったし。

真の狙いが『悪役令嬢さまあテンプレ』を実現したいから、だとか。

あの時の彼も含めて『逆ハーレム成立の第一歩』とか。

そんなあんたの『野望』……野望？ が分かったのは、もうちよい

先の話だよ。

その『野望』を実現させるべく——いや、その原動力になったらしい『力』についてもね。

《——転生特典【乙女ゲー化】……って、どこかな？》

周囲に乙女ゲー的テンプレ行動を取らせる、ないしそのように思考

を誘導する『力』。

実際の詳細はさておき、こいつが使った限りじゃこう言い表すのが適当でしょ。

……いやあ、おつどろいたんだよ？　こればかりは本当に。

まさか盗み聞きに入った御令嬢の部屋で、「自分は神様に選ばれたんだ」だの「私はこの舞台の主役なのに」なんて呟きを聞く事になるとはねえ。

やつベコレ本物だ。モノホンの罹患者全盛期な令嬢が存在してたわ、相棒と一緒に笑い飛ばしたろー、なんて考えながら報せに戻ったらまさかの拒否を——そこはあんたにや関係無いな、失敬失敬。

後にあんたの『力』つてのが見えてきた辺りでようやく、そのときはお病気だと思って流してたその言葉の意味に行き当たったってわけ。

ま、私という前例も居るわけだし？　これだけヒントがあればそりゃあね。

その『力』について、もうちょい真面目に考えるなら……まあ認識
改変の極みって感じ？

対象にした人間の思考やら、感情やら、常識——まあとにかく、あんたが「やって欲しい」と思った行動を取るように認識を変える。そんな趣きの何某でしょ。

本来のその人なら絶対にありえないような行動を取らせることも可能。

その代わりと言うべきか、周りから違和感を指摘されると効果がリセットされる。

そこで本命は勿論、周囲の人間にも違和感に気付けないって程度の改変を施していた——と、まあこんなところ？　……当たらずしも遠からずみたいね、その様子だと。

ところが何あ故かそれが効かない人間が紛れ込んでいて、ついだと

ばかりに『改変』を一斉解除されちゃったもんだから大いに焦ったつてわけだ。まあ分かんなくてもいいよ、そう思えば。

何とかして異分子イレギュラーを取り除きにかかる。そこに行き着くまでは理解出来るさ。……一応は、ね。

……困ったのはそこからの行動がとにかく意味不明だったことだよ。

あんなくつだらな事続けて何がどうなると思ったんよ？ 小生せいせい生せいせいじゃあるまいし。

それで、もしかしてと思ったんだけどさあ……あんだ、さては前科があるやろ？

前世ぜんせいにおいて、そーいう嫌がらせで気に入らない級友クラスメイトを転校てんこうさせた的な。……分らないでか。

あんな悪ガキじみた発想、その手の不愉快な成功体験でも無きや出てくるもんじゃないもんよ。

バカは死ななきやなんとやら……つてのもアテになんないんだねえ。ハア、やだやだ。

……自分が何してようが、お前には関係ないだろ？ だーからさつきからそう言っつてんじゃん。

私は聖人でもなきやケーサツでもない。ああ、一応言うけど神様が遣わした『お仕置きキャラ』とかでもないよ？ 勿論。

現地人巻き込んでどうこう……つてのに顔をしかめはしてても、こっちに『実害』が出ない限り何をする気だつてなかったさ。

《けど、あんたさあ……私の親友ユズちゃん操ろうとしてたわけじゃん？》

——声を潜めて会話するのが面倒だからと、【念話】の為に逐一【憑依】していたから。

あの学園内の人間の中で、ユズちゃん唯一人がこいつの（推定）転

生特典——認識改変能力を防げていた理由が、ソレだ。

それが証拠に、ちよつと人目が無いからと憑依抜きの会話をしていただけで……アレだもん。

つまりこいつずっと、ずうつとユズちゃんの認識を書き換えようと……駒に仕立て上げる気で『攻撃』し続けてたわけですよ。……それから私かてキレますわ。キレさせていただきますわ。

先にそつちからやられたから、やり返した。

人を撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだ。

色々御託は並べたけども、結局私が言いたいのはそんだけよ。

……うん、そうそう。こつちの主張はこれで一通り。

というわけで、さあ、そこの濡鼠さん？

反論が、あるなら、どぞ？

《……し……知ら、ないわよ……》

《あ……あたしの他に『プレイヤー』が居たなんて聞いてないもの！》

《そ、それにこの『力』は神様が……そう、そうよ！ 神様がくれたからには、この使い方だつて『仕様』の内よ！ あたしは何も悪くない！》

《他にプレイヤーが居ると知ってればあたしだつて……というか！

いったいこれは何なのよ!? あんた、あたしに何をしたの!? あんたの友達に絡んだことなら後で謝ってやるから、さっさとあたしをあたしの身体に戻しなさい——》

《イヤお前の身体じゃねエだろ。あの子爵令嬢ちゃんの身体やろが

い》

推定『憑依型』転生者。……公爵令嬢さんの言葉も加味するに、おそらく割と最近の。

それ自体についての是非は私が論ずるようなことじゃないけどさあ。せめてもうちよつと身体の持ち主に敬意とかないんか、お主？

……許可を得て身体を動かすのだって、割と緊張するんやぞ？

うっかり怪我でもさせたらどうしようとか、ちよつとでも考えたりせんもん？

逐次相談しながらでもそれなのに……意識まで乗っ取ってソレってお前エ……。

しかもプレイヤーだの、神様のせいだの……お前、人の話聞いてた？

何？ 現地人だって生きた人間なんやぞ、とか、やっぱ古臭い説教せなアカン流れなん？

死んでも死にきれなくて、僅かな思い出を糧に擦り減る様に存在し続けた女の子の話とか！

自責の念と責任感で、地獄も地獄な数千年を乗り越えた女傑の話とか！

そんな私の口から拙く語るだけ興醒めだろうが、バカヤロー！

《ああー……もういい。もう分かった。あんたをどうしてやろうか、腹あ決めたよ、私は》

《……っ、な、何よ!? これ以上あたしに何する気!?》

《んー、これ以上、ね。そこは、ちよおつとあんたにも意見聞きたいとこなんだけどさあ?》

《い、意見……?》

握ったままの胸倉——私のそれにも似たどこぞの制服に力を加えながら、問いかける。

《身体から抜け出ちゃった憑依転生者。これってさ——幽霊に含まれると思わん?》

《………は?》

……大丈夫。

イケるイケる。

今こそ『やってみたら出来ちゃう』の本領発揮の機会やぞ、我がパ
○プリンテボデイよ。

《身体から抜け出しちゃった彷徨う魂。……まあ『生霊』でも良いよ? 判定としては『幽霊』にギリ入るっぽかったし。……あんたは知らんだらうけどさ》

《な……何なの、あんた……? さつきから何を言っ——》

そいつの言葉は、そこで途切れた。

端から視界に割り込んできた情報に、それどころではなくなったからだろう。

忽ち真っ青になった顔が向いた先は、自身の胸元。

目の前に居る私のことすらも意識から外して、そいつは、叫ぶ。

《Rogamusあ……え、Aptansあ——!!?》

けれどその叫びは、呑まれた。

そいつの声とは確実に無関係な、彼方から響く無機質な音に。

生きた虫の如く体表を滑る——白く輝く文字列に。

《お、まA p t a n s……っ!? なん、なのよC u r r i t l e!?!?》

埋め尽くす。

這いまわる。

言葉に表すならばそんな表現となるだろう、悍ましくもどこか神々しい光景。

《あんたといったS o l i n s e n o n d o l e t い、あたしに、何を——ッ!?!?》

怖いのだろう。

恐ろしいのだろう。

先に何が待つかも分からぬ怯えに、震える口より絞り出されるは継るような問いかけ。

不遜な態度も傲慢な物言いも、砂の如く崩れ去ったその様を前に、私は、答えてやった。

《………ごめん、わかんない。ナニコレ?》

《はア!?!?》

……いやあ、その、なんていうか……コレはちよつと予想外というか、ね?

なんかこう、イイ感じに神様のところに送り返せないかなー、ぐらいのノリだったというか……え、マジで何コレ？ 何が起きてんの？ 私の手から……というか、私の腕が文字列に変わつとる……っ!? うわ、ちよ、待つ……腕だけじゃねえ!? 足から頬から……なにこれなにこれなにこれ!?

《自分でやっつといて分かE a r e s a t t i n g e r e p o t e s t
んないってあんたそんS a l i n s e n o n d o l e t な無責任A
r g e n t i i n s e n o n d o l e t ……こらあ!?!》

ええ、はい！ おっしやる通りですね、こればっかりは!?

う、うおお……何だこの今までに無い盛大なバグり方は……!?

……あれか？ やっぱ憑依転生者の魂を幽霊扱いは無茶振りが過ぎたか？

イヤ、でも、出来んなら出来んでいいからもうちよつとささやかに主張してくれんかなあ!?

何この心臓に悪すぎる絵面!?! 私今どーなってるのコレエ!?!

《こ、こんなわけわかF a c i e m s u a m i n s u p e r f i c i
e a q u a e p o n e r e p o t e s t 》
《やり直しをようきゅM a r c a m n i g r a m r e l i n q u e r
e p o t e s t i n q u a c u m q u e r e t e t i g e r i t 》
《聞いてるのかこのN o t a e n i g r a e i n f a c i e s v e r
t i p o s s u n t 》

お、おおう……もう何も言えてねえよ、あいつ。文字列さん達の殺意が高過ぎる……。

いやしかしこれ私も傍観してるわけにいかんぞ。こうしてる間にも身体がどんどん解けていくというか……とにかくどうにかして元に戻さんと――

……。

……あれ？

なんだろう、見た目めっちゃショッキング映像垂れ流しなのに……
危機感が沸かん。

絵面はホント……手から脚から胸から糸が解けるみたいに文字列
が飛び出して、虫食いみたいにボコボコ身体に穴開いていつてるんだ
けど……だからといって痛みとかあるわけじゃないし。

めちやくちや驚きはしたけども……うん、なんだろう、既定の動作
的な何某というか。

始めは不具合かと思っただけど、それも違うわ。なんか、こう……変
形の途中的なアレだわ。

無茶振り染みた『やれるかな?』に、このトンチキボディが応えて
る最中なんだわ、コレ。

……それにしたつてもうちよつと見せようがないのかと言いたく
はなるけども。

P e t i t i o t u a a c c e p t a e s t .

……うおつと？

いや、違うぞコレ、私から出た文字列じゃねえ。……かつてないパ
ワーワード（物理）やな。

ま、まあ冗談はともかくとして、これは――

《……っ！》

《なS u t r a s l e g i t u r a p u d m o n a c h o s , q u o
d d o l e t d e s u o っ!?!》

……何かに引っ張られてる？ しかもどうやら、あいつも一緒か。
さっきの文字列……いやメッ、ページからして、これはそういうこと

かな？

《あ、あんた今度は何をSacraeresinsenondole
t》

《まあ、そう騒ぎなさんなって。……多分、あんたもお望みの所じやないかな？》

《はあ!? 望みつてEasomniorumimpedirepot
est》

《いやいや、私も割と同感ではあったんよ? ……あんたが貰った『力』についてとかさ》

まあそれ以前に……私の事でも色々あるし?
何が決定的な切っ掛けになったとかは分らんけど、機会が得られ
そうなのは良い事だ。

《とにかく一緒に往こうや——リコール物言いに》

Salve.

Carus } n }
[n] n }
Urrit } n }
[n] n }

.

.

.

Hello.

A
m
a
m
i

I
t
o
y
a
m
a.

D
e
a
r

. . .

D
e
a
r
}
n
]
n
u
]
U
r
i
t
]
n
].

C4—6 幽霊の 正体見たり

——白。

白、白、真っ白。

右を向いて、左を向いて、上も、足元も、背後も、一面の白。

……病院の天井……なわけがない。

突然歩道に突っ込んでくる車なんぞ、世界を隔てた記憶の彼方だ。しかして直近の記憶に残る学園の教室とは似ても似つかぬ白世界。

いやあ………すっごい既視感ありますなあ。

「こんにちは………それとも、こんばんは？ えっと、確か時刻によつて違うんだったわね？」

そして唯一、視界が白一色でないのは真正面。

につこり微笑んで立っていらっしやる、金髪碧眼、胸部装甲十二分な女性の姿。

その美貌溢れる御尊顔、麗しき花唇から流暢に紡がれるは——耳に久しき、日本語。

「おはこんばんちは………なら間違いないかしら？」

………イヤ、それはどうかと思うっす。

「あらそうなの？ まあともかく——初めまして、糸々山 雨巫さん？」

「アッハイ」

………何だよその返し？ じゃあ他に何と言えど。

——怒りと思い付きに任せた己が身体への無茶振りから、沸き出した白く輝く文字列に視界が埋めつくされたのが、私の主観で数秒前。

束の間の浮遊感を経て晴れた視界に映ったのは、見慣れた私の身体と……推定、女神様。

……オウ、ウエイト、どうしてこうなった。

いやまあ、何となくそうかなーとは思ったよ？ あの『メッセージ』を見た時に。

だからこそ、諸々込めて物言いしてやるぜ、つてなつもりでいたわけだし。

それでもこう、一対一の面談方式でお待ちかねってのはちよつと予想外っていうか……それに、一緒に引っ張られてたはずのあいつはどこに——

「折角の機会に余人を交えたくはないでしょう？ 陽気な幽霊っぽいナニカさん？」

あ、これ、私が今まで何をやってたか、キツチリバツチリ把握してはる感じやな？

……いや待て、まだ慌てるような時間じゃない。ここはひとつ気の利いた一言でも。

「……貴方は女神様の眷属でしょうか、それとも女神様ご本人ですか？」

「ふふ、貴女とあの少女の最初のやり取りね。……後者よ」

うわっは、こんなんにまで反応してくれるとか間違いない本物ですわー。確定ですわー。

「あら、こんなので確信するのね」

「あ、や、なんかすいません？」

「楽し良いわよ。いつの時代も、どうやって信じさせるか、が一番の

難題なのよねえ」

手をひらひらさせて上機嫌に笑う女神様（確定）。

……声を聞く限り、転生させてくれた神様とは別神べつじんっぽいかな？

……あ、そういえばさつき「初めまして」って言われたな。その時点でそれも確定だったわ。

「そうね、それはあっちの世界の神がやった事よ」

しかしさつきからすごい自然に心読んできますね。おかげで話の調子が速い速い。

「嫌かしら？」

いえ全く。すっげー便利っすね。何より取り繕う意味も必要も皆無つてのが。

「……やっぱり結構変わってるわよね、貴女」

それほどでもない。

「あら謙虚。……それじゃ、貴女が今気にしていることから順に話していくとしましょうか」

ういっす、お願いします。

「まず貴女が連れて来たもう一人に関してだけど……あー、彼女がやっていたことに対して私から何かをする予定は無かったのよ？ 貴女には残念に思われそうだけど」

ああ、まあ……そりゃ視座スケールの違いってやつでしょ。

あいつがやってきたことが悪かどうか、なんて結局は私の判断ではないわけで。

もつと究極的に言えば、私があいつの行いについて気に食わなかったってだけですし？

それを以て天罰落としてもらおう、なんてつもりも全く……いやそもそもこんな状況になるとは夢にも思ってたもんで。

それに悪人にいちいち天罰落とす感じの神様じゃないですもんね、私を知る限り。

えっと……シヤニム様、で良いんですかね？

「ええ、そう呼んでくれて構わないわ。……そういうことなら、あの子の扱いについては私の方で決めてしまうことにするわね?」

……あれ? その口振りからして、もしかして私の要望聞いてくれる予定だったんで?

「ええ、まあ、その………ちよつと貴女には、負い目があったから……ね?」

………。

………あー。

まず一つ、確認させていただいてよろしおす?

「……よろしおすえ」

今の私の状態って、やっぱり予想外というか……想定外の事態だったりします?」

「……だったりします」

で、その事態になった原因って……今しがた連れてきたあいつが関わってたりします?」

「……しますです、ハイ」

それじゃ、最後にもう一つ。

私を転生させたのは向こうの神様だそうですが……あいつを転生させたのって——

「わたしがやりました」

デスヨネー。なんせ前々から疑問には思ってたんよ。

私を転生させてくれたあの神様が、本当にあの事態を予見出来なかったのだろうか、とか。

そして出来なかったんだとしたら、果たしてその原因は何だったの

か、とかね。

それで、今回のあいつに関して『私』の記憶を掘り返してたら、ねえ。

ちよいと素行がアレな子爵令嬢を窘める場面だとか。

丁度それを機に、不自然に味方が居なくなっていく過程とかね、残ってたんですよ。

残念ながら『私』は、その因果関係を繋ぐことは出来なかつたらしいが。……そら無理だわな。

転生だ、認識改変だ、テンプレだ……ってな予備知識無しにアレを見破れる道理が無いもんよ。

——神様が用意した筋書きが崩れたのは、同じく神様が為した何かしらが要因であった。

うん、実に道理の通った結論ではないか。いつそ清々しいまでに。

……『私』をイラつかせてくれたあのハゲデブ三段腹親父も、あいつに『そうあれ』と『役』を与えられてたんだとしたら、何とも言えねーなあ……。

「……弁解を、させてください」

あ、はい、どうぞ。

「あつちの神の事情で転生者を受け入れたわけだし、私が同じ事を求めても悪くないでしょう？」

まあ、そりゃあ、そうですね。

「でもどうせなら、あつちの世界の人間をこつちの世界に招き入れた方が面白いわよね？」

……いやそれは知りませんけども。

「え、だってめっちゃ流行ってるじゃない？ 現代日本人異世界転生」

……まあ、そういうことにしときましよう。それで？

「で、その……貴女の選んだ転生タイプって、『始まる』までに時間掛かるじゃない？」

ああ、時期が来たら『思い出す』タイプでしたもんね、私。

……察するに、待ちきれなかったと。それ故の『憑依型転生』と。

「あ、うん……で、そうなることやっぱり『転生特典』も付けるじゃない？」

……はあ。

「折角だから……盛大な『特典』を乗せてみたくなるじゃない？」
……。

「だから、その、流行に乗ったというか、様式美テンプレに従ったというか……つまり私は悪くな——」

あつのおく、私ってば今どういう状態なんでしたっけねえ？

この身体についてえ、さっき何と言ってましたっけえ？

予想外で、想定外で、パル○ンテじみたこの身体をおく、あなたは
どう、言う、のお？
D You Know

「……許してヒヤシンス」

ヒヤシンスどっから出てきた。

「……うん、まあ、その辺り説明するつもりで招待したっていうのもあるんで、ハイ」

……ホウ、それはそれは。

しかし事は私——もとい、『私』とその家族にまで及んでるんで、弁解にせよ何にせよそこはしっかりとお話しして頂きたいところでござーますよ？

「いや、その……あくまであの子に持たせた特典アレは遠因の一つであつてね？ どこまでが私の責任だとかそもそもあの子がやったことで

あつて私はそんなに悪くないと主張したくゴメンナサイ」

あー……元から追いつき落とすような家ではあつたみたいだからねえ。主に金回りで。

それがあいつの『特典』で、『悪役』に『設定』された影響で、味方が減つたことにより事態が加速して——やっぱだいたい女神様に責任ありません？ ありますよね？

……まあ、これ以上は話進まなくなるんでいいですけど。他に気になることも一杯ありますし。

とうにかさつきもちよつと触れてましたけど、招待したつてのはいつたい？

「……私からすると、『憑依型転生者』の魂担いだ貴女の身体が……あー……鬼電してきたとか、そんな感じだったのよ。……で、さつきも言った通り貴女には負い目もあつたし……こうなつたら一回ちゃんと説明の機会を作らなきゃしょうがないかなあつて……ね？」

オウ、^h何してくれてんねん、この不可解ボディ。……今に始まつたことじゃないけども。

私の無茶振りに対応しようとした結果なのかもしれないが……そもそも捻り出したらそんな結果が飛び出すつて時点で何かおかしくないつすかね？ いやいよ何で出来とるんや、このボディは。

「それを今から説明するわ。……あ、ここは下界したとは時間の流れを変えてあるし、ちよつと時間を取られることになつても、戻る頃には何秒と経つてないだろうから心配は要らないわよ」

おお、流石は神様、スケールでけえ。……しかしそんなに長話になりそうなんです？

「そこは貴女次第、と言つてもそう苦労しないとは思わ。この世界の人間に理解してもらおうと思つたらどれだけ時間が掛かるか分かつたもんじゃないけど」

……という、基礎教養的な？

「的な。これから神の力……ないし、その作用について貴女に理解しやすい言葉にして話すから、厳密には違うけど『そういうもの』とし

て聞きなさい」

理解しやすい言葉、ですか。

イヤしかし教養と言われましても、私そんなに成績良い方ではなかったんで若干の不安が――

「まず世界全体を『動作中の実行ファイル』、そして神私の仕事を『プログラミング』及び『動作と並行させつつの更新』とするわね。そこに、貴女が前世を過ごした世界の神から『糸々山雨巫の魂およびその転生処理』という『関数ファイル』が送られてきたと捉えてちょうだい」

アツハイ（本日二回目）。

成程こつちの世界の諸兄には無理っすね。

「色々と差異はあるから、あくまでもイメージだけどね？ ……システム全体世界に比べれば魂一つの去就なんて些細な事だし、いちいち問い合わせたりせずに導入するのよ。少なくとも私の場合は」

……それ大丈夫なんです？

「……貴女だつてOSの『更新プログラム』とか、中身確認せずにインストールしてたでしょ？ ダウンロードしたソフトウェアの『利用規約』とか一度でも隅から隅まで読んだことある？」

あ、まあ、それは……発行元確認するのが精々ですかね、ハイ。

しかしその例えからすると私、ブラウザの拡張機能か何かにでもなった気分なんですが？

……あ、すると、ウイルス対策ソフト的なのもあったり？

「あったり。……だからこそ確認したのは後になってからだだったわけだけど、私の世界に悪影響を出さないための『エラー処理』の類なんかもしっかり整えてあったわよ」

エラー処理……引数の形式が間違ってた場合にその部分だけ脱出させて全体は継続、みたいな？

「みたいな。転生特典も色々付けてたし、それがこの世界的に過剰なチート

力にならないように、とかが主だったかしらね」

ああ、転生者の要望を転生先世界の様式に合わせたらぶつ壊れ化、って話もよくありますよね。

提案した当人にも予想外の効果になってるやつとか。

「そうそう、あれも面白いわよねー。……で、貴女の場合は特定の年齢になった時に前世の記憶を思い出す、というプログラム関数……的なモノがそこに入っていたわけよ」

確かに赤ん坊期再経験はつらいと思っ、て、そういう要望出しましたな。

なるほど神様同士のやり取りとしてはそういう感じに……まあ、イメージの話だろうけど。

「この世界で生まれ育った『ヤーネースペクハイド』と、あちらの世界の『糸々山雨巫』、二つの世界で培われた記憶が一つの魂の中で混じり合い、ひとりの人間となる……より端的に言うなら、そのときそこに存在する『貴女自身』が何者であるかを定義する関数だったわ」

……ふむ。するとやっぱり『私』と私の魂同一説は正しかった？

しかしそうすると【記憶の部屋】の何某がどうなのかという疑問が……その辺は後で。で、その中にエラー処理の一環として、正しく関数が実行されたかどうか、すなわち魂が整合性の取れた形になったかどうかを、『戻り値』にて判定、成功判定が得られないようなら何度か同じ処理を繰り返し、それでも失敗判定が出るならユーザ^私の元に通知が届く……といった処理が組み込まれていたの」

あー……メッセージボックスが出てきて「○○が××できませんでした、△△しても解決しない場合は管理者に問い合わせてください」な表示がされるアレかな？

「そういう感じのソレよ。ただ——その通知は来ていないのよ。私の元には、未だに」

……ホワイ?

イヤイヤめっちゃ想定外の予想外や言うてはりましたやん? 思
いくそ失敗してますやん?

それなのにその関数とやらは、未だ女神様に失敗を報告してない
と?

「……それ以前の問題なの。今言った通り、成否判定が出るのは処理
の最後なのだけど——」

……私の状態を傍から見た限りは明らかに実行失敗。

しかし失敗の通知は発信されていない。

成否判定のタイミングは処理の最後。それって、つまり——

「処理が終わってない? ……ということね」

……イヤ、いやいやいや、それってつまりどういうことだ
べさ?

転生処理が終わってない、今もまだ実行中? 私ってば未だに『転
生中』だとても?

「ここからはプログラム系の例えをちよつと外れるのだけど……実は
この戻り値、処理後の魂から発信される仕組みになっているのよ。本
来の挙動を考えればそれで問題ないんだけどね?」

……何か、そこで例外事項起きたと。

「ええ、実は今世の貴女であるヤーネさんが死亡したのが、この関数が
動き始めた直後だったの。そのせいで彼女の魂は死亡者に対する処
理……『成仏関数』とも呼びましようか。そんな感じの普段この世
界で動いている別の関数へと、転生処理の途中で送られてしまったみ
たいなのよね」

お、おおう、よりによってそのタイミング……あれ? でも私「今
の年齢近くで記憶覚醒」って頼んだよね? でもヤーネ嬢の享年は十

二歳で――

「あつちの世界で貴女が暮らしていた国は二十で成人でしょ？ 享年が十六歳だから、成人年齢の五分の四。対してこっちは全体的に十五歳で成人、そこに五分の四を掛ければ、ホラ十二歳」

「……………おうあ、転生先に合わせた調整……………本当に行き届いたサービスだったんだなあ。」

「それがこうまで裏目に出るとは……………ん？ あれ、じゃあ結局『私』って既に成仏済みなん？」

「それだと私は、その……………結局、誰なんよ？」

「……………『貴女自身』定義関数の中身を大雑把に表すと、『新規記憶の取得』、『旧記憶と統合』、『魂へ反映』の三工程になっていたわ。中でも特に不味いことになってるのが最後の工程ね」

「……………反映する魂が無いから、処理が終わらない？」

「それも間違っていないんだけど……………この部分もまた既存の関数の一つでね？ 具体的には、新しく人間が生まれる時の処理の一部を呼び出す形になってたのよ」

「……………ああ、本来は生まれる前の魂に対して働かせる処理の一部だったと。」

「それなら処理の最中に魂がどっか行っちゃうなんて想定してないわなあ。」

「となれば例外事項発生時の対策がおざなりだったりしてもおかしくは……………そこで何か起きたってわけですね？ ここまでの流れから察するに。」

「……………『人間の魂である』という前提が失われ、あるのは先の二工程で統合された『記憶』のみ。それでもそこに『何か』があるのは確かだから、『何か』にはならなければならない……………結果、それが何なのかという『定義』が『記憶』及びその周辺プログラムにまで要求されてしまったわ」

……うわあ、なんかRPGのバグみたいすな。

本来エンカウントしない場所で戦闘画面だけ出したら、アイテムデータか何かを敵データとして無理矢理読み込んで、名前も見た目も能力もぐつちやぐちや敵が出現、みたいな。

アレって型というか、要求されるデータ量がそもそも違うもんだから本来なら使われないはずの周辺領域まで読んじゃってたりするんですよね。

「まさになんかそんな感じよ。……曲がりなりにも『何か』として活動することで『記憶』は更新され、また『旧記憶』との統合も延々と繰り返されている。成功か複数回の失敗という判定を得ることが停止条件なのに対し、そもそも成否判定が為されないせいで。その度に『定義』もまた更新され、常に一瞬前の存在とは違う『何か』になっていく」
うっわあ、何ていうか………マジで私はいったい自分を『何』だと言えばいいんですかね？

聞けば聞くほど分っかんなくなってくんですけども。

「……その問いの答えは貴女の『記憶』に、ひいては『自身に対する認識』に左右されているわ。それが人なのか、魂なのか、はたまた——
—幽霊なのか」

………。

……え、ちよ、待……ウエイト。

いや、それ、まさか——ウツソやる？

「『己は幽霊っぽいナニカである、という認識から自身をそのように定義更新し続けている関数』——それが、貴女の正体よ」

.....マジっすか。

C4—7 何この……何？（字余り）

「——これまでも貴女は何度か、出来るかなと思ってやってみたら出来ちゃった、という経験をしてきてるでしょう？ それは貴女の『出来るかな』という認識によって『出来る』ようになった貴女自身がその瞬間に定義し直されていたというわけよ」

………何か、もう、色々……マジっすかとしか言えねえ。

あのととき自分を一目見て「幽霊だよなあ」と思ったせいで幽霊になつてたとか、もうね。

「そしてそれら能力の源になつたのは、あつちの神が乗せた『転生特典』……になる筈だった力。幸いだったのは、チート化防止処理も動き続けている点ね。あんまりにも無茶な『出来るかな』はそこで除外されていたというわけ」

ああ、私の認識如何で出来てるにしては、割と制約があつたのはそのせいでしたか。

……いや、でもそれって幽霊だと思つたせいであつて、もつと違うものを想像してたら——

「それでも幽霊や精霊あたりの肉体を持たない存在以外に近くなることは無理だったと思うわよ？ 何も無いところから物質を作り上げるなんて、チートの最たるものなもの」

オウ。まあ、そりや確かに？

「それに元が凍結されていた『糸々山雨巫の記憶』を参照する処理だから、貴女の無意識の部分を多く取り込む形になつてゐるわ。貴女は見た目と大きく異なる己の姿をハッキリと、それも無意識に想像するなんてこと可能だと思う？」

あ、無理っすね。じゃあもう、なるべくしてなつた、と。

……イヤしかしちよつと待つてくさいな。正体はともかくとして……私の認識から生まれたと言われても、よう分からん能力や性質

が多い気がするんですが？

「この世界の幽霊——私からすれば何らかの要因で『成仏関数』から零れちゃった魂だけだね。その法則と貴女の認識、チート防止処理の三者がせめぎ合いを起こした結果でしょ。個々の能力について何でそうなったか、なんて私にだって正確には分からないわ。全知全能神じゃあるまいし」

あれえ、なんか匙投げられた？

イヤでも【記憶の部屋】関連なんかは明らかに私の認識とは別物では？

「あー、その辺は……どうも『貴女の定義』に『成仏関数』も一部紛れ込んでるみたいなのよね。具体的には関数へのアドレス……『輪廻転生』の『入口』が混じっちゃってるというか」

……ええ？ ナニソレ。

「……あんまり詳しく言及したくは無いんだけど……所謂『転生待ち』の魂から生前の『穢れ』を落とす工程が……あ、ほら、あつちの世界の宗教でいうところの『禊』的なアレよ。そんな感じで恙無く来世へと送り出す、的な……アレをアレする部分がアレなわけ！」

お、おう、なんかすみません？

……そのものズバリを明言しちゃうと不味い感じなんかね？
じゃあ私なりに考えてみるか。

えーと、つまり……恙無く成仏——輪廻転生するには、生きている間にアレコレ起きた魂への変化をリセットせにやらなんわけだ。
……良きも悪きも一切合切に。

それは『記憶』であり、『経験』であり……おそらく『欠落』も、そこに含まれる。

だからこそ幽霊として時を過ごし、『削れて』しまった彼らは私に——そこに混じったらしい『輪廻転生の第一工程』の気配にでも惹か

れていた、と。

『穢れ』を拭い、『欠損』を癒し……洗い落とされた彼らの『記憶』を私は受け取っていたと、そんな感じの流れになるのかな？

「……………私からはノーコメントよ」

はいな。了解です。

……………あ、でも「感情吸収」に関してはもうちよいヒントもらえませんか？ わりと本気でヤベエと思った能力なんで。……………せめて暴発させない予防策とか、そういう方向でも良いですんで。

「……………『死者の記憶』へ『貴女の記憶』へ『生者の記憶』。……………お^oけ^k？」

アツハイ（本日三回目）。

ですよねえ、私自体の存在というか定義というかがメツチャあやふやなんですもんね。

何を以て”私”とするかに対して、生きてる人間の記憶は優先順位に割り込んできちゃうわけか。

……………私が”私”で無くなる危機感も湧いてくるわけだよ。やつベエなマジで。

しかし原理がそうだとすると……………結局は生きた人間相手に『襖』が機能しちゃうのが主な原因と言って良いのかな？

さて、それを何とかする方法となると……………え、何とかできるのか、コレ？

「……………貴女の中での事なら貴女の認識次第で割と何とかなると思うわよ？ 外へ出さずに完結する内容であれば、よっぽどじやなきやチー卜化防止処理にも引つかからないだろうし」

ああ、もう単純に『生きた人間相手には機能させない』とでも認識してれば良いんですかね？

……………イヤ、あれか。『機能しなくなる能力を作った』的な認識の方が良いか。『出来るかな』を絡めて……………『生きた人間のソレは受け付けな

くなるような仕切り板を作ってみた』これでどうだ。

……うん、たぶん、多分だが出来たと思う。

これで【記憶の部屋】の中に『仕切り板』が立った、筈だ。……直前のイメージからして銭湯の男女を分ける的なアレになったような気が多分にするが。

えっと、まあ、これでも思うような効果はあるはずだ、と思う。……うん、私はそう思う！

「お前がそう思うんならそうなんだろう。お前ん中ではな。……あ、コレ煽りじゃないからね？」

……その台詞が煽り抜きに使われる機会が、まさか存在するとは……。

しかしツツコミが非つ常に遅れましたが、ネタに堪能すぎやしませんかね、女神様？

「あの世界のサブカルチャーが面白すぎるのが悪い。私は悪くねえっ！」

……あ、もう一人の転生者に関してちよいと聞きたい事があるんですが。

「ゴメンナサイっ。……あれ、というわけでもないのね？」

ええまあ女神様を責める意図はありませんよ。主にキリが無いんです。

そんなことより、と言っちゃうとアレですが……これからどうなる予定なんですか、あいつ？

「あーっと、ホラ……あの子の意見にも一理あるとは思わない？」

……と、言いますと？

「与えられたからにはその力をどう使おうがそれは仕様の内、とか主

張してくれてたでしょ？」

……あー。

「すなわち自分の行いで誰がどんな迷惑を被つていようが、それは自分のせいではなく力を与えた神様の責任だと言ってくれてたわけで

——」

心外だったんすね。ハイ。

けど実際あんな文字通りのチート能力貰っちゃったら、誰でも多少なり気が大きくなるもんだと思いますよ？

「ええ、まあ、そこは私も反省したわよ。……バランス調整って大事だったのね」

イヤ、バランス調整というか、もうちょつと人柄を考慮……そこは突っ込んじやいかんか。

聖人君子オンリーとか言い出したら私だって普通にアウトだろうし。

「当人から『やり直し』の要求もあつたし、お望み通り『三回目』の機会をあげることにしたわ。勿論、『悪い』特典チートなんか付けない形でね」

……それもう普通の転生なのでは？

いや、前世や今世(?)の記憶があるならそれなりに——イヤ待て。この女神様、転生”先”については何も言つてねえな？

「——あらあらうふふ？」

それ口に出して言うもんじやないっすよ……。

さては責任転嫁されてまあまあご立腹でしたな？

まあ与えられた力がどうあれ、それで現地人の人生まとめて狂わせてやるぜヒヤッハーしたのは当人の選択だし……私がそこに口出す理由も義理も何もかも無いわけなんですけど。

「貴女が望むなら色々と厳しい環境に生まれさせたりしても良いけど？」

いらんですいらんです。

何でわざわざそんな徳の減りそうなこと願わなきゃなんのですか。

この先、変に私達に絡んでくることが無けりやそれでいいですよ。

……さて、それじゃあいつ当人に関してはこれぐらいにしまして。

「……………本題、ね？」

ええ、こればかりはキツチリ聞かせてもらいますよ？

さっきの話のお陰で、どうやらそういうことだと把握出来ましたからね。

——本物の、糸々山雨巫。

彼女の魂は、果たしてどうなったんです？

「……………彼女の死亡直後に、あつちの世界の神がブチギレ状態で魂の回収に乗り込んできました」

……………オウ。

「今度こそ彼女の要望通りの世界に転生させる……………って言ったよ？」

……………はあ。

「巻き込まれた他の魂についても希望するなら一緒に、そうでなければせめてちよつとした幸運を与えて次の人生に送り出すようにって

……………」

……………。

「後は『神とはいえケジメは付けろ』なんて言われて謝らされたし……結局、彼女の主観では何も起きてなかったんだし、あんなに怒らなくて良いと思わない？　ねえ？」

知らんがな。

そもそもどういいう関係なんですか、あんなら。

完全に手の掛かる後輩を教育してる感じの空気じゃないっすか。

……ひよつとしてあいつに対する扱いが割とアレなのって、その辺りの八つ当たりも兼ねてたりしませんか、女神様？　……これ、目を逸らすでないわ。

というかそれならいつそ特典の回収とか考えたりは……あ、そういうのはダメなんすね。まあ、渡しといて思わしい使い方しなかったから没収、とか言い出したらそれはそれで道理が通らんか。

まあ、何にしろ謝るべき対象にはきちんと謝ってたようでは何よりだよ。

死後に一神教の国の信仰対象に謝られるとか、『私』一家どんな顔してたやらだが。

どうにもさつきからなにかと謝罪が軽かったからねえ、この女神様。

……そもそも私は謝罪対象に入るかどうか微妙なラインか。厳密に言えば殆ど関係無えもん。そりゃネタ混じりの謝罪にもなるわけだわ。

そしてブチギレて乗り込んできた、かあ……律儀だったもんなあ、あつちの神様。

二つの世界の差異も考えて色々細かな調整をしてくれてたみたいなのに、後から転生^{道加}された、しかも自分が関わってない転生者のせいでいつの間にか約束を反故にされてたとか、そら怒るわ。

……もしかすれば、この一連の騒動における一番の被害者かもしれん。

何しろ私……もとい『本物の雨巫さん』にとっては、まだなーんも始まってなかつたわけだし。

今頃は、あの日の要望に沿った全く別の異世界で、そこで生まれた誰かとして懸命に生きながら記憶覚醒の日を待っている、ということになるんだろう。

——アレ？ でもそれ雨巫さんなのか？ それともヤーネ嬢だつたりするのかわかるか？

だつてどつちの記憶も今、私が持つて——え、記憶部分も魂と一緒に回収されてる？ じゃあ私が持つてゐるのって……あ、一時ファイル的なアレ？ これまたマジっすか。

……ああ、そっか、ファイル読み込み形式のプログラムが直接元データは弄らんよな。

一旦適当なデータ型に読み込んで然るべき作業をしてから、データ元に反映書き込むするのが基本だわ。

私の場合、その反映先が作業中にどつか行っちゃったわけで……画像やテキストデータだつたら新規ファイルが作られるとこだけど……魂だもんなあ……。

……じゃあ今頃、雨巫さんであり、ヤーネ嬢でもあり、現地で新たに生まれた誰かさんでもある転生者になつてゐること？ ……内面とか大丈夫なんかソレ。ちゃんと統合できるんか？

……まあ、あつちの神様なら、その辺しつかり調整してくれはりそうやな。何となく。

こつちの女神様ならいざ知らず「何ですよ!?!」……そういうところやぞ。

「——さて、それじゃ一応と思つて聞くわけだけど……貴女はこれから先、どうするつもり？」

……はて、どうするとは？

「当面は、あの女の子の相棒を続けるつもりなんでしょう？ けれど貴女達の『時計』は、決して同じ造りではない。いずれ別れの刻ときが来ることは、貴女も分かっているわよね？」

「イヤ、そんな未来の……ええ、そんな遠い未来のことなんざ、碌に考えてやしませんよ。」

「第一、別れがどうこうなんて特に私達に限った話でもないでしょうに。」

「……貴女は『幽霊のような何か』であって幽霊ではない。……というかそもそも魂ですらない。この先どう変化していくのか、『終わり』があるのかどうかさえ私にだって分からないわ」

……………。

「私も、まあその……貴女に関しても、悪いことしたかなーとは思っているのよ？ なんなら貴女がこれから生きて……生きて？ うん、生きていくのに役立ちそうな追加サパッチポの一つでも——」

「だーから、要りませんって」

「当初求めてた第二の人生からは、まあ随分と遠いところに居るとは思いますがね？」

「それでも私は、女神あな様たの世界を全力で楽しませてもらってますよ」

「真面目で頑張り屋さんな、最近ちよいとツツコミ気質になりつつある相棒ユズちゃんと一緒に、ね」

「だからまあ……たまーに女神様宛の信仰持ってっちやうことだけ御目溢し頂ければ十分っすわ」

「あ、そういうえばさつき貴女が考えてた三段腹ハゲ親父、例の『特典』影響外だったわよ?」

「待ってソレ話が変わるk w s k。…:あ、詳しくと言えば、ユズちやんみたいな靈感体質の人って女神様的にはどういう——」

「知らん。バグじゃね?」

「えっ?」

E p i 珍道中徒然行進中

《——そっか。そっちは大体どこも丸く収まったんやね》

「ええ、わたしが聞いた限りは。公になった行いが殆ど無かったのが幸運だったのでしょうね」

《ま、どれも私が未然に潰してたからねえ。……いや、最初の騒ぎ潰したのはユズちゃんか》

「え、いや、あれは……まあ確かに否定はできませんけど。そんなわけで『憑代』にされていたファルファ様にも、その家にも少なくとも表立って何か懲罰が下されることはないそうですよ」

《彼女は根本から100%純然たる被害者だからねえ。良かった良かった。……あ、でもそうになると『婚約破棄』宣言しちゃってた、あの令息は?》

「……サラ様から聞いた話なんですけど、彼に関しては一連の騒動における擁護の対象外に決まっちゃったらしいですよ」

《……えっ、どゆこと?》

「又聞きになるので詳しくは分かりませんが……どうもあれを機に身辺調査が行われたことで、前々からの瑕疵が明るみになったとかで」

《あー………子爵令嬢の豹変よりずっと以前の時期に何かしらやらかしてたことが判明したと。あいつとは無関係に爛れた女性関係でも出て来たか? ……あ、公爵令嬢さんがお茶会で言ってた『本性』つて、まさかそっちの話だった?》

「……なんか、この王都に来てからそんな令息の話ばかり聞いてる気がするんですけど」

《イヤ流石にそれは風評被害甚だしから!? ……ある意味片棒担いだ私が言うのも難だけど、ちゃんとお相手——主に婚約者か? を、大事にしてる令息の方が多からね!? たぶん!》

「……たぶんなんだ」

「——あ、表立っては無いですけど、サラ様の家に対して公爵令嬢様の家から何かしらの御礼が届いたそうですね？　領地の方から送られてきた手紙で知らされたのだとかで」

《あ、マジで？　覗き見しとけばよかったなあ……サラ嬢本人はそれに対して何て言ってたの？》

「……………喜んでましたね、すごく。……ちよつと、だいぶ、傍目にも心配になるくらいには」

《お、おおう……まあ結構ギリギリな立場だったもんねえ……で、具体的な御礼の内容とかは？》

「流石にそこまでは。ただ、その、領地に帰るのが良い意味で怖くなってきたと……満面の笑みを浮かべながらの総白目で……」

《……………したかったなあ、しとけばよかったなあ、手紙の覗き見！》

「あはは……そういうレインは、あのとき何を見に行ってたの？」

《それが丁度、前々から注目してた修羅場が山場を迎えたところでさあ……》

「ああ、あの二股かと思ったら三股だった令息。……四人目が出てきたとか言いませんよね？」

《一号ちゃんと三号ちゃんが義姉妹の契りを結びました》

「……………え、ま、えつと……うえいと！　何が起きたんですか、ソレ！？」

《お、おう、ウエイトね。ちなみに男は今度こそ折檻されてましたよ。……残りの二人に》

「……………やっぱり四人目も居る!?　そんな令息令嬢ばかりで大丈夫なんですか、この国!？」

《うーん、何も否定できねえ》

《——それはそうと、ユズちゃん？　さつきから何見てるの、それ？》

「ああ、これはギルドで出されていた依頼の写しですよ」

《依頼？ え、何かしら受ける予定なの？》

「その日の内に終えられるようなものがあつたら、学園の休日にも受けてみようかと思つて取り寄せてもらつたんです」

《な、なんて生真面目な……まあいいけどね。それで何か面白い依頼でもあつた？》

「面白さは求めてないけど……気になる依頼が一つありましたね」

《ほほう？ どんな内容なの？》

「ええつと……これですね。たぶん幽霊が関わっている案件だと思うんですけど——」

「夜になると家中から指を鳴らすような音等、出元の分からない色々な音が聞こえる、気がする。壁の模様や水面に、気付けば人の顔のようなものが浮かんでいてゲタゲタ笑っている、気がする。朝起きると置物などの位置や向きが変わっていて、人形や肖像画がこちらを見ている、気がする。たまに腹部に断続的な圧迫感が襲ってくる、気がする……等々と書き連ねてありまして」

《……ああ、それなら受ける必要無いよ。こないだ私がやつといたヤツだから》

「あ、そうなの？ ……内容からしてやつぱり、最近亡くなった幽霊が居たりした？」

《まあね。陽気な伯しゃ——恨み骨髓に入った女幽霊だったよ。なかなか盛大に崇られてたし、まだ暫くは幻聴幻覚的なアレに悩まされるだろうけど……ひと月もすれば大丈夫なんじゃない？》

「そっか……じゃあ、この依頼は置いといていいですね」

《……何ならひと月経った頃に解決しに行つて、報酬だけ筆記取るとか》

「いえ、そういうのは遠慮します。……何となく嫌なので」

《……あつはははは！ 真面目だねえ、ホンツトに！》
「……？」

《——あ、そういえば聞こうと思ってたことあったんだ。……
ねえ、ユズちゃん？》

「どうしたんですか、レイン？」

《ユズちゃんが作って、使ってる御札なんだけど……作り方、師匠さん
から教わったんだよね？》

「ええ、そうですよ？」

《……その師匠さんは、さ？ 誰かから教わったとか言ってた？》

「いえ……自分で作り上げたよ、そう言っていましたけど……？」

《……マジかあ》

「……レイン？」

《いや、その……下手すりや私以上に摩訶不思議な人物の可能性が急
浮上してきたというか……だってバグじゃね、って……ええ……
？》

「れ、レイン？ 急にどうしたんですか？」

《あの口振りからして過去に転生者を招いてた感じでも……いや待
て、転移なら別枠だった？ 突然の和洋折衷な趣も、そういう転移
者だとすれば納得が……いやあ、しかし……》

「あの、さつきから小さな声で何をぶつぶつ呟いて——」

《あ、ゴメン何でもない。……師匠さんに巡り合えるようにバツチリ
協力するからね、うん》

「は、はあ……？」

「——学期の終わりにはクリイサム領を一度訪問する予定ですけどね。あちらの支払いの準備が終わっているかどうかに関係無く」

《ああ、一回サラ嬢に誘われてたっけね。……今の護衛依頼を継続で受けるかどうかも、その時に考える感じになるかな?》

「そうですね……いつまでもこの国に滞在するつもりはないですし」

《ふむ。次に向かう国とかは考えてあるの? 一応、面してる国は幾つかあるけど》

「……………」

《……ユズちゃん?》

「……レインは、どこに行きたいとか、ありませんか?」

《え? うーん……それじゃあ——》

《こっちの河が国境線になってる国とかどう? 地図でもこの大きさだし見応えありそうだなー、とか思ってるんだけど》

「…………えっ」

《え?》

「えっ」

《……どうかしたの?》

「え、いや、そのっ……南の、山向こうの国……」

《え? ああ、ユズちゃんが行きたい方向があるなら勿論それで良いけど?》

「……………」

《あ、あれ? ユズちゃん?》

「…………いえ、えっと……南にあるこの国のこと、知ってますか?」

《ん? んー……………別に? なんかあったの?》

「……………えっ」

《えっ?》

「えっ……………と。だ、大体、半年近く前に、急死したお姫様の話が……………」

《あー……………丁度知らんタイミングやわ、それ》

「えええええ……………」

《……………えつと、なんかゴメン? わかんないけど》

「……………いえ、もう、いいです。……………なんでも」